

---

# 大空あっと非現実的学園生活。

沢藤 蜜柑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大空あつと非現実的学園生活。

### 【Nコード】

N7886Q

### 【作者名】

沢藤 蜜柑

### 【あらすじ】

とある不思議な感じのする高校へ進学した、ツナこと沢田綱吉。そこは、ツナの勘通りただの学校ではなかった・・・！

## ぶろろーぐ。（前書き）

はじめまして！蜜柑と言います。

完全にノリと趣味だけでやってしまいました。

処女作ですので、くれぐれも期待はしないでください。  
生温かい目で見ただければと思います。

ぶろろーぐ。

「ここが、今日からオレが通う学校かー。」

『こだま木魂学園』と書かれた門の前。

栗色のつんつんとした髪を風になびかせながら、オレはぼそっとつぶやいた。

(でも、なんだ？この違和感は？)

受験でここを訪れた時も感じた、不思議な感じ。

まるで………何かから生徒を保護しているような。何かを隠しているような。

それも、ただの隠し事ではなく何か非現実的なもの。

(……ま、いつか。)

ここに来ようと思った時点で、すでにオレの運命は決まっていたのかもしれない。

・・・ちよつとおおげさか。

（なんとかなるぞ。）

## ぶろろーぐ。（後書き）

次回は、クラスメイトの紹介をするつもりなので少々長くなりそうです。

あ、この小説に出てくるキャラクター達はもともとからこの世界にいます。注意です。

そして、私が好き放題しちゃってます。  
なので、色々キャラ崩壊してます

こんなんですが、どうぞよろしくおねがいします！

## 標的1：くらすめいと（前書き）

1 - Aのクラスメイトの紹介だけという感じなので面白くないかもです。

とりあえずどうぞ！

## 標的1：くらすめいと

「ちゃおっす。お前ら1-Aの担任のリボーンだ。」

入学早々、生徒に向かって『お前ら』って。

しかも何で室内でボルサリーノを当たり前のようにかぶってんの？  
おかしくない？何で誰も突っ込まないの？

「んで、オレが副担任の坂田銀八だ。甘いものとジャ プは、すべてオレに貢ぐよーに。」

誰が貢ぐか！

本当に先生なの、この人たち！？

「・・・あれ、つつこんでくれないの？」

つつこんで欲しかったのかよ！

「慣れてねーんだ。そのうちはしゃぐようになるだろ。」

「うーん、そんなもんかねえ。あ、糖分とジャ プ好きって言うのは事実だ。」

そこは事実なのかよ！っていうか、果てしなくどうでもいい！

・・・なんか、もうすでにつかれた。  
こんなんでも3年間もつのかな・・・。



「うーっし、んじゃまずは自己紹介からな。」

「つつてもめんどくせー。今から出席番号と名前を呼ぶから、呼ばれたら返事しろ。」

いいのか、教師がそんな適当で。

まあ、趣味とか言われるよりはありがたいけど・・・

ツナ君とおんなじ学校に来れるなんて。

3年間言い事がありそう

「じゃあ読むぞ。出席番号1番、あかしやもか赤夜萌香。」

「はいっ!!」

ピンクの長髪が印象的な女の子が、元気よく返事をした。すっごく美人だな・・・。

「2番、アレン・ウォーカー。」

「はい。よろしくお願いします。」

礼儀正しい白髪の男の子。左手に手袋をはめていて、左目には大きな傷跡がある。痛くないのかな？

「3番、家長力ナ。」

「はい！」

ごく普通・・・っていうのかな？仲良くなれそう！

「4番、泉こなた。」

「はい！」

長い水色の髪がすつごく綺麗。あれ、地毛なのかな？

「5番、井上織姫。」

「はあいつ！」

のんびりしてそう。お友達になりたいな。

「6番、越前リョーマ。」

「ういッス。」

あ。あの子って、たしか中学のテニス大会で優勝してた子！この学校だったんだ！

「7番、江迎怒江。えむかえむかえ」  
「はい。」

なんだろ？不思議な人だな・・・

「8番、エリン。」  
「はい。よろしくお願いします！」

やさしそう。動物の世話とか得意そうな感じがする。

「9番、沖田総悟。おきたそうご」  
「へーい。」

・・・。なんで堂々と携帯電話いじってるんだろ？

「10番、神楽。かぐら」  
「はいアル！もぐもぐ。」  
「もぐもぐ・・・じゃねえよ。何で弁当食ってんだ、オメーは？」

ホントだ。いつから食べてたんだろ？

・・・あれ？沖田くんは叱らないのに神楽ちゃんは叱るんだ・・・。

「先生、私の中学ではいつでも弁当食べてオツケーでした！」  
「そーか。やり直せ、小学校から！！」つーか原作と似たようなボケをしてんじゃねえよ！」

そーいう問題なのかな？

「続けんぞ。11番、桂木弥子。」

「はい！食いつぶりならだれにも負けません！」

「ここでは何の自慢にもなんねーから。次。」

あれ、いつの間にボケ大会になっちゃってるのかな？

私も自分の番で何か言わないとダメかな・・・。

「12番、かみやかある神谷薫。」

「はい。」

あ、もどった。やっぱり言わなくていいのかな？

京子はそんなことを考えながら聞いていた。

ツナはというと。

終始心の中で突っ込んでました

以下ツナ視点でどうぞ。

「13番、霧雨<sup>きりぐりめまりさ</sup>魔理沙。あー、こつから返事なくていいぞ。」

「はあ！？ちよつとまつんだぜ！なんで私からなんだよ！」

そういう問題でもないけどね。

「だってだって、めんどくさくなつたんだもん。」

きも！大の大人のセリフじゃねえから、それ！

「先生、それは少し不公平というものではなかるうか。」

えーっと・・・だれだろ？めちゃくちや美人なのになんか残念というか・・・

「それであれば、最初から番号と名前だけ載せておけば読者にも優しいというものだ。」

「軽々しく読者とか言つな！先生まで苦笑してんだろ！！」

いや、先生はむしろ爆笑してるよね。笑い必死にこらえてるし。

つていうか、あんたも誰だよ。・・・あ、クラスメイトか・・・。

「それは失礼した。それにしてもナイス突っ込みだったぞ、善吉。」

「お前に褒められても全く嬉しくねえぞ！？」

「この黒神めだかが誉めてやったというのに・・・そんなだから恋人の一人も出来んだぞ？」

「今する話じゃねえだろ！しかも全く関係ねえし！！」

・・・・・・夫婦漫才？

「14ばり・・・あー・・・もう言つのもめんどいから載せるわ。  
ほい。」

どれだけ生徒に不親切だお前ら！・・・先生だけど。

ということだ。

### 13 番以降の1 - A 生徒一覧

- 14 番黒神めだかくろかみ
- 15 番黒子テツヤくろこ
- 16 番黒崎一護くろさきいちご
- 17 番笹川京子ささがわきょうこ
- 18 番沢田綱吉さわだつなよし
- 19 番涼宮ハルヒすずみや
- 20 番高町なのはたかまち
- 21 番長門有希ながとゆき
- 22 番奴良リクオぬら
- 23 番脳噛ネウロのうがみ
- 24 番博麗霊夢はくれいれいむ
- 25 番初音ミクはつね
- 26 番日暮かごめひぐらし
- 27 番人吉善吉ひとよしぜんきち
- 28 番火ノ宮満ひのみやみつる
- 29 番緋村剣心ひむらけんしん

30番フェイト・テストロッサ・ハラオウン

31番フランドール・スカーレット

32番武藤遊戯  
むとうゆうぎ

33番八神はやて  
やがみ

34番ラグ・シーイング

35番リナリー・リー

36番ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

以上、

男13人

女23人

計36人。

「どこの入学式？これ？」

「あんたがいうな！！」

標的1：くらすめいと（後書き）

途中から名前だけしか紹介してない気が・・・orz

事実ですね、はい

あ、最後の二人は、銀八先生と善吉です。  
分かりにくかったですね、すいません。



## 標的2：バカとテストと学級委員（前書き）

副題が「バカとテストと 喚」っぽいですが、関係ないです。  
いやほんとに。

今回からあとがきにかるゝいキャラ説明をつけてみる事にしました。

でわどろぞ！

## 標的2：バカとテストと学級委員

「あー、テストの結果だが・・・」

「お前ら、学力の差がありすぎだぞ。」

テストとは。

この場合、入学早々行われたテストのこと。

もちろんオレはほとんどできなかった。  
めっちゃめっちゃむずかったよ、うん。

「満点は黒神めだかと脳嚙ネウロ。70点以上とつたのは2人を含めて8人だけ。なめてんのかお前ら？」

なめてません。少なくともオレは。

「先生！オタクに勉強しろというんですか？」

「堂々と何を暴露してんだオメー!？」

爆弾発言したのはこなた。

向こうからオレなんかに話しかけて来てくれて、今はオレの大切な友達の一部。

だから知ってた。こなたが重度のオタクって。

でもそれ今言うことじゃないから。それもみんなの前で。

・・・あれ、勉強の話だったよな？

「フフツ、私は自分がオタクであるということに誇りを持っている。」

「は？」

「ゆえに、私に勉強をやらせようなんて100万年早いっ！（どや  
「どや顔でいばんな！・・・あ。」

しまったー！つい口に出しちゃったー！！

「ツナ、やっと自分がツツコミストだと自覚したんだね！」

「何ツツコミストって！？」

「ツツコミストとは・・・その昔、古代エジプト」

「そんな壮大な話なのか！？」

ああ・・・目立たないように3年間過ごすはずだったのに・・・！

「ちょっと待て、それなら善吉と一護もツツコミストに任命すべき  
だろう？」

「待て待て待て！いつからオレはそうなってんだ！？」

「勝手に決めんなよ！」

「事実ではないか。」

「「当たり前のような顔して言うな！！」」

どうして黒神さんってこんなに偉そうなんだろう。

「ちょっとツナ！負けてるじゃん！！」

「勝ち負けとか争ってないから！」

「ツナ君がんばって！」

「がんばれー！」

「京子ちゃん、に、ミク!?」

応援してくれるのは嬉しいんだけど、ここ応援するようなどころじやないから！

「おめえらうるせえ!!」

バーンッ!!!

しーん・・・

こ、この先生、拳銃撃った・・・！  
しかも室内で！

「びびび、びつくりするじゃねえか!!」

あんたもびびってんのかよ！  
しつかりしろ、副担任！

「んなことより、今は決めなきゃなんねえことがある。」

「あ、忘れてたわ。」

「教師が忘れるとはいいい度胸だな？」

「だって今週のジャプよ・・・すいませんごめんなさい。」

今度はマシンガン!?どこに持ってたんだよ！

っていうか、同僚脅してるよこの人！

「次はねえぞ。で、今から決めるのは・・・学級委員長だ。」

「男女1人ずつ、オレとリボン先生の独断と偏見で決めたいと思う。」

決めるとか言っておいて生徒に決めさせる気無いよ、この人ら！

「じゃあ発表すんぞ。学級委員長は・・・」

え、何この間・・・？

「・・・黒神めだかと脳嚙ネウロだ。」

「理由はズバリ、テストの点だ。バカに委員長やられても困るしな。」

理由が軽いな。

というか、これ決定事項？本人の意思ゼロ！？

「ちょっと待ちなさい！！」

あーあ、やっぱり苦情が・・・

「貴族であるこの私に、平民の下につけと言うの！？冗談じゃないわ！！」

orz

痛い！この人自分で自分を貴族とか言ってるよ、このご時世に！

「ふむ、貴様を貴族と呼ぶのなら、私もまた貴族に該当すると思うのだが？」

「はあ！？」

この人もなんか言い出したー！

「こう見えても私の親は世界経済を担う大金持ちでな、一応大富豪ということになっているのだ。」

普通にすげえ……。

「ななな……か、金持ちだけが貴族じゃないのよー！」

金持ちじゃない貴族をオレに教えてください。

「黒神、お前は学級委員長でいいんだな？」

「無論。（凜っ）」

「こ、この私が……平民と同じ立場だなんて……！これ以上ない屈辱だわ……！」

あ、確認はするんだ……。

ルイズさん、ご愁傷様。

「で、脳噛？お前もいいんだよな？」

「我輩を誰だと思っている。魔界の謎を食いつくした男だぞ。」

えーっと……魔界ってどこですか？

「じゃあいいんだな。」

「このクラスの間を一人残らず我輩のおもちゃにしてもいいのなら引き受けよう。」

上から目線本日3人目・・・だよな？

つか、おもちゃってなんだ。

「ちょっとネウロ！？あんた何言ってるの！？」

「おお、奴隷1号。」

奴隷っ！？

「いつから私はあんたの奴隷になったのよ！」

「ほう・・・奴隷のくせになまいきに主人にたてつく気か？」

ネウロさんがすごくいい笑顔で桂木さんを見る。

「すいませんでした。」

「後でお仕置きだな。ふむ、生ごみをドラム缶いっぱい食わさすいませんごめんなさいもういいません。」・・・チッ。」

これなんてプレイ？

そんなこんなで、学級委員長はネウロさんと黒神さんに決まりました。

「あそうそう、今のうちにくじ引いとけ。」

先生に一番近い席だった霧雨さんに、ぽいっと袋が渡された。

「うおっ、重いぜこれ!」

「次の時間に3年生が2人説明に来るから、四の五の言わず引いとけよ。以上!」

キンコーンカーンコーン

くじの説明なし!?

あと、チャイムのタイミングよすぎ!

このときはまだ知らなかったんだ。

これがあんなことにつながっているなんて・・・。



## 標的2：バカとテストと学級委員（後書き）

ミク「読者のアジト、はーじまーるよー！」

ツナ「！あんまり読者関係ないし、原作のじゃん名前！」

蜜柑「いいのいいの。今回のアシスタントはミクだよ！」

ミク「よろしくね！」

蜜柑「あ、次から私はいないからね。」

ツナ「オレに押しつけた！」

ミク「今回のキャラは【沢田綱吉】！ツナだよ！」

ツナ「オレー！？」

### 【沢田綱吉】

作品：家庭教師ヒットマンREBORN！

武器：？グローブ

得意技：超直感

部活：いまのところなし

その他：イタリアンマフィア・ボンゴレの十代目

『一応この主人公。オールツツコミ担当。薬がなくてもハイパー化出来る。作者権限でたまーに変なチカラ（縦の時間軸がいじれるとかそんなん）が追加される・・・かも？』

ツナ「最後のなに！？」

ミク「あ、作者帰っちゃった。」

ツナ「逃げたー！！」

ミク「次回もよろしくねっ」

### 標的3：暦とひたぎ（前書き）

サブタイトルで分かった方もいらっしゃると思いますが。

そうです。

今回はあの二人が出てきます。

ちょっと短いかもしれませんが、どうぞ！

### 標的3：暦とひたぎ

「いまからあんた達には内乱をしてもらうわ。」

「唐突だな！しかも内乱って！他に表現はなかったのか！？」

「あら、戦争っていう表現の方が好きだなんて・・・」

「んなこと言っただけ！っていうかどっちも一緒だ！」

いきなり来た3年生はいきなり漫才を始めました。

「ああ、自己紹介してなかったわね。私は3 - Aの戦場ヶ原せんじょうがはらひたぎ。こつちが童貞。」

「違うわ！勝手に人の名前を改ざんすんな！・・・ごほん、僕は阿あ良々木ら々き暦。同じく3 - A。」

・・・変わった名前だなー。（

「ここに入学してきたということは、わかってるわね？」

「・・・多分分かってない人の方が多いと思うんだけど・・・。」

少なくともオレはさっぱりです。

「そうね・・・。じゃあ、この学校が他の学校とは大きく違うことについて詳しく知らない奴は立ちなさい。この学校の裏事情ね。」

裏事情？

「え、拳手じゃなくて立たせるの？」

「当たり前でしょ。」

「当たり前なのか!？」

いや、当たり前ってわけじゃないと思う……。

がたがた

「……え？」

「あれ？」

「三人だけね。今年の1年は上出来だわ。」

立ったのは、オレと京子ちゃんとスカーレットさんだけ。

やばい、すっごい恥ずかしい……

しかもオレ、マフィアのボス（一応）なのに裏事情知らないとか・

・orz

「そうね……。今から適当に出席番号を言っていくから、該当者は前に出なさい。」

「今度は前に出させるのか。」

「なに、ロリコン。文句あるわけ？」

「さっきから僕を貶めるようなことを言っなあああああ!?!」

「事実じゃなくて？」

「僕は無実だ!?!」

脱線してます、先輩達。

「一気に言うからよく聞きなさい。」

「僕は無視か!」

「2番、10番、25番、32番。」

指名されたのは、

アレ

神楽

リクオ

遊戯。

「ふーん。その4人は、放課後保健室に集合。そのバカ3人は明日の朝一番にこのシヨタコンが正門前で待ってるから学校に来なさい。」

「シヨタコン!?!」

「あら、ごめんなさい。ロリコンだったわね。」

「どつちもちがああああう!!」

えーと・・・とりあえず、どつからツッコめばいいのかわかんないんですけど。

うん、まあ、一応。

・・・くじ関係なかったくない？

次の日。

「おはよう、ツナ君!」

「おはよう京子ちゃん。・・・と、おはよう、スカーレット・・・さん?」

「・・・おはよう。」

何でこんなに暗いんだろ・・・?

「フランちゃんは、きつと朝が弱いんだよ!」

「そうなのかな・・・。」

若干だけど、違う気がする。

「ああ、来てる来てる・・・。」

やってきたのは、阿良々木先輩。

「えーつと、とりあえずここに入って。」

「ひっ!?!」

瞬間、足元に数字が浮かび上がり、変なものが出現した。

まるで空間を割いたような・・・。

「入ったら”32”と書かれた扉に入ること。僕からは以上。」

言い終わると同時に、オレ達はそこに向かって突き飛ばされた。

「きゃっ!?!」

「なあ!」

「わっ！」

「がんばってね！」

手を振る阿良々木先輩を最後に、そこは閉じてしまった。

「いたたたっ・・・」

「ツナ君、見て！」

オレ達がいたのは、真っ白い街並みが続く美しい所。そう、イタリ  
アのような煉瓦の家が並んでいる。

「あ、32の扉ってあれじゃないかな？」

京子ちゃんが指さす先には、ひときわ大きい黒い扉。  
白の中で黒色はやけに目立っていた。

「入ろう！」

「う、うん。」

一体何が起こるんだろう・・・。  
そう考えずにはいらなかった。

ぎい・・・

そしてオレ達は、扉の中へと進んで行った。





### 標的3：暦とひたぎ（後書き）

ハルヒ「読者のアジトはじまるわよ！」

ツナ「だから、読者関係ねえし！」

ハルヒ「読者から質問が来るかもしれないでしょ？そう言うときのためにこうしておくのよ。」

ツナ「……もういいや……。今回は阿良々木先輩だよ。」

### 【阿良々木暦】

作品：化物語以下、物語シリーズ

武器：とくになし（機会があればオリジナルを作るかもしれない）

得意技：怪異に出会うこと（本人は別に望んでいない）

部活：いまのところなし

その他：吸血鬼もどきの人間

『ひたぎの彼氏。何かと怪異に遭遇する。チャームポイントは、頭の上の方にあるアホ毛。ここでは、どちらかというとツツコミ担当。』

ハルヒ「ちまちま1人ずつ紹介してたら来年になるわよ？一気に紹介しないのかしら？」

ツナ「その話にあつた人を紹介するんだつて。」

ハルヒ「ふーん。あんな馬鹿でもちよつとは考えてるのね。」

ツナ「そんな大声で言わなくても・・・。」

ハルヒ「さて、そろそろ時間ね！」

ツナ「あ、ほんとだ。じゃあ、ご感想（とか質問）・・・」

ハルヒ&ツナ「おまちしてまーす！」

ハルヒ「次回もよろしく！」

#### 標的4：夜兔族ノ娘と吸血鬼ノ娘（前書き）

普段より長くなりました。

休日に調子に乗りすぎたです、はい。

後半ちよいシリアスにしてみました。

だからと言って期待しない方がいいですよ！  
シリアスかけてませんから！

あ、くじの件ですが、そのうち分かるかと（笑）

ルイズ「で、出来たら読んで欲しいなー・・・なんて、思っ  
てないんだからねっ！」

#### 標的4：夜兔族ノ娘と吸血鬼ノ娘

「よく来たアルな！」

「つて、神楽ちゃん！？」

扉の向こうには、早弁少女という予想外の人がありました。

「缶けりで私に勝ったら次に進ませてあげるネ。」

缶けり！？

「え、負けたら・・・？」

「男なら、勝つことだけ考えるアル！」

なんか怒られた！

「私が鬼をやるアル。缶を元に戻せないようにするか5分以内に1人でも私から逃げきれば、京子達の勝ちアル。」

「進まなきゃダメなの？」

「そういえば。ひたぎって女が、進まなきゃ一生閉じ込める、つて言ってたネ。」

それは嫌すぎる。

「やろつか、京子ちゃん。」

「楽しそう！」

という訳で、缶けりスタート

「いーち、にーい、さーん、しーい・・・」

ココ隠れ場所ねえ！

「どうしよう、ツナ君？」

オレに聞かないで！

「・・・あの缶を壊せばいいの？」

「え？」

なにいつてんの！？

「だって、缶を元に戻せないようにしても勝ちなんですよ？」

「そういえばそうだけど・・・」

壊す方が、圧倒的にリスクが高い。

「じゅーはち、じゅーきゅー・・・」

「や、やばい！とにかく隠れよう！」

オレ達は、塵々に散った。

「さあ、一人残らず捕まえてやるネ！」

鬼が一番に向かったのは大きな岩。  
その後ろに、京子ちゃんはいる。

（い、いまのうちなら缶倒せるか？でもちよつと遠い・・・！）

オレの今の身体能力では少し無理か？

と、そのとき。

「見つけたアル！・・・・・・確保！」

「は、走るの早いよ・・・神楽ちゃん・・・！」

走って逃げだした京子ちゃんにあつという間に追いつき、捕まえてしまった。

（はええええ！！女子高生の身体能力じゃないだろ！）

「さあ、残りは二人アル！さっさと出てくるネ！」

言われて出る奴いないから！

そして。

それは、突然の出来事だった。

ぶぎいっ!!

「な!?!」

オレの目の前で。

誰も触っていない缶が、ひとりでに潰れた。

・・・いや、正確には破裂した、のかな。

「ど、どという事アルか!」

「これで私達の勝ちでしょ? もうその缶は使い物にならないよ。」

それは、フランドールの仕業だった。



「つ、次に進んで、いいアル・・・」

次に進む途中の通路のこと。

「ねえ、アレどうやったの？」

フ란の能力。オレは直感的にそう思った。

「・・・『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。それが私の力。」

彼女は、ぼつぼつと語り出した。

小さいころにこの能力がコントロールできずに人を気傷付けてしまったこと。

それ以来、周りから忌み嫌われていたこと。

姉であるレミリアに、『気がふれている』として部屋に閉じ込められていたこと。

「・・・ひどい。」

「いいの。お姉様は何にも悪くないんだから。うつかり、よその子に怪我をさせて、お姉様のプライドを傷つけてしまったんだもの。それに、周りのやつらが無理やりお姉様に私を部屋から出さないように仕向けたのも、私がうまく周りと接することが出来なかったから。」

「私とお姉様が・・・吸血鬼だつてばれてしまったのも私の所為だから。」

フランは俯いたままそう話した。

「なんであんなたちにこんなこと言ったのかな。・・・どうせ私は化け物なんだから。あなた達もそう思ってるんでしょ？」

違う。

「オレ達はそんなこと思ってないよ。」

「そうだよ！」

フランは口を開こうとしない。

「確かに最初はびっくりしたけど・・・それって、個性なんじゃないかな。」

気がつくと、オレの口は勝手に動いていた。

「なんていうか・・・この世界に全くおんなじ人なんていないじゃん？だから、それはキミの個性なんだと思う。それにさ、そんなに自分を責めることないよ。」

「・・・。」

「オレはダメダメのダメ人間だったけどさ・・・後ろばかり見てたら見えない事もあるんじゃないかって思い始めてから、親友もできたし世界の見える幅も広まったっていうか・・・はは、何言ってるんだろオレ。」

ホントに何言ってるんだろうね。

自分でもよく分からなくなってきた・・・

「うつ・・・。」

「?・・・あ。」

「う、うわああああああん!!!!」

突然泣いたー！

しかもいつの間にかオレに抱きついてるし！

「泣かないで、フランちゃん。私とツナ君はフランちゃんの味方だからね。」

「うん。だから泣くなつて！な？」

「ぐすつ、ひつく・・・（こくん）」

えーと、とりあえずどうするべきかな、オレ。

「歩みにくいから手、放してくれたらうれしいって言うか・・・えーっと・・・。」

「フラン。」

え？

「フアンって呼んで！私もツナって呼ぶから！」

今回の収穫（？）。

なんだかんだで吸血鬼に懐かれました。

#### 標的4：夜兔族ノ娘と吸血鬼ノ娘（後書き）

霊夢「読書のアジトはじまるわよ？」

ツナ「今回は2人！神楽ちゃんとフランだよ。」

#### 【神楽】

作品：銀魂

武器：夜兔の傘

得意技：大食い

部活：空手

『大食い怪力少女。ハードなボケが特徴・・・なのだが、今のところ比較的落ち着いたボケが多い。もうそろそろ本気を出すかもしれない。』

#### 【フランドール・スカーレット】

武器：レ ヴァティン（剣）

得意技：破壊活動

部活：いまのところなし

『このフランは気がふれてません。まともです。言動とかが子供ですけど。スペカも多少出すつもりです。』

ツナ「こんなもんかな。」

霊夢「そうね。あ、そうそう。」

ツナ「？なにこれ？・・・チョコレート？」

霊夢「アンタ意外とモテるのね。私が義理チョコあげなくてもよかったかしら？ちょうどこのコーナーにあたったのがバレンタインだからと思って買って来たんだけど・・・まあいいわ。」

ツナ「え？」

霊夢「京子にフラン、それと私から。ハッピーバレンタイン。」

ツナ「あ、ありがとう！！（じーん）」

霊夢「さてもう終わりね。」

ツナ「あ、うん！せーの！」

霊夢＆ツナ「質問・ご感想おまちしてまーす！」

霊夢「次回もよろしくね。あ、期待はしないこと。」



標的5：でゅえるきんぐ（前書き）

短いし、多分あんまりおもしろくないかもです。

何やってるか分かりにくい！

文才ほしいです。

織姫「よければ、読んで行って下さいね！」



## 標的5：でゅえるきんぐ

ぎいいい……………

「あれ？思ったよりも早かったね！」

いたのは武藤君。

オレの記憶が正しければ、デュエルモンスターズというカードゲームの初代王者。

知り合いの海馬君に聞いたから間違っていないはず。

「じゃあまず、ルールを……」

「その前にさ、何でオレ達がこんなことさせられてるか教えてくれないかな？」

全くわけわかんないし。

「え？神楽ちゃんに聞いてないの？」

何にも聞いてないんだけど。

「うん。」

「あちゃー。……うーん。じゃあ、ボクに勝ったら少しだけ教えてあげるよー！」

どこのマンガ的展開だよ。

「何で勝負するの？」

「もちろんゲーム！トランプゲームの神経衰弱だよ！」

シンケースイジャクで？

「面白そうだね！」

「私もやる！」

希望しなくてもやらされと思うんだけど・・・

「3人の合計枚数が、ボクの枚数を上回れば勝ちだよ！」

・・・これ楽勝じゃない？

「やったー！」

「うそ・・・」

「むむむっ・・・」

現在の戦況。

オレ達の枚数、8枚。

武藤君の枚数、14枚。

・・・あれ、おかしくない？

「また当たっちゃった〜！」

「すごい。」

あれ、これ負けるんじゃない？どうすんのこれ？

「後半分かな？」

本格的に、これは、ヤバい。  
しかも次オレだし！

「・・・ツナ君。」

「あ、はい、へ？」

「いまから私が言ったカードを引いて。」

「う、うん。」

ぺら、ぺら。

「あ、あつてる・・・！」

「ほんとだ・・・。」

次も、その次も当たり。

「き、京子ちゃん、すごいよ！」

「なんでわかるのー？」

京子ちゃんと言った。

ついさっき、突然トランプの裏がすけて見えるようになったのだと言っ。

「本当に、ついさっきなの。」

その後もどんどんカードを当てていった。

「あーあ。ボクの負けだね。」

京子ちゃんのおかげで何とか勝てた・・・。

「じゃあ、ちょっとだけ話すね。」

彼が語ったことはこうだ。

この学園は、とある裏組織から、特別な力を持って生まれてきた子供たちを守るために設立されたのだと言う。

この学校で学ぶこと。それは、力のコントロールと社会適応能力。

こういう特別な子供たちは、ほとんどが社会適応能力が欠如しているのだと言う。

「たぶん、変な奴だって、いじめられたりするんじゃないかな？」

「そっか……。」

入学したての生徒の中には、まだ自分の力に気づいていない者もいる。

だから、今オレ達がやっているようなことを毎年行うんだとか。

「ボクからはそれぐらいかな。じゃあ、次へ進んでいいよ！」

なんやかんやで、彼は結構いろいろな事を教えてくれた。

フラン 京子ちゃん・・・と来たら次はオレ？

オレ、ちゃんと自分の能力に気付いてるんだけどなあ・・・

標的5：でゅえるきんぐ（後書き）

なのは「読者のアジト、はじまるの〜！」

ツナ「えーと、今回は京子ちゃんだね。」

【笹川京子】

作品：家庭教師ヒットマンREBORN！

武器：とくになし

得意技：笑顔

部活：いまのところなし

その他：物を見透かす能力がある

『天然。おそらくツナを好いていると思われます。1-Aの濃いキ  
ヤラ達に埋もれないことを願うばかりです。』

ツナ「京子ちゃん可愛いなあ。」

なのは「片思い？」

ツナ「……。」

なのは「ま、まあ、がんばってなの。」

ツナ「……。」

なのは「あ、そ、そういえば、質問がきてるなの！」

ツナ「質問？」

なのは「『漆黒の不死鳥』さんからツナになの！」

ツナ「え？オレ？」

なのは「『ツナはボンゴレのボスを継ぐ気になったんですか？』だつて。」

ツナ「あー……色々あってね。（フツ）」

なのは「なにがあつたの？」

ツナ「出来たら継ぎたくなかったな。うん。今辞めてもいいなら全力で逃げるよ、オレは。」

なのは「……。」

ツナ「簡単に言うと、あのクソジジイ（初代）が勝手にオレを後継者に認めちゃったんだよね。オレは山本を助けただけだったのに。あのあと……（ぶつぶつ）」

なのは「目がすごい勢いですわって来てるなの……。」



ツナ「何である時、リングをポケットに入れっぱなしであそびにいったかな……。」「ぶつぶつ」

なのは「にやはは……。あんな感じみたいなの……。『漆黒の不死鳥』さん、ご質問&ご感想ありがとうございます！」

ツナ（ぶつぶつ）

なのは「あ、1回分質問の回答が遅れてしまってもうしわけなかったの！」

（蜜柑「すいませんでした！あ、『漆黒の不死鳥』さんの小説はのちのち拝見させていただきます！」）

なのは「じゃあ、そろそろ終わるの……。ツナ？」

ツナ「あ、うん……。せーの。」

なのは&ツナ「質問やご感想おまちしてまーす！」

なのは「次回も期待しないで待つのだ！」

## 標的6：奴良組三代目（前書き）

このツナの口調が、回を重ねるごとに悪くなってる気がします。  
蜜柑です。

後半のツナがただのめんどくさがり屋です。

やまもおちもいみもないですよ。

黒子「ボクは今回は出てませんが・・・良かったら読んでみてください。  
さい。」

## 標的6：奴良組三代目

「ねえ、ツナ君？」

「ん？なに？」

「そういえばツナ君って、イタリアに移り住んだんじゃないかって？」

「・・・それって今答えなきゃいけないかな？」

京子ちゃんの天然さは今も健在だと思いました。

「と、とりあえず入ろっか？」

「うん！」

「早く入ろ！」

フランはいつまでオレにしがみついているのかな。  
高校生・・・だよな。

ぎいい・・・

「思ったより早かったな、歓迎すんぜ。」

・・・。

「えーと、あなた誰？」

「髪が白と黒に分かれてる・・・」

オレの思い違いであって欲しいな。  
ほとんど別人だよね、うん。

「も、もしかしてけど・・・」

「・・・奴良君？」

「おう。」

一発で当たったー！  
じゃなくて！

「ええええ！！な、何があつたの！？」  
「又ラ？」

別人！他人！

・・・あれ、何か心が痛むな。

「オレは大妖怪ぬらりひよんのクォーターで、奴良組三代目総大将だ。」

つまり。

「まあ、オレは妖怪だつてこつた。」

ああ・・・奴良組ね・・・・・・・・はいはい。

「あんたとゲームするの？」

「今回はゲームじゃねえけどな。」

戦いとかやめてね。  
ハイパー化するのめんどくさいし。  
オレ戦い嫌いだし。

「じゃあ何するの？」

「オレと1対1で勝負だ。オレに一太刀入れる事が出来たら、お前の勝ちだぜ。」

・・・何でこういふときのオレの勘は妙に冴えてんだろうね？

「えーっと、じゃあオレが行きます。」

つか、オレしかないし。何にもしてないの。

「私が行く！」

「フランちゃん・・・。」

男がいるのに女の子は出せないよ。

「オレが行くから。な？」

「・・・わかった。」

異様に懷かれちゃったな・・・いつものことだし、ま、いつか。

「言つとくが、容赦はしないぜ。」

「うん。・・・あ、ちよつとまった。」

「？」

”一太刀”ってことは、刀の方がいいよな・・・。

カチッ、バシユッ！！

「な、箱から刀が出てきた・・・！？」

オレが出したのは、青い炎をまとった雨属性の日本刀。  
親友から受け取った、大切な刀。

「あんまり気にしなくていいよ。（ハイパー化しなくてもいいか）  
始めよう！」  
「言われなくてもはじめるぜ!!」

ガキイン!!

「!!（コイツ・・・）」  
「はあっ！」

こんな細い貧弱そうな体の、一体どこからこんなパワーが出てんだ？

「・・・勝利条件は覚えてるな？」  
「キミに一太刀浴びせるんだよね。これでオレの勝ちだ！」

フツ・・・かかったな。

ズバツ！！

リクオ君に当たった・・・？  
でも、なんだこの違和感は？

しゅっ・・・

「え？」

手ごたえがない・・・？  
・・・！

キン！！！！

「おっと、防がれるとは予想外だったぜ。」

「認識をずらされることの方がよっぽど予想外だったよ。」

「！！こいつ・・・！」



あーはいはい、意外そうな顔されるのは慣れてるから気にしないよ。

「次はそっち！」

「うっ……！」

バシッ！

オレは、何も無いように見える所をみねうちで叩いた。

「何で……わかった？」

あー……毎回毎回お約束の様に聞かれるんだよなあ、それ。  
どこのマンガだよ

「……企業秘密……かな？」

説明してたら次進めなくなりそうだ。

「ツナくんすごかったね！」

京子ちゃんに褒められた……！（ばわーん

「ツナって 意外 と 強いんだね！」

・・・見た目弱そうで悪かったな。

結論。

むやみやたらに知らないヤツの前で匣兵器とか使っちゃいけない。  
説明が面倒なら、だけど。

## 標的6：奴良組三代目（後書き）

こなた「読者のアジト、はじまるよぉ。」

ツナ「今回はリクオ君だね。」

### 【奴良リクオ】

作品：ぬらりひよんの孫

武器：祢々切丸（妖刀）

得意技：奴良家意志相伝ヤクザキック（

部活：とくになし

その他：奴良組三代目総大将

『いつでも好きな時に妖怪に変身できる。ほとんど夜中が多いけど。変身するとがらりと感じが変わるし、妖怪が妖怪なので、9割5分リクオだと気付かれない。』

こなた「ほーう、ギャップ萌えってやつだね！」

ツナ「・・・は？」

こなた「ギャップ萌えも知らないのかね、キミ！」

ツナ「それ何キャラ？」

こなた「細かいことは気にしない！・・・ごほん、ギャップ萌えとは、普段はヘタレなダメ人間なのにいざというときには凄いいケメンにn」

ツナ「それ以上こんなところでかたるなあああ！！！」

こなた「ちつ。あ、そうそう。今日はゲストを呼んでるよ！  
フランちゃん。」

ツナ「フラン？」

フラン「ツナあっ！（だきっ）」

ツナ「わあっ！ちょ、落ち着いて！」

こなた「はいはい、いちゃいちゃしない。」

ツナ「別にいちゃいちゃはしてない！」

フラン「」

こなた「いきなり行くよ。『漆黒の不死鳥』さんからフランちゃんに質問！」

フラン「なにになに？」

こなた「《ツナと京子の第一印象は？　そして今の印象は？》だつて。どうなの？」

フラン「んゝゝゝツナの第一印象は、ひ弱そう。京子ちゃんは、うざったいくらい明るい、かな。」

ツナ（そんな風に思われてたんだゝゝゝ）

フラン「でも、今は違うよ！京子ちゃんはとっても優しいし、ツナはかつこいいし！ツナ！ツナに近づくバカは私がぶっ殺すからね！」

ツナ「それはありがたいけど、女の子がぶっ殺すとか言ったらダメだからね。」

フラン「（ゝゝゝ）しょぼーん」

こなた「フランはツナが大好きなんだね。」

フラン「もちろん！だって、初めて私を認めてくれたもん！」

こなた（三角関係勃発か？（にやにや）

ツナ「それはわかったけど、そろそろ離れてくれないと熱いから！」

フラン「いやだゝゝ」

ツナ「なっ！」

こなた（博麗さんもチョコあげてたし、裏から操作してハーレムにでもするか？こりゃ、モモに相談だ（にやにやにや）

ツナ「も、もう終わるよ！・・・せーの！」

こなた&フラン&ツナ「質問や感想おまちしてまーす！」

こなた「次回ものぞいてみてね」

??「?誰か呼んだ？」

??「急にどーしたんだよ、モモ？」

モモ「ううん、なんでもないわ。(・・・気のせいかしら?)」

??「そろそろあたしらの番が回ってくるころかな」

モモ「言っとくけど、あなたはまだ名前伏せられてるわよ。??。」

??「なにいつ!？」

モモ「フフフ・・・さて誰でしょう?。」

## 標的7：黒の退魔使（前書き）

はい、そろそろ次の展開に進みたいです。  
蜜柑です。

色々ネタは浮かぶのに文章にできませんね。  
打つのが遅いのもありますが

カナ「よかったら読んでってね！」

でわどーぞ

## 標的7：黒の退魔使

ぎぎいい・・・

「しつれいします?」

次の部屋にいたのは。

「え、もう来たんですか!？」

「すっごいはやかっただね!」

美男美女でした。

「とりあえず名乗っておきますね。僕はアレン・ウォーカーです。で、こっちが・・・」

「リナリー・リーです!よろしくね。」

ものすごく礼儀正しい・・・



「さ、沢田綱吉です。」

「笹川京子です」

「フランドール。」

でも嫌な予感しかしないという。  
どうなってるんでしょうかね。

「ここでは、リナリーの肩についているバッジを30分以内に取ればあなた達の勝ちです。」

ふーん、あの白いバッジか。・・・ん？取る？

「そのかわり、僕が全力で妨害します。僕の妨害をくぐりぬけてリナリーの所にたどり着いてくださいね。」

「2対2で勝負よ。」

・・・。

「・・・誰が出る？オレは決定だろうけど。」

普通に考えたらフランかな。

「私が行く！」

「うん、じゃあ京子ちゃんは巻き込まれないように逃げててね！」

「がんばって！ツナ君、フランちゃん！」

それより。

『アレン』と『リナリー』って・・・

・・・まさか、ね。

「では、始めます!」

京子ちゃんの隣にある大きな時計が、カウントダウンを始めた。

ドウンッ!

「!!!」

「飛んだ・・・」

空中戦か。しかもあれは・・・というかやっぱり。  
イノセンス。

「フラン、空中いける?」

「もちろん!十八番おこはなだよ!」

フランの背中から、服を突き破って美しい羽根らしきものが生えた。

「そつか。」

じゃあ。

「・・・オレがアレンの足止めをする。そのすきにバッジを奪え。」  
「！ツナ？・・・わかった、まかせて！！」

・・・さあ。

はじめよう。

「！二人の雰囲気が変わった・・・？」  
「関係ないよ、私達はできることをやるだけ。でしょ？アレン君。」  
「はい！」

殺し合いをするわけじゃないから落ち着いて行こう。

数分後、この考えがどんなに甘いものだったか……。僕は思い知らされることになった。

次回。

いよいよバトル勃発です。

## 標的7：黒の退魔使（後書き）

萌香「読者のアジト、はじまるよ！」

ツナ「うちのクラス美男美女ばかりで・・・確実にオレ浮いてるよな・・・（ぼそぼそ）」

萌香「？どーしたの？」

ツナ「ううん、こっちの話。」

萌香「そっか。今回は戦場ヶ原さんだよ。」

### 【戦場ヶ原ひたぎ】

作品：化物語以下、物語シリーズ

武器：文房具全般

得意技：毒舌（猛毒）

部活：とくになし

その他：質量操作の能力

『暦の彼女。浮気は絶対に許さない質<sup>タチ</sup>。ヴァルハラコンベのひとり。頭はいいのに中身が残念という典型的な（？）例。』

ツナ「言いたい放題だな・・・」

萌香「ねえ、ひとつ聞いてもいい？」

ツナ「いいよ。」

萌香「その・・・ツナって呼んでもいいかな？」

ツナ「あ、うん。いいけど・・・」

萌香「やったーっ！これでお友達かな？」

ツナ「うん。」

萌香「わーい」

ツナ（オレなんかと友達になって何がそんなにうれしかったんだろう）

萌香「」

ツナ「えーっと、今回も質問が来てるね。」

萌香「ツナに『漆黒の不死鳥』さんから！《「オレが出したのは、青い炎をまとった雨属性の日本刀」って言ってますが、ツナは雨属性の炎を使えるんですか？》ということだけど・・・」

ツナ「使えないよ。ただ、この雨系・ランクAオーバーの特殊なりングには雨属性の死ぬ気の炎がある程度蓄えられていて、匣を3」

4回開けられるくらいの量の炎が出る仕組みになってるんだ。」

萌香「ん〜?」

ツナ「スパナと正一君にどうしても持っていて言われたから・  
・。あ、あと雷属性のも持ってるんだけど使うときが来るとは思わ  
なかったな。オレとしては普通の学校に進んだ気になってたし。」

萌香「確か、山本君って言うお友達からもらったんじゃない?」

ツナ「日本刀自体はね。山本は今野球選手目指してるから、もう使  
うことはないだろう、ってさ。竹刀(〃時雨金時)があれば十分だ  
とか言ってたつけ。そもそもこの日本刀より竹刀(〃時雨金時)の  
方がしっくりくるってよく言ってたし。ただ、竹刀(〃時雨金時)  
は変形型で両刃なんだ。だから、みねうちが出来るこっちの剣をよ  
く使ってたよ。」

萌香「ほえ〜。バリバリのスポーツ少年だねー。(よく分かって  
いないようです)」

ツナ「うん。オレにもそのくらい運動神経があつたらなー・・・。  
しかも山本、お寿司も握れるし・・・。」

萌香「ツナは十分だとおもうよ?」

ツナ「全然。中学校時代オレの身の回りにいたヤツらはオレの10  
倍は運動神経いいよ。どっかの委員長とナツポ(〃)にいたって  
は・・・(ぐちぐち)」

萌香「あはは・・・えっと、『漆黒の不死鳥』さん、ご質問&ご感

想ありがとうございました！」

ツナ「ありがとうございました！そろそろ終わろっか。せーの！」

萌香＆ツナ「ご質問＆ご感想、おまちしてます！」

萌香（友達ができた！男の子の！）

ツナ「じ、次回もよろしくね。」



## 標的8：黒い靴・白い道化（前書き）

戦闘描写なんて書けません。（え  
蜜柑です。

今回から、キャラ紹介の時に出演作品も書いておくことにしました。  
前回までののも修正しておきました。

それではえらい短いですが

怒江「ごゆっくりどうぞ。」

## 標的8：黒い靴・白い道化

「・・・。」

鎧のイノセンスか。

「くっ・・・なかなかやりますね。」  
「・・・。」

・・・アレン・ウォーカー。

ノア『14番目』の宿主・・・か。

「その羽で、どうやって飛んでるの？」  
「さあ？考えた事ない。」

しかも、はい。  
わたしのダークブーツについてくるなんて・・・！

「壊しちゃダメなのよね、捕まえないと。」

「あなたじゃ捕まえられるいわ。」

まるで子供がおもちゃを見つけたような彼女の純粋な目。

・・・戦闘を楽しんでる？正気なの？

「うん、このままじゃあんたには追いつけないってわかってる。」

そう言っただけで彼女がとり出したのは、カード。

見た目は、ただのカード。

「あははははっ！さあ、ここからが本番！」

「ただのカードで何をしようっていうの！？」

「スぺルカードを知らないの？」

確実に分かった。

あのカードは危険すぎる。

がっ、ダン！

「あの子が何者かは知りませんが、リナリーを捕まえることはできませんよ。」

「……………」

・・・あの左腕、剣にもなるのか。  
だが、あれはおそらくオレを切れない。・・・退魔の剣。  
情報が正しければ、だが。

「そろそろ、僕も本気でいきますね。」  
「・・・！」

フードと目の周りを覆う仮面を素早く装着し、マントを巧みに伸ばし始めた。

・・・空中戦にでも持って行く気か？

「そういえば、あなた空中で戦えるんですか？」  
「・・・残念だが。」

オレは素早くとびあがった。アレンの目の前で。

「！！！！！」  
「空中はオレの絶対領域だ。<sup>テリトリー</sup>」

「禁忌『フォーオブアカインド』!」

気がつく、相手は4人に増えている。

「!」

そして、それぞれが・・・所謂<sup>いわゆる</sup>弹幕攻撃というものを仕掛けてくる。

「ほらほら、逃げないと当たっちゃうよ?」

「本物がどれか。」

「あなた、わかって。」

「ないんでしょう?」

「くっ・・・」

こうもバラバラに攻撃されたのでは、全部は避け切れない。

(とりあえず、一人でも減らさないと埒が開かない!)

「円舞『霧風』!」

ゴオッ!

「きゃあっ!」

フランドールが二人に減った。

これなら、本物を絞れる!

「あなたいま、」

「これで本物が見つけられる、とか」

「「思っていない？」」

・・・そんな・・・。

「うそ・・・！」

どうしてフレンドールが、4人、いるの？  
倒したはず・・・なのに！

「30分逃げきるしかない！」

「ふふふっ・・・アハハッ！」

速いだけの人間が吸血鬼に勝とうなんて

100億年はやい！



## 標的8：黒い靴・白い道化（後書き）

エリン「読者のアジトはじまります!」

ツナ「今回はリナリーだよ。」

### 【リナリー・リー】

作品：D・Gray-man

武器：黒い靴<sup>ダークブーツ</sup>

得意技：パンチとキック（あ

部活：とくになし

その他：黒の教団のエクソシスト

『まだ装備型の段階です。のちのち結晶型になるかとおもわれ』

ツナ「そういえば、エリンって王獣って言う生き物が好きなんだよね。」

エリン「王獣は、とっても美しい魅力的な生き物なの!（きらきら

ツナ「飼ってるんだっけ?」

エリン「リランのこと？うん、そうなの！色々あったけど、リランは私の最高のパートナーなの！（きらきらきら）」

ツナ「今度本編でも出してくれるって。」

エリン「本当！？よかったね、リラン！」

リラン「ぐああおお！」

エリン「そうだねリラン。じゃあ、質問の紹介するね。『漆黒の不死鳥』さんからツナ君に。《ツナとリボーンは面識は無いんですか？》ですって。」

ツナ「面識？ないよ。」

エリン「でも、原作では中2の時に家庭教師に・・・ってことになってるね。」

ツナ「原作はオレにとって他のパラレルワールドの話なんだよね。現に、白蘭って原作では敵だったけどオレにとっては異国の友達ってとこなんだ。」

エリン「へえ〜。」

リラン「ぐああああー!!」

ツナ「そ、そろそろ終わろっか！『漆黒の不死鳥』さん、ご質問とご感想ありがとうございます。・・・せーの！」

エリン＆ツナ「ご質問、ご感想おまちしてまーす！」

リラン「がるっ！」

エリン「次回もよろしくお願いします！」

## 標的9：狂哀ヴァンパイア（前書き）

学年末テストが迫りつつあります。

蜜柑です。

活動報告にすでに書きましたが、そろそろ更新が遅れたす可能性があります  
あります。

書き次第出すつもりなんですけどね。

まあ、それはともかく。

書いてたらフランがえらいことになった・・・！

どうするんだよ、この始末！（オイ

文字数も無駄に多くなってる気がします。

有希「標的9：狂哀ヴァンパイア、はじまります。希望する方は下  
へスクロールしてください。」

## 標的9：狂哀ヴァンパイア

ドガッ！！

「くっ・・・爪クラウンエッジノ王輪！！」

一回一回の攻撃が重い・・・！  
こんなに強い子がいるなんて知らなかった。  
退魔の剣じゃ人間の相手は出来ないから、左手に戻して正解だった。  
劣勢なのには変わりない・・・ですけど。

「・・・。」

そのとき。

彼は何の前触れも無かったにもかかわらず、ちらつと素早くどこか  
を見た後ぼそつと何か呟いた。  
僕には聞こえなかったけど。

「えっ？」

聞き返すと、彼はぐつと拳を握って、今度ははっきりと聞こえる声  
で言い放った。

「終わらせるぞ。」

「ツナ君・・・！」

多分あのままじゃ、フランちゃんがりーさんからバッジを奪うのは不可能だと思う。

時間はあと20分あるけど、バッジを取るためにはどうしても彼女を追い抜くぐらいのスピードが必要。

でもフランちゃんは、ついて行くのが精一杯に見える。何かの攻撃で足止めは出来てるけど、攻撃をやめてしまったら今度はもう、りーさん捕らえられなくなる気がする。

吸血鬼だって言ってたから動体視力は私よりいいかもしれないけど、それでもおそらくは難しい。体がついて行かない気がするから。

でも、ツナ君ならもしかしたら・・・。

「いつまで」

「逃げるの？」

「諦めて」

「止まったら？」

「」「」「それとも今から私たちを倒すつもり？」「」「」

そう言っても、アイツは止まることなく私の弾幕をよけ続ける。  
すばしっこさだけはハエ並ね。

「あと15分・・・」

『もう少し逃げできれば勝てる。』って、絶対あいつはそう思ってる。  
ツナが言ってたもん！

・・・は？ああ、いつ言ってたかつて？  
戦う前しか無いじゃん。

何で戦う前から、半分くらい時間が経ったら相手はそう考えると思  
う、って分かるんだろーね。

頭に火がついてから雰囲気変わっちゃったし。

それでもツナはツナだけどね。

それにしても、吸血鬼より早い人間がいるとか・・・。  
プライドの高いお姉様に知られたら怒られるなあ。

「他<sup>ゴ</sup>と考<sup>カ</sup>えてる時間はあるの？」

「あつ！！」

しまった。

完全に油断してた・・・！

「きゃあああつ！」

するどいかかと落として、私は一気に地面にたたきつけられた。

ガスッ、ドゴオオオン！

「あうう・・・」

いつの間に。

でもまあ、これぐらいの骨折ならすぐ直る。

両腕とも折れるとは・・・なかなかあなどれない威力。

「これ以上動けない様に、とどめを刺すわ。」  
ケイルイ しつつい  
「？累」 失墜の踏技<sup>とつぎ</sup>  
てつかせ  
鉄枷<sup>てつかせ</sup>！」

だーくぶーつ・・・だっけ？が巨大化してさらに、頑丈<sup>けんちく</sup>そうな鋼鉄の形状へと姿を変える。

あれ当たったら、さすがのわたしでもちよつとまずいかな・・・。  
とどめって言ってるくらいだし。



「はあああつ！！！」

「！！？・・・あ、あれ？」

知らないうちに部屋の角に追い詰められてた・・・？  
気付かれない様に避けるつもりだったのに！！

「うわああああああつ！！」

あいつの攻撃は周りを破壊して砂煙をあげながら、わたしの体をきれいに貫いた。

「やりすぎちゃった。手当てしないと・・・！」

まさか全く避けないとは思わなかった。

たぶん、さっきの私のかかと落として腕か足が折れてたんだ。  
こんなことって・・・！

「ふう・・・今は痛かったな。なかなかやるね、アンタ。」

「えっ・・・？」

いまの攻撃で、無傷・・・？

いや、確かに深く貫いていたはず！

「・・・。」

わたしは、このときバケモノを見るような眼で彼女を見てしまった。  
あとからものすごく後悔した。

・・・そんな目で見ては、いけなかったのに。

「えっ・・・？」

・・・  
・・・。

その眼。

その眼、その表情、私を否定し続けてきた奴らと全く同じ。どうしてそんな目で私を見るの？どうして周りと違っていたらすぐ仲間はずれにするの？どうして私は遊んじゃいけないの？なんで？どうして？

ねえ。どうして私を怖がるの？

あなたいま、ワタシがコワかったンデしょ？

「・・・い？」

「！？え・・・？」

「ワタシが、怖い？恐ろしい？」

さあ、コタエテヨ。

シヨウジキに。

「・・・コワカッタンデシヨ？キモチワルカッタンでしょ？コンなモノガつきササツてもモ、シナイワタシガ、キミがわるい。そうオモッタンデシヨ？」

「そんなことは・・・」

ウソ。

・・・ソウナンデシヨ？

バケモノみたいに、ミエタンデシヨ？

「ネエ・・・？」

「・・・いや・・・来ないで！・・・あつ。」

ほらネ？

キヨゼツシタ。

しよせんニンゲンナンテ、ミンナソウ。

「来るな化け物！」

「あの子と遊んじゃダメよ。」

「お前がいるとなにもかもが壊れるんだよ！」

「ねえ・・・ドウシテ？」

オトモダチニナリタイダケダッタノニ。

みんなミンナ、ニゲテイク。

「モウイイヨネ。」

・  
・  
・

ホンキでコイツコワシチャウネ？

今日のおやつは

紅茶のジャムとアプrikott。

イッショニイカガ？

## 標的9：狂哀ヴァンパイア（後書き）

はやて「読者のアジトはじまるで〜」

ツナ「今回はアレン君だよ。」

【アレン・ウォーカー】

作品：D・Gray-man

武器：神ノ道化  
クラウン・クラウン

得意技：トランプ（主にポーカー）でのイカサマ

部活：とくになし

その他：黒の教団のエクソシスト、14番目の宿主

『トランプゲームになると黒アレン化する似非紳士少年。アンラッキーボーイで、じゃんけん等にもものすごく弱い。モテるっぽい。』

ツナ「今回はここまで！せーん」

はやて「すとおおーっぷー！」

ツナ「何！？」

はやて「質問は？」

ツナ「・・・来てないよ、今回は。」

はやて「えっ・・・？」

ツナ「あれ、もしかして質問したかったの？」

はやて「当たり前や！そのために来たんやで！やのにそんな時に限って当たるなんて・・・どんだけ運悪いねん私！」

ツナ「うーん・・・わかった。今度質問が来たらはやてに来てもらうようにするから。な？」

はやて「おうおう、ツナはごつつやさしいなあ。おおきにおおきに」

ツナ「じゃあ、もう終わろっか？」

はやて「よっしゃー！」

ツナ「せーの！」

はやて&ツナ「ご感想&ご質問おまちしてまーす！」

はやて「素朴な質問でもええから、遠慮せずにこのはやて様に聞きや！まってるで！」

ツナ「様って・・・」





## 標的10：大空（前書き）

今日中（20日）に間にあってますね！  
蜜柑です！

書いてないで勉強しろという  
普段部活が忙しくて勉強していないのに。

沖田「標的10はじやりやーす。こんなんでいいですかイ。」

## 標的10：大空

「サア、アソボウヨ！禁忌『かごめかごめ』！」

ダダダダアンッ！！！！！！！

「ぐう・・・っ！」

！？暴走してるの？

暴走してるならどうして・・・

あなたは泣いてるの？

「フランちゃん！」

どうしたの、急に？

このままじゃ、フランちゃんもみんなも巻き込まれちゃう・・・！！

だれか・・・とめて・・・！

「アハハハ、アハハハハッ！！」  
「くっ・・・！」

攻撃は無差別で無茶苦茶・・・明らかに彼女の体に負荷がかかっている。

私との戦闘でボロボロの体が耐えきれない・・・！  
このままじゃあの子、死んじゃう！

「はあっ！」  
「ウフフ、キカナイヨ。」

彼女の折れた左足がすぐに回復する。

・・・さっきより回復スピードが遅くなってる。  
しかも、回復しきれずにうつすらとかすり傷が残ってしまっている。  
彼女の剣の攻撃をかわしながら、私は観察した。

「早く死ンジャエバ？」

サッキ折ラレタ左足ガイタム。

ドウシテダロウ？

治ッタハズナノニ？

「Q E D 『495年の波紋』！・・・アレ？」

イツモヨリイリヨクガナイナ？

アーア・・・壊レチャッタ。

「ジャア、モウ壊スネ。」

ワタシハ、目ノ前ノ女ヲ壊スコトニシタ。  
面白クナクナッタカラ。

「サア・・・死ンデ？」

「もう止めろ、フランー!」

・・・ツナ?

「ダメダヨ、チャントオ片付けシナキヤ。」

アノオ人形ヲ壊シテ、捨テナイト。  
オ姉様ニ、オ仕置キサレチャウ。

「!？」

「もういい……。もういい、フラン。」

ダメダヨ。

ダツテアイツハ……

「アイツハ、私ヲバケモノ扱イシタンダヨ。ソレニ、ツナノ敵デシヨウ？」

アンナ奴、死ンデ当然ナンダ。  
殺サレルベキナンダ。

「それは違う。死んで当然な奴なんていない。殺されるべきな奴なんていない。」

ワタシハアンナニ苦シンダノニ？  
ソイツラモ殺サレルベキジャナイノ？

ジャア、ワタシハ幸セニナツテハイケナイノ？  
ミンナヲ不幸ニシテシマウワタシハ？

「・・・確かに、そいつらはお前に酷い事をしたんだと思う。でも。」

デモ・・・？

「だからといって死ななくてはいけないことにはならない。お前も普通と違うからといって幸せになっちゃいけない・・・友達を作っちゃいけない事にはならない。」

・・・。

「・・・フラン、オレはお前の友達だ。お前の味方だ。オレは、お

前と出会って不幸だなんて思ったことはない。」

「……ツ……ナ……？」

「不幸じゃない……？こんな私と出会って……？」

「ああ。」

「フランドール・スカーレットという吸血鬼と出会えて、オレは幸せだ。」

大空が、歪んだ紅をやさしく、優しく包んだ。



## 標的10：大空（後書き）

はやて「読者のアジトはじまるで」

ツナ「今回はご機嫌だね、はやて。」

はやて「私に質問がきてるんやで」

ツナ「よかったね。あ、今回はキャラ紹介はなしです。」

はやて「よっしゃー！」

ツナ「落ち着いて！じゃあ、はやてに質問が来てるよ。『漆黒の不死鳥』さんより、『守護騎士達は一緒に学園に通ってますか？』あと、初代リインは健在ですか？」ということなんだけど・・・」

はやて「このはやてちゃんが答えたるで！・・・ん？シュゴキシタチ？・・・ああ！あの4人のことやな！4人はうちの屋敷のメイドさんや。昔から仲がええんやで！」

ツナ「メ、メイドさんがいる屋敷って・・・」

はやて「えーと、もうひとつはリインフォースのことやったな？リインは初代も何もひとりしかおらへんけどな・・・？」

ツナ「原作ではリインフォース？がいるって。」

はやて「ちょっとまちや。・・・なるほど。そういうことやってん。」

ツナ「先に把握しといてね・・・。」

はやて「いや、シグナムが戦闘狂でな、毎日その相手させられそうになるんや。それで見る暇なかってん。」

ツナ「はやても大変なんだね。」

はやて「そや！今度うちに遊びにこーへん？シグナムの相手して欲しいんや！そろそろ新しい相手探す言つてたし！うん、我ながらええ考えや！！」

ツナ「ええ！？と、とりあえず一旦終わろつか！せーのっ！！」

はやて&ツナ「ご感想&ご質問おまちしてまゝす！」

はやて「『漆黒の不死鳥』さん、質問おおきにな！」

ツナ「次回もよろしくね。・・・あれ？ハヤテサン？オレハドコニヒキズラレテイルンデショウカ？」

はやて「もっちゃん、私のマイホームや 戦闘狂が待ってるで」

ツナ「いやだああああ！！！！！」

標的11：木魂学園校長（前書き）

はい、勉強よりこつちの方が楽しいな。  
蜜柑です。

特に書くこともないので・・・

ネウロ「読みたくば読むがいい。ただし、我輩責任は一切負わんぞ  
」？」

ではどうぞ？

## 標的11：木魂学園校長

「幸せ？本当に？」

「ああ。」

「私は・・・生きていてもいいの？」

ツナはオレンジ色の美しい瞳でしっかりと私を見て頷いてくれた。  
うれしい。

「・・・ありがとう。」

この時から、私の生きる意味は今までと変わった。

「リナリー、時間です。これは僕たちの勝ちですか？」

「ううん・・・私達の負け。」

リナリーの腕に、バッジはなかった。

「いつ取られたのかは分からなかったけど、たぶんあの男の子が取ったんだと思う。」

「僕も綱吉君に手も足も出ませんでしたし・・・完敗、というわけですね。」

エクソシストが負けただなんて、神田が聞いたら怒るだろうなあ。

「フフッ・・・3人とも。次の部屋である人が待ってるわ。行って。」

「お疲れさまでした。」

「えっと、ありがとう！アレン君、リナリーちゃん。」

3人は、扉から溢れる光の向こうに消えていった。

「ここが、最後の部屋？」

ついたのはひどくこざっぱりした部屋。

「ようこそ。」

ふいに現れたのは・・・

「？ツナ、だれこのババ」それ以上いったらスキマ送りにするわよ？」ええ・・・。」

スキマ送りってなんだ・・・。  
それよりもあなたは誰なんですか。

「あの、あなたは・・・？」

「私は八雲紫。ここ、木魂学園の校長先生よ。」

え？

こんな若そうなの？え？

「ええええええええええ！！！？？」  
「うるさい。静かにしなさい。」

「一体何歳なんですか……。」

初代から変わってないとか・・・。  
 ここ『創立2000年の歴史ある学園』（キャッチコピー）って  
 いうのじゃなかったつけ。

「レディーに歳を聞くななんて野暮ね。ああ、ちなみにダー……おっと、理事長も変わってないわ。」

何て言おうとしたんだよ。

なんだよダーって。

っていうか理事長もあんたも何者だよ！人間じゃないことは確かだけど！

「……コホン。ちゃんと話さなくちゃいけないわ。この学園について、ね。」

校長先生が語ったことはこうだ。

「この学園は、能力を持った子供たちが世の異質として消されていくのに耐えきれなかったダ……もとい、理事長が建てた学校よ。理事長はひっそりと隠れるように暮らしていたそんな子供たちを集めて、はじめはただの青空学級からだったけれど、子供達を守るために能力の押さえ方やうまく扱う方法などを研究したりしていた。そして……その活動が1500年前に広く世間に知られることになってしまった。それによって、特殊な能力のある子どもたちは裏組織に狙われるようになってしまった。見世物にしたり、奴隷としてこき使ったためよ。でも、彼は組織達に子供たちを一人たりとも渡すことはなかった。どんな大金を積まれようと、彼は取り合わなかった。」

いまこの日まで、だ。

「そして、1000年前……あいつらが現れた。」

「あいつら？」

「そう。裏組織『ラーニョファミリー』。誰にも分からない様に罠を張り、かかった獲物は逃がさない……。手段は選ばない最低最悪のマフィアよ。あいつらは、一番能力の向上確率の高まっているこの学園の生徒たちを日々狙っているわ。他にも狙ってくる輩はたくさんいるけど、一番厄介なのはこいつらね。でもまあ、私の張った結界であいつらはここには近づけないわ。安心しなさい。」

この学校にいる限り、とりあえずは安全らしい。

「さあ、あなたたちはそろそろ帰りなさい。ああ……その男の子には少し話があるわ。」

「え？オレですか？」

「あなたしか男はいないわよ。」

京子ちゃんとフランは？

ちゃんと返してあげてくれるのか？

「ちょっと待ちなさいよクソババア！私も残る！」

「誰がババアじゃ、このクソガキイイ！！」

ババアがNGワードなんだ、校長。

「ツナ君！」

「き、京子ちゃんの下に変な空間が・・・！京子ちゃん！！！」

京子ちゃんは、空間に落ちて行った。

「校長先生、どういふつもりですか！京子ちゃんは！？」

「これはスキマといって、わたしの空間なの。彼女は家に帰してあげたのよ。感謝なさい！」

「は、はあ・・・。」

結局、フランは帰りませんでした。京子ちゃんだけ強制帰宅を余儀なくされました。

この後オレ（とフラン）は、1時間近く家に帰してもらえませんでした・・・。

帰りはスキマで送ってもらえたけど。





標的11：木魂学園校長（後書き）

ツナ「読者のアジトはじまるよ！」

??「・・・。」

ツナ「今日は校長先生だよ。」

【八雲紫】

武器：おそろく傘

得意技：スキマ送りにすること

その他：木魂学園校長

『この記事はスキマ送りにされました』

ツナ「なんか削られてるー!？」

??「・・・何が書いてあったのか逆に気になるな。」

ツナ「えーと・・・誰？」

??「（はあ）・・・自分の顔も忘れたのか？」

ツナ「まさか・・・ハイパーモードの、オレ?っていうかこんな分

裂じみた事あり？」

ハイパー「ありだろ。（どーん」

ツナ「当たり前のように抜かすな！つか、あつてたまるか！なしだなし！」

ハイパー「事実、オレはここにいる。」

ツナ「いないね、これは夢だ。（どーん」

ハイパー「・・・現実を見る。（呆れ」

ツナ「自分にあきれた！？あ、そろそろ終わつとかなないと！せーのっ！」

ツナ「ご質問、ご感想おまちしてまゝす！・・・ってお前は言わんのかい！！よく考えたらタイトルコールしたのもオレだし！」

ハイパー「・・・そういう柄じゃない。」

ツナ「オレってハイパー化するとこんななるっけー！？（がーん」

## 標的12：居候（前書き）

性懲りもなくまた勉強せずに執筆してしまいました（オイ  
蜜柑です。

剣心「はじまるでござるよ。」

## 標的12：居候

こんにちは。沢田です。

今回は、オレンちのいそう「、もとい家族を紹介します。  
実家の方にも居候がいるんだけど、多くなるから割愛。

ガチャ

「ふう・・・ただいま」

ダダダダダダッ！！！！

「おかえり、パパっ！！」

どごおん！ごっん！

「ぎゃあっ！！？」

「あれ、パパ？」

帰るたびに突進するのを止めてくれれば、パパ、はうれし、い、な・  
・

「パパっ！？」

「なに、どうし・・・ツナ！？」

そこでオレの意識はとぎれました。

「ん・・・？」

あれ、オレ家に帰って・・・で？

「パパごめんなさい・・・大丈夫？」

「ヴィヴィオ、大丈夫だから泣くなって、な？」

そうそう、玄関でヴィヴィオに突進されて頭打っちゃったんだ。

あ、えーと、読者の人はさっぱり分からないと思うので1人ずつ説明します。

「パパ、あのね、今日クッキー作ったよ。たべて！」

この子はヴィヴィオ。10歳で、うちの居候ナンバー4。泣き虫でさびしがり屋だけどもとってもいい子。

一つ問題があるとすれば・・・

「はい、パパ。」

・・・オレのことを（なぜか不明）パパって呼ぶところかな。周りからなんか子持ちみたいに見られるし。

でもまあ・・・悪い気はしないかな。

「ツナ、ごはんできたよ。ヴィヴィオも早くおいでね。」

「うん。ありがとう、アリシア。」

この人はアリシア・テストロッサ。居候ナンバー2。19歳。長い金髪が綺麗な人。

記憶喪失で、自分の名前と年齢しか覚えていなかった。

「どう？記憶、戻りそう？」

「うつん……。ごめんね。」

「いいんだ、アリシア。思いだせないなら思い出せないで別に大丈夫だと思うし。」

「ありがとう、ツナ。」

何でもできるし美人だし……。ほんと得だよなあ、こういう人ってあ、冒頭で気絶したオレをベッドまで運んでくれたのも彼女だと思う。

……。ふがないな、オレ。

「ツナ、お帰りなさい！うにゆう」

この子は靈烏路空<sup>れいいうつろく</sup>。居候ナンバー3。11歳。妖怪らしくって、誰かに追われていたところを助けて以来一緒に暮らしてるんだ。今更家には帰れないって言ってたな、そういえば。

「ただいま、空。いい子にしてたか？」

「もつちろん！」

「ウソつけ。壁に落書きしてただろ。」

「ちくるな、シロちゃん！」

「オレの名前は冬獅郎！誰がシロちゃんだ！！」

えーっと、この白髪の人が日番谷冬獅郎<sup>ひつがやふしろう</sup>。居候ナンバー1。17歳の氷使い。

この人も記憶喪失っぽい。

アリシアといい、一体何があったんだ。

いや、記憶喪失だから分かんないんだけどね。うん。

「・・・ケンカはダメ。」

「希、熱は下がったの？大丈夫？」

「ツナ！・・・うん。」

この子は霧谷希<sup>きりやのぞみ</sup>。居候ナンバー5。14歳。施設育ちで、人見知りが激しい。

昨日から熱を出して寝込んでたんだ。

「そっか、よかった。」

がちやつ。

「なんだ帰ってたのか。言えよ、ったく。」

「いなかったのはそっちじゃん。」

「はいはい、ケンカはしない。おかえりなさい、ツナ。」

「ただいま、哀。」

この人は江戸川コナン<sup>えどがわ</sup>。本名工藤新一<sup>くどうしんいち</sup>。居候ナンバー6。表向きは

10歳だけど、本当は18歳。

もう一人は灰原哀<sup>はいばらあいい</sup>。本名宮野志保<sup>みやのしほ</sup>。居候ナンバー7。こっちも、表

向きは10歳だけど、本当は18歳。

二人とも、薬を飲まされて身体が幼児化したらしい。

犯人を見つけるため、日々二人で何かしてる。研究？



えーっと、そんな感じ・・・かな？  
居候多いな、オレの家。  
いつの間にも増えたし。

## 標的12：居候（後書き）

アレン「読者のアジト、はじまります！」

ツナ「今回もキャラ紹介はなしだよ。」

アレン「作者に質問が来てますね。『漆黒の不死鳥』さんからです。」

ツナ「《蜜柑さんの好きなキャラは誰ですか？》だって。どうなの？」

蜜柑「はいどうも。好きなキャラ？ハイパーツナはオレの嫁。以上。」

アレン「・・・はい？」

ツナ「・・・え、オレ？」

蜜柑「にゃははは」

ツナ「・・・キモイ。っていうか、オレ男だし。嫁じゃねーよ。」

蜜柑「（無視）あとと、京子ちゃんとクローム大好きなんですよ。霊夢とかフラン（東方の）とか、なのはとかも好きだな。あと、リクオにアテム（闇遊戯）もかっこいいよね！」

アレン「聞いてませんね。」

蜜柑「ハイパーさんは嫁ったら嫁！」

ツナ「マジでキモイ。近寄るな。」

蜜柑「ひでえ！」

アレン「とりあえず・・・理由は？」

蜜柑「最初はルックスと言い言動と言い、めっちゃめっちゃカッコいい！と思ってただけ、最近は原作の作画がなんかほんわかしてきたというか・・・可愛らしくなったなーって。それで余計に好きになりました ノーマル時のツナもカッコイイと思うよ（ぽわーん）」

ツナ「えーと、とりあえずありがとう？」

アレン「時間もないので。」

ツナ「終わろっか。せーの！」

アレン＆ツナ「ご質問＆ご感想おまちしてまーす！」

蜜柑「『漆黒の不死鳥』さん、ご質問とご感想ありがとうございます！」

アレン「次回も意外と早く書かれるかもしれませんね。」

ツナ「オレが言うのもあれだけどさ・・・勉強しなよ・・・。」

### 標的13：霧と雪の少女（前編（前書き））

やっと隙を見つけて投稿出来ました！

蜜柑です。

これが終わったら新しい展開に……いく……かも。

霊夢「よかったらスクロールしなさいね。」

でわどづぞ？

### 標的13：霧と雪の少女く前編

シリシリシリシリ．．．．．！！！！

「．．．。」

バシッ。

「．．．．．6時半．．．。」

何でこんな早くセツトされてるんだろっ、このめざまし．．．  
学校の日ならいざ知らず、日曜日なのに。

．．．なんだろ．．．．．なんかあったような．．．

「．．．．．あ。」

そうだ。

すっかり忘れてた。

「おはよう、ツナ。」

「アリスア起きてたんだ．．．おはよう．．．。」

だめだ、めちゃくちゃ眠い。

朝が弱いのだうすれば治るんだろっ。

「・・・結局、冬獅郎と希だけ？」

「うん。私は残る。」

「そっか・・・。」

いざ減るとなると、さみしい・・・かな。

向こうに行って、ちょっとはみんな落ち着いてくれたらいいな。

オレの精神が堪えきれたのが不思議なくらい（あらゆる意味で）騒  
がしいからな・・・。

あの手この手で精神削られる。うん。

・・・それがいいところでもある・・・のかな。いいのか？

「8時についてことだから、そろそろみんなを起こしてくるよ。」

「私は今のうちに応接間掃除しておくよ。来るんでしょ、クローム  
さん。」

そっいえばそうだった。

「うん。わざわざうちまで迎えに来てくれるってさ。・・・気使わ  
なくてもいいのに・・・。」

「部下がボスに気を使うのは当たり前のことよ。」

「うーん・・・オレ的には普通の友達のままが良かったなあ・・・  
獄寺くんにしても、山本にしても。」

オレが巻きこんでおいてあれなんだけどね。

あ、獄寺君はもとからか。

「早くしないとクロームさん来ちゃうよ。」

「本当だ、もう7時！？新一、哀！起きてる！？」

えーっと。今日は、新一達がイタリアに行く日なんです。

「世界一のマフィアの研究室はどうなっているのかしらね。」

「バーロー、研究室なんざどこも変わんねーだろ。要はどんな人間がいるかってことだろ？」

「あら、そうじゃないのよ工藤君。研究にはちゃんとした設備が必要不可欠。どんな優秀な人間がいたとしても、道具がないことには始まらないでしょう。まあ・・・だからといって、ただ単にいい道具ばかりあってもしょうがないけれど。その人に合った設備があるかということが重要なよ。」

「ふーん・・・。」

ほんと仲いいよなー。この二人。

二人が、幼児化させられたこの薬の効果を抑制する薬を作るため、今の社会よりも科学が少し発達している（らしい）ボンゴレの本部に行きたい、と言い出したのが2週間前だったっけ。

薬作るだけなら哀だけでもいいんじゃないかと思うけど・・・どうなんだろう？

・・・あ、もしかしたら黒の組織について調べるつもりなのかも。

「クローム、急に増えちゃってごめんね。」

「大丈夫よ、ボス。」

「よろしくおねがいします、にゃあ。」

「・・・にゃあ・・・猫が好きなの？」

5日前に突然、希と冬獅郎が自分達も行きたいって言い出して困った。

とりあえずザンザスに頼んだ（脅した）から大丈夫だろうけど・・。

もつと強くなりたいって突然言い出すんだもんなあ。ほんとに焦った。

まあ、二人は比較的物静かだからヴァリアーの五月蠅い奴らにもまれた方が（？）いいのかも。

あー・・・でも、精神的な意味で・・・ちょっとキツイ、かな・・・？

うーん？よく分からなくなつた・・・。

コホン。・・・それはそれとして。

クロームも猫好きだから、希と気が合うかも。

この二人は仲良くやっていけそうだな。  
ちよつと安心した・・・。

「ツナ、氷輪丸はそのまま持つていけるか？」

あー、刀だからなあ。

どうなんだろう？普通に持つていったら間違いなく引つ掛かるけど。

「えーつと・・・クローム！いけそう？」

「大丈夫、問題ないと思う。私の槍がうまく運べたから・・・。」

「そっか、ありがとう。冬獅郎！大丈夫だってさ！でも、外からは見えないようにしておきなよ。」

「わかつてる！」



よし、みんな準備できたみたいだ。

「それじゃあクローム、お願いするね。」

「まかせて、ボス。」

その日、うちの住人は・・・

沢田綱吉

ヴィヴィオ

アリシア・テストロッサ

霊鳥路空

の4人になりました。

・・・って・・・あれ？

今、男ってオレ一人？

あれ？

新一と冬獅郎がイタリアに行つて・・・で・・・

今はヴィヴィオ達が家にいて・・・

女しかない・・・？

そんな家で暮らす？オレが？

「・・・あれ・・・。」

これじゃまるでオレが女たらしみたいじゃ・・・ち、違う!!

オレはそんなキャラじゃない。オレはそんなキャラじゃない！！

「パパー、アリシアお姉ちゃんが『せつかくの日曜日だから、みんなどこか出かけない？』だって！私、遊園地行ってみたい！」  
(・・・ちよつとまでええええ！！！！)

言つとくけど、オレはロリコンじゃないからね！親子でもないからね！夫婦じゃないからね！

「？パパどうしたの？」

「……！？」

「言ってることは支離滅裂（しりめつれつ）と言うより何言ってるか分からない）で、おまけに挙動不審。ツナ・・・どうしたの？」

「うにゆう？シリメツレツ？キョドウフシン？」

誰か、精神をすり減らさないですむ方法を教えてください。

対女性用の抗体がオレにはありません。

・・・え？今まで大丈夫だったじゃないかって？

だってそれは・・・他にも男いたし・・・だからあんまり気を使わなくて済んだって言うか・・・。

つまりひとりっ子のオレには、もともと気を使うというスキルが低いんですね。たぶん。

次の日。

「やつほー、ツナ」

「ツナ、おはよっ！元気ないね？」

「おはよ。・・・そうかな。」

「お前の<sup>こなた</sup>テンションが高いんだろ。昨日ゲームでもしてたのか？」

「ゲームなんて、毎日4時以降までやってるよ？」

え、睡眠時間2時間！？

こなたの家から学校までって、7時には家出ないと間に合わないんじゃない・・・？

「・・・せめて、せめてでいいから2時までには寝ろよ・・・。」

善吉君の言う通りだよ。

っていうかそれでも遅い。12時までには寝た方がいい気がするけど・・・。

「いつも2時ぐらいからオンラインゲームの本番だよ！？そんな時に寝れるわけないじゃん！」

「しらねえよ！」

「あはは・・・。」

このときオレは知らなかった。  
イタリアで何が起こってるか。



標的13：霧と雪の少女（前編（後書き））

魔理沙「読者のアジト、はじまるぜっ！！」

ツナ「えーと、今回は質問が来てるね。っていつか、今回の話は学園と関係ないんじゃないや……。」

魔理沙「いんや、実は関係あるんだってよ！！それより質問行くぜ！！まず一つ目！『漆黒の不死鳥』さんからだ。ありがとな！《ツナは京子が好きですか？ 勿論、恋愛の方で》だってよ。どうなんだよ？（にやにや）」

ツナ「ちょ、直球な質問だな……。」

魔理沙「いいからいいから」

ツナ「……………うん。（ボソ）」

魔理沙「お熱いな〜！」

ツナ「魔理沙うるさい！」

魔理沙「次の質問だぜ『夢幻』さんからだ。ありがとな！《ツナから見た居候達の第一印象は？逆に居候達から見たツナの第一印象は？》。……っー訳でお呼びしたぜ」

居候「s「ども」

ツナ「聞いてないよ!？」

魔理沙「じゃあ7人に質問だ！ツナの第一印象は？」

冬獅郎「貧弱。」

アリシア「うーん……なよなよしてる、かな。」

空「クズ。弱そうだったし。」

ヴィヴィオ「すぐ人を信用して変な人にもついて言っちゃいそうだったよ。」

希「……ダメダメそう。」

コナン「頭悪そうだったな。」

哀「運動は出来なさそうだったわね。」

ツナ「みんなひどい……（泣）」

魔理沙「たしかに弱そうだよな。筋肉とか全くなさそうだし。」

ツナ「オレを苛めて楽しいの？ねえ？」

魔理沙「わりいわりい！んで？ツナはどうだったんだ？」

ツナ「冬獅郎と希とヴィヴィオは人見知り激しそうだなって。空はなんていうか……カリスマ性が感じられた。アリシアは美人だなーって。哀と新一は子供なんだけど大人っぽくてよく分かんなかったな。」

魔理沙「だってよ。」

ツナ「あれ？ノーコメント？」

魔理沙「質問サンキューだぜ」

ツナ「・・・新手のいじめだね。そうだよな？」

魔理沙「そろそろ終わるぜ！」

ツナ「・・・・・・・・せーの・・・・。（泣）」

おーる「ご質問&ご感想お待ちしてまーっす！！！！」

魔理沙「？ツナどうしたんだ？」

ツナ「オレなんて・・・・。」

魔理沙「ほんとにへなへなしてんなー。（作者あ、次ハイパーモードで出すってどうよ？しゃきつとしてるはずだぜ！）」

（蜜柑「ごめん、ハイパーさんだと虐めたくなる」）

魔理沙（それでもおもしろそうだけどなー。）

ツナ「・・・・・・・・。（泣）」

#### 標的14：霧と雪の少女（中編（前書き））

知らぬ間に前回から1週間近くたってて驚きました！  
蜜柑です。

そろそろ落ち着いて来たので、投稿を再開しようかと思います。

今回はキヤラ崩壊しかないです（？）。

『原作でこんな技つかわねーし、そもそもねえよ！』と思っても大目に生ぬるい目で・・・お願いします。

文才の無さはいつも通りです。

ゆっくりれいむ「ゆっくりしていつてね!-!」



## 標的14：霧と雪の少女／中編

・・・ごめんなさい、ボス。

先に仕掛けられたとはいえ、やっぱり気のはしないけど・・・。

「おらおら！死にたくなかったらおとなしくしな！！」

「ちっ・・・」

「シロ君、舌打ち聞こえちゃうにやあ。（ひそひそ」

私、セーニョファミリーにケンカ売ります。

「？」

今誰か・・・？

「どうしたの、ツナ？まさか刺客！？」

「ちがうから・・・何でもないよ。」

「最近ばーっとしてる時間が増えてないか？ツナ。」

そうかな。

思考時間は増えたかもしれないな。（それです B Y 作者）

「そういえば。」

何を思い出したのか、善吉が箸の動きを止めた。

「？」

「めだちゃんが言っただけだよ、次のテストっていつもと違う風にするらしいぜ。」

「違う風？どんな感じ？」

フランとオレも、同じように箸を持つ手を止めた。

こなたは相変わらずチヨココロネを頬張ってたけど。

「さあな。さすがにそれ以上は分かんなかったって。」

「ええー。気になるじゃん！」

「先生ってケチだね。」

気になる・・・か。

・・・どうしてこんなに嫌な予感がするんだろう。

同じ頃、イタリア・ローマのとある裏路地。

ちなみにイタリアは夕方で、しかももう日が暮れかかっているためすでに薄暗いのである。

「全員捕獲だ！（伊語）」

骸様との合流ポイントまであと少しだったのに。  
まさかセーニヨファミリーに見つかってたなんて・・・。

「その一番年上の姉ちゃん。後ろの4人をおとなく差し出すつてんなら、あんただけ見逃してやるぜ？どうする？（伊語）」

「・・・それはダメ。（伊語）」

このままではみんな殺されてしまう・・・。

・・・でも、私ひとりで50人の相手はきつい。特にこの子たちを守りながらでは・・・。

「おい、こいつらなんて言ってたんだ？（ひそひそ）」

「・・・。」

「私達を・・・狙ってるみたい。（ひそひそ）」

！希ちゃん、イタリア語がわかるの？

「昔、施設にイタリア出身の人がいた。その人から教わった、にゃあ。（ひそひそ）」

「この状況で、にゃあ、はいらねえだろ・・・。（ひそひそ）」

「・・・にゃあ。（ひそひそ）」

・・・それは確かにそう。

それにしても・・・この子たち余裕そう・・・？

「どうするの、戦うつもり？（ひそひそ）」  
「そのつもり。」

あなた達を連れては逃げられない・・・。

「じゃあ私達も戦わなくちゃね、工藤君？（ひそひそ」

「わーってるよ！（ひそひそ」

「？」

この子たち・・・？

「グダグダ言ってるじゃねえ！お前ら、さっさと殺れ！（伊語」

「了解！（伊語」

「！！」

・・・。

しゅわあっ！

「！？」

「この子たちには、指一本触れさせない。」

50人の屈強な男たちが、藍色の靄もやに行く手を遮られた。

「てめえ、何しやがった!?（伊語）」

「・・・私なんかに気を取られてて・・・いいの?（伊語）」  
「!?!」

男の頭上には、氷輪丸を構えた冬獅郎。

「霜天に坐せ、氷輪丸!」

（!この子・・・まさか?）

冬獅郎の持っていた刀　氷輪丸から、氷の龍が放たれる。

「な、なんだ、あの餓鬼!?!」

すると、それを聞いた冬獅郎の額に青筋が浮かんた。

「誰がドチビだコラアアア!?!」

「ぎゃああああ!?!」

どうやら子ども扱いされたのが気に入らなかったらしい。  
あっという間に10人の男が氷漬けになった。

「・・・その人たち、ドチビとは言ってなかった。」

「うるせえ!」

ごもつともである。

そうこうしているうちに、何とか避けた7人が反撃の構えを見せた。

「ぶっ殺したらあ!」

「雷遁・稲妻忍具。」  
クナイ

「な．．．につ．．．?」

「!?!どうした!?!」

突如、13人の男たちがどさどさ何の間ええぶれもなく倒れていた。

背後から希が、クナイの形を模った雷撃を正確に男たちに当てていったのだ。  
かたど

「ガキが舐めた真似しやがつて．．．!」

「よそ見るなつて、言われなかつたのかしら。」

瞬間、どこからともなくとんできたサッカーボールが当たり、合計8人の男たちが気絶した。

「な．．．!?!か、体が．．．!」

そして、残りの男たちもその場に膝をついた。

「あなた達に（注射器で）打ち込んだのは、試作品の新しいしびれ薬よ。即効性を追究したら持続性がなくなったから、心配しなくてもそのうち効果が切れるでしょうね。まあ．．．試作品だからどうなるか分からないけど。」

「灰原．．．分からないってお前．．．。」

「真実よ。」

訳の分からない薬品を平然と投与するとは．．．。

灰原哀。なんとも恐ろしい女である。  
念のため言っておくが、哀は薬剤師ではなく科学者である。

「今のうちに、急いで骸様の所へ・・・！（この子たちのことは後で聞けばいい。）」

クロームは嫌な予感と戦いながら、待っているであろう恩人のもとへ走った。

「！獄寺、笹川先輩、気付いたか？」

「ああ。」

「無論だ。」

どこかの建物の前で話す、4人の男。

「ザンザスはどうかだった？」

「カスが。オレを誰だと思ってやがる。」

「ヴァリアーのボス、だよな。」

「チッ・・・カスが・・・！」

・・・ひとりはキレ気味だが。

「まあまあ、落ち着け。そんなことよりすることがあるだろう？」

銀色の短髪の男が、ザンザスと呼ばれた黒髪の男をいさめる。

「・・・だな！」

「芝生頭のくせに分かってんじゃねーか。」

芝生頭のくせになどと言っている煙草を吸っている銀髪の男と、笑顔でバットケースの様なものを背負っている男が肯定の意を示す。煙草野郎は明らかにいらんことを言っているが。

「なんだと！足の多いタコヘッド！」

「うるせえ、芝生頭！！！」

この二人の場合、程度の低い悪口をいちいち拾って反論するので、すぐに喧嘩に発展する。

言う方もあれだが、反論する方もする方である。

他の二人は完全に呆れてしまっていた。いや、むしろいつものことだとも言いたげである。

「チツ・・・。」

「まーまー二人とも落ち着くのな。」

なんとも精神年齢の低い言い合いをしている者がいたが・・・。  
ともかく、4人は建物の中へ消えて行った。

「クフフ・・・僕 いや、僕たちを捕まえるとおっしゃいましたか



？

「是<sup>シ</sup>。私達セーニョファミリーのボスの意志。殺すのではなく生け捕りにするのよ。」

「何とも無謀な人ですね、その人は。」

それにしても・・・なぜこの女性の瞳には光が見えないんでしょうかね。

女性と言う生き物は、もっと芯の通った人ばかりだと思っていましたが・・・。

「・・・時間ね。また会いましょう、六道骸<sup>ろくろくむくろ</sup>。あなた達のボスにもね。」

「クフフフ、人生の楽しみが増えました・・・朱染亞愛<sup>しゅせんあけあ</sup>。」

これはこれは・・・。

（楽しくなりそうですよ、沢田綱吉。）

## 標的14：霧と雪の少女（中編（後書き））

リクオ「読者のアジト、はじまります！」

ツナ「ええと、久々のキャラ紹介だね。今回は希を紹介するよ。」

### 【霧谷希】

作品：迷い猫オーバーラン！

武器：体術

得意技：背後からの容赦ない踵落としかかと

その他：独学で身に付けた忍術が少し使える

『雪が降りしきる中、街を徘徊していたところをツナに拾われた。容姿端麗、運動神経抜群でおまけに勉強も人一倍出来る天才少女。忍術を独学で身に付けたことから、その天才ぶりがうかがえる。趣味はケーキなどのお菓子作り。』

ツナ「うん、こんなところかな？」

リクオ「へえ、その子お菓子作るの好きなんだね。うちにも料理好きの雪女がいるよ。」

ツナ「料理できる女の人っていいよね。」

リクオ「そうだな。」

ツナ「!？」

リクオ「ん？どうした？」

ツナ「・・・いきなり妖怪にならないでくれるとオレはうれしいな。」

リクオ「いーじゃねーか。別に。」

ツナ「いいけどもさ・・・うん。」

リクオ「？」

ツナ「あ、ひとつ聞いていい？」

リクオ「いいぜ。なんだ？」

ツナ「何で（妖怪化すると）身長まで伸びるんだ？」

リクオ「さあ？知らん。お前だって前髪伸びんだろ、ハイパー化する。」

ツナ「え、そうだっけ？前髪伸びてるっけ？」

リクオ「ここの作者曰く『原作のツナさんとハイパーさんのときの前髪の長さが違って見える。ハイパーさんの時鼻までかかってんの、ツナさんかかってねーもん。見間違えですかね？』だそうだ。」

ツナ「細かつ！しかも心底どうでもいい！！」

リクオ「まあ、原作者の天野先生に聞かねえと分かんねえだろうな。」

ツナ「絶対あいつの見間違いだと思う。」

リクオ「あいつどうでもいい所ばかり見てんな。『東方の巫女ってみんな腋巫女だな。現実では見たことないけど・・・いたらいたですこいよね』とか『無印時代のなのは達って小3だよ？小難しいことペラペラ言ってるけど小3なんだよね？えらい大人っぽいこと考えてるけど小3なん（ry』とか『VSモスカのハイパーさんなんで催涙ガス知ってたの？そんなん事態出て来んのじゃね？しかもあのツナさんが知ってた？自衛隊じゃあるまいし、えらい博識だな』とか・・・」

ツナ「本人の前で失礼だな！っていうかあいつ原作者に謝れ！！土下座で謝れ！！・・・モスカのはラルに聞いたんだよ！・・・たぶん。」

リクオ「たしか、元軍人だったな」

ツナ「あ、うん。鬼教官で有名だったらしいよ。」

リクオ「ふん。ん、そろそろ終わりだな。」

ツナ「そうだね。・・・せーのっ！」

リクオ&ツナ「ご質問&ご感想おまちしてまゝす！！」

リクオ」ところで、あのくじ引き意味あったのか？」

ツナ「何話前の話掘り返してんの！？」

標的15：霧と雪の少女（後編（前書き））

地の文って大事。

蜜柑です。

いつもよりシリアスに書きました。  
相変わらずグダグダです。

越前「・・・読みたいならスクロールするっスよ。」

でわどうぞ？

## 標的15：霧と雪の少女―後編

「何度来てもお断りよ。」

カーテンの隙間からこぼれる日の光を浴びながら、彼女は答えた。

「・・・なぜそんなに彼らを庇うんですか、マドモアゼル？」

しばらくの沈黙の後、言葉を選ぶように青年が口を開いた。

鋭い眼差しをうけながら、その青年は西洋の紳士的な恰好をしてソファにゆったりと腰かけていた。真っ黒なシルクハットを手でもてあそびながら。

「あの人・・・うちの理事長はあなた達のような下種<sup>ゲス</sup>とは違うのよ。分かったらさっさと帰って頂戴。それともスキマ送りにされたいのかしら？」

「下種扱いとは・・・。落ちぶれたもんだ。」

あからさまな殺気を放つも、青年にひるんだ様子は感じられなかった。

「ただの人間ではないようね。それとも、もともと人間じゃないのかしら？」

「人間ですよ。・・・選ばれた、ね。」

青年は怪しげな　それでいて楽しそうな笑みを浮かべると・・・

「また来ますよ、ミス・ヤクモ。」

突如出現した扉の向こうに姿を消した。

「二度と来ないでもらいたいわね。私は、あんたみたいないい加減な男が大っ嫌いなよ。」

オレンジ色に変わり始めた光に影を落としながら、消えて行く扉に向かってそうつぶやいた。

「お帰りティッキー どうだったあ？」

「ありゃだめだ。あんな奴に勝てる気がしねえよ。」

闇のなかを思わせる、距離感のつかめない真つ暗な部屋の中。

光が灯っている所にいた小学高校学年くらいの少女が、キャンディをなめながら青年に声をかけた。  
それにしても、肌がえらく浅黒い。

「ユカリ・ヤクモは最高ランクの能力者だからねえ。」

八雲紫 青年たちの間で知らぬ者はいない最強の呼び声高い能力者。彼女にかかればこの世のあらゆるモノの、境界の有無を操ることが出来るという。

「ああ。・・・あり？千年公は？」

「たぶんフ」「フランスにいますよ。」あ、おかえりい、ノワール。



少女のセリフに、何処からともなく現れた銀髪青年が割って入った。

彼の体は黒いマントで覆われていて、

「よう、ゴーシュ。どうだった、ボンゴレの・・・あれ、名前なんだっけ？ まいいか・・・女は？」

「亞愛がちよつと単独行動をとりましたが、問題ありませんでした。クローム髑髏は引き続き要注意ですが。あと連れの子供が4人いました。」

4人の子供と聞いて少女が反応した。

「ごども？」

「あ、はい。一般人ではなさそうでしたが、あの程度なら『鏡音リン』レベルでも余裕だと思いますよ。」

丁寧な敬語で、ゴーシュ（ノワール）と呼ばれた青年が答えた。どうやら飴少女とシルクハット青年よりも位が下らしい。

「ふーん。じゃあシグナムに連絡とって、あいつらの残りが日本のどこかにいるはずだからさっさと捕まえちゃって。直接シグナム達が動くんじゃないくて、ハクとネル達を使えばいいから。」

「実行は1週間後ぐらいでいいんじゃない？ そんなに急がなくていいよ。」

「分かりました、そうします。・・・行こう、ロダ。」

足元に隠れていた少女　ロダに声をかけ、ゴーシュは部屋を後にした。

「骸様!!」

「おや、遅かったですね。」

険しい顔をしたクロームを見て、何があったのか尋ねてみた。

「・・・この子たちをよろしくお願いします。誰か、追って来てください。」

「そうですね。・・・分かりました。くれぐれも無茶はしない様にしてくださいね。後から沢田綱吉に文句を言われるのは僕なんですから。」

「はい。いつてきます。」

「無理は禁物ですよ。」

「私は骸様が思っているよりも弱くないです。」

クフフ、思っているより、とは。僕にどの程度だと思われていると思ってるんでしょうか。

あなたの事は僕が一番よく知っているのに。

「・・・女が一人で残った。」

「私が行きましょう。ヤミちゃん、私に何かあるまで待機しててね。」

「うん。ルカも気をつけて。」

暗闇の中でもひととき目立つ金髪ロングの少女。  
彼女が見送ったピンク髪ロングの女性。

二人は互いに微笑み、闇の中に姿を消した。

「・・・でできて。」

静寂に包まれた林。何もかもを溶かしてしまいそうな漆黒の夜空。  
そこに響き渡ったのは、歌。

「!?!」

「はじめまして。」

現れたのはピンク髪の美女。

「・・・誰？」

「あなたがボンゴレファミリー・雪の守護者ね。私は知らない歌手よ。名乗るほどじゃないわ。」

「!?!」

・・・少し間違ってるけど・・・何でそれを知ってるの？  
私が雪の炎を使える事を知ってるのは、ボスと骸様だけのはずなのに・・・!!

「フフッ。あなたは捕獲してくるように言いつけられているから、

心配しなくても殺しはしないわ。」

直後、彼女の足元にピンク色の魔法陣が浮かび上がった。

「魔法陣……。魔力使い？」

そして私は、自分の目を疑った。

「密林に潜みし迅竜シンリュウよ我が歌声のもとに飛翔せよ。」  
「！！！！」

魔法陣から出現したのは……。  
巨大な、赤眼の真つ黒なセイブツ。

「ナ・ガ……。！」

最後まで彼女の声を聞きとるひまなく私は、そのセイブツの素早い攻撃を食らい意識を手放した。

標的15：霧と雪の少女（後編（後書き））

銀八「おしえて！」

ミク「ぎーんぱーちせーんせー！！」

ツナ「ちょ、コーナー名変えんな！」

銀八「あん？銀さんが呼ばれたんだぜ？そこは変えるだろ。」

ツナ「意味分かんねー！」

ミク「アシスタントのミクです　じゃあさっそく、最初の質問！『漆黒の不死鳥』さんの作品のキャラ、『火渡優也』くんからです。『原作で戦う力が無い奴も学園にいるが、そう言う奴にも戦う力があつたりするのか？　答えられる範囲で頼む。』とのことです。」

ツナ「えーつと？」

銀八「銀さんがズバリお答えします。いますね。つか、力がないとこの学園には入れません。えー、戦闘で使える力かどうかは個人によるけどな。」

ツナ「そういうえば京子ちゃんは透視能力だったけど、これは戦闘能力ではないよね。」

銀八「そういうこつた。つーわけで『漆黒の不死鳥』さん及び『火渡優也』君は机の上で30分逆立ちしてください。」

ツナ「無理！無茶苦茶言うな、あんた！」

ミク「えと、最後の質問です。」

ツナ「はやっ！もう終わるのかよ！ってかさっきのスルー！？」

ミク「うん。『紅葉or紅蓮』さんからです！『フランが高校生って設定になってるけど、フランは何年間も閉じ込められても姿は子供のままだったはずじゃ？』とことです。」

ツナ「フランって見た目は完全に小学校低学年だよ。」

銀八「はい、ストゥップ。お答えしましょう。その通り、フランは見た目も精神年齢も幼女です。ちなみに495歳だ。」

ツナ「うそ！？何で今さら高校生！？」

銀八「いやよお、本当は高等部じゃなくて初等部に入れるつもりだったらしいんだけどよ……。いくら精神年齢が低くてもいくら見た目が幼女でもさすがに初等部はダメだろ、ってことになって間を取って高等部にしたらしい。」

ツナ「中等部にはしなかったんだ。」

ミク「中等部って今0人なんだよ。」

ツナ「・・・え？」

銀八「おう。初等部はいるにはいるんだが、中等部はダントツに少ないんだ。だから、この学園に初等部と中等部があることを知って

るやつが少なすぎて入る奴も入らんらしい。高等部は多いけどな。」

ツナ「へ、へえ……。」

銀八「よし。つつーわけで、『紅葉or紅蓮』さんは水でいっぱいにしたバケツを持って廊下に立ってなさい。」

ツナ「・・・思ったより普通だ。」

銀八「バカ、タマに変なことするから面白いんだろうが。」

ツナ「しらねえよ！つか面白くなかったから！」

ミク「あれ、そういえばキャラクター紹介してないよツナ。」

ツナ「あ！え、えっと、今回はクロームです！」

### 【クローム髑髏】

作品：家庭教師ヒットマンREBORN！

本名：凧

武器：三叉槍

得意技：幻覚

その他：ボンゴレファミリー

『雪と霧の死ぬ気の炎の使い手。幼いころ両親を亡くし路頭に迷っていたところを、たまたま日本を訪れていた骸になんとなく拾われる。骸も子供だったので、拾った、というよりは仲良くなった(?)の方が正しい気がするが。好物は麦チヨコ。麦チヨコだけでも生きていけると豪語しているほど、大好き。右目の眼帯は何かを隠しているらしい。』

ツナ「これでよし。じゃあ、終わろう。」

ミク「せーの!」

銀八&ミク&ツナ「ご質問&ご感想おまちしてまーす!」

銀八「ああ、忘れてた。」

ツナ「?」

銀八「実は作者がこの学園の紹介を1話書こうと思ってるらしいんだが、誰に説明させるか決めかねているらしい。」

ミク「というわけで『このキャラに説明して欲しい!』という案があったら(この小説に出て来ないキャラでもいいので)感想のに書いてください」

ツナ「しょうもねえ……。こんなん募集かけるなよ……。」

ミク「気軽に書きちゃってくださいね?」

銀八「っつーわけだ。ヨロシク。」



「ッナ」よろしくおねがいします。

## 標的16：蜘蛛の糸（前書き）

単行本の表紙見てテンションがぶっ壊れました。あ、リボンですよ。

蜜柑です。

アリシア「の馬鹿は無視してくれて結構だからね。では、読みた  
い方は下へどうぞ?」

今回はフラグ立てしかしてませんのでめちゃんこ短いですよ！

## 標的16：蜘蛛の糸

「……。」

「ふん、ふん」

「ここは……どこ？」

「……そうだ、私はあのピンクの人に……」

「ふん、ふん あら？気がついた？」

「……誰？」

全身水色の衣装……と言いか和服の人。

「あら……私って意外と地味なのかしら？……まあいいわ。私の名は西行寺幽々子。名前は聞いた事あって？」

「……！」

西行寺幽々子<sup>さいぎょうじゆうめい</sup>。八雲紫と並ぶ『幻想四帝<sup>げんそうしてい</sup>』のひとり。最強ランクの能力者で、あらゆる生き物の“死”を司ると言われている。

「どうして……。」

なぜそんな人物がこんなところに？なぜ私はそんな人の所にいるの？

「まあ、1週間もすれば分かるわ……私達の目的が。安心なさい、取って食べたりしないから。」

「……。」

「だってあなたは、私達の大切な操り人形だもの・・・フフフッ。」

1週間

それは一体何を意味するの？

・・・・・・助けて、ボス・・・！

「任務完了。ごくろうさまです、ルカ。」

「ヤミちゃんもごくろうさま。思ったより骨がない相手だった・・・。」

どこかの木の上で会話しているのは、クロームを襲った女性と金髪少女。

「実戦経験、性能、実力。すべてがルカに有利だった。」

「ふふつ、ありがとう。・・・あとのくらいなの？」

性能。スペック、ということなのだろうか。

「うん・・・まだまだ。」

「そっか・・・。やっぱりこの程度じゃあの人を救えないのね。」

「長年の悲願だから・・・そう簡単にはいかない。」

それっきり彼女たちは黙りこんでしまった。

「アイ、ゴリラ肉のステーキが食べたいな。」

「・・・かしこまりました。少々お待ち下さい。」

アイと呼ばれた女性は、礼をした後すぐに部屋を後にした。

「それにしても楽しみだな。」

怪しげに微笑む少年。

目線の先には・・・

「木魂学園高等部。」

学園が映し出された大きなモニター。それは暗闇の中で不気味な存在感を放っている。

「一週間後をお楽しみに ステキな罍を用意してあるよ・・・。」

彼 いや、彼女は画面に向かってほほ笑んだ。

戦いの火蓋が切って落とされるまで

あと、七日。

## 標的16：蜘蛛の糸（後書き）

ハルヒ「読者のアジトはじまるわよ！」

ツナ「いきなり質問行きます。『漆黒の不死鳥』さんの小説キャラ『神道美優』ちゃんからだよ！質問ありがとう！えーっと『恋人同士の人っていますか？これから恋人になる人っていますか？』ってことなんだけど・・・ハルヒはどう思う？オレはよく知らないや・・・」

ハルヒ「まかせなさい、リサーチ済みよ！そうね・・・私の見解だと、神谷さんと黒子君、日暮さんと越前君が怪しいと見たわ！」

ツナ「へえ〜。公で恋人<sup>おおやけ</sup>つて人はまだいないと思うけど、恋人予備軍はいたんだ。」

ハルヒ「ツナ、噂にもっと敏感になりなさい。そんなんだから、いつまでたっても笹川さんとの間が進展しないのよ！」

ツナ「なっ、は、ハルヒには関係ないよっ！！！」

ハルヒ「・・・まあいいわ。後からこつてりしぼってあげる 私の可愛いゴーレムちゃんを使ってね」

ツナ「ひiiiiiiii！！お、終わろっか！！せーのっ！」

ハルヒ&ツナ「ご質問&ご感想おまちしてま〜す！」

ツナ（つか、ゴーレムってなに！？ドラクエのみたいなやつなのか

！？  
）

ハルヒ「うふふふふ。  
（妖笑）」

ツナ「ひいっ！？」



標的17：試験（前書き）

前回変なことを口走っていたようですね。気にしないでください。  
蜜柑です。

バカテスト・音楽

【第1問】

問 以下の問いに答えなさい。

『?フルートと?サクソフォンが、金属で出来ているにもかかわらず木管楽器に分類される理由を述べよ。』

黒神めだかの答え

「?フルート」ももとは木でつくられていたから。』

?サクソフォン『マウスピースに竹製のリードをつけるから。』

先生のコメント

「バッチリだぞ。よく勉強してんな。」

泉こなたの答え

「?フルート」笛だから、でしょ?。』

先生のコメント

「でしょ?と聞かれてもな・・・。」

フランドール・スカーレットの答え

「？サクソフォン『そくすふおんってなんですか？』」

先生のコメント

「質問を質問で返すな。あと“そくすふおん”じゃなくて“サクソフォン（サククス）”だ。」

## 標的17：試験

「明日のテストは、死ぬ気でやれよ。」

「えー、点数が低いと判断した奴は、オレ達の手で直々に処刑する。以上！」

いきなり明日がテストとかほざいた揚句に死刑宣告受けました。

「ツナあゝ。やばいよお、私殺されるゝ！」

こなたも勉強苦手だもんね。

「ああ・・・。」

クラス全体の雰囲気がこんなんです。  
やめてくれ。

普段五月蠅い奴まで黙りこくって気持ち悪いし！

「ツナ、てすとつてなに？」

フランが一番重傷だな。

本当に495歳の吸血鬼なのか・・・？

「学力診断。フランがどのくらい普段の授業を聞いているか試す試験だよ。」

「ふーん。善吉って物知りなんだねー。」

「常識と言つ名的一般教養だぞ・・・。」

だめだ。このままではフランが危ない。  
処刑の餌食になってしまう！

「ところでさあ。先生、テストにルールがあるっていつてなかった？」

「そつえば……。」

確かそんなこと言ってたっけ。

数十分前、LHRの時間での事。

「んじゃあ、ルール説明すんど。耳の穴かっぽじってよく聞け！」  
「一度しかいわねーからな。」

テストにルール？どういうことだ？  
・・・嫌な予感しかないけど。

「これは無限に点数を増やすことが出来るテストだ。」  
「簡単に言えば、1時間という制限時間のなかで無制限に用意されている問題を解くんだぞ。」

ごめんなさい、そんなシステムにした意味を測りかねるんですけど。  
「このテストの点数は、後々お前らに深く関わってくる。真面目に受けるよーに。」

テストの点なんてオレはどうでもいいんだけどなあ。  
どうせボンゴレのボスになるんだし、成績なんて・・・。

「ちなみにこのクラスで点数が悪かった上位10人は、1ヶ月ねっ  
ちより補習だゾ」

よし！やろつかテスト！

「うーん、この中で一番勉強ができるのってだれ？」

出来る人に教えてもらった方が効率がいい。

「さあ？二次元についての問題なら満点取れるんだけどな。」

安心して。そんなテストないから。  
そうだな・・・ちよっと試してみよう。

「こなた。」

「ん？」

サイン 「サイン  
Sine、Cosine、Tangent？」

「ごっく、ずごっく、ざんごっく！」

「神のみぞ知る？」

「カニの味噌汁！！（どや」

「・・・。」

だめだこりゃ。

「うーっし。んじゃ、今日から3日間テスト詰めだ。テストの途中で教室を離れた生徒は0点になるから、トイレとかは事前にちゃんと行っておくよーに。以上！」

3日後。

「おわ・・・った・・・。（がくっ）」

「お、おい泉！？大丈夫か？」

すべてのテストが終わったその日の放課後、一護が心配するほどこなたはぐったりとしていた。

「ああ・・・莓・・・大丈夫じゃ、ない。」

「オレの名前を変換ミスするほど！？お前保健室いけ！」

頭から煙まで出てるよ・・・。

「ツナ」

「あ、フラン。どうだった、初めてのテストは？」  
「全然分かんなかった。えへへ」

えへへじゃない。

補習行き決定かな、フラン・・・。

・・・え？オレ？

聞かないで。お願いだから。

吉日まで・・・

あと三日。

## 標的17：試験（後書き）

黒崎「読者のアジト、始まるぜ。」

ツナ「早速質問コーナーだよ！」

黒崎「『漆黒の不死鳥』さんのキャラ『水野進』君からだ。『ツナはテストの成績上がってるか？』だってよ。」

ツナ「・・・平行とだけ言っておきます。」

黒崎「だそうだ。質問ありがとな！」

ツナ「えっと、もう一つきてるね。『紅葉or紅蓮』さんのこのオレ（ツナ）から。」

黒崎「『この世界の俺がツナこの小説の主人公になっているけど、他作品の主人公達（黒崎一護とか）はどうするの？ほら、力とか、いろいろと。』だってよ。どうすんだ、コレ？オレ達が気軽に答えていいのか？」

ツナ「こんなときの作者だよ。おい。」

蜜柑「はい。どうもお久しぶりですね！」

ツナ「この質問に答えてほしいんだけど・・・。」

蜜柑「えーっと・・・長くなるので、今度どこかの魔人探偵さんに



説明してもらおうと思います。質問ありがとうございます」

ツナ＆黒崎（押しつけやがった、コイツ！）

蜜柑「でわまた次回お会いしましょう」

ツナ＆黒崎「ご質問＆ご感想おまちしてまゝす！」

蜜柑「学園説明してくれる人が決まんないなー。ゆっくりにしてもらおうか？」

ゆっくりれいむ「ゆっ！ゆっ！」

ツナ「ダメだろ！何言ってるかわかんねーから！」

黒崎「えと、今の編が終わった書くつもりらしいから終わるまでに案がある奴はよろしく頼むな。」

蜜柑（ぺこり）

ツナ「あれ？来なかったらゆっくりにやらすの？本気で！？」

蜜柑「さーてねふふふ。（棒読み）」

ツナ「無理だろー！」

## 特殊弾1：魔人の特別講座（前書き）

学校が休みだといらんことしますね。

蜜柑です。

えーと、『紅葉or紅蓮』さんから質問がありましたので、答えさせていただきました。

独自解釈の塊ですので、何かあれば感想にどうぞ

## 特殊弾1：魔人の特別講座

初めまして、の者が多いな。我輩の名はネウロ、脳嚙ネウロだ。今回は我輩が直々に魔力の素晴らしさについて語ってやろう。

・・・なに？魔力とはなんだ、だと？

ふむ、そこから説明せねばならんのか。まあいい。

一度しか言わんぞ。心して聞くがいい。

まず、この世界には「魔力」まりよく、「霊力」れいりよく、「妖力」ようりよく、「忍力」にんりよく、「炎力」えんりよく、「能力」のうりよくの6つの力が存在する。

凡人にはどれも実際に使えるほどの力は備わっていないが、我輩の様な特別な者には生まれつき高い力が備わっている。

他にも「六聖力」ろくせいりよくというものもあるが・・・貴様たちには縁のないものだろう。よって説明は不要だな。

では、簡潔にそれぞれ説明してやろう。

一つ目は「魔力」。一般的に魔法と呼ばれるものだ。

リンカーコアと呼ばれる魔力の源が大きければ大きいほど、強力な魔法を使える。

この力は貴様ら凡人でも多少はある、比較的に一般的なものだ。まあ、ほとんどが気がつかないまま死んでいくがな。

これについては後で詳しく説明してやるとしよう。

二つ目は「霊力」いわゆる。所謂霊圧や靈感などと呼ばれているものだ。

この力が強力な者は・・・まあ・・・この世の生き物ではないだろうな。

もちろん、例外も存在するが。黒崎辺りにでも聞け。

ああ、霊媒師だとかああいう者達はまだ低い方だ。本当に強力な者は気付いていないことが多いのだ。

三つ目は「妖力」。妖怪の力だな。

人外の力だ。迂闊に手に入れようなどとは思わぬことだな。

かつて不老不死の力を求めようと妖怪たちを狙った者が数多くいたが・・・人は闇に手を出してはならぬのだ。

四つ目は「忍力」。チャクラなどとも呼ばれているようだ。

忍術を扱ううえで欠かせない力らしいな。

まあ、力と言うよりはエネルギーを練ってチャクラに出来るかどうか、ということだが。

・・・そのうち分かるだろう。

五つ目は「炎力」。死ぬ気の炎などとも呼ばれる。

ふむ・・・。

多くて説明が面倒だな。他のやつにでも聞け。

六つ目は「能力」。超能力などと呼ばれるあれだな。

これは種類が多い。時間を止めたり奇跡を起こしたり、春を告げるだけ・・・と言う者もいるな。能力が春を告げるだけとは・・・何とも言えんな。

後々説明するものが現れるだろう。

さて本題だ。魔力について、だったな。

一概に魔力と言っても大きく分けて3種類あるのだ。

一つ目は「間接魔法」。霧雨がよく使うようだ。・・・あくまで噂だが。

ハーッターなどのSF映画でもおなじみの、杖を構えて呪文を唱える事で発動する魔法だ。

一番イメージがわきやすいだろう。

生まれつきの魔力値云々があまり関係しない辺り、相当な訓練と練習を積みめば貴様ら凡人にも使える力だ。才能がないと言われればそれまでだろうが。

む、少々脱線してしまった。・・・どんな力か、だったな。

「間接魔法」と言う名の通り、杖などの媒介がないと使うことは出来ない。

しかも、杖が主人を選ぶというからな。そのくらい自分に合ったものでないとダメだということだ。

二つ目は「組立魔法」。高町や八神、フェイトなどの時空管理局の管理局員が使っている力だ。

これは自分の潜在的な魔力値が大きくかわってくる類のものだな。まあ、どれも関わっているが。

あらかじめ“デバイス”と呼ばれるものに魔法式を組んでおくことで戦闘で素早く攻撃を行えるようにしたもの。凡人には扱えぬ代物だ。一流ともなれば、自分で魔法をコントロールして、軽い攻撃ならばデバイスを使わなくともできるらしい。機械的な魔法とも思えばいいだろう。

これにはたくさん種類がある。転移魔法や砲撃魔法・・・そのうち

分かるだろう。

さて、デバイスにも色々なモノがある。共通しているのは、石を媒介にしているということだろうな。ああ、見た目の話だ。宝石に見えない事もないが、宝石も所詮はただの石に過ぎん。

ちなみに魔法陣もここに分類される。ということは、錬金術師もここか？ふむ。

……どうしても使えるようになりたい！と言っているのであれば、時空管理局の門をたたいてみるがいい。

まあ、おそらく無理だな（笑）

三つ目は「融合魔法」。我輩の力だ。AのモンスターとBのモンスターを融合して 召喚！……などと言うあれではないぞ。体内の魔力と身体が完全に結合している者を指すこともある。

簡単に言うのだな……服まで破けるような大怪我をしても、魔力を使って傷だけでなく服まで自動修復出来るような者のことだ。どうだ、便利だろう？

以上だな。我輩が言いたいのはこのくらいだ。

……なに？説明が長くて聞いていなかったと？

普通なら鎖でぐるぐる巻きにして噴火直前の火山の火口に垂らして放置するところだが……ふむ……。

仕方がない。この作者レベルの馬鹿にでも分かりやすいように簡単にまとめてみたぞ。

他の力についてもまとめておいた。参考程度にはなるだろう。

「」のなかは、それを主に扱っている人物だ。 1 - Aのクラスメイ  
トに絞っておいた。

魔力

かんせつまほう

間接魔法「霧雨魔理沙」

くみたてまほう

組立魔法「高町なのは」

ゆうごうまほう

融合魔法「脳噛ネウロ」

霊力

しにがみがた

死神型「黒崎一護」

かめんがた

仮面型「黒崎一護」

とくしゅがた

特殊型「井上織姫」

よつりよく

妖力「奴良リクオ」

にんりよく

忍力

えんりよく

炎力

おおそらちよくせつがた

大空直接型一（全9種類）「沢田綱吉」

だいちかんせつがた

大地間接型一（全7種類）

のつりよく

能力

げんそうタイプ

幻想型「フランドール・スカーレット」

アブノーマルタイプ

異常型「黒神めだか」

スペシャルタイプ  
特殊型「笹川京子」

こんな所だな。

どうだ、わかりやすいだろう。

何かあれば遠慮なく質問に来るがいい。

以上だ。



## 特殊弾1：魔人の特別講座（後書き）

江迎「読者のアジト、始まります。」

ツナ「あれ？ “ろくなんとかせい”の解説は？」

蜜柑「・・・。」

ツナ「オイ！？あ、質問行きます。『漆黒の不死鳥』さんのキャラ  
『つくおみりゅう月臣龍』君からです。ありがとう！ええと『学園で一番Sな奴は  
誰だ？ あと、一番強気な奴。』だって。え、誰が答えるのこれ？」

江迎「そう思って呼んでおきましたわ、沢田さん。」

ツナ「？誰を？」

ハルヒ「はいはい！学園の事ならこの私にまかせなさい！」

ツナ「ハルヒいつからそんなキャラに！？」

ハルヒ「下にまとめたわ！」

ツナ「いや、Sな人と強気な人だけでいいんだけど・・・。」

DS 脳噛ネウロ、武藤遊戯（闇遊戯も）、八神はやて、沖田総悟

強気 ルイズ・フランソワズ、赤夜萌香、エリン

ムードメーカー 鏡音リン、初音ミク

大食い 神楽、桂木弥子

リーダーシップ 霧雨魔理沙、奴良リクオ、高町なのは

裏方 黒子テツヤ、日暮かごめ、長門有希

ハルヒ「こんな感じでどうかしら？」

江迎「色んな人がいるのね。驚きました。」

ツナ「へえ〜。」

江迎「次の質問です。『紅葉or紅蓮』さんのキャラ『天壤焰香』  
ちゃんから。質問ありがとうございます。『この作品の中で一番×  
×な人って誰？例えば、一番突っ込みが上手い人とか、一番頭が良  
い人とか？』。どうなんですの？」

ツナ「一番の世間知らずはフランかな。」

ハルヒ「一番の腹黒はツナよね。」

江迎「ですわね。」

ツナ「ん？なんか言った？」

江迎「何も言ってますんわ。一番ツツコミがうまいのはツナさんだと言ってたんですの。」

ツナ「そ、そんなことないよ。」

ハルヒ「頭がいいのは・・・黒神さんとか脳嚙さんとか、あとはBクラスの姫路さんね。」

ツナ「そんな感じです。もう終わろっか。せーのっ！」

ハルヒ&江迎&ツナ「ご質問&ご感想おまちしてまゝす！！！」

ハルヒ「心配しなくても次回はちゃんと進むわ！」

## 標的18：試召戦争（前書き）

あかん、後半のツナが黒い・・・？  
蜜柑です。

バカテスト・日本史

### 【第2問】

問 以下の問いに答えよ。

『大化の改新の中心人物の名前を漢字で二人あげよ。』

黒神めだかの答え

「中臣鎌足と中大兄皇子」

先生のコメント

「正解だ。」

越前リョーマの答え

「小さい頃はアメリカにいたんで知らないっす。」

先生のコメント

「じゃあしょうがねーな・・・何て言うわけねーだろ。後で職員室に来い。」

神谷薫の答え

「中臣のかたまりと中野おええのおおじ」

先生のコメント

「こんなグロテスクな名前は教師生活で始めてみました。」

## 標的18：試召戦争

「・・・マジか。」

「マジよ。テストの点が大きくかわってくるって、こづいことだったのよ・・・!」

朝一番にオレがハルヒに聞かされた内容はとんでもないものだった。っていうかハルヒ顔近い近い!!

試験召喚戦争しけんしょうかんせんそう

通称・試召戦争ししょうせんそう

自分の分身となる召喚獣を使い勝負する、クラス対抗戦。

召喚獣の強さは、テストの点で決まる。

そして、それぞれのクラス代表（または指揮官）を先に下した方が勝利となる。

最終戦績がトップだったクラスは、1週間好きな所に無料で旅行に連れて行ってもらえる。

反対に最下位だったクラスは・・・

「つまり。点数の高い方が絶対的に有利なわけだから、自分の得意

教科を伸ばせばバカでもそれなりに戦えるって寸法よ。」

「なるほど・・・。」

「ツナ、私の得意教科ってなに？」

なんでオレがフ란の得意教科をしってんの。知らないから！

「でもよ、総合科目だった場合どうすんだよ？」

「……・……・潔く諦めなさい、善吉。所詮バカはバカよ。」

「っていつか、善吉いつからいたの。」

「『……マジか。』ぐらいから？」

「最初からじゃん！！すごいお約束すぎるボケだな！」

じゃなくて！対策なし！？

総合科目は全部のテストの合計だから、どうしようもないっちゃどうしようもないけど……。

「先生ー。指揮官（クラス代表）は誰にするんですかイ？」

沖田君がガムを噛みながら質問する。

っていつか、ナチュラルに校則違反だよね？それ。

「それはオレが決めたぞ。沢田ツナ、お前がやれ。」

へえ、沢田さん大変だな……って、沢田さんオレじゃん！！

「ちょっと待ってください！なんでオレなんですか！？」

他に偉そうな……じゃなかった、使えそうな人いるでしょ！

「中学時代、クセのある7人をアゴで使ってただけでなくどっかの白い甘党と怒りんぼのカスを完全屈服させたお前なら楽勝だろ。」

「アゴで使ってはないから！しかもどこで聞いたそんな話！？」

「某タコヘッドにお前の自慢話として10時間ぐらいダラダラと。」

よし、次会ったらずは獄寺君を八つ裂きに・・・じゃなかった。

「指揮官って、具体的になにするんですか？」

「あー・・・作戦立てたりしてりゃいいから。あと、指揮官殺られたら負けだから。」

やられるの漢字ちげええええ！！

「クラス代表だからしつかりやれよ、ダメツナ。」

「ファイトだダメツナ。」

カチッ。

「・・・。」

「？沢田？」

「・・・。」（黒笑）

（ゾクッ！）

決定。このモミアゲと天パぶっ殺す。



「先生、ツ・・・沢田くんからの殺気が痛いです。どうしてくれるんですか？」

「初音？先生知らないよ。」

白々しいな、オイ。

「ツナ任せて！私が今すぐこの教師2人を壊すから！」

「じゃあお願いしようかな」

さすがフラン。気が利くね

「いやまってまって！落ち着けて！な？」

「黙れ天パ。（黒笑）」

「いゝっ!？」

「キュッとしてどかーん」

「ぎゃあああああ!？」

教師2人戦闘不能。

+ツナに変なスイッチが入ったようです。

「まずはB組が相手？」

「うむ。先程宣戦布告を受けた。B組の使者は沖田同級生たちにボ

「コボコにされていたような気もするが。」

「ご愁傷様と言っておこう、一応。」

「うーん・・・相手の事を知らないことには作戦立てられん」まかせなさいツナ！そのクラスの成績上位者からなにからすべて調べ上げておいたわ！」あ、ハルヒ。」

さすが！やることはやい。

「で？どういった作戦で行くのだ？」

「うーん、と。前線はミク達で・・・こなた達は、ミク達とやり合って相手が消費した所にとどめを刺して補習室送りに。後ののは、やってもらいたいことがあるから教室で待機。」

点数が0点になった人は死亡とみなされて、もうその戦争に参加することはできなくなる。そしてその戦争中は、スパルタ鬼教師・松まつ平片栗虎のもとで補習を受ける羽目になる。  
だいらかたくりこ

「前線みんなはまずいと思ったなら引いていいから。ある程度まで・・・くれぐれもオレの兵士コマが減らないようにね（黒笑）」

「まかせて、ツナ！みんな壊しちゃうんだから！」

「よっしゃ、隙をつくのはこのこなた様にまっかせなさい！」

「ネギの名にかけて（？）！」

「じゃあ・・・」

士気も上がって来てるし、あれもちゃんとうまくいったみたいだし・・・。

「B組徹底的に潰してこい。（黒）」  
「「「イエツサア、ボス！」「」」

ただいまの1年A組、ツツコミ不在。

・・・・最下位になったクラスは1ヶ月校長にこき使われる。  
24時間休みなど与えられる暇なく。  
規則を破った者も同上。

## 標的18：試召戦争（後書き）

黒子「読者のアジト、はじまります。」

長門「今回はツナの紹介を。」

【沢田綱吉・黒】

性格：ドS 腹黒

特徴：笑い方が黒い 目が笑っていない オーラがどす黒い

好きなモノ：人の苦しむ顔 部下弄り

嫌いなモノ：見下されること 負けること

『中学時代からの禁句“ダメツナ”と言うとこの状態に変貌する。通称・黒ツナ。腹黒ドS大魔王様。一番やってはいけないのはハイパーモードの時に“ダメツナ”と言うこと。この比ではないヤバさらしい（無事に戻ってきた人がいないので確証はナイ）。』

はやて「きたで、質問コーナー！」

ハルヒ「私達がばっちりこたえるわ！」

黒子「・・・今回はボクたちなんですけど。」

長門「放っておけばいいと思います。」

ツナ「遅れてごめん！あれ？なんではやて達が？」

長門「突然割り込んできました。」

ツナ「・・・うん、勝手にやらせればいいんじゃないかな。うん。」

黒子「じゃあ、ボクは帰らせてもらいますね。もう出番なさそうなので。」

長門「私も退席します。」

ツナ「ごめんね、ふたりとも！」

はやて「まずは『夢幻<sup>めいけん</sup>』さんからの質問や。おおきに！『テストつてりボーンの事だから、教科無視しちゃってます？それとも難易度激高？』と『イタリアに行っているコナン達の居住先は？無難にボンゴレアジト？』の二つ。まずは前者からや。」

ハルヒ「教科はたくさんあったわね。古文現代文数学現代社会日本史世界史地理科学物理生物地学英語家庭科情報技術音楽美術保健体育・・・あと力学。」

ツナ「っていうかハルヒ、それ読みにくいから・・・。」

はやて「力学は理科のじゃないんよ。魔力とかそういうんの基礎知識を問われるんや。」

ハルヒ「どの教科もめっちゃくちゃ難しかったわ。」

はやて「そやな。さて、後者の質問やけど・・・ツナ、これ答えて。」

ツナ「うん？えっと・・・新一達の移住先？新一と哀はボンゴレアジトで冬獅郎と希がヴァリアーのところ。ザンザスに頼んだ（脅した）んだ。」

ハルヒ「だそうよ。」

はやて「次の質問や。『漆黒の不死鳥』さんのキャラ『雷道仁』らいどうじん君からや。おおきに！『神楽と桂木弥子ならどっちが良く食う？』か・・・どっちやる？」

ハルヒ「さあ・・・？毎日のお弁当の数（食堂で購入）は神楽さんが25個、桂木さんが34個だけど。」

ツナ「何で数えてんだよ。」

ハルヒ「クセよ。」

ツナ「絶対違うだろ！」

はやて「まあとにかく、毎日のお弁当の数は桂木さんの方が多いたいやな。」

ハルヒ「最後の質問よ。『紅葉or紅蓮』さんのところの刹那くんからね。感謝するわ！『この作品の中で、一番まともな人間は誰だ？』だそうよ。作者！」

蜜柑「はい？」

ハルヒ「一番まともなのは誰？」

蜜柑「ん〜・・・常識人的な観点でいえばツナかな。あと善吉とか。カナちゃんもまともだよ！」

はやて&ハルヒ「一番は？」

蜜柑「え。。。。。。京子ちゃん？」

ハルヒ「こんな変人ばかりの作品なのに、私はまともじゃないっていうのかしら。。。？」

はやて「私やって普通に生きてきたつもりやけどな。。。？」

ツナ「ちょっとO H A N A S H Iしようか。」

蜜柑「それ魔王なのはセリフ！！」

ツナ「一旦終わるところか。せーのっ！」

ハルヒ&はやて&ツナ&蜜柑「感想&質問おまちしてます！  
！」

はやて「じっくり聞かせてもらおうで。」

ハルヒ「覚悟なさい！」

蜜柑「いやあああああ！！！！み、みなさん、じ、次回またお会い  
しましうー！！」



**特殊弾2：1年A組の部隊編成（前書き）**

だんだん春休みが近づいて来ました。後1週間以上も先ですが、蜜柑です。

ただの設定なので、面白みはないですよ。

## 特殊弾2：1年A組の部隊編成

各部隊のリーダーは のついでに人物。  
「」内は得意教科。

前線部隊（主に成績が中の下）

初音ミク「家庭科・音楽」

アレン・ウォーカー「体育」

越前リョーマ「体育」

神谷薫「古文」

黒子テツヤ「現代文」

ルイズ・フランソワズ「力学」

奇襲部隊（主に成績が下）

泉こなた「保健」

フランドール・スカーレット「美術」

神楽「現代文」

桂木弥子「化学」

緋村剣心「地理」

武藤遊戯「美術」

特殊部隊（主に成績が中の上）

フェイト・T・ハラウン「数学・体育」

ラグ・シーイング「数学」

長門有希「世界史」

支援部隊（主に成績が上位）

八神はやて「現代文・日本史・家庭科・保健」

赤夜萌香「数学・英語」

後方部隊（なのは以外は成績が中の上、なのはは上位）

高町なのは「現代文・古文・数学・化学・英語・音楽」

井上織姫「現代文・化学・美術・家庭科」

日暮かごめ「日本史・世界史」

火ノ宮満「日本史・物理」

リナリー・リー「世界史・英語」

別動隊（主に成績は上位）

涼宮ハルヒ「オールラウンダー」

エリン「数学・生物・物理・地学・化学・家庭科」

人吉善吉「現代文・日本史・世界史・体育」

本隊（主に成績は中の下と中の上と上位）

黒神めだか「オールラウンダー」

奴良リクオ「古文・数学・力学」

脳噛ネウロ「オールラウンダー」

霧雨魔理沙「数学・化学・力学」

黒崎一護「現代文・古文・体育」

笹川京子「オールラウンダー」

家長力ナ「数学・家庭科」

沖田総悟「古文・保健・体育」

江迎怒江「力学」

博麗霊夢「力学」

沢田綱吉（クラス代表）



特殊弾2：1年A組の部隊編成（後書き）

とりあえずこんな感じで。

何かあれば感想に書いてくださいね。

## 標的19：初音部隊（前書き）

なんで世間が地震の話題で持ちきりな時にこんなことしてるんでしょうね。

蜜柑です。

あ、今回の下の問題の答えは私の独自解釈です。  
あしからず（笑）

バカテスト・力学

### 【第3問】

問 以下の問いに答えよ。

『大空直接型のうち、雪の炎の特性は何か答えよ。』

沢田綱吉の答え

「蓄積」

先生のコメント

「まあ、当然だな。正解だぞ。」

アレン・ウォーカーの答え

「降り積もること」

先生のコメント

「おいしいな。でもそれじゃただの雪の様子だな。不正解だぞ。」

初音ミクの答え

「朝起きて庭一面の氷かな」

先生のコメント

「誰も俳句作れなんて言っ  
てねーぞ。」

## 標的19：初音部隊

「私達の使命は、奇襲部隊がとどめを刺せる程度まで相手の戦闘力（＝テストの点）を下げること！みんな、気合入れて行くよっ」  
「おーっ！！」

初音ミクは今日も元気です

試召戦争のルール。

その一、必ず先生の監督のもと行うこと。先生のいない場合の戦闘は無効となる。

その二、戦闘を行う教科は監督の先生の担当教科であること。総合教科の場合は誰でもかまわない。

その三、『戦争である』ということを常に意識すること。

その四、持ち点が0点になった場合はその場で補習室へ向かうこと。

その五、0点にならない限りは各教室へ戻ってテストを受け直すこととで何度でも点数を回復してよい。

その六、テストや戦闘で不正を働いてはならない。働いた場合その生徒のクラスはその場で失格とする。



その七、原則クラス対抗であること。

こんにちは、初音ミクです

私は、目の前に都合よくいた音楽担任の先生・卯ノ花烈先生うのはなれつを捕まえて、適当に目の前にいた人に勝負を挑むことにしました。

「先生お願いします。」

「どうぞ。」

「さあ、その人！音楽で勝負だつ、試獣召喚サモン！！」

デフォルメされた私って言ったら伝わるかな？それが私の召喚獣。  
ちなみに武器はネギ（刀）。

え？何で教科が音楽かって？音楽は私の大の得意教科！今前線に出て来てるような人に負けるはずないんだから。

「よろしくお願いしますね。試獣召喚サモン。」

相手が召喚してきたのは、弓矢を持った召喚獣。

そして召喚獣が召喚されると同時に、頭上に参考として二人の点数が浮かび上がる。

「・・・ゑ？」

私はそれを見て驚いた。

『1年A組	初音ミク	V S	1年B組	巡音ルカ
音楽	130点	V S	358点	

あれ？前衛の人・・・だよな？本陣の人じゃないよね？あるえ？

「攻撃です。」

私の点数が一気に37点まで減ってしまった。

「初音隊長、相手の強さが段違いダンチです！普通に300点超えて来て、僕たちじゃ話にならないですよ！」

「ちよつ、全員早速ボロボロじゃない！」

アレン君にルイズさん！？

「隊長。英語なら勝てるんスけど、英語の先生いないんで無理っス。」

え、越前君まで！

「ボクの点数じゃ届きませんね・・・。」

黒子君も！？

あわわわわ！

こ、こんなはずじゃ・・・

「アレンくん、ボスに報告！私たちじゃ無理！」

「わ、わかりました！」

これはまずい。

「補習はいやだあああ!!」

「これで私の勝ちです。補習室でしっかり学んで来て下さいね。」

相手の召喚獣が新たな弓矢をつがえて、構えてきた。

「いやーっ!!」

開始早々補習室送りになるなんて・・・こんな私って・・・

「ちょおつとまった!!」

・・・えっ？

「？だれですか、あなた？」

「ハルヒちゃん!？」

「ミクの相手は私が引き継ぐわ!試獣<sup>サモン</sup>召喚!」

なんでハルヒちゃんがこんな所に!?

教室で待機してたはずじゃ・・・?

「安心なさい、後方支援のなのは達が動いてくれてるわ。」

!なのはちゃんたちが?

よく見ると、いつの間にかリナリーちゃんや織姫ちゃんの姿が見える。

「それにしてもさすがだわ、何でもお見通しってわけね。」

「なにをいつているんですか、あなた?」

どういうことなの、ハルヒちゃん?

「優秀なボスに使える部下は幸せ者って話よ。」

「えっ?」

気がつくところには、私の召喚獣を守るように太刀を構えたハルヒちゃんの召喚獣がいた。

『1年A組      涼宮ハルヒ&初音ミク      VS      1年B組  
巡音ルカ

音楽      445点      &      37点      VS      358

点      『

「う・・・そ!?!」

「さあ、補習室で勉強するのはあんたの方よ!攻撃!」

「きゃあああっ!」

ハルヒちゃんの圧勝でした。  
っていうか頭良すぎるよ、ハルヒちゃん……。  
わたし、さっきの音楽が最高点だったんだよ？  
他の教科100点未満しかないよ、わたし。

「ひるんじゃダメ、早く援護に回るの！」

前線でこれだけ強いってことは、本隊はたいしたことない。  
クラス分けは平等にされてるって話だから。

「でもこのままじゃB組にたどり着けないよ、なのはちゃん！」  
「くう……。！」

おそらく相手の作戦はこう。  
前線を強い人で固めて私達の動きを封じておき、隙を作ってボスの  
首をとる。  
こんな感じかな。

「（だったらそれ以上の力で叩き潰すまで！）試獣<sup>サモン</sup>召喚！！」

『1年A組	高町なのは	VS	1年B組	佐藤美穂
数学	460点	VS	328点	

』

「そんな、このわたしが・・・！」

「問答無用！」

私の召喚獣の杖から放たれた光が、佐藤さんの召喚獣を一撃で仕留めた。

数学は得意教科だし、こんなもんかな

「そんな、400点以上取れる人がいるなんて・・・！」

「そんなに驚かなくなつたって、得意教科だけなの。」

美術なんて340点しかなかったんだよ？

恥ずかしくて言えないの！

（私の最高得点110点なんですけど・・・。）

影でそうつぶやいた探偵もどきがいたとかいなかったとか。

B組教室前。つまり、一番の前線つてとこかな。

今私がいるのはそこ。

はやてちゃんと萌香ちゃんの援護のもと、ここまでたどり着いた。  
今私が連れているのは、保健体育担当の猿飛あやめ先生。ちなみに  
自他ともに認める根っからのド。

「泉さんね？あんたの成績ドベもいいとこじゃなかったの？何でこんなところにいるのよ。」

・・・。

第一声がそれか。

誰か知らないが、なんという失礼極まりない女なんだ。

いや、確かに平均点93点（保健がないと46点）のお馬鹿だつてことは認めるけど。

「失礼な！アバズレ女二人まとめて相手してやる！先生いいですか？」

「ルール違反じゃないからオッケーよ。」

「よっしゃあ！」

保健。

私が唯一得意な教科。

「だ、だ、誰がアバズレじゃ腐れドチビいい！！！！上等よ、補習室送りにしてやるうう！！！」

あ、コイツ扱いやすいや。

『1年A組	泉こなた	VS	1年B組	亞北ネル&
弱音ハク				
保健	270点	VS	86点	&
154点				

「な、なんですつてえ！？ドベのあんたが何でそんなに強いのよ！」

保健だけは、常に100点以上ある！

絶好調の時はギリ400点とったこともある！！

あ、私ここの中等部からあがってきたんだよね、言ってなかったんだけど。

「ネルって馬鹿だったんだ。」

「るっさいハク！！アンタも馬鹿でしょうが！」

仲間割れ！

「二人仲良く補習室に行きやがれえッ！」

私の召喚獣が、巨大な鎌で二人を切り裂いた。

所変わって1年A組の教室。

ここに、ひとりの少女がいた。

「・・・誰もいない？」

彼女が連れているのは、ジョディ・サンテミリオン先生。  
担当教科は

「いるよ。」

「！！・・・あなたがクラス代表の沢田くんね。」

彼は教室の奥に足を組んで座っていた。



っていうか、何で部屋ん中真っ暗なのよ。

「勝負を始めますか、ミス・カガミネ？」

ジヨディ先生が、パツと部屋の明かりをつけながら私に聞いて来た。私の答えははじめから決まっている。だってその為に来たんだもの。

「もちろんですよ。いいよね、沢田君？」

「いいけど、教科は？」

私は口の端が緩むのを抑えて言ってやった。

「・・・沢田君、入学式の時私と話したの覚えてる？」

「？」

「何でそんな話題になったのかは覚えてないけど、その時沢田君言ってたよね。“英語が何よりも嫌いだ”って。」

「！まさか・・・。」

そう。そのまさか。

「フッフ、教科は沢田君の大っ嫌いな英語よ！」

「！！！」

ジヨディ先生の担当教科は英語なんだから。

「わたしは英語得意なの。さあ、覚悟は出来た？」

「・・・。」

私は負けるわけにはいかない。  
教室で戦っているであろう弟のためにも。

## 標的19：初音部隊（後書き）

魔理沙「読者のアジト、始まるぜ！」

霊夢「今回ツナはあの調子だから私が代理よ。」

フラン「私もやる！」

霊夢「はいはい。じゃあさっそく質問に答えましょうか。」

魔理沙「まかせろ！まずは『漆黒の不死鳥』さんのキャラ『風魔正』  
君からだ、サンキューなんだぜ 『黒いツナに勝てる奴はいるか？』  
って……。」

霊夢「私は心当たりがないんだけど？」

フラン「京子ちゃんとか家長さんは普通にお話ししてたよー。」

霊夢「でも勝てる人はいないんじゃない？」

魔理沙「ブチギレた霊夢なら渡り合えそうな気がする」

霊夢「なんかいった、魔理沙？」

魔理沙「な、何も言ってないぜ。」

霊夢「……魔理沙？」

フラン「えーと、もう終わる？」

魔理沙「お、おう！終わろうぜ！」

霊夢「逃げる気？」

魔理沙「そ、そんなんじゃ・・・せ、せーのっ！」

霊夢＆魔理沙＆フラン「ご感想やご質問お待ちしてま〜す！」

フラン「またね〜」

霊夢「フフッ、どいう意味か説明してもらっわよ魔理沙？」

魔理沙「たのむ、勘弁してくれ!!」

## 標的20：鏡音リンVS沢田綱吉（前書き）

遅くなりました！こんばんは（？）！  
蜜柑です。

バカテスト・情報

### 【第4問】

問 次の問いに答えよ。

『パーソナルコンピュータのソフトウェアで、？文章を作る？表を作る？スライドショーを作る、ソフトの名前をそれぞれ答えよ。』

涼宮ハルヒの答え

「？ワード

？エクセル

？パワーポインタ」

先生のコメント

「ばっちりだぞ。」

沢田綱吉の答え

「？エクセリオン」

先生のコメント

「根本的に何か違うな。アニメの見過ぎだ。」

博麗靈夢の答え

「?どうでもいいです」

先生のコメント

「後で生徒指導室に来い。」

## 標的20：鏡音リンVS沢田綱吉

「くっ……。」

どうやら、私はここまでみたいなの……。

A組の横にある階段。  
彼女達はそこにいた。

「前線・奇襲・後方部隊はトドメは免れたようだが全滅、引き返して来ている。特殊部隊は任務遂行中。別動隊は任務完了で、支援部隊と合流……か。」

ちなみに、今報告書（？）を読み上げたのはリクオである。

「今前線にいるのははやて達だけかよ!？」

魔理沙が焦るのも当然である。

しかし、他の生徒たちに焦りは感じられなかった。

「B組の方もダメージは深刻だからどっちもどっちだよ。」

のんきなのか、余裕なのか。

「我々も前線に出ようではないか、脳嚙同級生？」  
「なかなか楽しみだ。」

と、こんな調子である。

つまりはまあ、こいつらは余裕のようであるわけで。

「じゃあそろそろ・・・」

めだが、ピンクの扇子をバサツと広げて言った。

「いくぞ。（凜っ）」

1年A組本隊・・・ようやく出陣するようだ。

だが、実は遅すぎる事はなかったりするのである。実は。

「萌香ちゃん、大丈夫か!？」

「うん、なんとか・・・。」

二人とも満身創痍。教室に帰ってテストを解いてもいいが、今は動けない。

・・・いや、動くわけにはいかなかった。

「あ、あの、総合教科で勝負です!」

「総合教科!？」



いきなり話しかけてきたB組の生徒。

ピンクのふわふわした髪についているウサギの髪どめがなんとも可愛らしい女子だった。

彼女も満身創痍の様だが・・・。

「2対1でもええんやったら！」

「はい、よ、よろしくおねがいします！試験召喚です！」  
サモン

『1年A組 路瑞希	八神はやて&赤夜萌香	VS	1年B組 姫
総合教科	1680点	&	1460点
0点	『	VS	446

「え？」

「あ、あれ？」

こんだけみんなが点数削られてんのに、この子ピンピンやないか！  
終盤にまだこんな子が残ってたとは・・・B組もやるな。

「あかんわ・・・めだかちゃんおるか！？交代や！」

「え、交代しちゃうんですか！？」

当たり前やろ、今の私らでは一方的に負けるだけや！

「だらしないな。いいだろう！私が相手になるぞ、姫路同級生。」  
「へっ！？あ、あの、お願いします！」

『1年A組 黒神めだか VS 1年B組 姫路瑞希  
音楽 5860点 VS 4460点  
』

「・・・ふえっ！？ごっ、ごっ、五千オーバー！？」

恐るべし、学級委員長・黒神めだか。

一体1教科何点取ったんや・・・。

「私の負けです・・・。」

「うむ。（凜っ）」

さつきから思ってたんやけど、初対面（たぶん）の人に何でそんなに偉そうなんや？

「私の勝ちが決まったも同然ね。試獣召喚<sup>サモン</sup>！」

英語が苦手な奴に英語が得意な人をくだせるわけがない。

だって私、学年で英語ただけで13位だったんだよ。

絶対勝てる。

「クスッ・・・」

沢田君の顔がニヤツと歪んだように見えたのは気のせい・・・？

「？何笑ってんのよ。もしかして、自分のあっけなさに笑いがこみあげてきた？」

だとしたら重症ね。頭が。

「フツ。確かにオレ、中学時代にトラウマじみた事があったから英語は大嫌いだよ。でも・・・」

召喚獣の上に、点数が表示される。  
私はそれを見て自分の目を疑った。

「えっ・・・？う、そ・・・？」

『1年A組	沢田綱吉	VS	1年B組	鏡音リン
英語	503点	VS	429点	

『

沢田君の点数が私の点数上回ってる・・・？  
しかも、500オーバー！？

「だって・・・えっ？」

「オレ、英語が“苦手”だなんて一言も言っていないよね。」

え、そ、そんな・・・！

「オレね、諸事情で英語とイタリア語はペラペラじゃないと将来生きて行けなくなっちゃうんだ。」

「で、でも、こなたちゃんとかが話してるの聞いたもん・・・！嫌  
いって・・・」

沢田君が、舌をんべつと出して言った。

「“情報操作”ってね、裏社会とかでも常識なんだよ」

同時に、私の召喚獣も強力なパンチを食らって消滅した。

「オレから情報を絞り取るうなんて、100万年早い。（黒笑）」

瞬間、戦争終了の合図のチャイムと放送が鳴り響いた。

《A組の脳嚙ネウロにB組のクラス代表・鏡音レンが敗北しました  
ので、これにて試召戦争を終了いたします。》

1年A組 VS 1年B組

勝者、1年A組。



標的20：鏡音リンVS沢田綱吉（後書き）

アレン「読者のアジトが始まりますよ！」

フラン「早速質問にいこーっ」

ツナ「フラン、落ち着いて・・・。」

アレン「じゃあ行きますね。『漆黒の不死鳥』さんのキャラ『黒城流香』さんからの質問です。ありがとうございます！『フランに質問よ。 綱吉の血を吸ってみたい？』だそうですが・・・。」

フラン「そうなの！ちょっと聞いてよ！毎日毎日こんなに頼んでるのに、ツナったら照れて一滴も飲ましてくれてないのよ！と思う！？」

ツナ「照れてねえー！！！」

アレン「あの、吸血鬼に血を吸われると吸血鬼になるって本当なんですか・・・？」

フラン「うん、そうだけど？（サラリ）」

ツナ「さらりと当たり前の様に言うな！」

フラン「当たり前だもーん。」

アレン「まあまあ、気を取り直して次の質問に行きますよ。『紅葉

or紅蓮』さんのところのツナからです。ありがとうございます！  
『このクラスの中で一番挑発に乗りやすくイジメがいるのって誰??これすっごく気になってたんだよネ』とことです。ボク的には魔理沙ですね。」

黒ツナ「そうだな。オレはミクとラグかな?」

狂フラン「やっぱ一護デシヨ。」

黒アレン「でも一番はやっぱり・・・」

黒ツナ・狂フラン・黒アレン「フェイトでしょ（黒笑）」

黒ツナ「じゃあ、せいの」

黒ツナ・狂フラン・黒アレン「感想&ご質問お待ちしてます!」

黒ツナ「いちいち反応するからな、フェイトは。」

黒アレン「そういう意味で一番いじりがありますからね。」

狂フラン「あはは」

## 標的21：勝ち抜き戦（前書き）

お久しぶりです！

執筆そつちのけでPSPのミクの音ゲーにハマってた蜜柑です。

春休みにも入って落ち着いたのでまたしばらく執筆に精を出そうか  
と思います。

バカテスト・国語

### 【第5問】

問 以下の文のカタカナの部分を漢字になおせ。

『・英語の聖地はイギリスだと言われている。』

脳嚙ネウロの答え

「英吉利」

先生のコメント

「まあ、当然だな。 正解だぞ。」

黒子テツヤの答え

「伊技利洲」

先生のコメント

「どっかの国と勘違いしてんじゃないか？もう一度勉強してこい。」



沢田綱吉の答え

「英吉利・・・？」

先生のコメント

「？がなけりや完璧だったのに残念だったな、ダメツナ。」

## 標的21：勝ち抜き戦

「2年はB組が勝利・・・3年は1クラスしかないからシードか・・・」

と、いうことは？

「3年と2年が争って勝った方が私達と、って事かしら？」  
「そうだよ、霊夢。」

この学校は、生徒に容赦がないらしい。  
3年と1年なら、問題が簡単な1年が有利じゃないのか？

「・・・。」

どうもここの校長が考えてることはよくわからないなあ。  
そもそも何で戦争？

平和主義の今時の世の中流行らんくない？

「ところで。あのポンコツ6人組はどうするの？頭から煙が出て、それを魔理沙が面白がるから目ざわりなのよ。何でテスト前からぐったりしてるのかしら。どうしたらいいと思う？」

「うん、プールにでも放り投げてくればいいんじゃない。ショートしてるだけだろうし。」

思考回路が、ね。

「名案ね、それ乗った。魔理沙！ちょっと手伝いなさい！」

たぶんオレと霊夢って所謂“悪友”ってやつなんだろうなあ。  
会ったびにこんな話してる気がするし。

「ハルヒもやる？」

「もつちろん。こんな面白そうなこと、やらない手はないわ！」

ああ、ハルヒも“悪友”かな。

この間も霊夢と3人でなんかしたような……まあいいや。

「じゃあ、今いるみんなに言っとくね。」

作戦と言うか、戦い方はもう決めてある。  
これが前からしたかった。

「次は、勝ち抜き戦で行こうと思うんだ。」

「ふむ、面白そうだな。それはどうやるのだ？普通に勝ち抜くだけか？」

そんなわけではないじゃん。

「部隊対抗勝ち抜き戦、なんてどうかな……って思ってるんだよね。」

部隊対抗勝ち抜き戦とは？

各部隊がそれぞれ勝ち抜き戦をし、勝った部隊数が多いほうが勝者

となる。

ただしクラスによって各部隊の数も強さも違うので、より高い戦略性が必要となる。

クラス代表は、引き分けとなった場合にのみ戦う。

「ということで、午後の時間と明日の午前中の点数補充テストは死ぬ気で頑張るように（黒笑）」

今回はより一層、黒味の増した笑顔だったそうなの……。

「勝者は3年A組か……。どうだった、ハルヒ？」

「完全勝利ね。さすが3年生……。ってところかしら。戦法から何からすべて2年生より一枚上手だったわ。」

ハルヒに渡された資料にざっと目を通していく。

……ふーん、なるほど。

「で、部隊員入れ替える？」

「ううん、そのままで行くよ。奇襲部隊が少し不安だけど、3年もこのメンツだし……。大丈夫だよ。」

勝ち抜きなら、勝てる。

「絶対にオレがみんなを勝たせてみせる。」

絶対に。

運命の日まで

あと、2日。

## 標的21：勝ち抜き戦（後書き）

カナ「えーと、読者のアジトはじまります！」

ツナ「早速質問が来てるね。『紅葉or紅蓮』さんからの質問！ありがとう！『黒アレンと黒ツナと狂フランが話しているところを見て思ったんだけど、黒ツナと黒アレンが組んだらその学園どうなるんだ？』……って、え？」

カナ「そうだね。ドSかつ鬼畜な人なら他にもいるから、一応学園自体は崩壊しないんじゃないかな？ほら、ネウロ君とか沖田君とかこなたちゃんとか覚醒した萌香さんとか……あとあとブチギレた霊夢ちゃんに神楽ちゃん。涼宮さんになのはちゃんにミクちゃん、遊戯くんにはやてちゃん！！」

ツナ「え、えーっと……何かそんな感じです（？）。」

カナ「こうしてみると、普通な人いないね。」

ツナ「た、確かに……。」

カナ「次の質問だよ！『漆黒の不死鳥』さんのキャラ『風魔正』ふうませい君からです。ありがとうございます！『ツナとアレンに対抗できる位腹黒い奴っているのか？』ってことなんだけど、にあげた人と同上かな。」

ツナ「……オレ、黒いか……？いや、そんなはずは……（ぶつぶつ）」

カナ「十分真つ黒だと思つよ。じゃあ最後の質問！『咲夜月黒蝶』  
さんからです。ありがとうございます！』ツナのお家つて原作と同  
じですか？フウ太、ランボ、イーピン、ビアンキってどうなりまし  
た？』だって。これは綱吉君への質問だね。」

ツナ「あ、うん。えーっと、オレの家は仮住宅・・・になるのかな  
？です。うちから通うにはあんまりにも遠すぎるから、最初は安い  
アパートを借りる予定だったんだけど・・・まあ、その辺のエピソ  
ードはのちのち・・・。あ、ビアンキ達は実家の方にいるよ。」

カナ「そんな感じみたいです。よろしいでしょうか？」

ツナ「えっと・・・もう終わる？」

カナ「そうだね。やる事もないのにダラダラ続けられないし・・・。

」

ツナ「うん。じゃあ、せいのっ！！」

カナ＆ツナ「ご感想＆ご質問おまちしてまゝす！！」

カナ「次回も、もしよかったら読んでね」

## 標的22：VS初音ミク前線部隊（前書き）

お久しぶりですこんにちは。

春休みが終わりがけてるのに宿題が終わっていない蜜柑です。  
あれ終わらない。どうしよう）

バカテスト・数学

### 【第6問】

問 以下の問いに答えよ。

『 “悪魔の証明” とまで呼ばれた定理の名前を答えよ。』

黒神めだかの答え

「フェルマーの最終定理」

先生のコメント

「まあ、一般常識だわな。」

フランドール・スカーレットの答え

「ふえるまーのさいしゅうていり」

先生のコメント

「・・・スカーレットが正解してる幻覚見るなんて、疲れてんのかなオレ？」

泉こなたの答え



「フェルマーの最終定理」

先生のコメント

「・・・今日はやけに幻覚を見るな。」

## 標的22：VS初音ミク前線部隊

前線部隊のリーダー・ミクは、朝から一際張り切っていた。

「最初は私達の出番だよ！」

「まさかのしよっぱなですね・・・」

実は、彼女達は初戦で戦うのだ。

クラスのモチベーション的にも落とすわけにはいけないので、こんなにも張り切っているのである。

「ところで、何で勝ち抜き戦にしたのよ。普通に戦えばいいじゃない？」

「確かに。」

ルイズとリョーマは、どうやらルールに納得がいていないようだ。

「あのねえ・・・。普通に戦ったら、地の利がある3年生が有利になるにきまつてるでしょ？勝ち抜き戦ならば、そんなことは関係なくなるわ。」

「それに3年生は人数が少ないです。人数が多い僕たちが有利ですよ。」

さすが薫と黒子。よく分かっている。

そう。今年の3年生は極端に人数が少ない。その少ない中にももち

ろん馬鹿と天才がいるわけだが、勝ちぬきは途中で点数補充と云うことが出来ない。

つまりどんな天才が来ようと、よほど非人道的な点数でもない限り、馬鹿の集まりにも勝機は十分にあるわけだ。

「馬鹿っていうな、アホ作者ー!!」

「・・・誰に話しかけてるんですか、初音さん。」

「ほっとけばいいんじゃない。」

冷たいな、黒子に越前・・・。

「お断りよ。そんな危ない存在をたったそれだけの理由で解放するなんて・・・馬鹿げてるわ。」

「じゃあ・・・あんたの学園内に裏切り者がまぎれてる、って言うたらどうします？それも、解放に協力的なヤツの、ね。」

青年に背を向けていた少女(?)の肩が、僅かに反応した。

「頑張ってみつける事ですね。さて・・・オレはそろそろ帰らせてもらいますよ。」

「どうぞご自由に。」

突然現れた扉の奥に姿を消した青年を追う事もせず彼女はただ、窓からガラス越しに見える高等部の校舎を静かに見下ろしていた。

「ねえツナあゝ！私の出番ゝ！！」

「これが終わったらフランの出番だよ。」

1 - Aクラスでは、フランがいつものようにダダをこねていた。

「ほんとにゝ？」

「あれ、オレがフランにウソついた事あった？」

「なかった！ほんとなんだね！（ばああ」

ちなみに、フランとこんな風に会話ができるのはツナを含めて数人だけだったりする。

別に吸血鬼だから怖いとか、そういうことではないよ。

ただ単に、フランのコミュニケーション能力が低いだけ。

「あ、そうだ。3年生って人数少ないんだよね、ツナ？」

「うん。うちの学年はこのクラスだけで36人はいるんだけど、3年生は1クラスしかないうえに23人しかいないんだ。しかも、そのうち7人が特別飛び級生なんだって。」

「へー。」

それでも相手は3年生。

決して、侮ってはならない。

「第1回戦は、前線戦になります。基本ルールは普通の試召戦争と同じのノーマルな勝ち抜き戦。教科は数学。両クラスとも準備はいいですか？」

審判をしてくれるのは、イミナ先生。本名は李美兒先生イ・ミナっていうんだって。

「3 - Aが2人、1 - Aが6人。全員いますか。では、始めてください。」

あ、ちょ！ストップっ！！

「・・・えつと、2人・・・ですか？」

「そうだよ。なんか文句ある？」

ちよつとまって。えつ、2人？

こつち6人・・・えつ？

少ないとは言ったけど・・・これほどだったなんて。

「ってことは、余裕なんじゃない？」

「そうとも限りませんよ。」

そのとき、相手側から女の子が進み出てきた。

露出が多めの服にお団子頭で、しかもニット帽をかぶってる不思議な子。

「はいはい、グダグダ言っていないで始めよつか。試獣召喚！」<sup>サモン</sup>

その子の召喚獣は、どうやら格闘系なよう。  
だってグローブみたいなしてるもん。

「最初はボクからです。試獣召喚！」<sup>サモン</sup>

一番手はアレン君。彼の召喚獣は左手を剣にして戦うの。  
あそうそう、ちなみに私は最後だよ。一応リーダーだし。  
あつ、攻撃力が表示され

『1年A組 賀 <sup>が</sup> いたみ	アレン・ウォーカー	V S	3年A組	古 <sup>こ</sup>
数学	82点	V S	216点	
『				

・・・。

ランクが違うんですけど。

「・・・ツナ、どうしよう。」

言ってみても、ここにツナはいない。  
だってここは図書室だもの。しかも、戦闘を行う人だけしか会場には入れない。  
よって、ここにはツナも霊夢ちゃんもめだかちゃんもはやてちゃんもない。

「くっ・・・！」

「弱い弱い。そんなじゃ名瀬<sup>なぜ</sup>ちゃんまで回らないよ?。」

アレン君の召喚獣が放った攻撃は、ことごとく古賀さんにはじかれちゃってる。

こんなんじゃダメージすら負わせられないよ！

「・・・そんな。」

「アレン・ウォーカーの持ち点が0点になりました。1年生は交代してください。」

「オレが行くっスよ。」

二番手はリヨーマ君。

リヨーマ君、英語ならとつても頼りになるんだけどな。

数学は・・・どうなんだろう。

『1年A組 いたみ 数学	越前リヨーマ VS 3年A組 古賀
124点	VS 198点

』

削れてる・・・けど・・・

・・・！！

そうだった！！

そう・・・まずは落ち着いて、私。落ち着くんだよ。

「・・・よしつ。リヨーマ君、とにかく相手の点数を減らして。」  
「りょーかい。」

ツナから言われてたんだった。

『相手はたった二人だから、まずは落ち着いて相手の点数を削って、チャンスが来たら思いつきりいけ。後は任せる』って！  
あゝもう、わたしのほかあ！！

何でそういう大事なことを忘れるかなー？

「それがあなた達の作戦？」

「まあ・・・そういうことっスね。」

「ふゝん。まあ、これでとどめだけどね。」

リヨーマ君も負けちゃった。けど、だいぶ減らせたみたいだね。

「これはチーム戦なんだから・・・みんなで補い合えばいいんだから・・・。」

そう。個人個人じゃ勝てないけど、これはチーム戦。  
うん・・・勝てる気がしてきた！

「ルイズちゃん、やっちゃって！」

「私に指図しないで。言われなくても分かってるんだから！」

『1年A組      ルイズ・フランソワズ VS      3年A組      古  
賀いたみ

数学      113点      VS      54点

』



「くらいなさい、ギガントファイヤーボール（適当）！！」  
「あつ、しまった・・・ごめん名瀬ちゃん。」

ルイズちゃんの召喚獣が繰り出した大きな火の玉が、古賀さんの召喚獣に直撃！

あつという間に消えちゃった。

っていうか・・・勝ったのはいいけど、ルイズちゃんのネーミングセンスが引つ掛かった・・・。

「大丈夫か、古賀ちゃん？」

「うん、へーきへーき 名瀬ちゃん、がんばってね。」

「任せとけて。」

さてと。オレの大事な大事な親友兼実験体おともだちに傷つけてくれたんだ。ちゃんとお返しはしねえとな。

「次はだれ？」

「オレだよ。」

現れたのは、全身黒タイツみたいな格好の上から制服を着て頭を包

帯でぐるぐる巻きにしている女の子。

よくみると、包帯の上から包丁のようなものが軽く刺さってる。

・・・大丈夫かな。色々と。

『1年A組  
なぜようか  
名瀬天歌

ルイズ・フランソワズ

VS

3年A組

数学

105点

VS

420点

『

「なっ・・・！」

「時間の無駄だ、はやく終わらそうぜ。」

ルイズちゃんの召喚獣が、あっという間に消滅・・・

「ままま、まだ終わってないよ！」

「とりあえず落ち着きましょう、ミク。」

落ち着けないよ！

って、次誰だっけ？

「次はボクです。」

「・・・うん、がんばって。」

ふ、普通に影が薄い人キター。

『1年A組  
数学

黒子テツヤ

VS

3年A組

名瀬天歌

145点

VS

328点

」

「・・・普通だね。」

「・・・そうですね。」

うわあ。

「なにがよ。」

なにがって、そんなの決まってる。

「黒子君のテストの点が。」

「・・・。」

でも相手はアブノーマル異常だからなあ。  
ノーマル普通の黒子君じゃ・・・。

「すみません、負けちゃいました。」

「うん・・・。」

・・・デスヨネ。

「何とか削ってね、薫ちゃん。」

「でも、最高でも130点は残る可能性大だけど。勝てる？」

「・・・あと30は削ってほしいな。」

「・・・それはちよつと・・・。」

私の数学の点数めちやくちや悪いんだよ？  
過去最低点だよ？

「とりあえず行ってくるわ・・・。」

「・・・。」

やっぱり、様子見かな。

「ちょっと」。負けてるじゃんか、あのツインテール！  
「画面にしがみつくのはいいけど壊さないでね。」

学校の備品だからね。  
壊しちゃうと面倒だし。

「ねえツナ」。お腹空いたー、アイス食べたい！」

前々から思ってたんだけど、何でフランは昼間も出歩いてんだろうね。

吸血鬼だよね、この子？

最近の吸血鬼って、日に当たったら蒸発するとかそついのないの？

「昼休みまで我慢してよ。」

「ええー・・・・・・・・ちえっ。」

今はそれどころじゃないんだから。

それにしても。

ミク・・・女優の才能あるよ。

「ふふっ・・・。」

「ツナ？なんか面白い事あった？」

「今から面白くなるんだよ。」

「え？」

『1年A組	神谷薫	V	3年A組	名瀬天歌
数学	154点	V	S	240点

』

「チェックメイト。」

木刀を持った薫ちゃんの召喚獣が、名瀬さんの召喚獣に大剣で真つ二つにされちゃった。

「くう・・・！」

残るは私・・・だけ。

「もちつと骨のある点数取れねえのかよ、350点くらい。」

「無理よ。」

「・・・言いきつたな。」

めだかちゃんとかなら、さらつととれるんだろっなあ。

私はそんなの無理だけどね。

「あああっ！！！」

ついに来てしまった私の出番！！

「落ち着いて下さいよ、ミク。僕たちが負けてもみんなが勝つてくれますよ。」

えっ？

「まったく、この私をパシらすなんて何様？」

茶色い紙袋を持った少女が、ブツブツ言いながら図書室の前を通り過ぎようとしていた。

よく見ると、彼女はポテトチップスを食べながら歩いていた。行儀悪いな、オイ。

「ああ・・・そろそろかしら。」

黄色いリボン付きのカチューシャをつけたその少女は図書室の前で一言そうつぶやいた後、急いで階段を上って行った。

「落ち着いて下さいよ、ミク。僕たちが負けてもみんなが勝つてくれますよ。」

アレンがそういった瞬間、ツインテールの周りの空気の温度が急激に下がった。

「ミ、ミク？」

「・・・あのね、私が一番許せないと思ってることって何か知ってる？」

「えっ？」

許せないこと・・・？

「一つは、歌っている時に邪魔をされること。もう一つは・・・」

ツインテールが、ゆっくりと顔をあげた。

「・・・すぐに仲間に頼ること。」

仲間に頼ることの何が許せないのよ。  
頼ってこそその仲間なんじゃなくて？

「私はね、それはただの甘ったれのすることだと思ってる。もちろん本当に助けが欲しい時は頼るべきだと思うよ。でもね、まだやつてもいないのに頼るのは違うと思うよ。」

「でも……もう勝ち目は……」

「それを弱音っていうんだよ!!」

突然ミクが大きな声を出して、アレンのセリフをさえぎった。

「それにね、勝機はあるんだよ。」

「でも、ミクの点数は100点以下だったんじゃ……」

諦めるも何も勝ち目はないわよね、これ聞く限りじゃ。

「……私ね、得意なことがあるんだ。」

アンタの得意なことは歌うことでしょ？

ああ、裁縫も出来たんだっけ。

「もちろん一番得意なのは歌うことだよ。でもね……」

「演技も得意なの」



・  
・  
・  
・  
・  
・  
は  
？

## 標的22：VS初音ミク前線部隊（後書き）

こなた「読者のアジト、はっじまっるよぉ」

ツナ「ええつと、今回はまず質問から。『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『天道優花』てんどうゆうかちゃんからです。ありがとう！『原作とは設定が違う人ってどれだけいますか？』って・・・これは。」

蜜柑「はい、こんにちは。」

こなた「呼ばれる前に出てきた。」

ツナ「まあいつか・・・で、これはどうなの？」

蜜柑「はい。そうですね・・・まあ、ほとんどですかね。都合のいいように自己解釈&改ざんしまくってますからd（グッ）」

ツナ「グッ、じゃねえよ！」

こなた「わたしも、ちよつとあるんだよ。」

ツナ「なにが？」

こなた「それは今後のお楽しみ。フフフフ。」

ツナ「えーと・・・そんな感じみたいです。」

こなた「次は、キャラ紹介だよ！今までとは違って、まだ紹介されてない人たちの出演作品を紹介しちゃうよっ」

・博麗靈夢

・霧雨魔理沙

・靈烏路空

・西行寺幽々子

東方Project

・高町なのは

・フェイト・T・ハラオウン

・八神はやて

・ヴィヴィオ

・アリシア・テストロッサ

魔法少女リリカルなのはシリーズ

・黒崎一護

・井上織姫

・日番谷冬獅郎

・卯ノ花烈

BLEACH

・工藤新一（江戸川コナン）

・宮野志保（灰原哀）

・ジヨディ・サンテミリオン

名探偵コナン

・家長カナ

ぬらりひよんの孫

・越前リョーマ

テニスの王子様シリーズ

・ 泉こなた

らき すた

・ 黒神めだか

・ 人吉善吉

・ 江迎向江

・ 名瀬天歌

・ 古賀いたみ

めだかボックス

・ ルイズ・フランソワズ

ゼロの使い魔

・ 涼宮ハルヒ

・ 長門有希

涼宮ハルヒシリーズ

・ リボーン

・ 笹川了平

・ 山本武

・ 六道骸

・ 獄寺隼人

・ ランボ

・ イーピン

・ ビアンキ

・ ザンザス

家庭教師ヒットマンREBORN！

・坂田銀時

・猿飛あやめ

・神楽

・沖田総悟

銀魂

・脳噛ネウロ

・桂木弥子

・イミナ（李美兒）

魔人探偵脳噛ネウロ

・初音ミク

・鏡音リン

・鏡音レン

・巡音ルカ

・弱音ハク

・亞北ネル

VOCALOID（亜種込）

・赤夜萌香

・朱染亞愛

ロザリオとバンパイアシリーズ

・エリン

獣の奏者エリン

・緋村剣心

・神谷薫

るろうに剣心〜明治剣客浪漫譚〜

・黒子テツヤ

黒子のバスケ

・日暮かごめ

犬夜叉

・火ノ宮満

ぼっけさん

・ラグ・シーイング

・ノワール（ゴージュ・スエード）

・ロダ

テガミバチ

・佐藤美穂

・姫路瑞希

バカとテストと召喚獣

ツナ「こんなもんかな。」

こなた「こんなにいたんだね。」

ツナ「みたい。さて、そろそろおわるっか。せーのっ！」

こなた&ツナ「ご感想&ご質問おまちしてます!!！」

## 標的23：くじ姉（前書き）

こんばんわ、蜜柑です！  
今回は短いです。

バカテスト・生物

### 【第7問】

問 以下の問いに答えよ。

『沖縄のとある島にのみ生息し、1994年に絶滅危惧ⅠA類（CR）指定を受けた動物界脊索動物門哺乳綱ネコ目（食肉目）ネコ科の生物はなにか。カタカナ9文字で答えろ。』

黒神めだかの答え

「イリオモテヤマネコ」

先生のコメント

「そうだな。ちなみに天然記念物にも指定されてるんだぞ。」

フランドール・スカーレットの答え

「ベンガルネコ」

先生のコメント

「めずらしくえらくまともな間違いだな……。正解はイリオモテヤマネコだぞ。ベンガルネコの亜種なんだ。」

アレン・ウォーカーの答え

「フェルマーの最終定理」

先生のコメント

「数学は1時間前に終わったぞ。」



## 標的23：くじ姉

「わたし、演技も得意なの」

・・・・・・・・・・は？

「え、まさかミクって頭いいの？」

「まっさか」。正真正銘の馬鹿だよお。」

そこは演技でも何でもないらしい。

「じゃあ、どうやって勝つのよ。何のどこが演技だった？」

「とりま、見た方が分かりやすいから。」

ミクの召喚獣が召喚され、その上に点数が表示された。

数学	1年A組	初音ミク	VS	3年A組	名瀬天歌
		72点			
			VS	135点	



「はい、お疲れ様〜。」

「教室に戻りましょう。」

「負けちゃったわね・・・。」

「次のテストで頑張れば大丈夫ですよ。」

「ちょ、何で!？」

ミク以外は、図書室から出て行くこととしている。  
もちろん3年生も、である。

「ほんとに天才でした〜っていつの期待してたのにねー。」  
「結局その程度ってこった。」

当たり前っちゃ当たり前である。

期待を裏切った挙句、チーム最低点だったのだから。

「ちょ、みんな待ってよ、帰らないでえ！！（泣）」

言っても止まる人などいるはずもなく・・・。

「あのツインテール、よくもまああんな点数で貴族にあんな生意気な口を叩いてくれたものね。許されない大罪よ！！」

「まあまあ、起こってもなにもでませんよ。」

ついにはこんなことまで言い出す始末。

それを聞いたミクは泣き始めてしまった。

「うわあああん！バカバカバカ！！（泣）」

言っていることはまるで小学生・・・。

「うええええん！！（泣）」

「わ、分かった！分かったからこんな所で泣かないでよ！！」

見かねたルイズによって、みんなしぶしぶ戻ってきてくれた。  
よかったね、ミク。

「うう・・・勝てるのに！！！！」

「分かりましたって。」

味方は誰ひとりミクを信用していないようで、あきらめムードが漂っている。

「ったく、これだからお嬢様育ちは・・・」

「名瀬ちゃんもだよな。」

「古賀ちゃん、人には黒歴史ってヤツがあるんだぜ。」

名瀬天歌の育ちについてはさておきまして。

はたから見ると負け確定の試合で、ますます小学生にしか見えなくなってきたミクがこんなことを言っていた。

「ほんとにかてるもん！！ミクの召喚獣には能力が備わってるんだもん！！！！」

「能力？」

この期に及んで何を血迷ったことを、と、誰もが思っていた。

「そう！１回のテストで１度しか出せない能力！」

「へー、ツカイドコロヲマチガエタラオシマイデスネ。」

「ふーん。そうなんだ。」

アレンにいたっては完全に信用していなかった。

ルイズはちょっただけ考え直しているようだったが。

「さあ、やっちゃって！私の召喚獣ちゃん！」

すると。

「えすぎ メッセー ーれに くかも らな で」

「？歌ってる、この召喚獣？」

そう、ミクの召喚獣が突然歌い始めたのだ。

ちなみに曲はハ様の有名なオリジナル曲・マトヨシ。

気になる人は【ミク】【GUMI】【オリジナル曲】でググってみよう。

277

「あつ、名瀬ちゃん！名瀬ちゃんの点数が・・・！」  
「は？」

『1年A組	初音ミク	VS	3年A組	名瀬天歌
数学	72点	VS	63点	

「減ってる！？」

「んな馬鹿な・・・。」

突然の変化に、常に冷静な名瀬ちゃんも動揺を隠しきれないでいる。

「どうなってるんですか!？」

「点数の減る歌・・・？」

アレンや越前達も驚いていた。

こんな能力がミクの召喚獣にあるなんて聞いていなかったからである。

「ツインテール!!こんな展開聞いてないわよ!!」

「だって、ツナに『言うな』って言われてたんだもん。」

「はあ!?あのツンツンどいうつもり!？」

ツンツンで・・・後で殺されるぞ、ルイズ・・・。

「やっとみんな信じてくれたね。私の演技は、いままで負けそうだとか言って慌てふためいてたこと。つまり、いままでのぜーんぶ!さあて、これで形勢は逆転したよ!」

そこからは一瞬だった。

ミクの召喚獣の攻撃をもろに食らった名瀬ちゃんの召喚獣は、すぐにその場に膝をついて降参の意をしめした。

「名瀬さんの召喚獣が降参を示したので、この戦いはA組の勝利とします。」

所変わってAクラス。

「ツンツン〜！」

「フラン？（黒笑）」

「・・・ごめんなさい。」

うむ。あのフランが押し黙るとはさすがだな、ツナは。

「・・・ん？」

このテレビに映っている、初音同級生と戦っているのは・・・

「くじ姉・・・？」

「はぁ・・・。オレの負けだ。まさかお前が、希少種である能力持ちの召喚獣使いだったとはな。」

「えへへ〜。」

「いや、誉めてはないんだけどよ・・・。」

勝っても、やっぱりミクはミクだった。  
純粹なのか、バカなのか。



「あ、そうだ。3年生にもいるんですね、能力持ちの召喚獣使いさん。」

と、急にミクの表情が引き締まった。

「さあな。オレはしらねえぜ。いくぞ古賀ちゃん、こんなところに長居は無用だ。」

「あつ、待って名瀬ちゃん！」

「名瀬先輩、古賀先輩！ありがとうございます！！！」

再び笑顔になったミクは、元気に2人の先輩を見送った。

### 標的23：くじ姉（後書き）

剣心「読者のアジト、始まるでござるよ。」

ツナ「えーっと、早速質問が届いてるね。」

剣心「『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『椿薫』殿からでござる。『フランちゃんやこなたさんが、問題に正解した時、先生どう思いましたか？』。おお、奇遇にも薫殿と下の名が同じでござるな。」

ツナ「そうだね。ええと、質問ありがとう！というわけで先生を呼びました。」

銀八「はいどーもお。みんなのアイドルぎんぱっつあんど〜す。」

ツナ「・・・。（無視）とりあえず質問に答えてください。」

銀八「つつこめよ、ったく。」

剣心「フラン殿やこなた殿が問題に正解した時、先生はどう思ったでござるか？」

銀八「ぶっっちゃけ昇天しかけました。」

ツナ「え？」

銀八「いや〜、あと一歩知り合いの大串君が訪ねてくるのが遅かったら、先生はびっくりしすぎてこの世にはいませんでした。」

ツナ「誰か知りませんが、大串君G」!

剣心「危機一髪でござったな……。」

銀八「そんな感じでーす。というわけで、椿さんはこのあと廊下で30回腕立て伏せをして体力作りしてなさい。」

ツナ「ここあんたのコーナーじゃねえから!!勝手なことしないでください!!」

剣心「まあまあ……。そろそろ終わるでござるよ。」

ツナ「まったくもう……。せーのっ!」

銀八&剣心&ツナ「ご感想&ご質問おまちしてまゝす!」

??「まてやあアアア!誰が大串君だ、あの天パアア!!!」

沖田「煩いですぜ、大串君。」

??「違うわアア!!!」

## 標的24：VS涼宮ハルヒ別動隊（前書き）

4月テストのせいでご無沙汰しておりました！  
蜜柑です。

バカテスト・現代文

### 【第8問】

問 以下のカタカナを漢字に直せ。

『・ユシュツニユウが盛んな国だ。』

黒神めだかの答え

「輸出入」

先生のコメント

「当然だな。正解。」

ルイズ・フランソワズの答え

「輸出入」

先生のコメント

「おお、あってるな。」

越前リョーマの答え

「Yusyutsunyuu」

先生のコメント

「英語は他でやってください。」

## 標的24：VS涼宮ハルヒ別動隊

「さあ、はりきつていこー！」

「煩いロン毛。」

「ロン毛の何が悪い。」

さっそくこなたとフランがケンカを始めたようです。

「次はわたしたちとはやてたちの試合アルな。気を引き締めていくネ！」

「旅行目当てですかイ、チャイナ娘。」

「あゝん？ガキがしゃしゃり出てんじゃないアル！」

こっちでも、いつもの2人がしょうもないことで言い争いを始めた。え？言い合いだけじゃなくて、椅子や机が飛んでる？オレには見えないな。

「はいはい、ケンカしとらんではよくでー！！」

はやてに言われてしぶしぶ喧嘩を止める両者だが、睨み合いは続いている。

「試合開始やで！」

1時間後。

奇襲部隊成績（世界史）

式波・アスカ・ラングレー

x

VS  
桂木弥子

x

VS  
緋村剣心

x

VS  
神楽

x

碓シンジ

x

VS  
武藤遊戯

x

VS  
神楽

スカーレット

x

綾波レイ（

VS

フランドール・

3年生の勝利。

x

支援部隊成績（化学）

八意永琳（ ）

V S 八神はやて（

）  
x

V S 赤夜萌香

x

3年生の勝利。

つまりは、惨敗だったわけで。

「ああ・・・どうしよう・・・!」

しかも、こなたに至っては作戦無視してしまった拳句に負けていたのだ。

正規の順番は、弥子 剣心 遊戯 フラン 神楽 こなた、のはずだった。

しかし、シンジを観察していたこなたがイラつき、順番をごちゃごちゃにってしまった。

作戦を練り直したのではなく、完全にその場の空気に流されてしまっていたのだ。



「わたしは知らんで・・・」  
「そんなぁ！」

10分後。

「あのさ・・・永琳戦は教科が教科だったし、ぶっちゃけしようがなかったよ。はやてほどの指揮官でも力の差は埋まらなかったんだから。」

「はい。」

「でも、こなたたちは勝てた試合だったはずだろ。」

「はい。」

「・・・オレは確かに、作戦は一応立てるけどあくまでこなたに任せると言ったよ。」

「はい。」

「でもさ。オレ、あれほどフランを最後にするなって言ったよね。聞いてた？」

「はい。ごめんなさい。」

「指揮官として一番やっちゃいけないのは感情に流されることだっ  
てはやてに教えてもらっただろ。」

「・・・ごめん、なさい。」

1-Aでは、こなたが予想通り説教を受けていた。

その後ろで落ち込みまくっているタヌキとバンパイアもいたが。

「でも聞いてよ！相手のシンジってヤツ見てたらイライラして来て、  
ぶっ飛ばしたくなっただんだよ！？」

「結論。それでぶっ飛ばせたか？」

「・・・イエエ。」

ツナの言っていることは正しかったので、こなたは言い返すことが出来なかった。

「とまあ・・・偉そうに言っただけど、これ全部オレが中学の時に家庭教師が言ってたことなんだ。」

今まで険しかったツナの顔が、ふわっとほころぶ。

こわばっていたこなたも、それを聞いてほっとした。

「へえ、そうなんだ。」

「うん。実践じゃあるまいし、そんなにこなたを責めたりしないって。」

「よかったあ。本気で怖かったよあ。」

「そうかな？まあとにかく、ありがとう。」

ツナはくるつと振り向き、後ろで重苦しい空気を背負っているタヌキとバンパイアにも声をかけた。

「はやても萌香も御苦労さま。」

「うう・・・あのババア、絶対仕返ししたる・・・!!」

「もつともつと学力を向上させて必ず見返してやるのよ、私!!」

「・・・がんばって。」

二人とも、意外と元気そうである。

所変わって、こちらは音楽室。

ここにいたのは6人の少年少女達、と先生。

「さあ、始めましょうか。この私を楽しませられる相手なのかしら？」

「先輩に向かってその口のきき方はいけないとおもつよ。」

1勝2敗と後がない1のA。  
4戦目の結末やいかに。

## 標的24：VS涼宮ハルヒ別動隊（後書き）

ツナ「読者のアジト始まるよ！」

こなた「まずは質問コーナーだよ！『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『こうがいじひゅうが鋼鎧寺彪牙』君からだよ、ありがと。ええと？『ツンツン発言に笑った奴はどれぐらいいた？』。」「

ツナ「は？」

こなた「ぶつちゃけ全員だよ。」「

ツナ「・・・。」「

こなた「あの後ルイズ見てないんだけど、どこいったのかな？」

ツナ「・・・さあ？」「

こなた「まあいいや。次は久々のキャラ紹介だよ！」「

ツナ「ちよつと人数が多くなりました。」「

【初音はつねミク】

作品：VOCALOID2

スキル：組立魔法による高等生物召喚魔術

武器：ネギ

得意技：ネギでロイレンツマ（ネギを曲に合わせてぶんぶん振るヤツ）

部活：合唱部

その他：ネットアイドル

『自らの歌声を媒介に契約を交わした生物を召喚して戦うらしい。表の顔は、大人気ネットアイドル。』

【泉いずみこなた】

作品：らきすた

スキル：霊力・死神型

武器：漆黒の大鎌　ダークホワイト

得意技：オタク談議

部活：コンピューター部

『重度のオタク。好きな食べ物はコッペパン。探している人があるらしい。』

【式波しきなみ・アスカ・ラングレー】

【碇シンジ】  
いかり あやなみ  
【綾波レイ】

作品：新世紀エヴァンゲリオン

スキル：とくになし

武器：各エヴァンゲリオン

部活：家政部

その他：極秘兵器エヴァンゲリオンのパイロット

『この学園においては珍しい普通の人間。ただし、軽い間接魔法程度ならば彼（女）達も扱える。』

【名瀬天歌】  
なげよつか

作品：めだかボックス

スキル：能力・異常型  
アブノーマルタイプ

武器：凍る火柱  
アイスファイア

得意技：人体改造

部活：異常性同好会  
アブノーマル

その他：マッドサイエンティスト？

『本名は黒神くろかみくじら。めだかの姉。めだかや善吉曰く「根はとってもいい子なのに性格がうつとおしい！」だそう。』

ツナ「ふう、今回はここまでかな？」

こなた「だね。」

ツナ「終わろうか。せーのっ！」

こなた&ツナ「ご感想&ご質問おまちしてまーす！」

## 標的25：不知火半袖（前書き）

こんにちは、蜜柑です。  
誰か文才ください（あ

バカテスト・力学

### 【第9問】

問 以下の問いに答えよ。

『魔力の源は一般的に何と呼ばれているか。』

涼宮ハルヒの答え

「リンカーコア。リンカーコアとは特殊な人間にだけ備わっている  
身体の器官のことであり、その魔力量は潜在的なものである。」

先生のコメント

「えらい詳しく書いたな。」

家長カナの答え

「コアキメール」

先生のコメント

「これ、もとネタ分かるヤツどれくらいいるんだ？オレは分かるけど。」



フェイト・T・ハラオウンの答え

「リッシャーコア」

先生のコメント

「おいおい、誤字はバツだぞ。次から気をつけろよ。」

## 標的25：不知火半袖

「久しぶりだね、善吉」

「お前も相変わらず元気そうで安心したぜ。」

俺の幼馴染であるこいつ、不知火半袖しらぬいはんそでは飛び級で3年生に上がった。名瀬先輩と古賀先輩でも1年分しか飛び級で来てないのに何でこいつは2年分も出来たのか不思議だが、あまり深くは追求していない。相手が言わないことを無理やりと言わせるのはちよつと気が引けるからな。

まあ、めだかちゃんならすけすけと聞くんだろうが・・・。

「まさかお前と戦うことになるとは、正直思わなかったぜ。」

「安心しなよ。主人公がそっちにいる時点で私達の試合は善吉たちが勝つて決まってるんだし」

「カツ！どこの少年漫画だよ、そりゃ。」

そんな反則技があつたら苦労しないっつーんだよ。

「よくよく考えたら、この学園の生徒の3分の1程度が主人公じゃねーか。」

「でも、この小説の主人公は沢田君って子でしょ？」

「そつえばそうだけだよ。」

そつ簡単に事を運ばせるわけねーだろーよ。

まあ、一理あるっちゃあるけど。

「ちよつと何うだうだ喋ってんのよ、有吉。試合始まるでしょ。」

「誰が有吉だ！オレの名前は人吉！人吉善吉だ！」

「あつそう。アンタの名前なんて宇宙一どうでもいいからさっさと始めるわよ。」

「サラツとひでえな！」

どうでもいいのか！？

オレの名前なんて大して気にされていないのか！？

「有吉ドンマ〜イ」

「だからオレは有吉じゃねええええ！！人吉だああ！！」

なんなんだ？

オレはバカにされるために生み出されたのか？

まさかのいじられキャラ！？

・・・これ以上深く考えないようにしよう。うん、それがいい。

「はじめまして、木魂学園囲碁部主将・進藤ヒカルです。よろしく  
お願いします。」

「こちらこそはじめまして、理学部兼吹奏楽部所属のエリンです。  
よろしくお願いします！」

先発の二人がお互い丁寧挨拶をした後、科目とルールが発表され  
た。

科目は力学。

ルールは一騎打ち。

「一騎打ちか・・・。」

「えっと、私が出て言った意味はあったのかな・・・。」  
「・・・なかったよな。」

それはまあ、さておきまして。

「で、一騎打ちってどんなルールなんだ？」

有よ・・・もとい善吉が疑問を口にした。  
これにはエリンが答えた。

「チームで一斉に攻撃を仕掛けて先に全滅したチームが負けという簡単なルールよ。3対3だったからこのルールが一番いいと思ったんだとおもうの。」

「時間短縮よ、要は。」

ハルヒが後を継いでそういった。

「短縮すんなよ・・・何でもいいけどよ。」

周りに聞こえない位の声で、善吉がぼそつと呟いた。

（5分後）

「はしよんな！」

「あきらめなさい、善吉。この作者はそういうヤツよ。」

現在の戦闘状況。

善吉と進藤が戦闘不能。

なので、不知火&真城とエリン&ハルヒが戦っている状態である。

「オレ達の出番もう終わったのか!？」

「みたい……。」

がつくりうなだれている二人をしり目に、戦闘は続いている。

「さっさと降参なさい、真城最高!」

「断る!あと、一応先輩だから敬語使って欲しいかな。」

「……ノリが悪いわね。飽きたからもう逝っちゃって。」

「えっ?」

少々変換を間違ったセリフを吐いたハルヒ。

彼女の、ごつい装備をした召喚獣が一瞬で真城の召喚獣との距離を詰めて襲いかかった。

『1年A組	涼宮ハルヒ	VS	3年A組	真城最高
力学	830点	VS	223点	

』

「は、800!?!」

もはや人間のたたき出す点数ではない。

言っておくが、今回の力学の平均点は158点である。

ちなみにこれは結構いい方だったりする。

数学は103点、化学は126点、と他の教科は結構低めだからである。

「いつ宇宙人や未来人や地底人や超能力者に会ってもいいように、こういう授業は一言一句漏らさず学んでるのよ。」

「シュージンでも出せないって、800点は……。いいところ400点だよ。」

「天才美少女ハルヒちゃんをなめないことね。」

「……。」

涼宮ハルヒとは極端に負けず嫌いの人間である。

そのため入学してすぐのテストでネウロとめだかに負けたのが気に入らなかつたらしく、親友の魔理沙がガチで心配するほど勉強に打ち込んでいたらしい。

「ただの人間に興味はありません。さつさと私の前から消えなさい。」

「(……変人……)」

これが、涼宮ハルヒが変人扱いされる一番の理由である。

彼女はただの人間にトンと興味がない。

ゆえに、彼女がこの学校に来たのは能力者目当てだといううわさも流れている。

「あの、オレー応能力持ち……」

「アンタのチンケな能力より、まだフランちゃんの方が魅力的だわ。」

「……。」

取りつく島もなかった。

「今一番興味深いのは、奴良君とツナと武藤君ね。あのギャップは素晴らしいものがあるわ。」

「誰も聞いてないですよ……。」

「誰かが聞いてるから喋るんじゃないわ。私が喋りたいと思ったから喋るのよ。」

「……そう、ですか……。」

美少女から発せられる変人（というか自己中）発言に、なんとも言えない気持ちになる真城であった。

「私も行かせてもらいますね。」

「いいよ。」

ハルヒが真城に興味をなくした頃、エリンと不知火も勝負を始めていた。

『1年A組	エリン	VS	3年A組	不知火半袖
力学	340点	VS	214点	
』				

「あひゃひゃ 負けちゃった。」  
「・・・あの。」

負けたというのにへらへらしている不知火に向かって、エリンが疑問を投げかけた。

「あの・・・やる気あるんですか？」  
「あるよ〜。でも、終わった事を後悔したってなんにも始まらないじゃん？（ぽきゅぽきゅ）」

謎の効果音をたてながら、そう言った。

「・・・そうですか。」

そうしてる間も不知火は、何処から出して来たのかわからないペロキャンディを舐めている。  
なんだか掴み所のない人だ、とエリンは思った。

「あ、そうだ。善吉またね〜、めだかお嬢様によろしく」  
「おう、じゃあな不知火。」

それだけ言い残し、不知火は他の2人を引き連れて姿を消した。

1 - A の勝利。

現在、2勝2敗。



「向こうはどうなったかな？」

「なのはちゃん達ね。勝てれてばいいけど。」

「あの、話変わるけど善吉君って意外と・・・」

「バカね。」

「ほっとけ!!」

ちなみに善吉の点数は105点であった。

## 標的25：不知火半袖（後書き）

リナリー「読者のアジト、はじまります。」

ツナ「まずはキャラ紹介からだよ。」

【真城最高】  
ましるもりたか

作品：バクマン。

スキル：能力・幻想型「書いた絵を具現化する程度の能力」

武器：Gペン

得意技：落書き

部活：漫画研究部

その他：ジャ　プに連載している人気漫画家の作画の方

『とりあえず学校は出ていないといけないなと思い適当にこの高校を選んでしまった、ただの人間。入学当初は何の力も持っていないかったが、周りの超人共に感化されてしまい絵を一定時間だけ具現化できるスキルを身に付けた。』

【八意永琳】  
やごころえいりん

作品：東方Project

スキル：能力・幻想型「あらゆる薬を作る程度の能力」

武器：自分で作り出した怪しげな薬たち

得意技：硫酸を問答無用で頭からぶっかける（敵と認知した者にのみ）

部活：理学部（部長）

その他：マッドサイエンティスト？

『同じサイエンティストだからか名瀬とそこそこ気が合う。最近作り出した薬は、完璧な育毛剤。』

### 【涼宮ハルヒ<sup>すずみや</sup>】

作品：涼宮ハルヒシリーズ

スキル：能力・特殊型「ありとあらゆるものの創造と破壊」

武器：人一倍の行動力

得意技：ゴーレムの召喚

部活：能力研究サークル（団長）

その他：変人だらけの木魂学園でも群を抜く、変人の中の変人

『超能力者が集まるらしいという噂を聞きつけ、この学校に入学してきた。周りを全く気にしない言動・行動ゆえに周りからは“変人の中の変人”として一目置かれている。とはいえ、この学校の生徒自体が変人の集まりと言っても過言ではないため、中学時代ほど周りから浮いてはいない。一番の親友は魔理沙。ハルヒ曰く「魔女っ子」萌え。ゆえになのはたちも例外じゃなく得物としての価値は絶大」とのこと。「女を釣る時はツナか・・・もしくはアレンやリョーマ辺りが妥当」とも語っている。』

ツナ「こんなもんかな？」

リナリー「うん、そうだね。じゃあ次は、質問コーナーだよ！」

ツナ（リナリーがいると脱線しなくていいな）

リナリー「まずは最初の質問。『闇夜の黒鳥』さんから。ありがとうございます！『オリキャラって出ますか？』。』」

ツナ「オリキャラ？出るの？」

蜜柑「（首根っこつかまれ）そ、そうですね・・・機会があればだと思います。思いついてるキャラはいるんですけど、出すなら1次創作の小説書いてみたいかなーって・・・」

ツナ「あつ、そう。無理だよ。」

蜜柑「（がーん）お前いつからそんな冷たい子になったんだ！」

ツナ「別に？前からこんな性格だけど。」

リナリー「そうだっけ・・・」

ツナ「次の質問。『ごくでヴある』さんのキャラ『ねこ』君からです。ありがとう。『1-Aの人たちは他のクラスの人たちとくに知り合いがいるのかな？』だって。いる人はいるんじゃない？」

リナリー「こなたちゃんとかは結構他クラスの友達多いかな。霊夢ちゃんは腐れ縁の子が多いと言ってたっけ。」

ツナ「そんな感じですか？」

リナリー「じゃあそろそろ終わる？」

ツナ「そうだね。せーのっ！」

リナリー＆ツナ「ご感想＆ご質問おまちしてまーす！ー！」

特殊弾3：おしえて！えーりん先生！（前書き）

息抜きにやった。後悔はしていない。

どうもこんばんは（？）蜜柑です。

以前木魂学園の説明誰がいいかな〜と募集かけてたやつです。

結局決まらなかったので適当に東方キャラに会話してもらいました。

短いラジオでもしてるんだと思っていただければよいかと思います。

特殊弾3：おしえて！えーりん先生！

フラン：教えてっ！

霊夢＆魔理沙：えーりんせんせー！！

永琳：こんばんは。今回の特殊弾は、わたしと東方メンバーでの木魂学園講座よ。

霧雨：霧雨魔理沙だ、よろしくな！

霊夢：博麗霊夢よ。ところで、何で私まで呼ばれるのよ。

魔理沙：えーっと・・・

霊夢：まあいいけど。

魔理沙：いいのかよ。

フラン：フランドールだよ。あれ？ツナは？

霊夢：企画聞いてた？今回は私達とこの理系B B Aだけよ。

永琳：ん？誰が何ですって？

フラン：びーびーえー？なにそれ、おいしいの？

魔理沙：・・・後から私が教えてやるから、今は勘弁な。

フラン：はい。

永琳：ええと、とりあえずこの学校についてから説明していくわ。

霊夢：確か、とても伝統ある学校だとか？

永琳：ええ。とある東国で言う“寺子屋”よりもずっと前から、すでにこのこの原型はあったのよ。たしか2000年程度昔の話ね。

フラン：へー。

永琳：その当時から超能力者の訓練所だったわ。

霊夢：訓練所？

永琳：訓練所といっても、無能の人間たちを鍛えるわけじゃないわよ。力のあるものを鍛えるの。一般社会で何不自由なくみんなと共生できるように。共生したくなかったら、ここの職員として雇ってくれるから途中で捨てられる心配はないわ、安心して。

魔理沙：けどよ・・・本当に社会に出て行けるのかよ？

霊夢：第一、大人になってから力が開花したとか生まれつき能力持ちのヤツはどうやってそこに通うわけ？

永琳：そうね・・・とりあえず、この学園のしくみを説明するわ。これを聞けば分かるハズ。

フラン：はい！



永琳：この学園は、大きく分けて6つのエリアに分かれているわ。

霊夢：そうそう。めちゃくちゃ広くって、ヘタに探検すると迷うのよ……。

永琳：まず1カ所目。一番東の端に位置しているのが“寮エリア”。なんと、東京ドームがすっぽり入ってまだ余裕があるくらいの無駄な広さと充実感で溢れたエリアよ。遠すぎて通えない生徒や孤児の生徒はここで暮らしているわ。ここだけで生きていけるぐらい色々な物や設備が整えられているし、セキュリティもしっかりしていて快適よ。最低限の生活に必要な物品は、このエリア内にある寮生専用購買で買うことが出来るわ。6時〜22時まで利用できるのよ。

フラン：私もここで暮らしてるよ！（>・<）v

魔理沙：私もだ。購買は何かと便利だぜ。

霊夢：入学するときにくれたカードで、好きなだけ買い物できるものね。

永琳：生徒の8割がここで暮らしているから、他にも雑貨屋さんや洋服屋さんまで何でもあるの。

魔理沙：ゲームセンターもあるんだ。放課後は部活の後にカラオケに行くのが日課なんだぜ！

霊夢：あとは……そう、生鮮食品もイイの扱ってくれているから野菜が美味しいのよ^^

フラン：カフェもあるよ。そこにいるハトのマスターさんとはお友

達！私の話、黙って聞いてくれるんだ！

魔理沙：無口なおっさんただけだろ、ありゃあ……。

永琳：さてさて、2カ所目は“初等部エリア”。所謂小学生が勉強いわゆるしているわ。

魔理沙：ここもメチャメチャ広いよな。

霊夢：ええ、寮エリアの1・5倍もあるわ。運動場とか全部込みの広さよ。

フラン：今は、生徒数が3人なんだっけ？

永琳：そうなの……。時代が変わって来て、能力者の子も減ってしまったみたいね。

フラン：たった3人で東京ドームより広い校舎エ……

霊夢：それか、ただ単に気が付いていない……。もしくは開花時期が全体的にズレ始めたか。

魔理沙：桜かよ、私らは！？

霊夢：あら、きれいでいいじゃない。(・・)？

魔理沙：そういうことじゃないんだけど……。。

永琳：続けるわよ！初等部のカリキュラムは6年間。他校とは全く異なることを学ばわ。力の正しい知識と扱い方がメインの授業と言

えるかも。

霊夢：ペーパーテストもちろんあったけど、実技テストの方が頻繁にあった気がする。

永琳：で、似たような感じで“中等部エリア”“高等部エリア”“大学エリア”なんてのも存在するのよ。ほとんどの人が高等部からの入学者だから、一番人が多いのは高等部ね。

魔理沙：高等部からは学食食べ放題券が支給されたんだよね！

フラン：寮生のみだけど。

霊夢：お金がたまるのよ、私生活にかけない分（¥ ¥）！！

魔理沙：・・・そうか。

永琳：どんどん行くわよ。5カ所目は“中央エリア”。校長先生なんかがいるわ。図書室や部活動もこのエリアに在るわ。

霊夢：前々から思ってたんだけど、校長じゃなくて学園長よね？

永琳：いいえ、校長です。上に理事長さんがいらっしゃるわ。

フラン：へー。

魔理沙：分かってないだろ・・・。

霊夢：一番設備がいいのはこのエリアよね。エレベーターだってあるし。

フラン：必要性を感じないけどね。

魔理沙：フランって、意外と毒舌・・・なのか？

霊夢：はいはい、次行きましょ。このエリアは語るだけ無駄だわ。

魔理沙：無駄で・・・。

永琳：最後のエリアは“禁止エリア”。私達でも入ったことがない未知のエリアよ。

霊夢：何でそんなのが学校なんかにあるのよ・・・。

永琳：昔は、人体兵器として戦場に送りこまれそうになる生徒たちを守るためにたくさんの兵器が保存されていたの。

フラン：今は？

永琳：さあ・・・私にも分からないわ・・・

霊夢：生徒には全く教えてくれないのよね、ここだけは。

永琳：ええ。

魔理沙：きになるぜ！

フラン：ところでさあ、この学校バリアーみたいなのに覆われてるよね？なんで？

永琳：バリアーじゃなくってバリアーね。そう、それは結界。外の世界と学園を区切っている境界って考えてくれていいわ。

魔理沙：誰があんなデケー結界張ってるんだよ？

永琳：校長ね。彼女の能力は“境界を操る程度の能力”。結界ぐらいたやすいでしょう。

霊夢：！その能力はっ・・・！！

魔理沙：・・・霊夢？

フラン：なにになに？

霊夢：あんの腐れババアアアアア！！幻想郷ほったらかして何してんだアアアア！！

魔理沙：うおおっ！？

フラン：な、なに！？

永琳：・・・なんだか危険な気がするわ。今回はここまでね。

魔理沙：じ、じゃあ、生きてたら次回会おうぜ！

フラン：ばいばあーい。

鬼巫女：逃がさないわよ、その小動物3匹！死にさせ。必然「キングクリムゾン」！！

魔理沙：私を盾にすんじゃねええええ！！！！こ、恋符「マスターズパーク」！！

フラン・えへ

永琳：いたそうだったから、つい

魔理沙：U z e e e e e e e e e e e e e e e e !  
!!!!!!

特殊弾3：おしえて！えーりん先生！（後書き）

B B A 〓 ババア

このあと、借りてたプレハブ小屋が全壊したとか。 小屋でしてたのか だってフランが暴れる 結局暴れたのは霊夢さん / (^o^)  
^ ) \

標的26：VS黒神めだか本隊（前書き）

こんばんは（？）、蜜柑です（）

バカテスト・美術

【第10問】

問 以下の問いに答えよ。

『黄金比はおよそ $a:b$ である。 $a$ と $b$ の値を答えよ。』

涼宮ハルヒの答え

「 $a \parallel 5$ 、 $b \parallel 8$ 」

先生のコメント

「そうだな。」

アレン・ウォーカーの答え

「 $5:8$ 」

先生のコメント

「・・・惜しかったな。答え方を間違ってるぞ。」

桂木弥子の答え

「」。



先生のコメント

「日本語を書きやがれ。」

## 標的26：VS黒神めだか本隊

「あ、おかえり、ハルヒ達。」  
「ただいま。・・・フェイトちゃんになのはちゃん？何やってんの？」

教室でクラスメートが倒れてたら、誰でも驚くわよね。

「・・・これが成績？」

「うん。フェイトちゃんが・・・」

「そう。」

私の手元にある紙には、こんなことが書かれていた。

### 『後方部隊成績（古文）』

雪城ほのか

VS

井上織姫

x

VS

リナリー・リ

l

x

VS

火ノ宮満

x

VS

日暮かごめ

x

阿良々木暦（ ）

VS

×		×		V	高町なのは（
---	--	---	--	---	--------

雨宮桜子

V

×

3年生の勝利。

支援部隊成績（数学）

夜神月

V

フェイト・T・

ハラウン（）×

V

ラグ・シーイン

グ

×

V

長門有希

×

ブルーベル（

V

×

1年生の勝利。

☐

「？フェイトちゃんのチームは勝ってるじゃない。何でぶっ倒れてんのよ。」

確かに、勝ったのだからそこは喜ぶべきだろう。だがフェイトはずーんと落ち込んでいる。

「みんなの役に・・・立てなかった・・・。」  
「・・・なるほど。で、うじうじしてるわけね。」

実際問題は月の点数を下げるのに大きく貢献したのだが、本人はそう思っていないようであった。

「フェイトちゃん！フェイトちゃんはちゃんと役に立ててたよ。だから元気出して！」

「なのはちゃん・・・。」

「フェイトちゃん！」

「なのは・・・！」

「フェイトちゃんっ・・・。」

「なのh」

「あーもー、しつつこいわねー！」

手を握って見つめ合い始めた二人を見たハルヒが、突然大声で怒鳴った。

「いちゃつくんなら他行きなさい！教室でそんなことされても不愉快なだけなのよ。教室は学ぶところなの！」

「いちゃついては・・・っていうか女同士ではいちゃつかないよ・・・。」

「そ、そんなつもりじゃ・・・。」

「るっさい！さっさと出て行きなさい！！」

なのはとフェイトと・・・ついではやてまで教室から追い出されてしまった。

「ええ！？なんでや！？」

「なんかむかつくのよ。」  
「なんやねん！」

ハルヒははやての関西弁が癪に障ったようです。

「こうなったら・・・なのはちゃんとフェイトちゃんの乳揉みしだいたるううう！！」

「ええええええ！？」

急におかしなことを言い始めたはやて。

そう、彼女はこの学園で言わずと知れた揉み魔なのである。

「に、にげるよ、なのは！！」

「にがさへんでええええ！！！！！」

こうなったら、もうだれにも止められない。

揉み魔スイッチの入ったはやてに追いかけまわされる、悲惨な二人であつた。

4人が騒いでいたのと同時刻、教室の隅ではフランが深刻な顔をしてツナの横に立っていた。

「ねえ、ツナ。」

「ん？」

「・・・ドッペルゲンガーって、ホントにいると思つっ？」

「ふむ、ここが会議室か。なかなか広いな。」

全く同じころ、めだか達本隊は会議室に赴いていた。  
次の対戦場所だからである。

「おー。きたかおめーら。」

部屋の奥から現れたのは、天パ白髪に白衣の男。

「ぎ、銀八先生!？」

ダラダラとしたやる気のない歩き方といい死んだ魚の様な眼といい・

・間違いない坂田銀八その人である。

「おー。つたく、ジャンプの発売日だつてのによー。」

「先生、発売日は明日だと思っただけど。」

「あり? そうだっけ?」

霊夢が厳しく指摘した。

それにしても、この学校に先生を先生と思っている生徒は一体何人  
いるのか。

年上に対して当たり前のようにタメ口を使うよう、教育でもされて  
いるのだろうか?

・・・そんなわけではない。

「ん、向こうの準備もできたみてーだな。」

「先生。今回のルールをお教え願いたいのだが。」

あ、めだかちゃんが敬語使ってる。

え？失礼だつて？

「かったりーなー・・・。しゃーねー、簡単に言うぞ。その扉からまず最初に戦う二人が入れ。んで、負けたら出て来い。先にやられた奴が出てきたら、次が入る・・・という風に、次がいなくなるまでこれ続けるわけだ。教科は地理。オーケー？」

「つまりはダブル罵倒方式だな。」

えっ？罵倒？

「罵倒じゃなくってバトルな。精神の削り合いはしねーよ？」

「うち・・・つまらん。」

ネウロ、お前・・・。

「まず誰から行くんだ？」

魔理沙がめだかにそう聞いて来た。

「うむ・・・脳嚙同級生、どう思う？」

「そうだな、江迎と沖田をいけ・・・で様子見をするべきだと思うが。」

「・・・今生贄って聞こえましたゼイ。」

先に断っておくが、ネウロの辞書に“不可能”などと言つ言葉は・  
・おそらくないだろう。

普段から、奴隷を吊るして・・・とか言ってるからね。  
完全に周りをなめ腐ってるからね。

「江迎同級生に沖田同級生、いつてくるがよい！」

「分かりましたわ。」

「楽しんできまさら。」

二人は扉の中に入って行つた・・・。

「ドッペルゲンガー？」

「うん。」

それがどうしたというのか。

フランが、小声でこんなことを言つた。

「あのね、私達吸血鬼には“祖”と呼ばれるお方がいらっしゃるの。」

「ソ？」

“祖”とは、吸血鬼達の祖先だと言われている女性のことである。

「うん。・・・あの、赤夜萌香、って子いるでしょ？」

「いる・・・けど・・・？」

「・・・その子、“祖”と瓜二つなの。」

「えっ？」



外見もさることながら、性格も非常によく似ているらしい。

「なんでだろう?」

「うゝん・・・」

調べてみる価値はあるかな・・・。

「・・・。」

「来たわね。」

二人が扉に入ると、そこには二人の少女がいた。

一人は人形を持っていて、もう一人は本から全く目を離していない。

「まずはお互い名を名乗りましょう? 私はアリス・マーガトロイド。」

「・・・パチユリー・ノーレッジ。」

「江迎向江ですわ。」

「沖田総悟。まあひとつ、よろしくおねがいしますア。」

はたして、1年生はいよいよ本気を出し始めた3年生に勝てるのかッ!?



標的26：VS黒神めだか本隊（後書き）

ハルヒ「読者のアジトはじまるわよ!!」

ツナ「早速質問!『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『カイ』君からです。ありがとうございます!」ハルヒちゃんに質問。優也君達は、異常な身体能力や、色んな能力を使うけど、興味があるのは誰?」って。」

ハルヒ「そうね。美優ちゃんだったかしら?彼女の天使の力っていうのに興味があるわ。人間的に興味深いのは天道優花ちゃんね。何も無い人間が力を抑えられるっていうのは、なかなか面白そう。」

ツナ「だそうです。」

ハルヒ「次の質問は『ごくでぶある』さんのキャラ『ガット』君からよ。」

ツナ「ありがとうございます!」

ハルヒ「えーと?」ツナから見て今までであった人たちで一番強いと思う能力や力は何だ?ちなみに、成長したらどうなるかも予想して答えてくれて構わない!」らしいわよ。」

ツナ「オレ!?えーと・・・一番強そうだとおもったのは、霊夢かな。なんでも飛んで避けちゃうっているのはすごいよね。」

ハルヒ「そう?私じゃないの?」

ツナ「えっと、ハルヒの能力は感情でコントロールされちゃうでしょ？確かにすごい能力ではあるけど、そういう所を考えると暴走する心配とかが一切無くて強そうなのは霊夢の能力かなって。」

ハルヒ「ふん・・・確かにそうかもしれないわね。」

ツナ「全員の見た事あるわけじゃないからなんともいえないけど、なのはとかはやてはもうちょっとのびしろがある気がするんだ。」

ハルヒ「なるほどね。さて、このぐらいで終わりましょうか。」

ツナ「せーのっ！」

ハルヒ&ツナ「ご感想&ご質問お待ちしてま〜す!!」

## 標的27：魔女たちの晩餐会（前書き）

お久しぶりです！

気が付いたらGWになっててびっくりした蜜柑です。

バカテスト・生物

【第11問】

問 以下はなんの説明か答えよ。

『真核生物の細胞に見られる、へん平な袋状の膜構造が重なって出来ている器官。』

黒神めだかの答え

「ゴルジ体」

先生のコメント

「そうだな。」

アレン・ウォーカーの答え

「ひだひだ」

先生のコメント

「意味分かんねーぞ。」

沢田綱吉の答え

「小腸」

先生のコメント

「細胞の中にある器官だっつってんだろ。」

## 標的27：魔女たちの晩餐会

「・・・パチュリー・ノーレッジ。」

「アリス・マーガトロイドよ。よろしく。」

現れたのは二人の美少女。

どちらもこの学校で1、2を争う天才魔法使いである。

「ちよつとまちなさいよ。わたしはちゃんと、それなりの努力をして魔法使いになったのよ？何の努力もしていない生まれつきの根暗魔法使いと一緒にしないでくれない？」

「・・・なんですって？」

「“祖”って、どういう・・・？」

1年A組の教室前方。

ツナとフランドールが難しい顔をして話していた。

「彼女は最強の吸血鬼ヴァンパイアと呼ばれたお方よ。ただ、彼女自身は争いが好きじゃなかったからめったに戦闘してる所なんて見たことないけど。」

「ヴァンパイアね。」

フラン曰く、吸血鬼にも寿命が存在するらしい。  
ただ人間よりもずっとずっと長命なぶん、個体数ははるかに少ない

のだと言う。

「あ、そうそう。吸血鬼にニンニクとかロザリオが効くとか思ってるみたいけど・・・あれ、効く吸血鬼と効かない吸血鬼がいるから。」

「そうなの!？」

フランには多少効くらしい。

「まあとにかく、そんな私達吸血鬼の間で伝説になった吸血鬼がいたの。」

彼女はなにより平和を愛し、人間との共存を望んだという。そして誰に対しても優しくかったらしい。

「わたしもあつた事あるけど、温厚そうだった。」

「で、彼女の名前は・・・?」

名前が分からないのでは調べようがない。

「ええと・・・“アカーシャ・ブラッドリバー”・・・女王と謳われた吸血鬼の名よ。」

「なによ。ぜんそく持ちのくせに!」

「ぜんそく持ちのなにがわる・・・げぼげぼん!」



始まってそうそう、二人は仲間割れを始めてしまった。  
魔法使い同士は、基本的にあまり仲が良くない。  
同族嫌悪というヤツなのだろうか。

「これは、はじめるべきなのかしら。」

「いいんじゃないですかイ。」

オレ的にはさっさと終わらせて退場したいですね。

少なくとも、生徒会長が出てくる前にはおいとましときまさあ。

「なによー！」

「・・・やるの?」

「えーと、どうしましょう。試合になりませんわ・・・。」

ほっとくに限ると思いますかね。

「封印の解除だけならわたしは賛成よ。むしろ、それが私の使命だ  
と思ってる。・・・でも、あいつらに協力だけは出来ない。」

「・・・たとえ奴らが正しくても、か?」

太陽の心地よい光がさしこむ部屋。

その真ん中にある机で、2人の男女が向かい合わせですわっていた。

「正しくなんかいいわ。生<sup>せい</sup>に執着していない愚かな人間のすること  
なんて・・・たかがしれたこと。」

一人は木魂学園の校長である八雲紫その人であった。

紅茶の入ったコップを持って、優雅にソファーに腰かけている。

「封印された者達自体が、人間の負の遺産だからな……。反論しづらいところだ。」

もう一人は金髪の青年。

どこことなく、見覚えのある顔をしている。

「すべての生き物たちの行動理念は生きて、生きて、生きぬき……。そして、子孫を残すこと。それ以上でもそれ以下でもなく、ただそれだけのためにすべての生き物は生を全うするわ。」

「だが、人間は違うと。」

一口紅茶をすすり、紫はつづけた。

「そう。・・・自殺する生き物はどこを探しても人間だけよ。他の生物たちに、死なんて考えは微塵もないでしょうね。ただ生きる事だけを考えている。」

「それで、この話と封印と何の関係が？」

金髪の青年が、カップを机に置きながら続きを促した。

紫もカップを置いてすわりなおした。

「わたしはおばあさまと約束したわ。・・・幼い時の話よ。おばあさまはもうこの世にはいらっしやらないけれど、これだけはやり遂げると誓った。」

「。。。。。」

男は黙って聞いている。

「世界中に封じられたすべての呪縛を解きはなつこと。呪縛は、ほかのさまざまな生き物たちの生を妨害するわ。だから、一刻も早く取り除く必要がある。」

とくに、と紫はそこで一息おいた。

そして今まで開いていたせんすを、パチン、と片手ですばやくたたんだ。

「封じられていた人間や力がどうなろうと、わたしにはどうでもいい。幻想郷に被害が及ばなければどうなろうと知ったこっちゃない。」

つまり人間などどうでもいいということのようである。

ではなぜ、彼女はこんな学校を開いているのか。

「では、生徒たちのことはどう思っている？ 彼らのほとんどが人間だぞ。」

「生徒としている以上、彼らは私の忠実な兵士<sup>ボーン</sup>。あなたが王様だとすれば、わたしは女王<sup>クイーン</sup>。・・・そうね、生徒会長あたりが騎士<sup>ナイト</sup>かしら？」

どどのつまり、八雲紫という大妖怪にとって人間など取るに足らない存在であり・・・興味を引く存在でもあるようだ。

「ああ、勘違いしないでね。ダーリンはいつでもわたしの一番だから。」

「わかったわかった。」

金髪のが、何度も聞いたというと彼女はフツとほほ笑んだ。そのときの紫の笑みは、まるで純粋な少女の様であったという。

「・・・いつまで続けるつもりかしら。」  
「さあ。」

呆れた二人の見つめる先には・・・

「だいたい！なんであんなばっかり魔理沙とつるんでんのよ！」

「魔理沙がわたしの所に来るの。仲がいい証拠でしょ？」

「ざんねんでした。魔理沙の狙いは本であって、あんなじゃないわ。」

「な、な、な、な、な、なんですってえ！！それ以上いったらぶち殺す！！！」

「やれるもんならやってみれば？まあ、無理でしょうけど？」

「こんの根暗人形遣い風情があああつ！！！」

「人形なめんなああ！！！！」

ちゅどーん！！

「・・・収集がつかませんわね。」  
「ちよつとひと眠りさせてもらいまーす、つと。」

ケンカが収まらないと悟った沖田は、ぽかーんと見守る怒江の横でお決まりのアイマスクをつけて眠りについてしまった。

というか、よくこんな所で寝られるなお前・・・。

ちなみに、そのころのリリカル＋組。

「その巨乳をわたしに献上しいい！！！！」

「な、なんでわたし！？」

「ほらほら、逃げないと揉みしだくわよ！」

「フェイトちゃん追いつかれちゃうよ！」

「なのは、喋らないでとにかく逃げる！！！！」

なぜか、はやてとハルヒに追われるのはとフェイトと織姫なのでした。

「「「もういやああああ！！！！（泣）」」」

「「逃がすかああああ！！（満面の笑み）」」

はやてとハルヒが楽しそうで何よりです。

## 標的27：魔女たちの晩餐会（後書き）

京子「読者のアジト、始めるよ！」

ツナ「え、えーっと、質問から、だね。」

京子「わたしが読むね、ツナ君。『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『椿修二』さんからです！」

ツナ「ありがとう！」

京子「うーんと、『妹思いのコムイ、リナリーの好きなところを全て言ってみる』って。」

コムイ「はいどうも！時空管理局地上本部管轄黒の教団室長兼木魂学園化学科教師にしてリナリー・リーの兄コムイ・リーです！（ちこーん）」

ツナ「息次ぎなしで言い切ったー！！」

リナリー「もう、兄さんたら・・・！」

京子「質問です！リナリーちゃんの好きな所はどこですか？」

コムイ「顔！身体！性格！髪の毛の一本一本まですべて愛してるよ、ボクのリナリー・・・！」

リナリー「に、兄さんったら・・・！」

ツナ「えと・・・うれしそうだね。」

京子「時間もないから次の質問だよ。」

ツナ「え〜つと? 『紅葉or紅蓮』さんの紅蓮さんの方からだね。」

京子「ありがとうございます!」

ツナ「2つ来てるから、ひとつずつ行くね。『ネウロから見て（弥子は除外）奴隷に相応しいのは誰だ?』。」

ネウロ「ふむ、そうだな・・・・・・・・。」

ツナ（怪しい笑が見える!）

ネウロ「ルイズとはやと魔理沙と越前だな。プライドの高い奴の鼻をへし折ってやるのは、とても爽快な気分になれるぞ。」

ツナ「へ、へえ・・・・・・・・。」

ネウロ「逆に言えば、プライドの高い奴ほど奴隷にしやすいぞ。」

ツナ（そんな豆知識いらねえよ!）

京子「もう一つ質問があるよ。『アレンとツナってどちらのほうが黒いんだ?』。」

ツナ「は、え?」

ハルヒ「というわけで、クラスメートにきいてみたわ!」

アレン「えええっ!？」

ルイズ「ツナね。」

ヒノ「・・・ツナくん。」

ハルヒ「ツナじゃない？」

モカ「うゝん。ツナ君？」

こなた「ツナ!絶対ツナだよ!」

魔理沙「ツナだと思っぜ。」

霊夢「はあ?どう考えたってツナでしょ?」

カナ「ツナ君!」

織姫「ツナ君かなあ。」

怒江「ツナでしょうね。」

沖田「ツナじゃないですかイ?」

越前「ツナ。」



エリン「うゝん・・・・・・・・綱吉君かな。」

薫「アレン君じゃないの。」

神楽「断固ツナアル！女の勘がそう告げているネ！」

弥子「ネウ・・・・・・・・ツナ君。」

めだか「うむ。ツナだろう。」

善吉「カツ！ツナに決まってるだろ。」

長門「・・・・・・・・おそらく、綱吉さんだと思います。」

なのは「ツナ君だと思うの。」

フェイト「・・・・・・・・ツナ・・・・・・・・かな。」

はやて「アレン君やろ？ちゃうん？」

ミク「つつナツナにさーれてるよ。」

かごめ「沢田君じゃない？」

剣心「難しいでござるな・・・・・・・・ツナでござるかな？」

フラン「何言ってるの？ツナが最強にきまつてるじゃん。」

一護「アレンじゃねえか。」

黒子「ボクもアレン君だと思います。」

リクオ「ツナ君・・・かな。」

ラグ「ええっ！？え〜と・・・・・・・・ツナ？」

遊戯「ツナくんだよ！」

リナリー「アレン君だと思うな。」

銀八「オレも沢田に一票〜。」

リボーン「オレもだな。」

ツナ「ちょ、ちょっとまった!！」

ハルヒ「というわけで、ダントツでツナの方が腹黒いと思ってる子の方が多いわね。」

アレン「ほっ・・・。」

ツナ「うそー!？」

京子「終わろうっ、ツナ君 せ〜のっ!」

ALL「ご質問&感想おまちしてます!！」

コムイ「椿修二！キミの妹よりボクの妹の方が100億倍かわい  
し美人だ！！」

リナリー「に、兄さん！？」

## 標的28：生徒会長（前書き）

5月テストの発表があつたせいでご無沙汰しておりました。  
お久しぶりです、蜜柑です！

今回は東方祭り？と言つことの一つ。

バカテスト・力学

### 【最終問題】

問 以下は何の説明をしているか答える。

『時空管理局によりロスト・ロギア指定を受けている書物。以前暴走し、多くの血を吸ってきた。別名・闇の書。』

脳嚙ネウロの答え

「ム・・・」

先生のコメント

「ん？お前でも分かんねーか？」

黒子テツヤの答え

「闇の書」

先生のコメント

「まあ、教科書に載ってなかったからな。正式名称は。」

沢田綱吉の答え

「夜天の書」

先生のコメント

「・・・八神達はともかく、なんでお前が知ってやがる。」

## 標的28：生徒会長

「気が済みました？」

「全然。」

見た目ボロボロな魔女二人が、ようやく動きを止めた。

「やりますかイ？」

「上等よ」

「うけてたつわー!!」

なんだかんだ息ぴったりだなこの二人、と思った怒江と沖田であった。

いつもと同じように、スクリーンに攻撃力が表示される。  
ただ、今回はダブルバトルのため4人分が同時に発表されるのだ。

「これは・・・」

『1年A組 江迎怒江&沖田総悟 VS パチュリー&アリ  
ス 3年A組

201点 & 210点 VS 412点

& 210点

』

「ちょっと、あんた足引つ張ってんじゃないの？」

「はあ？あんたこそ、立つ舞台を間違えたんじゃないの？」

再びケンカを始める魔女二人組。

見かねた怒江が、そつと口を挟んでみた。

「あの、そもそも何で先程霧雨さんを取り合って・・・？」

「質問がずれてますぜ。」

まあ、そこはともかく。

「なにつて」

「決まってるじゃない。」

「「魔理沙の知識は使えるからよ。」」

その場の空気が10秒ほど停止しました。

「すみません、わたしでは相手になりませんでした。」

戻ってきたのは怒江。

どうやら、やられてしまったらしい。

「大丈夫だよ怒江ちゃん。私、怒江ちゃん分まで頑張ってくるね！」

「・・・ありがとう。」

京子が、天使の様な屈託のない笑顔でそう言った。

『1年A組 笹川京子&沖田総悟 VS パチュリー&アリス 3年A組』

258点 & 16点 VS 267点  
& 57点 『

「あつ、沖田君！」

「やれやれ・・・ここまでですねイ。じゃあ、これで失礼しますア。」

ここまでで、すでに最初の二人が退場してしまった1年生。対する3年生は、ほぼ無傷だ。

（次で確実にアリスさんは落ちるけど・・・たしか、あと5人残ってるんだよね。）

こちらの残り人数は、あと7人。人数的にはとても有利だ。しかし、あちら側には・・・

（常に成績1位をキープし続けている無敵の生徒会長が残ってる、だよね。）



（15分後）

「またか！またはしよるか、あの馬鹿作者！」

「いいかげんあきらめるべきよ、善吉。」

「“ゼロのルイズ”に言われるのもなんか癪だな・・・」

「だれが、なんですって？（怒）」

「ご、ごめん！オレが悪かった！」

ここまでの成績。

笹川京子&黒埼一護

V S

パチュリー&ア

リス

×

V S

パチュリー&因

幡てゐ

×

家長力ナ&黒埼一護

V S

×

V S

パチュリー&優

曇華院

×

奴良リクオ&脳噛ネウロ

V S

×

V S

古明地こいし&

十六夜咲夜

×

黒神めだか（ ）&脳噛ネウロ V S

「ム・・・」

「十六夜咲夜・・・あなどれんな。」

完璧超人・黒神めだかと天才魔人・脳嚙ネウロが敗れるなど、誰が想像しただろうか。

おそらく、1-Aのだれも想像しなかっただろう。

「その程度ではお嬢様の足元にも及びませんよ。もっとも、教科がわたしの得意分野であったことも勝因の一つである・・・ことも否めませんが。」

さすが優秀なメイド長。

こんな時でも冷静さを崩していない。

「むう！私はフランちゃんと会いたかったのに・・・。」

対照的にこいしは、ぷくつと頬をふくらませて怒っている。

フランドールに会いたかったようだが生憎彼女の本隊にはいない。

だがこいしはそれを知らないらしく、会えなかったことにぷりぷりと腹を立てているようだった。

「勝負はつきました。あなたはさっさと退場なさい。」

「うう・・・。」

こいしはしぶしぶその場を後にした。

心なしか、その背中が少しさみしそうに見えた。

それと、念のため言うておくがまだ1年生側には2人残っている。

まだ勝負はついていない。

「よっしゃ、やっとこの魔理沙様の出番が回ってきたぜ!!」

「はぁ・・・やっぱり、私も出ないとダメ？」

ダメです。

「わかったわよ。出ればいいんでしょ、出れば。」

出てくれないと困ります。

「久しぶりじゃない、咲夜？私が試合に出るのって。」

「すみません。私の非力で・・・」

少女がにやつと笑う。

「あら、私は怒ってないわ。楽しみなのよ。」

「楽しみ・・・ですか。」

「ええ。久々に、あの紅白巫女と戦えるのよ。これほど楽しみなことはないわ。」

どうやら、彼女は前に霊夢と戦ったことがあるようだ。

「弾幕ごっこではないけど、楽しめそうだし。」

「さようですか。」

少女の紅い瞳が、怪しく輝いた。

「無敗の生徒会長・・・ねえ。」

「ん？どうかしたのか、霊夢。」

霊夢は何かに気づいているらしく、眉根を寄せて考え込んでいた。

「あいつ、昼間出て来れたかしら。」

「は？」

と、そのとき。

「フフフツ、お久しぶりね。霊夢に魔理沙！」

部屋いっぱいの子供っぽい声が響いた。

「げっ、この偉そうな態度は・・・」

読者の皆さんならば、もうお気づきだろう。

そう、フランドール・スカーレットの姉にして紅魔館の主。

「レミリア・スカーレット！」

目の前に現れたのは、幼い紅い月と恐れられる吸血鬼であった。

「なぐんぐで、あんたがここにいるのよ！」

「いちやわるい？」

紅魔館はどうした。

「ああ、あの屋敷なら美鈴に任せてあるわ。」

「夏休みなどの長期休暇の際には必ずもどりますし。」

そうですか。

美鈴居眠りしてそうで心配なんだが。

「そんなことはどうでもいいわ。」

レミリアが、ビシッと二人を指差す。

「今日という今日はあんたたちをぶちのめしてあげる。覚悟なさい」

「？」

「はぁ・・・どうせあんたの負けよ、負け犬吸血鬼。」

聞き飽きた、と言う風に首を振る霊夢。

いつもならカツとして言い返してくるレミリアだが、今日は違っていた。

「いい？確かに弾幕ごっこではアンタらに負け続けてきたかもしれない。」

“しれない”じゃなくて、実際問題負けてんのよ。」

霊夢は相変わらずめんどくさそうにしている。

「でもね。勉強はどうかしら？」

「どういうことだよ。」

今日のレミリアは、いつもと違った雰囲気をもっている。  
さすがはお嬢様、と言ったところか。

「勉強にどうもこうもないわ。さあ、最後の戦いを始めましょうか。  
ホーッホッホッホ！」

（今日のこいつは異常に腹立つな・・・）

どうでもいい所で心をシンクロさせんな、霊夢に魔理沙。

「！！！！」

1年A組の教室。

モニターの前で固まっている生徒がいた。  
心配そうにこなたと神楽が声をかけている。

「?どつたの、ふーちゃん。」

「どこか体調でも悪いアルか?」

そう、フランである。

彼女はレミリアがモニターに映った瞬間、その場にへたり込んで動かなくなってしまったのだ。

「あ・・・あ・・・!」

顔は真っ青で、体は小刻みに震えている。

「た、大変アル!ふーちゃんしつかりするネ!!」

「どうしよう!なにがあつたの、ふーちゃん!?」

原因が分からなくては、どうしようもない。

とりあえず保健室に連れて行くしかない二人が思った時だった。

「・・・お・・・さま・・・」

「え?」

微かにフランの口が開いて、声を発した。  
神楽が慌てて聞き返す。

「あ・・・あ・・・!おねえさまが・・・このがつこうに・・・  
・・・」

そう言ったフランの瞳には、ハッキリと恐怖の色が浮かんでいた。

「お姉様・・・って、もしかして！」

「もしかしくなくてもアル！とにかく、モニターが視界にうつらない所に移動させるネ！」

今この教室にいるのはこなたと神楽・・・そして、走り回ってぐったりしているリリカル＋組のみ。  
つまり。

「じゃあ、モニター消しちゃえば？」

「その手があったアル！ナイスネ、タツキー！」

「おね・・・さま・・・が・・・」

まだ震えているフランをたまたま教室にあった布団に寝かせ、モニターの電源を落とした。

これで、フランの視界にレミリアが映ることはない。

「ふう・・・間にあったアルな。」

ちなみにこの布団無断で使っているが・・・アレンのである。

一方、そのお姉様はと言うと。



『1年A組	博麗靈夢&霧雨魔理沙	VS	レミリア&十六夜咲夜
3年A組	267点	&	286点
0点	&	32点	『
			VS
			93

「うそ、だろ。」

「いかにも“バカです”って顔してんじゃないの！詐欺よ、これは！」

確かに、普段の言動等は子供っぽい。

「なんとでも。でも、あなたが負けた事実はいくらあがこうと変わらないのよ。」

だが今日のレミリアは違っていたようだ。

「くっ・・・」

「カリスマ性が・・・溢れている、ですって!？」

まさか、力学のハルヒの点をもしのぐとは。

作者も想定外だったぞ。

「ホーッホッホッホ！さて、負け組はどっちかしらね？」

「ムキーン!!」

「さすがです、お嬢様。」

猿のように二人が顔を真っ赤にさせても、レミリアとの点差が逆転するはずもなかった。

試召戦争、これにて完結。

勝者・・・3年A組。

「ちょっと、私の出番なかったわよ。別にいいけど。」

いいのか、クラス代表・戦場ヶ原ひたぎ・・・

標的28：生徒会長（後書き）

長門「読書のアジト、はじまりm」

ハルヒ「始まるわよ！！」

長門「・・・。」

ツナ「あ、えっと、とと、とりあえず質問いこっか！だから帰らないで、長門ー！！」

長門「沢田様がそうおっしゃるのであれば。」

ツナ「様・・・？」

長門「はい。一番くらいの高い方だと認識しましたので。」

ツナ「そ、そう。ええと、質問行くよ！」

長門「まずはじめの質問です。『紅葉or紅蓮』さんよりいただきました。」

ツナ「ありがとう！」

長門「あちら側のリナリー・リーからですね。『じゃあいくわね。質問、その学園のいい所、悪いところを教えて。』いい所の方が沢山あるといいわね。…そっちの作品のコムイ兄さん、体を壊さないようにね。アレン君、…あまり食べ過ぎないように、それと迷子

にならないでね。そしてそっちの作品の私、アレン君やコムイ兄さんをよろしくね。あと、フランドールさんとは仲直りしなきゃ。それじゃあまたね！」とのことですよ。」

ツナ「な、長げえ！！と、とりあえず、リナリーに伝えておくよ。」

長門「学園のよい所は、周りに気を使わずのびのびと暮らせること。悪い所は、外界と完全に遮断されている所でしょう。」

ツナ「あ、うん。そうだね。オレは寮に入っていないから完全についてわけじゃないけど……。でも、女の子の友達が増えるのは……。うれしいかな。」

長門「能力者は、主に女性が多いようですね。」

ツナ「そうだね。」

長門「もう一つあちらのウォーカーさんから質問が。『その学園に僕やリナリーがいるということは、神田やラビ達ももしかほかのクラスに……？』」

ツナ「うん。神田君もラビ君も、1-Bに所属してるよ。」

長門「データに付け加えておきます。続いての質問は『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『天道亮』さんから。」

ツナ「ありがとう！」

長門「『蜜柑さん、貴方はギャグとシリアスならどちらが好きですか？』。」

ツナ「作者！」

蜜柑「はい、なにか？」

ツナ「ええと、シリアスとギャグどっちが好き？って質問が。」

蜜柑「ん〜。読むのはシリアスが好きかなー。」

長門「読むのは？では、書くのは。」

蜜柑「書くのはギャグの方が書きやすい。キャラが勝手に会話してくれるから。」

ツナ「だそうです。」

長門「データに加えておきます。次は『ごくでヴある』さんのところの『雲雀恭弥』と言う方と『六道骸』と言う方から。」

ツナ「あ、ありがとう・・・！よりもよって、あのW問題児とは・・・。」

長門「

『雲雀』・・・で、沢田綱吉。その学校には僕より強い奴が沢山居るみたいだね」

骸「それで、もし君の守護者と戦わせていい勝負が出来そうな人たちを6人選んでください」『  
とのことですが。」

ツナ「えーっと・・・。」

長門「追加です。」

『ごくでヴある』というわけであの2人からの質問でツナの守護者達が一对一のルールで戦ったら良い勝負をしそうな相手を・・・6人選んでくれ」

ガット「・・・・・・・・・・」

ねこ「あ、あと・・・その6人の属性も予想してくれないかな？」  
ごくでヴある「正確的な予想だけでいいからな」  
だそうです。」

ツナ「じゃあ、下に各属性で一人ずつ書き出してみたから・・・長門、解説お願いできるかな？」

長門「沢田様の望みであれば・・・それではいきます。」

ツナ（“様”はヤメてほしいんだけどな・・・）

## 嵐

幼き破壊者

フランドール・スカーレット

「すべてのモノはわたしが壊すためだけに在るんだよ。」

長門「破壊」嵐の分解と分析。作者的には『フランの方が強いんじゃないね』と。」

## 雲

不完全な創造神

涼宮ハルヒ

「わたしと戦いたいって事は宇宙人が何かって事よね。それなら相手になるわ!」

長門「自己中心的、単独思考・・・以上。」

晴

樂園の紅白な巫女さん

博麗霊夢

「はああ・・・めんどくさ・・・」

長門「大空には及ばないながらも太陽。」

霧

つかみ所のない大妖怪

奴良リクオ

「人間にあだなすやつにゃあ、容赦しねえぜ。」

長門「・・・一種の幻覚。」

雨

旧時代の人斬り

緋村剣心

「・・・お前では、この剣には追いつけないでござるよ。」

長門「人斬り抜刀齋。山本武では勝機はないと。」

雷

パーフェクトガール

黒神めだか

「私は24時間365日、誰からの挑戦でも受け付ける!」

長門「大空になるには染まっていなさすぎると分析。敵味方関係なく受け付けるのであれば、すべての攻撃を引き受ける雷がベスト。」

ツナ「ええと、6人って言ってたから・・・これでいいかな。」

長門「そうですね。もう少し紹介してもいいですが。」

ツナ「疲れたから、おわるっか。せーのっ!」

長門&ツナ「ご感想やご質問おまちしてます!」

長門「またの御アクセスお待ちしてます。」



## 標的29：終わりとキオク（前書き）

やっとテストが終わったのんびりしている蜜柑です。

こんにちは！いや、こんばんは、ですかね。

ここのレミリアが頭いいのは・・・きっと某メイドさんのおかげなんだと思われ。

だってあの人ザ・ワールド（違う）使えるからカンニングし放d（ry

## 標的29：終わりとキオク

「まけちゃったか……。あーあ、アリス達に負けたのはちっと悔しいぜ。」

「うむ。次の期末テストが楽しみだぞ。」

一人だと思っていたら、後ろから凜とした声が聞こえてきた。つーか、普通に出て来いよ……。黒神。

「げえっ、黒神！そうだった……。な。期末かあ。」

「ったく、だからテストで粗末な点数しか出せないのよ！」

「っておまえもいたのか！」

黒神と言いハルヒといい！普通のヤツはいないのか、ここに！？  
……。いない気がしてきた。  
うん、いないわ。

「ところで魔理沙。」

「なんだよ。」

嫌な予感しかない、のは、気のせい、か？

「ツナ、見なかった？教室にいなかったんだけど。」

「……。……。……。見てねえな、そういえば……。。」

おかしいな！。

教室にいるんじゃないか。たっけ。

「そうだな……。。」

「アンタも来なさい！どうしても聞きたいコトがあるから探してるのよ。」

ええええええ！？

なんで！？

「はア！？」

「親友の探し物くらい手伝いなさいよ。」

「うっうっうっ・・・」

探せばいいんだろ、探せばっ！

っ！か、ツナは物じゃなくて人間だ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

・・・あれ？

「ここは・・・図書室？」

何でオレこんなところで寝てたんだろ。

いや、確かに本見たら眠くはなるけどさ。

「うーん・・・。」

・・・。

「・・・ま、いつか。」

そういえば、テストいつだっけ。  
そろそろ勉強しないとマズイよなあ・・・。

「・・・今宵は満月・・・」

「はいはい。」

夕方、日もとつぷり暮れた暗い道。

そこにたたずむ、二人の女。

「聖なる日に人攫<sup>おとり</sup>いに精を出そうとしてる私達ってなんだろうね・・・」

銀髪ポニーテールの女性が、人生あきらめきったような顔でそう言った。

まだまだ人生をあきらめるにはずいぶん若いと思うが。

「人間の体がほしい。その願いのためなら何でもする！そう誓ったくせに、今更何言ってるのよ！」

言い返したのは金髪サイドテールの女性。

こちらは、先程の女性と対照的にずいぶんイキイキとしている。

「わかってるから・・・わかってる。」

ダメな私でも、もしかしたら……そうおもったから。  
あきらめきった表情の中にわずかな希望を浮かべ、そうつぶやいた。  
誰にも聞こえないほどの声で。

「あつ、いたいた!」

「魔理沙。どうしたの?」

どうしたの、じゃねえよ!

今教室で何が起こってんのか知らないわけじゃねえよな。

「今すぐ教室に戻るぜ!」

「えええ!?!なんで急にっ!?!」

“なんで”だつてえ!?!

「決まってるだろ!フランがぶっ倒れたって聞いてないのかよ!?!」  
「えええええええ!?!」

おいおい……しつかりしてほしいぜ……。  
さっきまでの気迫はどこいっちゃまったんだか。

たしか数時間前まで、教室で偉そうに足組んですわってたような。

「……なあ。」

「なに?」

聞くべきか否か？

・・・ええい、聞いてしまえ！

「テ、テスト、どうだった？」

「・・・どうって？」

どうって、点数に決まってるだろ！

て・ん・す・う！

「テスト、まだしてないじゃん。」

「はあああああ！？」

いやいやいやいやいや！

じゃあ、今までお前は何を見てたんだよ！！

全部見てたはずだろうが、今までのことを！！！！

「け、今朝こなたが靴箱でお茶まいた事件も覚えてないのかよ！？  
きのうの帰りにお前の近所で起きた事故はっ！？」

「えっ？それならしってるよ。だって、オレが床拭いたし・・・事故の通報したのもオレだし・・・」

ちよつとまてよ。

・・・もうわけがわかんねえ。

「と、とりあえず教室にもどるぜ！話はそれからだ！」

「え？っ、うん。」

どういうことだ？

なんで、テスト受けた日から今までの“学校にいた時間の記憶”だ

けがすっぽぬけてんだ？

あと、あの黒いオーラも感じないよな・・・？

標的29：終わりとキオク（後書き）

リナリー「おしえて！」

京子「ぎーんぱーちせーんせーい！！！」

銀八「はい。つーわけで、今回は我らが銀さんがでばりまーす。」

京子「ツナ君どこいったのかな？」

銀八「ほつとけ。つーわけで、まず最初の質問。『闇夜の黒鳥』さんとこの『カイ』ってヤツからだ。」

リナリー「ありがとうございます！」

銀八「えー、『綱吉君達は、僕の居る世界で戦ってみたい子は居る？』。どうなんだ、コレ？誰に聞けばいいんだ？」

リナリー「どうしよつか。」

京子「うーん・・・涼宮さんとか、みんなに聞いてみたらいいんじゃないかな？」

銀八「つーわけで、現場の井上リポーター！」

リナリー「用意周到ですね・・・先生。」

織姫「はい！こちら教室にいます井上でーす！」



銀八「じゃー、テキトーにリポートしてください。」

リナリー「て、てきとうに!?!」

織姫「まずは・・・あ、フランちゃん!」

フラン「なーに?」

織姫「この人達の中で、戦ってみたい人っているかな?」

フラン「えつとねえ。・・・この目が紅いの!コイツが持つてる剣邪魔くさいから壊したい!」

(リナリー『ほかにもつと邪魔なモノってあるんじゃ・・・。例えば、今教室にある持ち主不明の薙刀なぎなたとか。』)

織姫「そっか、どうもありがとう!次は、なのはちゃんに突撃!」

なのは「どうしたの、織姫ちゃん。」

はやて「なんやなんや?」

フェイト「どうかしたの。」

織姫「ズバリ!このなかで戦ってみたい人はいますか?」

なのは「うーん。そうだなあ。」

フェイト「風魔さん、ですか。独特の剣技があるみたいで・・・ぜひ、手合わせ願いたいですね。」

なのは「黒城流香さんと戦ってみたいかな。吸血鬼かあ。」

（銀八『うちのクラスにも2人いるけどな、吸血鬼。』）

はやて「貧乳仲間として、天道優花ちゃん気にいったで！気があいそうやな。」

（銀八『あつてほしくないな、はやてとは。』）

織姫「ありがとう！」

魔理沙「おっ、何してんだ？」

ハルヒ「ミステリーね。」

織姫「この中で戦ってみたい人は・・・ズバリ！」

魔理沙「ええと？そうだな。水野進？ってやつかな。」

ハルヒ「理由は。」

魔理沙「ちよつとばかりチカラを使った程度でぶっ倒れるようなヤツ、この魔理沙様が徹底的に鍛えまくってやるぜ！」

ハルヒ「あたしは月臣龍ってヤツかしら。能力の無効化？そんなものがこのあたしに効くとでも？これは、私に対する挑戦状と受け取

「ったわ！」

魔理沙「挑戦状じゃねえだろ・・・別に。」

織姫「ありがとうございますーす！現場からは以上ですー！」

銀八「つーわけで、カイさん。さしいれに土方井スペシャルを100人分（そのうち10人分にはダークマター入り）を神樂がもったので、みんなできれいに完食しちゃってください。」

リナリー「いまなにか危険なモノが入ってたような・・・。」

京子「ロシアンルーレットだね！楽しそう」

リナリー「ところで・・・おいしいのかな、そのどんぶり。」

銀八「次の質問だー。『ごくでぶある』さんとこの『ガット』クンから。」

京子「ありがとうございます」

銀八「『ツナに質問だが、あの二人のように喧嘩するほど仲がいいとおもう2人組みをだいたい五組ほど選んでくれ。ちなみに2人組みの数はいくらかでも構わない。学年も問わないからな。』。ついでにいうと、あの二人って言うのは雲雀恭弥とねこ、ってやつらだそうだ。」

リナリー「ここにツナ君から預かったメモがあるから、よみますね。」

神楽&沖田総悟

東風谷早苗&博麗霊夢

八神はやて&日暮かごめ

三浦ハル&鏡音リン

フランドール・スカーレット&江迎怒江

リナリー「こんなかんじみたい。」

銀ハ「つーわけでガットくんは本気霊夢の猛攻から頑張って逃げのびてください。」

京子「あ、霊夢ちゃん今行ったよ。道に迷わないか心配だね。」

リナリー「今日はこの辺で!」

銀ハ「アディュー。」

京子「次回もどうぞよろしくお願いします」

### 標的30：禁書少女と大天使

むかしむかしのことでした。

あるところに、“カンゼンキオクノウリヨク”をもって生まれてきたひとりの少女がいました。

“カンゼンキオクノウリヨク”とは、いちどみたことは死ぬまでわすれないというチカラでした。

そのノウリヨクにめをつけたあるそしきは、彼女にあるしょもつたちをキオクさせました。

それは、とてもとてもキケンなほんでした。

彼女はくるひもくるひもキオクしつづけました。

何もわからないまま、うながされるままにキオクしつづけました。  
。

そんな日々から、4年の月日が流れました。

成長した少女は、自分の頭に植え付けられた知識を恐れはじめました。

「私の頭の中には、なんて恐ろしい知識が詰まっているんだろう」と。

彼女は考えました。

「いまに、私の知識を悪用しようとする輩が出てくるかもしれない。

でも、私は魔術師でも何でもない。

ただ記憶力が人よりもすぐれていた、ただそれだけのただの人間。

この危険な知識達をうまく制御することは……一生かかっても叶

わない。

もしも私が世界中を逃げ回れば、周りの人たちに迷惑がかかってしまふ。

そんなこと、私には、できない！！

そうだ。この身を誰も知らない・・・近づけない場所に隠してしまえば・・・」

少女は考えました。

一体どこならば見つからずに済むのだろう。

一体どこならばこの身を永遠に封じられるだろう。

一体どこならば・・・死ねるだろう。

彼女にかかった魔術。

それは、彼女が命を絶つことをよしとしました。

何度喉を切り裂いても、

何度海に身を投げても、

何度崖から飛び降りても・・・

なにをしても、彼女は生きていました。

ならばこの身を誰も届かない所に。

この知識達が誰にも届かない所に。



・・・さらに10年の月日が流れました。

少女は、地中深くの結晶の中で静かに眠っていました。

結晶の名は“オレイカルコス”・・・またの名を“オリハルコン”  
といいました。

この金属ならば、私を、危険な知識達を、永遠に時の狭間に封じて  
くれる。

そう願って・・・

ながいながい月日が経ちました。

とおいとおい東の国では、少女が眠りについてから103回目の美しいサクラが咲こうとしていました。

そのとおいとおい東の国に、ひとりの青年がいました。

青年の正体は、天界から定期的に来ていた天使でした。

彼はここに住む生き物が少しだけ気に入っていました。

ある日、天使はひとつのうわさを聞きました。

「自分の知識を恐れた<sup>よわい</sup>齡16の小さな少女は

不老不死の呪われた御身を引きずって

本当の幸せを知るまもなく自らを時の狭間に封じ込めた・・・。」

それをとて<sup>ふひん</sup>不憫に思った天使は、お氣に入りを連れ少女のもとを訪ねました。

不憫に思うのと同時に、彼女にかかった不老不死の呪いに興味を持つていたからです。

天使の力を使えば彼女を探し出すのはとても簡単なことでした。

少女は人間たちが近づけないような地下深くで、美しい姿で眠っていました。

天使はこの美しい少女が二度と目覚める事のないように、と思いました。

そこで天使は、少女の周りの時間を少女の眠るオリハルコンと共に止めてしまいました。

“時間を止めてしまえば愚かな人間たちは近づけないだろう。”

そう思ったのです。

さらに天使は、お気に入り達と自分の力を使い、少女の周りに4重の結界を張りました。

「お前たちに永遠の命と永遠の肉体を与えよう。

その代わり・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

天使が去った後、彼らははそれぞれを封印し合いました。

なぜなら、彼らは自分達の中にいやしい心が生まれるのを恐れたのです。

彼らもまた、オリハルコンにその身を封じました。

彼らの封印が解かれるとき。

それは、少女にかけた結界が破られる時・・・

「ねえ、おばあちゃん。その人たちってスゴイ人なの？」

「そうよ。一人は伝説の赤き九尾の狐、一人は緋色のおしゃぶりを身に付け世界を統一した偉大なお姫様、一人はモノゴトの境界を操ったと言われるそれは美しい女性、一人はジャンヌダルクの再臨とまで呼ばれた凜々しかったと言われる美しい女性、一人は紅き九尾とは別の漆黒の九尾の狐、一人は最強にして最凶の魔女だったと伝えられているのよ。」

「へえ、スゴイ人達だったんだね！」

「・・・いい、紫。私達は妖怪だけれど、決して人間や他の生き物たちを下げずんだりしてはいけないよ。最初は受け入れてもらえなくても、いい子にしていればいつか必ず理解してくれる人に巡り合えるからね。」

「うん！」

・・・おばあさま。

わたしがおばあさまの血に目覚める事は、金輪際ないでしょう。

わたしとは、血がつながっていなかったんでしょう？

そんなことづくに気づいていたのに。

最後まであなたは言わなかった・・・なぜ？

「幻想郷のみんなにも話をつけないとね・・・。」

・・・やはり、あの封印は解くべきなのでしょうが。

だとしたら、やっかいなのは時間を弄ぶ天使。もてあそ

天界からどうやって引きずり下ろすか？

「でも、ヤツラの・・・セーニョファミリーの手に渡ることではないでしょう。」

いえ・・・・・・・・私が渡さない。」

・・・・・・・・。

標的30：禁書少女と大天使（後書き）

大天使の不憫〃ただの興味。

そんなもんです、大天使って。



## 標的31：くじ

「今宵は満月。美しいわね。」

明々と輝く満月をバックに、彼女は怪しく笑いながら立っていた。もっとも、口元は扇子で隠れてしまっているため本当の表情はとも分かりにくい。

「・・・始めましょうか。殺し屋さん。」

「ええ。」

殺し屋と呼ばれたその少女は、7日前イタリアでクローム髑髏を誘拐したピンク髪の女性と共に行動していた、まさにその人であった。長い金髪が、満月の光に反射してとても美しくたなびいている。

「舞台は 整いました。」

「今に見てなさい、八雲紫。自分の生徒が減<sup>く</sup>って行く様を。」

「お、おね・・・さまが・・・」

同じころ、1年A組。

明かりがついている唯一の部屋で、事件が起こっていた。寮に戻らなくてはならない時間にもかかわらず、フランドールが教室から出たがらないのだ。

「ツナ連れてきたぜ。霊夢、ハルヒ！」

そこに、バーンッ！、という豪快な音を立てて入ってきたのは、ツナを片手で引きずった魔理沙。

「おっそい！！！」

「もうほとんどみんな帰っちゃったじゃないのよ！」

今教室に残っているのは、フランのほかに、ハルヒと霊夢だけ。他のクラスメイトは2人がさっさと返したので誰も残っていない。それにしても、自分達で返しておきながら“帰っちゃったじゃない”とは・・・なんともいえない。

「わりーわりー。」

「な、なんなの！？」

「ツナっ！？」

ツナの声にいち早く反応したのは、フラン。  
目にもとまらぬ速さで、ツナにタックルをかました。

「いっつ！」

「うわあああん！！」

本人は泣きながら抱きついただけなのだろうが、端からみればそうはみえないのである。

ツナが痛そうにしている辺り、とくに。

「ツナあああ！帰っちゃヤダあああっ！」

どうやらツナと離れたくないらしい。

よっぽどレミリアに対するトラウマが強いのか。

「ほんとにツナを信用してんだな。」

「じゃあ、私部屋に帰るわ。大丈夫そうだし。」

フランに泣きつかれたツナは、苦しいのか何なのか顔を赤くしたり青くしたりしている。

不安で仕方ないのだが、これのどこが大丈夫そうなのか？

答える霊夢。

「あたしも帰るわ。ツナ、あんたフランの部屋で一泊過ごせば？どうせ帰れないでしょ。」

「・・・そうみたいだね。」

いいながらツナは、未だにブルブル震えているフランをお姫様だっこの要領で抱えあげる。

見てるこっちはものすごく恥ずかしいが、本人たちはなんとも思っていないのかそのままスタスタと歩きはじめた。

「あんたすごいわね・・・。」

「なにが？」

夜の9時      フランの部屋。

ここにいるのは、すっかり落ち着きを取り戻したフランとお風呂上がりのオレだけ。

「着替え持っていないから体操服？」

「あ、うん。急だったから……。」

そう、急だったからオレは今パジャマ代わりに体操服を着てる。一応暦の上では春になっちゃいるけど、夜はまだ肌寒いから夏服の上から冬服を重ね着して。

あ、下は冬の長ズボンだけだよ。さすがにこわこわしちゃうし。

アリシア達にはちゃんと電話しておいたから多分大丈夫。

気がかりなのは、その電話が留守電だったことぐらいかな。買い物に出かける時につけて解除し忘れたのかもしれないな。

「あ、そうだ！みてみてツナ！」

「これは……入学してすぐの頃に配られた……」

「そう！あの時のくじ！」

あの時配られたくじはモースターボールに似たきれいな透明な球で、中に番号の書かれたこれまた透明な板に黒インクで文字が書いてある。

こんなのいっぱい入ってたなら、そりゃあ重いよね。

「あれ？これ、なんか……」

「そうなの！これ、前と色が変わってるんだよ！」

配られた時は球全体が透明だったにもかかわらず、今は上半分だけが紫色に変色している。

おまけに、なんだかちかちかと点滅し始めたように見えるんだけど……。

「あれ、光ってる？ちっかちかしてるよー！」  
「！！！」

これはヤバい。オレの超直感が危険信号を送ってきたから、間違いない。

慌ててオレは、カバンの中からあの手袋を取り出した。  
あれは、確実に………爆弾だ。

「つかまれ、フラン！」  
「え、こう？」

突然、ツナの雰囲気が変わった。  
言う通りにツナの横からぎゅっと抱きついて、ちょっと怖かったから目もぎゅっとつむった。

「わ、わあっ！？」

突然体がふわりと浮かんできたかと思うと、次の瞬間大きな轟音と共にひんやりとした空気を感じた。

ドガアアアンッ！！！！

「……？」

相変わらず体がふわふわしてるけど、音の正体が知りたかったから  
思い切って目を開いた。

・・・見えたのは恐ろしい光景だった。

「ツ、ツナ・・・これ・・・」

「・・・なぜ、もっと早く気付けなかったんだ・・・」

ツナが唇を噛んで悔しそうにしてた。

あのくじ、爆弾だったんだ。

みんなに配られたから、それがいつぺんに爆発して大きな波になっ  
たんだ。

そうじゃなきゃ　どうして寮が真っ赤に染まってるの？

「燃えちゃう。燃えちゃうよ。」

「・・・。」

でも、私もツナもどうする事も出来なかった。

すでに炎は燃え広がってしまっていて、手の施しようがない。

ただただ・・・目の前で焼け落ちて行く建物を見ているしかなかった。

「大丈夫だった、はやてちゃん！」

「こっちは大丈夫や！」

あかん！火の回りが早すぎる。

まだ空気が乾燥しとったから燃えやすくなってたんやな、色んなモ

ノが。

「あれ・・・フェイトちゃんの姿が見えないよ!」

「なんやて!？」

他の子はみんな逃げたんやろか？

もしかしてフェイトちゃん、みんなを助けてんのやろか？可能性はある。あの子のことやから間違いないやろな。

「・・・もうあかん!これ以上ここにおったら私らまで燃えてしま  
う!」

「でも、フェイトちゃんが!」

気持ちは分かる。けど、や。

「他の子と一緒に逃げたんや!そう信じるしかない!」

「で、でも・・・」

「早よ!」

「・・・・・・・・わかった。フェイトちゃんを信じるよ!」

うん、私も信じとる。

・・・それにしても、や。

「何がどうなってるんや!？」

同時刻。

こちらにも、生き残りがいた。  
言わずと知れた変人、涼宮ハルヒである。

（３年生は全員いない。ということは、リードする人がいないってことよね。）

そう。あの後３年生は、すぐに旅行へ出発してしまったのだ。

全員寮暮らしなので準備はすぐにできたし、なにより校長先生が「早く行けば早く終わるでしょ。」という訳の分からないことをほざいた結果こうなった。

そんなんで大丈夫なのか、この学校。

「あつ・・・あなた、火ノ宮くんね？」

「！は、はい・・・」

ハルヒが逃げる途中に出会ったのはクラスメイトの火ノ宮満みつる。

あの騒がしいクラスにもかかわらず、その中で一際静かな生徒だ。

「そっちは誰もいなかった？」

「え・・・は、はい。」

（うじうじした子ね）とハルヒに思われたとは思っていない満と、  
何故かこの状況を楽しんでいるハルヒは、とにかくにもいそいで  
寮の外へと非難した。



「フフフツ、誰も気がつかなかったみたいね。さすがだわ、殺し屋・金色の闇。」

「長いのでヤミでいいです。」

さて、ここからが私の仕事。

証拠隠滅のためにわざわざ炎を放ってもらったんだから。

「炎の中にいるすべての生に“死”を……。」

目の前で明々と燃える建物から、たくさんの魂が姿を現した。  
魂魄……っていうのかしら？こっこの。

「屍はすべて灰となる。証拠も何もあったもんじゃないでしょうね。」

「そうですね。」

そう、“死”なんて簡単なこと。

悪いけど八雲紫に私達の邪魔をされたくないのよ。

コマがなくなってしまうえば、彼女も動きづらくなるでしょうね。

「八雲紫<sup>クイーン</sup>が一人で行動するはずがない。」

「慎重な彼女ならなおさらそうするでしょうね。」

危ない橋は渡らない。

わたるのは、安全で楽しい橋だけ。

「アンタはいつでもそうよ、八雲紫。」



## 標的31：くじ（後書き）

幽々子「読者のアジト改め、蜘蛛のアジトはじまるわよ。」

ヤミ「今回は私達が乗っ取らせてもらいました。」

幽々子「私、西行寺幽々子と金色の闇がお送りするわ。」

ヤミ「ひとまず自己紹介をしておきます。」

### 【西行寺幽々子<sup>せいぎやうゆうゆうこ</sup>】

作品：東方Project

武器：扇子

能力：死霊を操る程度  
の能力  
死を操る程度  
の能力

その他：大食い女王様。

「彼女の能力はとても恐ろしい。八雲紫とは旧知の仲……のハズ。」

### 【金色の闇<sup>こんじき</sup>】

作品：TO Loveる - トラブル -

能力：戦闘機人  
スナイパー

武器：自分の髪とか

その他：正真正銘、本物の超優秀な殺し屋

『変身とかができる。職業柄からか、基本的に人と関わりたがらない。』

ヤミ「……。」

幽々子「こんなものかしら。あら？これは、質問用紙？」

ヤミ「答えてみたらどうでしょうか。」

幽々子「暇だしそうするわ。ええと？まずは『ごくでぶある』さんから質問。」

ヤミ「ありがとうございます。」

幽々子「『あの学校内だけでも、何人いるか気になるな（色々とやばいやつもいそうだが）』……。あの学校の生徒の人数の事かしら？」

ヤミ「……そうですね。」

幽々子「残念だけど、私は知らないわ。単純計算で120～130人ぐらいじゃない？」

ヤミ「次の質問。『闇夜の黒鳥』さんからです。」

幽々子「感謝するわ。」

ヤミ「『学園で一番強いと思うのは誰だ?』ですか。」

幽々子「まあねえ。校長である紫じゃない“学園で”なんだから。」

ヤミ「それはどうでしょうか。」

幽々子「?。」

ヤミ「・・・発展途上の生徒たちを見る限り、一概にはそう言えない気がします。」

幽々子「難しいわね。でも今のところは紫と言うことにしておきましょう。」

ヤミ「そろそろ時間です。」

幽々子「また機会があればお会いしましょう。」

ヤミ「ご感想・ご質問はいつでも受付中ですから。」

幽々子「次回お待ちしておりますわ、ごきげんよう。」

標的32：坂田銀時（前書き）

オリキャラ作ってみました！  
こんにちは、蜜柑です。

いや、まだ名前すら本編には出てきませんけども。

## 標的32：坂田銀時

時間を少しさかのぼり、教室にまだツナ以外の生徒がいたころ。ツナの家でも事件が起こっていた。

「ぐっ!？」

少し暗くなった町を走っていた黒づくめの男が、何かに狙撃され僅かにふらついた。

仕組みは分からないが・・・とにかくその男は上空に逃げた。

そこしか逃げ場がなかったようで、とても切羽詰まっているらしかった。

「うつほ！」

「な、どこにいる!？」

何処からかアリシアの声が響いた。

それを聞いて動揺したらしい。

男の動きが完全に止まってしまった。

と、次の瞬間・・・突然男の真下に空があらわれた。

そして掛け声と同時に、竜巻状になった無数の火球を素早く放った。

「イエッサア!くらえ、フレアアープ!!!」

「うああああっ!!」

竜巻状の火球は、見事に男を飲み込んだ。

下からも横からも男の姿は見えない。

「よっしゃあ！今日のお仕事おわりつと。」

彼女たちの仕事は、次期ボンゴレ十代目・沢田綱吉の命を狙いに来た刺客たちをツナに気づかれぬように排除すること。誰かに命令されたわけでもなく、自主的に行っている。

「お疲れ様、うつほ。」

「お疲れ～おなかすいた。」

いつもどおりアリシアの狙撃で相手を惑わせて空がとどめを・・・という戦法で戦ったのだが、今日はいつもと違う事があった。

「遅くなっちゃったね。」

そう、知らぬ間に当たりが真っ暗になっていたのだ。

ここは街灯の明かりなどで他よりは明るいけど、そんなのがない所では何処にいるのか分かりにくいほどに辺り一面が真っ黒に染まっていた。

「ヴィヴィオ心配してるかな？」

アリシアのそのなにげないつぶやきに、答えた者がいた。

「してる訳ないでしょ、ばっかじゃないの？」

いきなり後ろから声が聞こえた。

二人が素早く振り返ると、そこには金髪サイドテールの女性がいた。

「誰、なの？それに・・・ヴィヴィオが心配してないってどういう



こと!？」

「私が捕まえて眠らせているの。ああ、私？私は亞北ネル。そして」

突如、二人の後頭部に強い衝撃が走った。

「な、なに・・・？」

「今アンタ達に手刀をおろしたのが、弱音ハク。どうせアレだけで教えといてあげる。」

何が何だか訳が分からないまま、二人は意識を手放してしまった。

時間を進めまして、今現在。

「ねえ、ツナ。」

「・・・。」

ツナはさっきから黙りこくったまんま。  
よっぱどシヨックだったみたい。

「あのさ、誰が爆弾しかけたのかな？」

「・・・。」

そう。

犯人を見つけないと、またおんなじことが起こるかもしれないですよ。

それはわたしもイヤだからね。

「全部のくじに細工しなきゃでしょ？じゃあ、全部触れた人にしか出来ないよね。」

「・・・ああ。」

くじはすぐに魔理沙によって配られたから、その前に触ってないため。

あれ？魔理沙？

いや、やっぱり無理だよ。

先生に渡されてすぐに配っちゃったし、なにより一瞬ずつしか触れてないや。

細工は不可能かなあ。

「ん？」

・・・先生？

「ねえツナ、あのくじ作った人って誰だろう？」

「！！・・・まさか。」

急にツナの顔色が変わった。

なんだろう。

あ、そうだ。

「ツナ！ツナの頭も火事になってるよ、そっいえば！」

「・・・これは火事じゃない。」

燃えてるように見えるよ？  
ほらほら、おでこの所！

「やってくれたわね・・・西行寺幽々子！」

寮のちょうど真上に彼女　八雲紫はふよふよと浮かんでいた。  
それはそれは悔しそうな表情を浮かべて。

「うかつだった。」

金髪の「どこかで見た事あるんじゃない？」というような顔の男も、  
悔しそうにしている。

うん、やっぱり最近見たわ。コイツ？

「・・・坂田銀八。」

「え？」

まあ、そんなことはさておきまして。

そう言った紫の眼は、怒りに燃えていた。

横に同じ様に浮かんでいるどこかで見たような顔のが悪寒を感じた  
ほど。

「あのくじを作ったのはあの男・・・教室で生徒に押し付けるまで  
誰にも触らせていないのよ！」

「・・・なんとということだ。」

配ったのは霧雨魔理沙だが、前述にもある通り彼女には不可能。主任教師のリボンに至っては一度も触れていない。となれば、可能性はただ一つ。

「やられた！銀髪天パのくせにいい！！！」  
「ひとまず落ち着け、たのむから！」

救いなのは、2・3年練が無事だったことだろうか。そちらは火事になっていない。  
だが今の風は運悪く、2・3年練に向かって吹いている。  
燃え移るのは時間の問題だろう。  
まあ、それはともかく。

「絶対許さない。生かして返すもんですか！！！」  
「わかったからいったん落ち着け、紫！」

手に持った扇子を真つ二つに折りそうな勢いで握りしめていて、正直恐ろしい。

「それに、まだあの男以外がやった可能性があるだろう！」  
「ぐうっ・・・！」

可能性。

それは、“坂田銀八”が“坂田銀時”ではなかった可能性。くじを作った“坂田銀八”が“坂田銀時”本人であったという確証はどこにも存在しない。

「とにかく！わたしはなんとしてもあの少女の封印をセーニョファミリーに解かせるわけにはいかない！たとえあいつらが今回の様な

邪魔をして来ても！！」

「ヤツラが解いてしまえば、私利私欲のために彼女を利用するだろうからな。」

彼女の頭脳の中には、恐ろしい内容のものも詰まっているはず。

もしもそれがセーニョファミリーにわたってしまえば大変なことになるってしまう。

彼の超直感がそう語った。

「でもね、彼女の封印を解くにはどうしてもとある大天使を引きずり下ろす必要があるのよ。」

「大天使？そんなヤツ、引きずり下ろすなど不可能だろう。」

急に二人の話が突拍子の無い方向へ飛んでしまったので、ここで少し補足をおこよう。

そもそも天使とはなんなのか。

天使とは、天界という所謂神の領域いわゆるだと言われている所に住んでいる神様の使い達のことである。

大天使はその天使たちの中でも特に強い力を持った者のことである。

「フフフツ、私の能力をお忘れかしら？ダーリン。」

「お前の能力は境界を・・・まさか。」

そのまさかである。

「人間界と天界の境界を一瞬だけうやむやにして、そこから侵入するわ。わたしのスキマを使えばそうさもなくてよ。」

この女、神様が怖くないのだろうか。

というかこの女に怖い物などあるのだろうか。

「恐ろしいことをいうな、お前は。それに、仮に行けたとしても大天使なんていっぱいいるし、そもそも神と話をつけるなど聞いた事もないぞ。」

普通はリアルで神様を拝むこともないだろう。  
銅像とか伝説なら世界各地に在るだろうが。

「・・・鹿目まどか。  
なに？」

さっきまで怒りに燃えていた紫の顔が、にやあつと歪んだ。  
これはこれで怖い。

「ダーリン、知らないわけじゃないでしょ？今の世界を構築した、  
現在の天界最高神。」

「そんなことは知っている。」

元は人間だったが、現在では最高神になった少女。  
もともと、彼女のことを知っているのはこの世界ではただひとり。  
彼女の人間だったころの親友・曉美ほむら、あけみ彼女のみ。  
ではなぜこの二人が鹿目まどかのことを知っているのか？

「とにかく、私は逝ってくるから・・・あとはよろしくね。」

「“いく”の字が違うぞ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
え、今からいくつもりか！？」

「今行かなくていつ行くの？」

そう言う彼女の足元に裂け目が出来た。  
やれやれと言う顔をした男を残し、紫は自らのスキマに姿を消した

のだった。

「さて、とにかく生徒を一人でも多く助けないといけないな。」

やっぱりこの男、どこかで見たことのある顔をしている。

（彼女にも協力を仰いでみるか。ちょうどアメリカから帰国したばかりのはずだ。）

目障りな金髪以外は。

（・・・それにしても、西行寺達はどうやって紫の結界の内部に侵入してきたんだ？）

そう思いつつ、彼は携帯電話を開きある番号に電話をかけた。

「とうとう始まったね、レン。」  
「そうだね、リン。」

双子の姉弟鏡音リン・レンが、燃え盛る寮を遠巻きに見つめていた。

「ルカさん・・・イタリアでクローム髑髏を捕まえたんだよね。」  
「そうね。もうそのころから始まっていたのかも。」

いや、もっと前から始まっていたのかもしれない。

「私（／＼）達が“創られた”ところから。」

所変わって、ここはどこかの家。

「・・・。」  
「・・・。」

二人の男が、玄関で無言で突っ立っていた。

ひとりはあるさまに怒った顔をして、もう一人はあらぬ方向を眺めている。

「・・・。」  
「・・・。」

いつまでこの睨めっこを続けるつもりなのだろうか。

どちらも全く動かない。

いや、明らかに怒っている男の人差し指は動いている。彼は腕を組んでいるだけなのだが、どうやらそれがクセになっているようだ。

「・・・。」  
「・・・。」

永遠にこれが続くかと思われたその時、玄関の扉が開いた。



「あ、お父さん！先に着いて　あれ？ししょー？」

入ってきたのは、少々小柄な女の子。  
ツナ達と同年代くらいだろうか。

「あ、おかえり。」

「“おかえり”ではないだろう！！」

今の今まで黙っていた二人の男が、ようやく口を開いた。

「何故私の家に貴様がいるのだ！成歩堂龍一なまふどうりゅういちッ！！！！」

怒られているにもかかわらず、成歩堂龍一と呼ばれたその男はしら  
つとしてこういった。

「いや、今月の家賃はらえなくて娘もろとも追い出されちゃった  
んだよ。」

「で、お父さんと私がアメリカに行ってる間に勝手に住んでたんだ  
ね……。」

「そんなこと私が知るか！今すぐ出て行けッ！！！」

と、成歩堂がそれを無視して語り始めた。

このおっさん大丈夫なんだろうか。

「最近不景気でバイトも満足に出来ないから娘の収入で暮らすしかない  
でしょ？必然的にお金持ってるお前の家に暮らすことになるわけ。  
」

「なるわけないだろう！バカか貴様は！」

娘の収入で暮らす親ってなんなんだ。

これが“ヒモ”ってやつか？

「あ、そうそう。娘の大事な商売道具に傷がついたらお前のせいだからな。」

「だから、なんで私の責任にされるのだ！貴様の責任だろうが！！」  
と、そのとき。

るるるるるる　　るるるるるる

携帯の着メロが鳴った。

それはなんとも独特な曲だった。

「あ、わたしのだ。・・・もしもし？」

持ち主は先程の少女。

彼女は少しごによごによ話したあと、こういった。

「お父さん！」

「な、なんだろうか。」

彼女の眼はきらきらと輝いている。

純粹なのか、何か楽しいことがあったのか。

「わたし、今からちょっと出かけてくる！しばらく帰らないかも。」  
「なにッ！」

なにやら重大な呼び出し電話だったようだ。

「あの金髪バカがどうしても今からじゃなきゃダメなんだって。」  
「う、うム・・・」

すると、いままで無表情だった成歩堂がニヤツとわらった。  
そして少女に向かってこういった。

「行っておいでよ。うちは何とかなると思うからね。」

「ほんとに!？」

「なんとかなるわけがなろう!! 犯罪だぞ、不法侵入はツ!!!」

彼の叫びも空しく、成歩堂はへらへらとしているだけで出て行く気はないらしい。

さすがに疲れたのかそれとももう無駄だと悟ったのか、彼もそれ以上は言わなかった。

「じゃあいつてきまーす!」

「いつてらっしゃーい。」

「貴様が言っな!!」

長い黒髪を揺らめかせながら、少女は騒がしい家を後にした。

### 標的32：坂田銀時（後書き）

フラン「読者のアジトはじまるよ!」

ツナ「早速質問から行きます。『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『橘紗理奈』さんからだよ。」

フラン「ありがとう!!」

ツナ「ええっと、『フランに質問するわ。 綱吉が他の女の子と付き合ったりしたらどうする?』・・・えっ?」

フラン「女の方を体液を全部飲みほしたうえで骨の髄までしゃぶりつくして殺す。（黒笑）」

ツナ（こ、こえええええ!!）

フラン「次の質問だよ!『紅葉or紅蓮』さんからです!」

ツナ「ありがとう!!」

フラン「二つきてるね。まず一つ目『生き残り、と書いてあるということは死人出てるのか?』。あれだけ燃えてたらひとりぐらい死んでるんじゃないの?」

ツナ「不吉なこと言わないで!きつとみんな生きてるよ!」

フラン「ツナが言うんならそうかな!じゃあ、次の質問!『そのクラス（1-A）の中で一番大人なのは?リードしてんのはいつもハ

ルヒだけど、あれは大人とは言えないからな。精神年齢低すぎ。だって！」

ツナ「大人なひと？そうだなあ・・・。」

フラン「黒神さんだよ、きつと!!」

ツナ「あー、大人ではないような気がするな・・・。エリンちゃんかな、一番大人なのは。」

フラン「そろそろおわりだね！」

ツナ「うん。じゃあ、せいの！」

フラン＆ツナ「ご感想＆ご質問お待ちしております!!」

フラン「次回もよろしくね！」

### 標的33：六道骸

「2年は全員無事だったか？」

「いえ、かなりの人数が行方不明ですね。なにせ火の回りが早かったですから。」

今現在、1年練と2年練を全焼した炎は鎮火している。  
しかし被害は甚大だった。

「油断して逃げ遅れたのか・・・。」

「・・・どこかで生きていると信じたいですね。これだけ広い学校ですから・・・。」

とにかくまずは全員を探し出さなくてはならない。  
でも、この暗い中で探し出すのは不可能に近かった。

「わかった。ありがとう、東風谷さん。」

「いいえ、理事長なんですからしっかりしてくださいね。」

とにもかくにも、今いる生徒だけでも一ヶ所に集めなくては、と彼は考えていた。

（紫の代わりにオレがすべて話さないといけないな。）

同日、イタリア・ローマ。

現在真昼間のここでも事件が起こっていた。

「……一応聞いておきましょう。どうでしたか。」

彼の名は六道骸。髪型がとても特徴的な、ボンゴレ霧の守護者である。

今、彼はいつになく真剣な顔をしてソファーに腰かけていた。しかしこの男、いつにもまして偉そうである。

異常に腹立つのはオレだけか。

……まあ、それはともかくとして。

「ええ。ぐちゃぐちゃで分かりにくかったですが……雲雀氏で間違いないですね。まさか、未来から呼び出されてまであんなものを見せられるとは思ってもありませんでしたが……。」

こちらの、今まさに部屋に入ってきたのはランボ。

れっきとしたボンゴレ雷の守護者である。

ただし彼は、特殊な機械でここ数日前から過去の世界にいる、未来の10年後のランボだ。

「いくらなんでも、たった8歳前後の子供にあんなものを見せるわけにはいきませんからね。」

「うむ。沢田が黙っておらんだろうな。」

骸に相槌を打ったのは、ボンゴレ晴の守護者である笹川了平。

いつもはもつと五月蠅いぐらいに明るいのだが、今は違っていた。

「若きボンゴレがいなかったら見せる気だったんですか！子供にあんなものを……！」

ランボの言い分もつともである。

鬼か、おまえら。

・・・また話がそれてしまった。とりあえず戻そう。

「山本武、獄寺隼人、風・・・そして雲雀恭弥も、ですか。」

「やれやれ。完全にボンゴレに話すタイミングを逃してますね。」

そういう問題ではない。

「極限にどうにかする必要があるな。」

クロームが消息を絶ったのが1週間前。

それから相次いで、ボンゴレの幹部であるツナの守護者が狙われたのだ。

「やはり、クロームろくろが行方不明になった時点で沢田に連絡を取るべきだったのだ！」

「“ろくろ”じゃなくて“髑髏”です、笹川氏。たしかにそうですね・・・。若きボンゴレに伝えるべきだったのかもしれませんが。」

了平がそう発言した。

ランボも訂正しつつ肯定したが、今更後の祭りであるわけで。

「では伺いましょう、笹川了平にランボ。」

骸の鋭い目が了平とランボをしつかりとらえた。

だが、慣れているのか了平もランボも全くひるまない。

「あなたたちは、クロームがいなくなったことを沢田綱吉にどういう風に報告するつもりだったんですか？」



「う．．．む。」

「骸氏．．．。」

よく思い出してほしい。

クローム髑髏は、いつ行方不明になったのか。

最後に彼女に会ったのは誰だったか。

「呟　クロームが消息を絶ったのは、沢田綱吉の居候を保護していた道中です。もちろん、あのとき居候だけを連れて帰ってきたボクにも大きな非があります。ですが．．．」

あの時、骸がクロームを引きとめていれば。

責任は六道骸にある。そう報告してもおそらく．．．

「おそらく．．．いえ、必ず自分を責めるでしょう。そういう男だ、沢田綱吉は。」

「．．．うむ。」

ここにいる全員が、それを承知していた。

「クロームが消息不明になっただけならば、ボクも報告したでしょう。彼はそれほど軟<sup>やわ</sup>ではない。」

「そうですね。」

そう、それだけならば。

「クロームを搜索するために万が一のことを考え、僕たちはヴァリアーと門外顧問組織<sup>チエデフ</sup>を動かししました。沢田家光の了承を得て。」

「しかし、クロームさんは見つからず今に至ってますよ．．．残念ですが。」

相手がセーニョファミリーかもしれないと言う疑念からだった。  
クロームの捜査をしつつ、ヤツラの足取りをつかもうとしたのだ。

「・・・いまだに1人も戻ってきていないがな。」

あのザンザスですら未だに行方不明なのである。

彼が行方不明になって、すでに6日が経っていた。

「正しくは“動ける姿で”ですけどね。」

「・・・まったくもってその通りです。肉体だけならば 何人か  
帰ってきましたから。」

なんとも無残な姿で。

とはいえ、見つかったのが不思議なものもあったという。

「自分の連れを迎えに来て行方不明になった人間を探している人間  
までやられたなんて・・・彼が聞いたらどう思うでしょうね。それ  
も、二度と起き上らない状態で帰ってきたともなれば・・・。」

「・・・。」

「あの時の繰り返しだろうな。中3の夏の、な。」

“あの時”とはなんなのか。

彼らは、それ以上このことについて語ろうとはしなかった。

「とにかくここで話していても何も始まりません。行きましようか。」

「

「いよいよオレ達も、ですか。やれやれ・・・。」

「極限に何とかしなければな。」

彼らはそれぞれの右手の中指に指輪をはめた。  
ボンゴレリングを、確かにはめた。

「クフフフフフフフ。それでは、反撃と行きましょうか。」

「勝てる自信はないがな!!」

「ないんですか!?!ちよつと!」

ランボの抗議の声が、イタリアの空に空しく響いた。

場所は戻りまして、木魂学園。

「ねえ、ツナ!ツナってば!」

さっきからツナの様子がおかしかった。

ツナの首にかかっている指輪が不自然に輝いた瞬間から!

「.....」

「ツナ、はやくみんなの所に・・・」

突然、ツナが動いた。

今まで身じろぎ一つしなかったのに、急にだよ?  
ビックリするよね!

「ツナ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

そっか。

じゃあ、私はツナについて行くよ！

私、ツナに救われた時に決めたんだ。

これから戦うときは、ツナのために戦うんだって。

「1 A・・・今現在ここにいるのは、私 黒神めだかを含めた

15人だ、理事長殿。」

「半数以上が消息不明ということになるな。」

今現在ここにいる人で1 - Aなのは、

黒神めだか

桂木弥子

アレン・ウォーカー

八神はやて

赤夜萌香

涼宮ハルヒ

高町なのは

泉こなた

火ノ宮満

神楽

武藤遊戯

エリン

人吉善吉

黒崎一護

江迎怒江

これだけしかいなかった。

「・・・仕方がない。ここにいるだけでもオレの話を聞いて」

「こんばんは〜！」

紫の残っていたスキマから、一人の女の子が元気に現れた。

そのスキマは、女の子がでけると同時に閉まって消えてしまった。

「来たか。」

「お久しぶりですね！」

その少女は、先程騒がしい家を飛びだしてきていた少女だ。

真っ黒な膝までありそうな長い髪をポニーテールにして、木魂学園の制服を着ている。

クリーム色のブレザーに灰色のスカートだ。

「理事長！だれですか、その子？」

誰からともなく、そんな質問が聞こえてきた。

「彼女は今日帰国してきたばかりの帰国子女で、明日からこの学校に転入してくるはずだった子だ。」

「本当は入学式までに帰ってくるんだっただんですけど、お父さんの

仕事が急に長引いちゃって。」

今は5月の末。

転校してくるには不自然極まりない時期だが、理由を聞いて全員が納得した。

「あ、自己紹介が遅れました。あやささいみ彩咲麗美と申します。よろしく願います!」

礼儀正しく、彼女はぺこりとお辞儀した。  
と。

「ところで、校長先生は今どこに?」

「ああ・・・大天使・ルシフェルを引きずり下ろすんだとかなんとか言ってどこかへ行った。」

その場の全員が思った。

（大天使ツ!? ここの校長はメルヘンの世界にでも行ったのか!?!）  
と。

つまり簡潔に言うと、ここにいる誰ひとりとして実際に天使がいるなどと信じている人はいなかったのである。

「えーと・・・今から話すことは、春先に沢田綱吉とフランドール・スカーレットに話したことだ。」

「ツナとフランに!?!」

「どうということなんですか!?!」

その話題に一番食い付いたのはハルヒとアレンだった。  
もちろん、周りもおんなじことを考えてはいたわけだが。

「いや、ちよつと諸事情でな。校長先生が喋ったのだ。入学試験（？）のときに箱舟でな。」

「ボクの箱舟で、ですか！？知らなかった……。あの後すぐに出て行ったものだとばかり……。」

持ち主であるアレンも知らない事実であつたようだ。

理事長は話した。

なぜここで爆発が起こったのか。

何が目的でこんなことになっているのか。

そして……。どんな奴らがどんな目的で何を狙っているのか。

「つまり、我らが校長先生が戻ってくるまでにその少女の封印の外側の結界を解かなくてはならないのか。そうしなければここは狙われ続ける、と。」

「そういうことだ。呑み込みが早くて助かるぞ、黒神。」

理事長は巧みな話術でここにいる個性豊かな生徒全員を、いつのまにかやる気にさせていた。

さすが紫の“ダーリン”である。恐るべし。

「さて。そこで、だ。これから6グループに分かれて行動してもらおうと思う。とくに決めようとは思わないからなんとなくでいい。」

「な、なんとなく……！（テキトーだこいつ！）」

善吉だけでなく、全員がそう思った。

あ、こいつ見た目に反していいかげんだな、と。

「わたしは？」

「あー、彩咲もどつかのチームに入ればいいんじゃないか。」

（だからなんでこいつこんなにテキストなんだよ！アンタの学校と生徒がボロボロになってんだぞ！？）

もはや理事長が理解できない生徒たちであった。

まあ、最初から理解するつもりもないようだが・・・。

「あ。すまん違った。彩咲は、神楽と黒衣と一緒に坂田銀時の搜索に向かつてくれないか？」

「搜索・・・なるほど。だから私を呼び付けたんですね？」

「そついうことになるな。」

突然指名された2人はもちろん、周りの生徒もぼーんとしている。訳が分からない、という風に。

「つて、銀ちゃんを探すアルか！？」

「そついうことだね。」

さきほど指名された神楽と黒衣がそう言いながら歩いて来て、麗美の前で立ち止まった。

どうやら、一足先に現実に戻ってきたようだ。

まだ数人ほどの生徒が旅立っていてぼっかーんとしたままだが。

「麗美、だったアルか？わたしは神楽ネ。歌舞伎町の女王アル！！」

突然チャイナ娘が麗美に向かって元気にそう挨拶した。それにしても、なんとも規模の小さい女王様だ。



しかもココだけの話、あくまでも“自称”だ。

「黒<sup>くろい</sup>衣マトといいます！2-B所属だよ、よろしく！」

次にそう言ったのは、右と左で長さも量も違うツインテールをした子。

名前の通り黒色がとても似合いそうだ。

本人の性格はいたって明るいが。

「彩咲麗美です。二人ともよろしくお願いします」

麗美も、二人に向かって丁寧にお辞儀をした。

“彩咲麗美”・・・彼女は一体何者なのだろうか。

「ええっと、うずまきナルト・・・だっけ？」

「ぐっ・・・テメー・・・何が目的、なんだって、ばよ！」

黄色のとげとげ頭の少年が、まるで槍のように変化した右腕で胸を貫かれている。

貫いている本人は、品定めをするように少年を観察している。

「目的か！。強いて言うなら、アンタの中にある九尾の妖狐、かな？」

「な・・・くっ・・・ぐああああっ！！！」

貫いている少年が突然腕を勢いよくひっこ抜いた。

刀や剣で人なんかを刺した場合、出血が多いのは刺す時ではなく抜いたときである。

つまり、もうこの少年は助からない。

数分もすれば大量出血で死ぬだろう。

「さて、そろそろ本題ができてそうだね。アイ。」

地面にたたきつけられた少年　ナルトを無視して、彼は近くの女性に話しかけた。

どうやら“アイ”という名のようだ。

「封印が完全にとける前にに出た方がよいのでは、サイ。」

「うん。アイが言うんならそうするよ。とりあえずちよっとの間もつ結界をはってもらってよ。逃がすのは忍びないしさ。ロードに頼んでよ。」

「かしこまりました。」

ナルトをそのままに、サイとアイは慌てる様子もなくその場を後にした。

「もうすぐ僕の正体がかかるかもしれない。そう思うと嬉しくなつてついたりすぎちゃうんだよ。」

明るい笑顔でそう言い残して。

### 標的33：六道骸（後書き）

麗美「読者のアジト、はっじまつるよー!!」

ハルヒ「今回はツナの代わりにあたし達で質問に答えるわ。」

ツナ「オレいるよ!!」

麗美「初めまして！これからよろしくお願いしまーす。」

ハルヒ「まずは『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『史哉』くんからよ！」

麗美「ありがとうございます」

ハルヒ「ええつと『沢田お前、あれだけ女に囲まれて変な気を起こしたりしないのか？』……。」

麗美「？」

ツナ「お、起こさないよ!!……っていかへんな気ってなんだよ!!」

ハルヒ「まあ、起こしたらしばき倒すまでだけ。」

麗美「わー大変だねえ。」

ツナ「……次の質問です。」

麗美「『く』くでヴある『さんのキャラ『コルテス』くんからだよ!』」

ハルヒ「ありがとう！」

麗美「『ツナは学校の昼飯は何を食べてる？教えるや。』」

ツナ「命令形！？え、ええつと・・・普通にお弁当食べてるけど・・・。」

ハルヒ「そういえば・・・誰が作ってるのよ、そのお弁当？」

ツナ「えっ、居候の子が作ってくれてるんだけど・・・どうかした？」

ハルヒ「・・・・・・・・フツ。」

ツナ「は、ハルヒ？」

ハルヒ「フッフ、フフ・・・フッフッフ。」

ツナ「な、なんか怖えええ！！」

麗美「質問は以上！お次は私の自己紹介を少しやろうかと思ってたり。」

ハルヒ「じゃあ、私達からの質問に答えなさい。そっちの方が手っ取り早いわ。」

ツナ「余計に時間かかるんじゃない・・・。」

麗美「いいでしょう、受けて立つ。」

ツナ（この二人が意味もなく怖いんだけど！！）

ハルヒ「じゃあまず一つ目。瞳と髪の色は？」

麗美「見れば分かるでしょ。どっちも黒。」

ツナ「ええと、辛いのと甘いのだっちが好き？」

麗美「断然甘いの！私甘党だから！」

ハルヒ「好きなものは？」

麗美「真実。」

ツナ「嫌いなものは？」

麗美「意味のない悪質な嘘。あと、お酒と煙草と排気ガス。」

ハルヒ「それじゃ、得意な教科を答えなさい。」

麗美「うゝん・・・犯罪心理学と解剖学。」

ツナ「将来の夢は？」

麗美「今のところ、弁護士か警察かな。」

ハルヒ「あなたのチャームポイントは？」

麗美「ええつ。えゝつと・・・膝まである長い髪かなあ。いつもは

ポニーテールにしてるけど。」

ツナ「得意なことってある?」

麗美「ムジユンを見つけ出すこと!それとハツタリ!」

ツナ「ウソ嫌いなのにハツタリかますの!?」

ハルヒ「細かいことは気にしちゃいけないのが人間よ。」

麗美「じゃあ、そろそろ終わるよ。時間もないし。」

ツナ「う、うん!せゝのっ!」

ハルヒ&麗美&ツナ「感想&質問お待ちしてまゝす!」

麗美「今後、私のことはもっと詳しく分かると思うのでその時に・・・」

## 標的34：4重結界

次の日。

高等部校舎の一室で一夜を過ごした生徒たちは、2年生の東風谷早苗<sup>なえ</sup>と1年生の黒神めだかの指揮のもと、それぞれ行動を起こしていた。

あるものは寮の復旧に取り掛かっていたり、行方不明者の搜索をしていたり。

「・・・で、結局“幻想神殿”ってなんなのよ。」

「うーん。リランも聞いたことない？」

「ガルウ。」

今私とハルヒちゃんとエリンちゃんは幻想神殿と言う場所に向かっている。

リランくんの背中に乗せてもらってるから大分早く着きそう。

理事長と彩咲さんって子が言うには、そこに今回の事件の元凶を守っている人がいるんだとか。

一体どんな人に会えるんだろう？

「萌香！ばやばやしない！」

「あ、う、うん。」

たった三人　と一匹で大丈夫かな。

ちなみに、リランくんは王獣<sup>おうじゆう</sup>って言う生物でエリンちゃんの言うことしか聞かない。

学校で飼育されてて、エリンちゃんが毎日面倒を見てるからかなあ。

あ、そうだ。ええつと・・・王獣っていうのはこの世界の生態系の頂点。

容姿は頭が狼で首から下が鷲。それがとてつもなく巨大化した感じ・・・で伝わるかな。

「あ、あそこじゃない？地図だとこの辺だから・・・まちがいないわ。」

「リラン！あの建物の近くに降りられる？」

その建物はまさに神殿！って感じで、見渡す限り木ばかりの森の中にぽつんとたっていた。  
パルテノン神殿の完成バージョンみたいな感じでとってもきれい。  
私が神殿に見とれてる間に、リランくんはビツシリと生えた木の間をうまくすりぬけてゆつくりと地面に着地した。

「ありがとう、リラン。」

「グアウツ！！」

なんだかエリンちゃんとリランくんって親子みたいだね。  
そう見えない？

「いかにも怪しい神殿だけど、どこから入るのかしら？」

と、一足先に地面に降り立ったハルヒちゃんが周りをきよろきよろと見回した。

確かに入り口は見当たらない。

もしかしたら、どこかに隠し扉なんかがあるんじゃない・・・

「あら、こんな所に扉があるわ。鍵もかかってないしここからは入れるんじゃない？」



ハルヒちゃんが見つけた扉は、壁と同化しているものすごく分かりにくい微妙な扉だった。  
この先に誰がいるのかな。

「・・・あけるわよ。」

私達の返事を待たずに、ハルヒちゃんがバンツと扉を勢いよく開け放った。

「ここが銀ちゃんの机ネ。」

「うわ・・・」

「漫画と大人の本ばかり・・・」

子供が見てはいけない雑誌が辺り一面に散乱している。  
正直、読むなどは言わないからせめて片付けておいてほしかった。

「さて。早速調査開始！」

腕がなるよね〜！

まずは何から調べたもんかな。

「調査つてなにをするアルか。」

神楽ちゃんが質問してきた。  
そっか、素人だもんねえ。

「まずは・・・とにかく情報収集しないと。徹底的にこの机を調べよ。」

「坂田先生がくじを作った証拠と、失踪を裏付ける証拠を見つければいいんだよね？」

「いやいやいやいや！」

作った証拠裏付けちゃったら、坂田先生が犯人になっちゃうよ！  
信じてあげようよ、先生を。」

「と、とりあえず、私が調べ上げた坂田銀時の情報を読むよ。」

「おっけー！」

「わかったアル！」

いつ私が調べ上げたのか、疑問に思わないんだろうか。

・・・それはそれで都合がいいけど。

私は手元のお手頃サイズの機械をピコピコといじりながらそう思った。

しばらくして、探していたページが姿を現した。

「ええつと、【坂田銀時】。歌舞伎町にある何でも屋　「万事屋<sup>ばんじやう</sup>銀ちゃん」を経営しているやる気のないオーナー。また、「坂田銀八」という名で木魂学園の現国の教師（仮）もしている。教師（仮）は、万事屋があまり儲からないので、知人のツテを頼ってやらせてもらっている。甘いものと週刊少年ジャンプをこよなく愛す糖尿病予備軍。攘夷戦争の経験アリ。そのころは“白夜叉”と呼ばれていた。」

「すごいアル！何処で調べて来たアルか！？」

「すっごーい！！！」

私のツテを使えば一発で調べられるよ、この程度。

さてさて。このデータとこの机の上にあるもののムジュン探ししてみようかな。

どこかにヒントがあるハズなんだから！

「きれいな神殿だね。」

「まあ・・・そうね。」

ハルヒちゃん、こういうの興味ないのかな。  
なぜか不機嫌そうにあたりを見回している。

「とつとと出て来なさい！！」

ハルヒちゃん！？

どうしたの、なにかあるの？

・・・そういえば、誰かいるはずなのにここには誰もいないよね。

「他に部屋も見つからないのよ、ここに誰かいるはずでしょ？」

「あつ、そうか。」

でも、ここにはだれも・・・

「よつこそ、私の宮殿へ。」

突然後ろから声が聞こえた。

私達は声のする方へ視線を移した。

すると、そこにいたのは……

「紫校長！？」

「ちがうわよ！」

速攻で否定されちゃった。

おかしいなあ。

服装はともかく、容姿は紫校長そっくりに見えるんだけど……？

「ところであんたたち、ここに何しに來たの？」

「これを、うちの理事長から預かってきたんです。」

エリンちゃんが、ポケットから一枚の紙を取り出して女の子の人に渡した。

この紙の中身は読んでないから分からないけど、理事長から渡すよ  
うにってたのまれたもの。

何か大事なことが書いてるのは確かなんだけどね。

[illegible]

「あ、あの？」

紙に目を通した瞬間、女の人の目付きが変わった。そして。

[illegible]

「!!」

突然狂ったように笑い始めた。

「ちょっと、なんなのよ!」

「ははっははは・・・ふう、いいえなんでもないわ。」

ええええ!

何も無いのに笑ってたの!?

「しいていえば・・・」

「いえば?」

嫌な予感がする。

「無謀な子供が目の前にいる事について笑っちゃったわ。」

「こ、子供!?!」

・・・そんな。

私達そこまで子供っぽい?

「さて、そろそろあなた達の罪を裁く時間よ。」

「罪・・・?」

「わたしたち、なにもしてません!」

急に、彼女の目の色が変わった。

いうなれば獲物を捕食するトラだね。

とにかく、彼女の眼がギラギラと光って見えた気がした。

「ここに足を踏み入れていることがすでに罪なの。」

「えっ。」

もっと早く言ってくれないと分からないよ！  
看板もなにもなかったし……。

「私の名はマエリベリー・ハーン。境界を見る事が出来る程度のただの人間よ。」

彼女　メリーさんはそう言った。

まるで、紫校長の様な含み笑いを浮かべながら。

「キョウカイ？」

「そう。もつとも、それは昔の話。今の私の能力は……」

「な、なに！？」

突然私達が今まで見ていた景色が一変して何も無い真っ白の世界に変わった。

「境界を操る程度の能力。」

メリーさんの金色の髪がぼわぁっと広がり、目もカッと見開かれた。  
正直、紫校長より怖い。

「いいじゃない、楽しくなってきたわ。」

「リラン行くよ！」

「ガウッ！」

ハルヒちゃんとエリンちゃんが臨戦態勢をとった。  
でも、私は一歩後ろでそれを眺めているだけだった。  
だって、今の私は何もできない。

「萌香、動くんじゃないわよ！」

「う、うん。頑張って！」

ロザリオの封印が外れないんだもの。

誰か外せる人がいればいいんだけど・・・。

「結界ですか？」

「ああ。彼女にかかっているであろう4重結界は、おそらくもう破れているだろうな。」

僕アレン・ウォーカーは、今理事長と話している。

聞きたいことがあったから個人的に聞きに来ただけ。

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

理事長はすこし考える素振りを見せた後、こういった。

「あの少女を解放するにあたって4重結界は大した問題にはならない。だがそれを解いたときに6つの別の封印が解ける仕組みになっている、その6つのそれぞれの場所にいるヤツラを全員降参させないと結界が解けないんだ。」

「なるほどー。」

どこのRPG?と思っただのは、僕だけじゃないはず。

「・・・見つけた。」

「何を？」

マトが搜索の手を止め、訝<sup>いぶか</sup>しげに私を見つめてきた。  
机の上の書類をかためていた神楽ちゃんもこちらを向いた。

「見つけたの。くじを作った“坂田銀八”が“坂田銀時ではない”  
という決定的証拠を！」

間違いない。

神楽ちゃん達の話と資料・・・そしてこの証拠品が一本の線につながった！

「あとは、彼の足取りを見つけるだけ。」

「ネウロと推理勝負させてみたい雰囲気アルな。」

魔界の化け物と一緒にしないでもらいたいんだけど。  
私はれっきとした人間だ。

それより、はやく他の場所も調べたいっ！！！！

「ねー、分かったことを教えてよー。」

「そうアル！隠し事はしない約束ネ。」

そんな約束したかなあ。

キオクニゴザイマセンネ、マツタクモツテ。



「はやくく！トロトロしてたら私、寝てしまっアルヨ？」

「こんなところで寝たら風邪引くよ！」

そうかな。

神楽ちゃん風邪引かなそうだけどね、うん。

### 標的34：4重結界（後書き）

麗美「読者のアジト、始まるよー！」

ツナ「早速質問が来てるよ。『闇夜の黒鳥』さんのキャラの『紗理奈』さんからだよ。」

麗美「どうもです」

ツナ「えーつと『紫さんの“ダーリン”さん。紫さんの何処が好きですか？』。」

麗美「リージーちゃん？」

理事長「オレに質問か、めずらしいな。」

麗美「奥さんの好きな所は？」

理事長「すべてに決まっているだろう。非のうちどころなんかないじゃないか。」

ツナ「・・・ありがとうございます。」

麗美「あ、もう帰っていいですよ。」

理事長「これだけか！？あ、ちょ、まっ」

ブツッ

麗美「続いての質問は『紅葉or紅蓮』さんからです。」

ツナ「ありがとう!」

麗美「『ミクがよく歌う歌（勿論オリジナルのもの）は何だ?あと、1-Aのクラスメイトはミクのどの歌が好きだ?』。」

ツナ「ミクがよく歌ってるのは“ぽっぴっぽー”かな。でも、みんなに人気なのは“ロレンツマ”かな。朝学校に行ったら、必ず誰かがこれ歌いながら物をぶんまわしてるんだよ。一番シユールだったのは、ハルヒが歌ってる横でリョーマ君が大根振り回してたことかなあ。」

麗美「へえー。私は“ロミオとシンデレラ”の方が好きだけどな、無難に。」

ツナ「どんな難があるんだよ……。」

麗美「はい、じゃあ最後の質問!『ごくでヴある』さんのキャラ『ねこ』くんからです。」

ツナ「ありがとう!」

麗美「ん〜?『ヴァリアー』はもうツナの下僕なの?（黒笑）。」

骸「平たく言えばそうですね。」

ツナ「ちょ、骸!?何処から出てきたんだよ!あと誤解を生むようなこのいうなよ!下僕じゃないよ!?!」

骸「ああ、大丈夫です。少なくとも僕にはそうにしか見えていません。」

ツナ「爽やかに言っな！そしてお前は眼科に行って来い！」

麗美「はいはい、ストップ。終わるよ。」

ツナ「せーの！」

麗美&ツナ「ご感想&ご質問おまちしてまーす！！」

骸「クフフ、次回もよろしくお願いしますね。」

標的35：マエリベリー・ハーンVS涼宮ハルヒ（前書き）

こんにちは！

戦闘シーンが書けない蜜柑です。（えっ

6月テストのせいでご無沙汰しておりました。

次回ぐらいから本気で戦ってくれたら・・・いいなあ・・・

### 標的35：マエリベリー・ハーンVS涼宮ハルヒ

「涼宮ハルヒよ。冥土の土産に持っていくといいわ。」

「私はエリンです！こっちが、リラン。」

「グルウウウ・・・」

「あ、赤夜萌香です！」

・・・って！

冒頭でいきなり名のられても読者のみなさん訳分かんないよ、きつと。

しかもすでに知ってるし。

「・・・冥土の土産？愚問だわ、全くのお門違い。」

日本が間違ってる気がするのは私だけでしょうか。

あれ？合ってるのかな。

よく分かんないや。

「さあ、そちらからどうぞ？」

この人・・・メリーさんだっけ。

完全に私達をナメきってるよ。

そもそも、境界を操る能力でどうやって戦闘をするつもりなの？

「言われなくてもいくわ、私のかわいいゴーレムちゃんがね!」

ハルヒちゃんの背後に突如姿を現したのは、なんともいえない真っ黒い巨人だった。

いや、巨人と言うには少し不平があるかもしれない。

確かに見た限りでは巨人に見えなくてもないけど………なんというか。

「ふん、相手にならないわ。」

メリーさんが左手をすつと前にかざすと、彼女に襲いかかろうとしていた数体のゴーレムが跡形もなく消滅してしまった。  
一体何がどうなっているのやら。

「消えた!?!」

「あのね、境界を操るってことがどういう意味か分かってるの?」

ハルヒちゃんもエリンちゃんも黙ってしまった。

わかってなかったんだね、うん。

「境界がなくなれば、アンタ達もただの肉塊ってこと。……おわかり?」

わかりません。

あんまり理解できない自分がいます。

そついう説明じゃなくてもっと分かりやすいのをお願いします。

「なるほど、そついうことだったのね。」

……すごいね。

それだけの説明でわかったんだね。  
っていうか、絶対最初から分かってたよね？分かってないふりした  
だけだよ。

「でもね、わたしのゴーレムちゃんもたくさんいるのよ。うんざり  
するほどね！」

ハルヒちゃんの背後から、おびただしい数のゴーレムが姿を現した。  
手品みたいだって思ったことは秘密。

「悪あがきはよしなさい？いくら増やそうが私には勝てないわよ。」

さっきとおんなじように、左手をかざされたゴーレムから順番に消  
滅していく。

そのとき私の中で何かが引つ掛かった。

なにかがおかしい。

「まだまだゴーレムちゃんはいるのよ！」  
「リラン……」

迫力に欠ける戦いを繰り広げているハルヒちゃん達のナナメ後ろで  
は、リラン君にのったエリンちゃんがいた。

「あ、エリンちゃん待って！」  
「萌香ちゃん？」

私に考えがあるんだ。  
もしかしたらあの人……

「……わかった。やってみる！」



「ありがとうエリンちゃん！」

私の予想が正しければ・・・。

この人の弱点を突くことは容易のハズ。

紫校長と容姿・能力がおんなじでも、決定的に違う部分を見つけたから。

「どういうことなの？本物の坂田先生がくじを作った筈がない？」

学校では、麗美とマトと神楽が銀さん探しに精を出していた。  
もともと、神楽とマトはあまり役に立っている感じが見受けられな  
いが。

「じゃあ、今机の上にある“週刊少年ジャンプ”を番号順に並べて  
みて。」

「これアルか。」

麗美の指さす先には、散乱した大量の雑誌が転がっている。

しかもすべてWJだ。  
ウィークリージャンプ

一見すると思春期の子供の机に見えるものばかりが辺り一面に散ら  
かっている。

「並べれば、自然と真実が顔を出す。真実って案外足元にあるもん  
なんだよ。」

「あはははは！いつまで続けるつもり？」  
「まだよ！まだまだ付き合ってもらわ！」

この迫力に欠けた戦いを永遠に続けるつもりはハルヒちゃんにも私にも、ない。

ただ・・・今はタイミングをみる。

（失敗は許されない。一か八かの大勝負！！）

もしタイミングを誤ったら、こっちがやられちゃうかもしれない。  
だって相手は境界を操れるんだもん。

（私の予想が正しければ・・・）

「今よエリンちゃん、思いっきりいきなさい！」

「リランッ！」

「ギャウアッ！！！」

ハルヒちゃんの号令で、エリンちゃんを乗せたリラン君がメリーさんに向かって突っ込んでいく。

まるで流星のようにまっすぐにすごいスピードで。

「な、何のつもり！？」

「はああああっ！！！！！」

「グワアアアアアッ！！！！！！！」

（彼女の能力は左手を奪えば機能しなくなる！）

バキィッ！！

彼女の横をリランが通り過ぎたその刹那。

啞然としたままの彼女の左腕はその姿を消していた。

「わ・・・わたしの・・・うで・・・わたしの・・・」  
「やったのかしら・・・？」

左肩から血を垂らしながら、彼女はついさっきまで自分の左腕があった場所を見つめていた。

そして、そのままその場に崩れ落ちた。

「あの人のすべては左手にあったのね。」

そう。

彼女は先程から左手だけで能力を使っていた。

もしもそんなすごい能力が使えるのなら、真面目に戦ったりせずに最初から私達を肉塊にしまえば済む話なのだ。

「やったみたいだね。」

でも彼女はそれをしなかった。

おそらく“しなかった”のではなく“できなかった”んだろうと思



「あはハハはッ！どうせ私の能力は妹に劣るわ！不完全ですもの！あはハはハハッ！！！」

狂ったように笑いだした片腕の女性が突如そう口走った。

“妹に劣る”と。

「妹ですって？」

すぐにハルヒちゃんが聞き返した。

興味もあつたけど、たった一人私達に“妹”の心当たりがあつたから。

「ウフふふふ・・・聞きたいのね？イイわ、教えてアゲル。」

まるで壊れたロボットのようにな、彼女はカタコトと語り始めた。

「私にハ双子の妹が、イルの。一卵性双生児・・・ソウいう種類の双子だつたワ。」

「それは何年前の話？」

「ソウねエ・・・忘れたワ。ズイブン長い間ここ二いたモノ。」

さすがのハルヒちゃんもセリフが読みにくいことは突っ込まなかった。

それはともかく、彼女は淡々と続ける。

「話ヲ戻すけど、ソナナ私達には決定的な違いがあつた。」

「違いですか。」

エリンちゃんが不思議そうにそういった。

だって、一卵性双生児なら決定的な違いなんてあるはずないから。

見た目も好みも性格もおんなじなのが普通なもの。  
成長すれば多少変わるだろうけどね。

「そう。それは、姉デある私ガタダノ人間で妹ガ純粹な妖怪ダツタこと。」

「よ、妖怪!？」

「母親が妖怪デ、父親が半妖ダツタの。でも、妖力は全部妹二取らしてイタ。アノ女に・・・!」

彼女たちの父親と母親は、二人が生まれてすぐに不幸な事故に巻き込まれ死んだのだと言う。

後に残ったのは、二人の結婚を最後まで反対し人間が大嫌いな母方の祖母。

そのせいで彼女は家から一步も出してもらえず、拳句の果てには家の地下に幽閉されていた。

100年以上もの間幽閉されていたのにもかかわらず、彼女が生きて　しかも大学生程度に見える　のは、地下から噴き出していた瘴氣に当てられていたからだって。

「ワタシガ再び外の世界ヲ拝んだ時、あの女八家からイナクなつてイタ。“八雲紫”と名乗つて人里デ男を作つてノウノウと暮らしてイタノヨ!」

「やくも、ゆかり・・・!」

「うちの校長ね。」

彼女の怒りがひしひしと伝わってきた。  
それはもう痛いぐらいに。

「ワタシガ苦しんでいた時!!実ノ妹であるハズあの女八私を助けようともシナカッタ!!それどころか、ワタシヲ覚えテモイナカッ

「タのよ！！！」

「・・・そんな・・・。」

実の妹に裏切られた悔しさと悲しみは、時間と言う流れの中で憎悪に変わってしまったんだと思う。

どうしてこんなことが起こったんだろう。

「復讐　私にはソレシカなかった。」

「・・・。」

それから彼女が語ったことは、恐ろしいことだった。

いかに彼女の憎悪の炎が激しいか思い知らされた。

「手始めニワタシハ、月一族を抹殺したわ。」  
つきいちぞく

「ツキイチゾク？」

月一族とは、紫と特別な関係にあった12の一族の総称らしい。

睦月・如月・弥生・卯月・皐月・水無月・文月・葉月・長月・神無月・霜月・師走家から成り立っている。

なにかを閉じ込めるために紫校長は彼らを生みだしたらしいのだけど、私は初耳だった。

「エエ。ヤツラしぶとくつて・・・。皐月・水無月・文月・師走、そのなかでもコノ4家は特にしぶとかったワ。水無月と文月は、後から考えてミレバ、しぶとくて当然ヨネ。」

「・・・なぜ？」

「簡単なコト。水無月家が月一族の本家で、文月家が一番の力を持った分家ダッタんだもの。」

最後にようやく最後の月一族を殺したのが、つい17年前のことら

しい。

・・・あれ？

でもそれってムジユンしてない？

「ちょ、ちょっと待ってください！」

「ナニ？」

「１７年前って・・・メリーさん封印されてたんじゃないんですか！？」

つまり、彼女に犯行は不可能のハズ。

「ウフフ。アソコノ結界は、アンタたちガ思ってるよりズツト頻繁に解かれテルワ。」

「そ、そうなんですか・・・。」

１７年前にもその封印が解けて、彼女は自由に動けた期間があったらしい。

それにしても。

「どうしてあなたは封印の手助けを？」

どう考えたって、メリーさんに得なことではない。

むしろ不利なことだらけだ。

「永遠の肉体、永遠の命。タダの人間である私の復讐二八それが必要不可欠だった。タダそれだけ。」

それほどまでに、彼女は復讐に執着していたということになる。あの１００年の間、ベリーさんの身に何があったんだろう。



「それで、水無月一族も滅ぼしたわけ？」  
「エエ。」

大きく脱線してしまった私達の話の軌道修正を、なめらかにハルヒちゃんがやってのけた。  
そういえばこんな話だったつけ。

「ふみづきゆうさく文月優作と水無月花蓮みなづきかれん！！そしてその一人娘・水無月悠里みなづきゆうり！！！  
それが、最後の月一族だッた。」

「どうして名前を？」

「フン。たまたま覚えてイタだけ。厄介な一人娘王葬れたシ・・・  
機嫌がヨカッタんでシヨウね。メッタ刺しにシタあの時の快感ハ今でも覚えテルもの。」

なんてことを・・・。

罪のない人をどうしてそこまで！！

「ちよつとまった。“厄介な一人娘”ってどういうことかしら？」

ハルヒちゃん。

「・・・水無月家の女と文月家の男にハ、ある紋章ヲ半分つづ右手ノコウに刻んで生まれてクルと言う変わった特徴があるの。半分つづの紋章が合わさッたら　ドウナルかしら？」

「！ー！！」

ひとつに・・・あわせる！

半分づつが互いを補い合うから。

「ゴ名答。水無月悠里はカンペキな紋章をソノ身に刻んで生まれオ

チテきた。ダカラ殺したわ。親よりもサキニ。」

「なぜ、紋章が完成してはならないのかしら？」

その時彼女は、何も知らぬ幸せモノね、といって笑った。

笑ったというよりは、バカにしたように鼻を鳴らした・・・のほう  
が正しいと思う。

「六聖獣・第三聖獣である雷獣の紋章よ。月一族はそれを代々守つてきたの。」

「ら、雷獣!？」

一体どんな紋章なの!？  
そして雷獣ってなに？

「イカツチのような紋章よ。」

「・・・なんですって？」

ベリーさんが地面に描いた模様を見たハルヒちゃんの眼の色が、変わった。

今は驚愕の色に染まっている。

何がどうしたの!？

「それならあたし、みたわ。学校で・・・それも最近。」

「ソナ馬鹿な！！月一族は17年モ前に滅びた！！見れたはずがナイのよ！！！」

確かにメリーさんの言うとおり。

すでに滅びた一族の体にしか刻まれていない紋章をハルヒちゃんが  
見れたわけがない！

「モカちゃんとエリンちゃんも見ているはずよ。」

「ええっ？」

「そう・・・だっけ？」

後から思い返せば、確かに私達も見ていた。  
ただ覚えていなかっただけで。

「彩咲麗美！あの子の右手の甲に確かに刻まれてたわ。イカツチの  
紋章がね！！」

「並べたアルけど・・・」

「一冊足りないね。」

神楽とマトが並べたジャンプは、確かに一号だけぽっかりと足りな  
かった。

「これでいいの。一冊足りない。なぜだと思う?」

「・・・買わなかったからない、ってことだよな?」

買っていれば足りないはずはないので、必然的にそうなる。

普通ならば一冊かけていたぐらいでどうと言うことはないだろう。

「それはありえないアル! 銀ちゃんがジャンプを買わないはずないアル!」

そう、坂田銀時だからこそおかしいのだ。

授業をほったらかしてジャンプを買いに行くような男が一週間分買い忘れるだろうか?

仮に月曜日にすっかり忘れていたとしても、後日に急いで買いに向かうだろう。

「つまり、この欠けている1週間の坂田銀八は“坂田銀時のフリをしていた別人”ということになる。おわかり?」

「なんとか。」

誰かは分からないが、坂田銀時のふりをしている人がいたことになる。

そしてその人物がいた期間は・・・

「・・・4月4日～11日。ちょうどくじが作られた期間ね。」

「すごいアル麗美!」

しかし、ここでもう一つの問題が浮上してくる。

「12～19日。坂田先生に変わったことは?」

「何も無かったアルヨ。特別機嫌が悪いわけでもなかったアル。」  
それがおかしいのだ。

「それほどジャンプが好きで先生が、1週読み逃したって気づけばどうなる？当然、機嫌は悪くなるハズよね。」

「でも、そんなことなかったよ。」

むしろ機嫌はいいぐらいだった、と聞きこみをした全員の生徒がそう答えているのだ。

「あんなに機嫌がよさそうな銀ちゃんはずいぶんだったから、みんな覚えてるアル。あ、新入生の子は、こういう先生なんだ、って勘違いしてたみたいアルけど。」

「そうすると、銀八先生は先週号を読んでいたことになる。」

「でもここにはないし・・・銀八先生がジャンプ以外で浮かれるモノなんて心当たりもないよ。」

その一週間、彼のお気に入りのお天気キャスター・結野アナはインフルエンザでお休みだったという。  
ますますおかしい。

「読まれていたジャンプ・・・二セの銀八先生・・・つかれる銀八先生・・・」

頭の中はこんがらがるばかりであった。

ただひとり、右手にイカツチの紋章を刻んでいる少女以外は。

標的35：マエリベリー・ハーンVS涼宮ハルヒ（後書き）

ルイズ「あ、あんたたちのために、読者のアジト、始めるわけじゃないんだからね！」

こなた「ツンデレ？」

ルイズ「さつさと終わらせてやるんだから！」

こなた「まず最初の質問だよ。『闇夜の黒鳥』さんから。」

ルイズ「う、うれしくなんかいないんだからね！」

こなた「（これギャルゲー？）ええつとお『竜也』くんって子からだね。『ツナは自力で死ぬ気になれるのか？』。」

ルイズ「死ぬ気？ばつかじやないの？」

こなた「・・・え〜つと、なれるよ確か。」

ルイズ「なんのはなし？」

こなた（死ぬ気の炎も知らないで、ほんとに貴族なのかこの人。ま、まさか、ギャルゲーの世界から飛び出してきたヒロイン！？）

ルイズ「今失礼なこと考えたでしょ？」

こなた「き、気のせいさ！続いては『紅葉or紅蓮』さんとこのツナからだよ。サンキュ〜」

ルイズ「『その作品のアレン君のティムキャンピーは一体何処に…？』。そういえば、あれってクロス先生が連れてったま行方不明なんじゃ……。」

こなた「クロス先生と共にね。あ、ちなみに担当教科は世界史だよ。」

ルイズ「最後の質問よ。『ごくでヴある』さんのキャラ『黒夢』君からね。」

こなた「ありがとー！」

ルイズ「『坂田銀時や神楽などの刀や体術というみただけじゃわからないのは能力などに入るのか？』。」

こなた「ええつと、これは確か……。」

ルイズ「異常性に入るんじゃない？バカみたいな怪力とかアホみたいな肉体もってるし。」

こなた「そうだった気がする。」

ルイズ「もう終わり？帰るわよ。」

こなた「まーまー。そう焦らない焦らない。」

ルイズ「あんたがのんびりしすぎなの！」

こなた「せーのっ」



ルイズ&こなた「感想&質問お待ちしてます!!」

ルイズ「・・・って！肝心のツナがないじゃない！メインがないってどういうことなのよ！」

こなた「（かがみんみたいだな）いいんじゃない、たまにはこんな日も。」

### 標的36：RL12号事件

「ソナ馬鹿な！彩咲！？水無月の性を持たぬ女がどうして！」

この場にいる全員が混乱していた。  
ハルヒちゃんの一言で。

「今のご時世、名前ぐらい簡単に変えられるわ。問題はそこじゃなくて、どうして根絶やしにしたはずの一族に未裔らしき人物がいるのかって事よ。これはミステリーよ！」

何でそんなに楽しそうなのか、私にはそっちの方がミステリーなんだけど・・・。

「ううううううう・・・！！！」

って言うかそんなことよりメリーさんの様子が・・・。  
その、ものすごくおかしいよ・・・？

「おやおや。何やら楽しそうをしているじゃありませんか。」

突然、背後から誰か・・・そう、男の人の声がした。

「・・・ダレ？」

わたしたちが振り返ると、そこには独特な髪型をした不思議な雰囲気  
の男の人が立っていた。

パ、パイナツポー・・・？

じゃなくって！！

い、いつの間に？

「急に話に割り込んできてどういっつもり？」

「ひどいじゃないですか、せっかく真実を教えてあげようとしている  
人に向かってその言い方は。」

真実？

麗美ちゃんのこと知っているの？

「アンタ誰？」

「クフフ、ぼくですか。そうですねえ。」

しばらく考えた後、彼はこういった。

「薄汚れた、マフィアの関係者・・・とでも言っておきましょう。」  
「マフィアですって！？」

ハ、ハルヒちゃんの眼がらんと輝いてるんだけど・・・。  
ってマフィアって、あのマフィア！？

「ま、まさか、麻薬密売・・・とかしてるんですか？」

「おやおや、心外ですね。ぼくはそんなことしませんよ。」

よ、よかった。

でも、信用しちゃっていいのかな。

「アンタ、組織の一部なんでしょ？じゃあアンタが知らない所でしてるかもしれないわ。」

「！」

「確か二・・・考エられるワ。」

うーん。

考えられなくもないね。

「それはありえませんよ。」

「何でそう言い切れるのよ！」

恐ろしいぐらい爽やかに、その人は言い切った。

「下の人間が、そんな大きな事を幹部の人間に黙って実行できるわけじゃないじゃないですか。それに、うちのボスはそういうモノが大嫌いですから。」

「か、幹部！？」

えっ、このひとマフィアの幹部なの？

何でそんな怖い人がこんな所にいるの！？

「名を名乗りなさい！」

「これはこれは・・・怖い女性ですねえ。名前を聞くならばまず自分から名乗ったらどうです？ぼくはそこまでレディーファーストにこだわる人間ではないのでね。」

た、確かにそうですよね。

自分から名乗らなきゃですよね。

「涼宮ハルヒ。」

「マエリベリー・ハーンよ。」

「エリンです。こっちがリラン。」

「あ、赤夜萌香です。」

メリーさんも名乗ってるよ……。

なんか最近、自分の名前をよく言ってる気がするなあ。

「クフフ、いいでしょう。ぼくの名は六道骸ろくろくむくろです。」

六道さんですか。

変わった名前……ですね。

「そんなことヨリ、真実を知ってルって言ったワヨね。」

「ええ。うちのボスとぼくと……あとは彼女の父親しか知らないことです。今となつては、ですが。」

「今となつては？」

なんでマフィアがそんなこと知ってるのか。

どこのなんていうマフィアなのか。

……は怖いから聞かないでおこう。

「知らない方が幸せですよ。さて、彼女　彩咲麗美が何者か、でしたね。」

「さつさと教えなさい。」

ハルヒちゃん！！

相手マフィアの人だから！裏社会の人だから！  
刺激したら殺されちゃうよ！

「クフフフ、元気な女性ですね。」

「イイからサッサとイイナサイよ。」

うつうつ。

なんでみんなそう攻撃的なのかなあ……。  
もつと穏便に行こうよ。

「タダで教えるつもりはありません。」

「何が欲しいのよ。」

マフィアが欲しがるもの？

ええっと……。もしかして？

「ま、まさか命!？」

「あなた方はぼくをなんだと思ってるんですか。まあ……。ぼくなら殺さずに生け捕りにしてこき使います。能力者ですからね、あなたたちは。」

「なるほど……。その手があったわね。」

納得しないでハルヒちゃん！

それはそれでもものすごく嫌だよ！

「デ、何がノゾミなの。」

メリーさんが警戒しながらそう聞いた。  
これが普通だよ。

ハルヒちゃん警戒しなさすぎだよ！

「大したことではありません。涼宮ハルヒ、赤夜萌香。あなた達に

これを受け取ってもらいたいです。」

「なにこれ？」

渡されたのは、何か固い物が入っているらしい封筒。

ハルヒちゃんが青色で私が紫色。

「うちのボスからです。何も言わずに受けとってくれば問題ありません。」

「・・・これだけ？これで話してくれるって言うの？」

「もちろんですよ。」

とりあえず受け取ったけど、この人ますます怪しい。  
でもちよつと怖いから私は何も言わないでおいた。

「さてどこから話したものでしょうか。」

「一番最初カラ。」

「クフフ・・・まあいいでしょう。」

一瞬ちらつとどこかを見た後、六道さんは語り始めた。

あれは17年前の話です。

もっとも、ぼくは当時まだ赤ん坊ですから実際に見ていたわけでは  
ありませんが。

みなさんは“R L 12号事件”をご存じですか？おそらく知らないでしょうね。

当時のメディアは“水無月一族惨殺事件”と銘打って報道していました。

どんな事件か？簡単なことです。

文月優作と水無月花蓮の夫婦、そしてその娘で当時5歳だった水無月悠里が惨殺死体で見つかったのです。それはそれはひどい有様だったそうですよ。どれが誰の体のパーツか分からないほどにバラバラのぐちゃぐちゃにされていたそうですから。

いくらばくでもあそこまではしませんね。

以上のことから、彼らに強い恨みを持った人の犯行であると断定されました。

そしてしばらくのち、犯人は逮捕されました。

犯人の名は博麗美乃利<sup>はくれいみのり</sup>。当時博麗神社の巫女をしていた女でした。彼女は友人に協力したただだと、そう証言したそうです。

あの子のためにわたしは動いた。・・・他には何もない。ただそれだけだ

そのの一点張りで、とうとう彼女は口を割らなかったそうですよ。

“あの子”が誰なのかを。

ですが、すべての証拠が彼女が 博麗美乃利が犯人だと語っていました。

裁判の結果は誰の目からも明らかでした。

誰もが予想した通り、彼女は有罪判決を受けました。

そして、事件発生から2年後・・・彼女は絞首刑にかけられてこの世を去ったのです。

「私が死んでも、あの子の復讐の炎が消えることはないでしょう。」



そう言い残して。

これが、世間に報道されたR L 12号事件です。  
ここからが本題なのですが、これはこの事件のすべてではありません。  
ん。

水無月花蓮　彼女は月一族最後の希望をこの世に残していました。  
そう、彼女は死の少し前の日にこっそりと赤ん坊を産み落としてい  
たんです。

もしかすると水無月花蓮はこんなことが起こるのをなんとなくわか  
っていたのかもしれませんが。

赤ん坊に与えられた名は水無月優香<sup>みなつきゆうか</sup>。

生まれた当時、彼女に紋章はありませんでした。

しかし姉である悠里が死んだので、彼女に受け継がれたんです。

水無月家の紋章は、代々長女に受け継がれます。

長女が子孫を残す前に死んだときには次女に受け継がれる・・・そ  
ういった仕組みです。

とても不思議な話ですよ。

話を戻しますが、いくら希望が残っていたとはいえただの赤ん坊。  
このままでは天涯孤独の身である彼女は死んでしまう。

頼りがいがないのですから、当然ですね。

だからと言ってヘタにこれを公表すれば彼女は狙われる。博麗美乃  
利のいう“あの子”に。

その時彼女の親代りを申し出た男がいました。

当時R L 12号事件の担当検事だったそうです。

名を御剣怜侍<sup>みつるぎれいじ</sup>。当時から天才だともてはやされていたそうですね。

それはどうでもいいです。

赤ん坊だった水無月優香との間に何があったのかはぼくも知りません。

彼は彼女の名前、経歴、出生など彼女に関するデータをすべて変えました。

警察もそれを黙認しました。

なぜか？クフフ・・・非常に簡単な話です。

月一族は警察と密接につながっていきましてね、彼女が見つかってしまつのは警察にとっても都合が悪いのですよ。

御剣怜侍は

「今後彼女に何か起こった場合私がすべての責任を取る。私の命にかえてもだ。」

と、そういったそうです。

ますます気になりませんか？御剣怜侍と水無月優香に何があったのか。

クフフフ。

さて、ここまで話してしまえば・・・あとはもうわかりですね？

「水無月優香が、彩咲麗美なのね。」

「クフフ・・・」名答です。本名は御剣麗美だったはずですよ。」

えっ、違う苗字をなのってるの？  
どうしてそんなことを？

「僕が知っているのはここまでです。」

ふたたび六道さんは、どこかをちらつとみた。  
わたしも彼が見た方向を見てみたけどそこには何にもなかった。

「時間ですね。それでは僕はこのへんで。C i a o , A r r i v  
e d e r c i . . . 」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

ハルヒちゃんの叫びも空しく、六道さんは霧のようにさらさらと姿  
を消した。

最初からその場になんていなかったようだった。

「一体なんだったのよ。何が目的で出てきたんだか分からないわ。」

「わたしはハルヒちゃんの行動の方が理解できないけど・・・。」  
「理解されようと思ってないわ。」

「・・・そ、そうだよね。」

しまった、つい口に出していつちゃった。

まあいいか。

あれ？ところでメリーさんは？

「エリンちゃん、今すぐ学校に戻って今の話を理事長に伝えてくる  
のよ。」

「えっ!?!」

突然ハルヒちゃんが口走った。

「リランに乗れるのはあんただけよ、早く!」

「二人はどうするの!」

「問題ないわ、早く行って!」

ハルヒちゃんのすごい剣幕に押され、エリンちゃんは後ろを振り返りながらその場を後にした。  
わたしでも怖かった。

「ここで問題よ、萌香。」

彼女がそう言うと同時に、辺りがモノクロに変化し始めた。

「今の話を聞いたこの復讐にとりつかれた化け物は、今から何をすると思う?」

一旦モノクロになった世界が、再び色を移し始めた。  
どうやら今私達とメリーさんがいるのはハルヒちゃんの作りだした世界らしい。

「怒り狂う、かな。」

「まったくもってそのとおりよ。」

と、その時。

炎の様な何かが、一瞬私の前を通りすぎた。  
同時にあるべきものが消えていた。

「えっ・・・わたし、の、ロザリオ・・・?」

そう、私の首にぶら下がっていたロザリオが消えた。

そして私は光に包まれる。

「よく分からないが好都合だ。存分に楽しませてもらうぞ。」

「裏萌香がでてきたのね。ちょうどいいわ。」

そんな彼女たちの見つめる先には、我を忘れ目の前が見えなくなつた復讐鬼の姿。

「・・・ミツルギ・・・レイジイイイイ！！・・・オノレエエエ  
！！！！」

彼女の表情は鬼の様な形相としか言いようがない。  
ぶわあっと広がった髪は、まるで山姥の様だ。

「まるで毛を逆立てて大きく見せようとする子猫のようだ。」

「ここからが本番よ。気を引き締めなさい。」

変貌したメリーの右腕は、刃物の様に变化して二人を狙っていた。

「捕獲完了お」

少女の前にあるのは、巨大なサイコロ中でぐったりしている赤い狐。

「アッレ〜ン 早く来ないかなあ」

「多分来ねえぞ、少年は。」

「ティツキーは夢がないよねえー。」

「夢でも何でもねえよ!!」

### 標的36：RL12号事件（後書き）

遊戯「読者のアジト、始まるぜ！」

めだか「今回の担当はわたしだ。よろしく頼むぞ。」

遊戯「まずは『紅葉の紅蓮』さんのツナから質問。サンキュー！」

めだか「『そのクラスでは誰がどんな人と仲が良いの？』。私はもちろん善吉と仲がよいぞ。」

遊戯「ぼくは、奴良君や黒崎君と一緒にいる事が多いかなー。」

めだか「うちのクラスはみんな仲がよいのだ。」

遊戯「次は『闇夜の黒鳥』さんから質問！」

めだか「ありがたく答えさせてもらおう。」

遊戯「えーと『うちの小説のキャラで、こいつになら勝てそうって奴は居ますか？』。」

めだか「全員まとめてかかってくるがよい。24時間！365日！私は誰からの挑戦でも受け付けるー！」

遊戯「ぼくはちょっと勝てないかなあ、誰にも・・・。」

めだか「今回はキャラ紹介をつけてみたそうだ。見て行くがよい。」

【水無月花蓮】  
みなづきかれん

オリキャラ

月一族本家・水無月家第46代目当主。  
わずか25歳でこの世を去った。  
彩咲麗美の実の母。

【文月優作】  
ふみつきゆうさく

オリキャラ

月一族・文月家第23代目当主。  
文月家最後のひとりで、水無月家に婿養子としてはいった。  
28歳で死亡。  
麗美の実の父。

【水無月悠里】  
みなづきゆうり

オリキャラ

僅か5歳でこの世を去った。  
麗美の実の姉。

【博麗美乃利】  
はくれいみのり



オリキャラ

17年前の事件で容疑者として逮捕。  
そのまま死刑判決を受け26歳のとき執行。この世を去った。  
博麗神社の巫女をしていたらしい。  
博麗霊夢との関係は不明。

### 【マエリベリー・ハーン】

作品：東方Project

能力：境界を見る事が出来る程度  
の能力 境界を操る程度  
の能力（不完全）

復讐のためだけに永遠の命を手に入れた哀しき人間。今現在彼女を動かしているのは憎悪のみである。

### 【六道骸】 ろくろ

作品：家庭教師ヒットマンREBORN！

能力：霧の炎、六道輪廻のスキル

ボンゴレ10代目ファミリー・霧の守護者。マフィアを憎んでいるはずだが、沢田綱吉には従う。  
彼の行動には、周りが理解できない点が多い。

【成歩堂龍一】  
なるほだてりゅういち

作品：逆転シリーズ

元・敏腕弁護士。

麗美の師匠らしい。しかもきれいな嫁さんがいるらしい。  
養子だが娘がいる。

【御剣怜侍】  
みつるぎれいじ

作品：逆転シリーズ

麗美の父親。

検事局のトップ検事。喋り方がなんか古風。  
天才とか言われているわりには私生活での弱点が多い。（麗美談）

【御剣麗美】  
みつるぎれいみ

オリキャラ

なぜか「彩咲麗美」と名のっている。

自分が本当は誰の子なのか、どうして右手にあんなものが刻まれているのか全く知らない。

実の両親からもらった名前は「水無月優香」。

遊戯「ずいぶん多かった……。」

めだか「そうだな。ではまた会おう。」

遊戯「次回もよろしくお願いします!」

### 標的37：マエリベリー・ハーンVS赤夜萌香

「コロシテヤル・・・コロシテヤルッ！！」

我を忘れた復讐鬼から溢れだすのは、恐ろしいほどの妖力。

「あたしの足を引っ張るんじゃないわよ。」

「下等生物にこの私が遅れをとるわけがなかるう。足を引っ張るなとは私のセリフだ。」

裏萌香とハルヒが、それぞれ戦闘モードに入る。  
いつの間にかハルヒの手には薙刀が握られている。

「コロ・・・ス・・・」

「行くわよ萌香！」

「貴様に指図される覚えはないな。」

その時、話していた二人に向かってメリーの凶器と化した右腕が振り下ろされる。

「フッ、甘いな。」

二人は左右別々の方向へ素早く飛び上りそれを回避した。

空を切った右腕は地面につき刺さり、辺りには土煙が舞い上がる。

「この私に貴様ごときが戦いを挑もうなどと・・・頭が高い！」

裏萌香の伝家の宝刀ハイキックがメリーの腹部に鋭く決まった。

さすが力の大妖と謳われるバンパイア。威力も生半可なものではない。

もちろん、その隙をハルヒが見逃すはずもない。

「秘技 四季演武・春の章 壱ノ舞『春風』！！」

「ぐあああつ！」

掛け声と共にハルヒは、ピンク色の風の様なものを纏った薙刀を渾身の力でメリーの後頭部めがけて振り下ろした。まるで春風のようになめらかな、それでいて力強い一撃。

メリーは悲鳴をあげてその場に倒れこむ。

「まだ寝るのは早いな。」

倒れこんだメリーに一秒も反撃の隙を与える間もなく、裏萌香の強い蹴りが右頬に炸裂した。

メリーは宮殿の真つ白い壁に真つ赤な鮮血を散らしながら思いつきりめり込んだ。

辺りに再び砂埃が舞い上がる。

「やったの？」

「・・・いや。」

「あゝあゝ・・・」

頭をやられて再起不能と思われた復讐鬼。

しかし彼女はガラガラと不快な音を立てながら、何事もなかったかのように壁から身体を引き抜いている。グロテスク、とはこのようなものを指すのだろう。

「まだだな。」

裏萌香は無表情でそうつぶやいた。それもそのはず。

メリーの美しいはずの金髪には見るも無残な赤黒い液体がところどころにこびりついているが、何故か頭に傷跡は見受けられない。

どうやら彼女の纏う妖力には、自己再生の機能が備わっているようだ。

「あゝはゝあゝ。」

「ヘタに攻撃するだけ無駄、ってことね。」

ならば再生できないほどにボコボコにしてしまえばいい。

そう考えた二人は、再び復讐鬼に攻撃を仕掛ける。  
ところが。

「なっ、なにこれ!？」

突然地面を割ってなにかが生えてきた。それは植物の様なのだが、うねうねと怪しげに蠢蠢いている。あの棘だらけの薔薇の茎がたくさん集まって自分から動いている様を想像していただければ間違いないだろう。

二人は触手が届かないぐらい高い所へ素早く回避する。

これは……。

「食人植物の一種か、煩わづわしい。」

そう、裏萌香の言う通りこれは食人植物である。  
少しでも触れようものなら一瞬で餌食にされてしまふ、恐ろしい植物だ。

一説によると、王獣や象も捕食するらしい。

「全部斬り飛ばせば問題ないわ。」

不可能そうなことをさらりと言うハルヒ。

しかし、裏萌香の無表情だった顔がその一言で微笑に変わった。

「貴様にはそれが出来ると言うのか？」

「もちろん。朝飯よりずっと前って保障するわ。」

「フツ。」

裏萌香は微笑を浮かべたまま自分の銀髪をさらりと払い、動く気配の無いメリーを見つめている。

彼女の紅の瞳にはこの光景はどんなふうに映っているのか。

「ならばやってみせろ。しくじることは許さんぞ。」

「心配しなくても、命令されなくたってやるわ。馬鹿にしないでくれる？」

どうやら上から目線な者同士では、ウマが合わないようだ。

高貴なバンパイアは目を細めて顔をしかめる。

「心配などするか、愚か者。私が貴様を気遣う義理などない。」

「あっそう。四季演武・夏の章・・・」

その言葉と共に、ハルヒの薙刀の刀身部分が青白く輝き始めた。光

は時間がたつごとに大きくなっていく。  
ハルヒの顔ぐらいいの大きさになった時、彼女はそれを横払いの要領で振りきった。

「壱ノ舞『南風』!!」

暫激の形をした光は四方八方に散らばり、食人植物たちを次々と刈り取ってゆく。

どうやらこの植物たちは核となる茎を斬り取ってしまえばすべてダメになる種類だったらしく、真ん中の太い茎が斬られた瞬間に全ての茎が枯れ落ちた。

「ほう、なかなかやるではないか。」

感心したように、裏萌香が口元に笑顔を浮かべる。

ハルヒは威張ったような態度で言い放った。

「このくらい当然よ。この涼宮ハルヒ様もなめられたものね!」

そのとき。

「あゝ あゝ あああ!!!!」

「きゃあっ!?!」

ハルヒは突然頭上からかかってきた圧力で地面にたたきつけられた。メリーの仕業だった。

「あの愚か者が油断したか・・・情けない。」

すぐさま裏萌香は、隙だらけの復讐鬼にの頭上からかかと落としを



見舞った。

凄まじい音共に再びメリーは砂煙をあげながらめり込んだ。

「む？」

ふと裏萌香が気付くと、自分の頬に横に掠ったような切り傷が走っていた。

血も僅かだが垂れている。

どうやら凶器と化したメリーの右腕がこの高貴なバンパイアの頬を掠めたらしい。

「高貴なるこの私の顔に、よくも傷を・・・」

相当怒ってます、この人　　じゃなかったこのバンパイア。

当たり前だろう。

プライドがチヨモランマよりも高い彼女にとって、これは屈辱以外の何物でもない。

「貴様、身の程を知れッ！！」

「これは何か分かる？」

「理科室でよく見るあれアルな。」

同じころ、木魂学園の職員室。

「ビーカーだよね。」

「そ、それアル！」

麗美たちは銀時の居場所を突き止めるため、彼の机をあさっていた。

「失礼な！これはれっきとした捜査だっというてるのに！」

はいはい。

そこで見つかったのは、何も入っていない空っぽのビーカー。  
理科の実験で液体の加熱なんかに使われるあれだ。

「なんでこんなものが？」

「あ、何か書いてあるネ。」

「どれどれ……」

ビーカーには黒マジックで“高等学部・理科準備室”と、目立たない様に書かれていた。

これはもう行くしかないだろうという結論に至った3人はさっそく広い敷地を走り、理科室へ向かった。

彼女たちが走り抜けた廊下には“廊下走るな！キケン！！”と書かれた手作りポスターがはられていた。

「何なのだこの化け物はッ！！キリがないではないか！」

「あゝはゝあゝ・・・」

もはや体中ボロボロだと言うのにこの復讐鬼は何度でも立ち上がってくる。

いくら地面にたたきつけようが脳天をかち割ろうが、無意味。

「ハアッ、ハア・・・」

「・・・くッ！」

それに対してハルヒも裏萌香もボロボロで、もはや限界寸前。どちらもあと一撃与えるのが精いっぱい状況。

「この私が負けるなど、断じて認めん！！」

「でも、どうするのよ・・・」

復讐鬼ははじめと変わらぬ素早さで二人の背後から右腕を振りかざしてきた。

疲労困憊で避けるのも困難な彼女たちには防げない。

「あゝははゝはゝあゝ！！！！！！」

「ここまで、ね。」

「この身の程知らずが・・・ッ！」

二人があきらめかけたその時。

「禁忌『レーヴァテイン』!!」

何処からか聞き覚えのある声がした。  
刹那。

「なっ、一体どこから!？」

メリーとハルヒ&萌香の間を真つ赤な光線がさえぎった。  
そのまま光は細かい弾を飛ばしながら半円を描くように動き、復讐  
鬼を襲う。

「ぎゃあ ああ あっ!!!!」

「なんなのよ、これ!」

「分かんが・・・ん?」

そのとき、二人の懷で何かが輝きを放っていた。  
輝きは六道骸に渡された封筒から溢れている。

「何が入ってるのよ。」

そして袋から出てきたのは 指輪。

「・・・紫色に光っているな。指輪に描かれているのは……………  
・綿あめか?」

「知らないわよ。こっちは青色に光ってて、雫の絵が彫ってあるわね。」

ちなみに、二人が不思議がっている間もメリーは謎の光線に襲われている。

「指輪ということは指につけるといふことか？図々しい指輪だな。」  
「図々しいも何もないと思うけど・・・」

裏萌香はハルヒに突っ込まれてしまった。

まあ、とにかく二人はこの輝く謎の指輪をつけてみることにした。

「これでいいのか。」

「ええ、バツチリよ。」

・・・

って、まてまてまてまて！！

何でお前らナチュラルに左手の薬指に指輪はめてるんだよ！

「なんだ、違うのか。」

思いつきり違うわ！

そこに指輪はめるのはあと10年ぐらい待て！

「いいのよ。右手につけたら薙刀持つのに邪魔なだけでしょ。」

だからってなぜ薬ゆ・・・もういい。何も言わんぞ。

その代わりあとから後悔しても知らんからな、オレは。

「結構よ。」

すると、どこからかこれまた聞き覚えのある声が聞こえてきた。  
今度は男のようだ。

『 右腕を落とすんだ。 』

ハッキリと二人の耳に、そう聞こえた。

「聞こえた？」

「ハッキリとな。右腕か・・・なるほど。」

裏萌かがそうつぶやいた瞬間、待つてましたとばかりにメリーにまとわりついていた赤い光線が消滅し無防備なメリーがあらわになった。

その先には紫のオーラを纏ったバンパイアと青いオーラを纏った少女の姿。

「この私をよくもここまでボロボロにしてくれたな。身の程を知れッ！ー！」

「ぎゃあ、あつゝ！？」

今までの疲労困憊ぶりはどこへやら。凄まじいハイキックがメリーに容赦なく襲いかかる。

メリーは背中から壁に激しく叩きつけられてしまった。

彼女が飛ばされた先には。

「四季演武・冬の章・・・」

ハルヒが、刀身が白く変色した薙刀を振りかざして待ちかまえていた。

「参ノ舞『木枯らし』!!」

「ギヤア、アアア、ア、アアア、アア、ア、ア、アッ、!!!」

刀身が復讐鬼の腕を斬り落とした。

落ちた右腕は木が枯れて行くようにカラカラになり、やがて砂となつて消えて行つた。

「・・・終わったわね。」

「ようやく静かになつたか、この身の程知らずめ。」

両腕を失つた哀れな少女は妖力も完全に失つたようで、二人の目の前にぐったりと横たわつたまましばらく動かなかつた。

標的37：マエリベリー・ハーンVS赤夜萌香（後書き）

アレン「読者のアジト始まりますよ。」

リナリー「早速質問コーナーから！まずは『ごくでぶある』さんのキャラ『霧雨佳奈美<sup>かなみ</sup>』さんからです。」

アレン「ありがとうございます！」

リナリー「『その世界の法律ってどうなってるの？』。」

アレン「木魂学園がある所はいちおう日本国の領土ですから、今の日本国の法律がほとんどそのまま使われてるって考えてもらっていますよ。」

リナリー「あつ、『黒夢』くんって子からもう一つ質問が！『そっちの世界の博麗の立場もどうなってるかも頼む』。」

アレン「博麗神社？なんですかそれ？」

リナリー「昔は結構有名な神社だったんだけど、今じゃ“知る人ぞ知るパワースポット！”みたいな感じになっちゃってるわ・・・。」

アレン「そういえば、“お賽銭が集まらない！”って霊夢がぼやいてましたね。」

リナリー「続いては『紅葉or紅蓮』さんのところのツナ君からの質問です。」



アレン「ありがとうございます！」

リナリー「まさかとは思うけど、ロードがアレンに懐いたみたい  
に、敵の誰かが懐いたりは…？」

アレン「ないですね。（キツパリ）」

リナリー「ツナ君なら知らない人を知らないうちに引っ掛けてそう  
だけど・・・」

アレン「最後の質問ですよ。『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『優花』  
さんからです。」

リナリー「ありがとう！」

アレン「『霊夢やフラン達は、死ぬ気の炎を使えるとしたら何属性  
ですか？』。そうですね。何属性でしょう？」

リナリー「霊夢ちゃんもフランちゃんも、シンボルカラーが赤だか  
ら嵐とか？」

アレン「そんな単純じゃないと思いますけど・・・リナリーは霧と  
か嵐って感じですね。」

リナリー「アレン君は雲か雷かな？」

アレン「そ、そうですね？あつ、ではこの辺で！せーのっ！」

アレン＆リナリー「ご感想＆ご質問お待ちしております！」

リナリー「次回もよろしくね」

標的38：人（ヒト）

・・・ここは・・・？

ああそうか

わたし、負けたんだったわね

あんな小娘二人に 情けない

やっぱり理性なんて飛ばしちゃだめね

でももういいの

妹に復讐するためだけに、罪のない人間をたくさん・・・

たくさん殺したんだもの

死んで当然よ

わたしってきつと妹のおまけだったのね

おまけのくせにこんなに必死に生きて・・・

本当、つくづくバカね

『・・・リ・・・』

？

誰か呼んでる

・・・ああ、きつと死神ね

私を地獄に連れて行くんだわ

『メ・・・きろ・・・』

でもどうしてかしら

何だかあたたかい

この声は

私を満たしてくれる

私を包み込んでくれる

なんとなくそんな気がする

そう

まるでどこまでも広がる大空の様な

不思議ね

もう死ぬっていうのに

まだ生に未練でもあるのかしら

『・・・起きろ・・・メリー・・・  
死んで・・・ない。』  
お前は・・・まだ

私が死んでない？

ホントかしら

もしそれが本当なら

少し嬉しい

・・・そうね

騙されたつもりで行ってみようかしら

あの温かな大空のもとへ

・・・

「あ、起きた！起きたよ。」

「・・・ここは？」

目を開けると、視界にはサイドテールが特徴的な少女の顔があった。  
何でもいいから早く私から離れなさい。

「神殿の中だ。」

グギギ、と壊れたおもちゃのような音が鳴りそうなボロボロの首を  
ゆっくりと声のした方へ向けてみた。

いたのは男。

顔が子供っぽかったけど、なんだか子ども扱いしたら傷つきそうだったからやめた。

「ねえ、痛くないの？」

「身体の節々が痛いわ……。」

ふと自分の体を見ると、いろんなところに包帯が巻かれていた。これで傷まない方が病気でしょね。

「……………何でアンタ達私の手当てしてるのよ。」

今更だけど。

「けが人を見捨てられない。」

「ハッ！よく言うわ。」

私が何も知らないとしても思ってるのかしら。相当な甘ちゃんね。

「私の右腕を落とすようにあいつらに命令したのも、わたしに弾幕攻撃を仕掛けてきたのもアンタ達でしょ？」

拳句こんな死にかけの女を手当てして。

何が望みなの？

「お前の妖力の源である右腕を切り落とせるのはハルヒだけだった。あやかし人が妖の力をもったんだ。フランや今のオレには止められなかった。」

「だからハルヒちゃん達がここに向かうようにわざわざ誘導したん



だよ。」

「あっそう、そんなこともうどうでもいいわ。私に生きる価値なんてはじめからなかったのよ。もう、さっさと死なせ」

バチンッ！！

突然、私は思いっきり頬をひっぱたかれた。

「な、なにを……」

「するな。」

「え？」

「“自分に生きる価値がない”なんて二度と口にするな。」

な、なんなのよ。

何でアンタ……

「なん、で泣きそうになってんの。」

「……ッ。」

意味が分からない。

「ねえ、ひとついい？」

「なに。」

今までぼーっと突っ立っていた少女が、突然話しかけてきた。手には何かをぶら下げている。

「これね、うちの学校の校長先生の部屋の机の上に大事そうに置いてあったの。」

「！！！！こ、これは・・・っ！！」

手にしていたのは懐中時計。

これはただの懐中時計じゃない。

だって中には、幼いころ妹と二人で撮った写真が収められていたから。

「あのスキマ妖怪、ずっと探してたんだよ。アンタのこと。」

「なんで・・・どうして・・・」

アイツは私を置いて家を出て行ったじゃない。

私を裏切ったじゃない！！

「紫が家を出て行ったあと、生活費はどうしてたんだ。」

「そんなの祖母の残したお金で生活してたに決まってるでしょ。」

そんな当たり前のことを聞かないでちょうだい。

「監禁までするほど人間嫌いの祖母が、人間に遺産を残すのか？」

「・・・あつ。」

ま、まさか・・・そんな！！

「そう。あんたが祖母が残したと思ってたお金は、スキマ妖怪がアントアの監禁中に死に物狂いで溜めたお金だったんだよ。」

「紫は、いつでもお前のことを思っていたんだ。」

「う、うそよ！！そんな、だって・・・」

今まで私がしてきたことはなに？

・・・ただの殺人？

それこそ死ぬしかないじゃない。

死んで償うしかないじゃない。

「もう・・・死んで・・・」

「ダメだ！」

だから。

何でアントアが泣きそうになってんのよ。

「生きて償うんだ。」

・・・無理よ。

一体私が何人殺したと思ってるの？

あいつらだって、私が地獄に落ちるのを望んでるわ。

「私がアントアに殺された人なら、私の分までちゃんと償って生きてほしいかな。」

「・・・え？」

なにをいいたすの。

「死ぬのって、逃げてるだけだよ。」

「お前はそうやってつらいことから逃げるのか？」

「。。。。」

冗談。

私逃げる事は好きじゃないの。

「わかったわ。一生この重い荷物を背負って生きて行く。どんなにつらくても逃げない。」

自分の犯した過ちがすべて許されるそのときまで。

「そのかわり、ってわけじゃないけどあなたのそばにおいてほしい。身寄りもないし、それに・・・あなたの様な大空について行きたいって思ったの。」

だめかしら？

「・・・わかった。」

「いいけど、ツナに手出さないでよね！ツナは私のモノなんだから！！」

フフッ。それはどうかしら。

あんまり隙だらけだと奪っちゃうかもね。

「名前は？」

そのとき、私は自分の両腕がしっかりと生えていることに気がついた。

「わたしはマエリベリー・ハーンっていうの。メリーって呼んでちょうだい。」

ねえ、美乃利。私の友達。

あなたは今天国にいるんでしょうね。

いえ、それともまだ地獄で迷子かしら。

知ってた？

“人”ってね、ヒトとヒトが支え合って出来てるのよ

ヒトは一人じゃ立てないんですって

・・・わたしは知らないうちにあんたに支えられてたのかもしれないわね

あんた最後まで口を割らなかったそうね

こんな最低な女のこと、庇う必要なんてなかったのに

友と名乗る資格もない私を

でも、それがアンタのいいところでもあった

・・・皮肉ね

私は犯した罪を必ず償うわ

だから、その時はまた

「親友と呼ばせてね。」





標的38：人（ヒト）（後書き）

萌香「読者のアジト始まるよ！」

ハルヒ「さつそくいくわ。『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『仁』さんからよ。」

萌香「ありがとう！」

ハルヒ「『沢田のクラスで一番身体能力が高いのは誰だ？』。私でしょ？」

萌香「意外とこなたちゃんも運動神経いいから侮れないよ？」

ハルヒ「聞かれてるのは運動神経じゃなくて身体能力よ。」

裏萌香「ではやはり私だな。」

ハルヒ「すごいタイミングで出てくるわね。次の質問は『紅葉or紅蓮』さんから。お礼を言っておくわ。『以前フランがツナと京子の第一印象を言っていたけど、ほかの人の第一印象は？』。」

裏萌香「入学したての頃に、アレンに向かって白髪と言いついていたりしていたな。」

ハルヒ「私の第一印象は、五月蠅い女だったらしいわ。」

裏萌香「私が言うのもなんだが・・・いいのかそれで。」

ハルヒ「ただの第一印象よ。ヒトを見た目で判断するなんてやってはならない行為よ。」

裏萌香（私のクラスで一番、ヒトを見た目で判断していそうな人間だが）

ハルヒ「あ、そうそう。私のあの技オリジナルなのよ。作者のネーミングセンスの無さがただ漏れよね。」

裏萌香「そうだな。」

ハルヒ「じゃあ今回はこのへんで！チャオ」

裏萌香（なぜイタリア語なのだ？）

## 特殊弾4：RL12号事件資料

分類No. RL 12号

### 「解決」

担当検事：御剣怜侍

容疑者：博麗美乃利

担当弁護士：綾里千尋

### 【概要】

2月24日午後4時、水無月家のリビングにて大量の肉片が見つかる。

DNA鑑定の結果、事件発覚から行方不明となっていたこの家の住人水無月花蓮とその夫である文月優作、そしてその一人娘水無月悠里の3名のものと判明。

現場に残っていた証拠から被害者の友人である博麗美乃利を逮捕した。

### 【容疑者】

博麗美乃利（24）

被害者とは自他ともに認める親しい間柄だった。  
検察は、殺害の動機は水無月花蓮とのいざこざであると推測。  
犯行については全面的に認めている。

【被害者】

文月優作（28）

水無月家の婿養子。

リビングで元の骨格すら分からない惨殺遺体で発見。  
DNA鑑定の結果、本人であると断定。

水無月花蓮（25）

水無月家第46代目当主。文月優作の妻。

リビングで元の骨格も分からない惨殺遺体で発見。

DNA鑑定の結果、本人であると断定。

被告人の犯行の動機は彼女とのいざこざであるとされる。

水無月悠里（5）

水無月花蓮と文月優作の一人娘。

リビングで元の骨格も分からない惨殺遺体で発見。

DNA鑑定の結果、本人であると断定。

【証人】

糸鋸圭介刑事

所轄の刑事。

事件の大まかな流れを証言。

霧雨宇江子（24）

事件の第一発見者。霧雨魔法店のオーナー。

水無月花蓮の友人でその日会う約束をしていた。  
発見当初の様子を証言。

八雲紫（？）

被害者の友人。

被害者と被告人の間について証言。

被告人の殺意を証明する決定的証言となる。

クロス・マリアン（？）

通りすがりの旅人。

偶然、返り血まみれの被告人を目撃。  
そのことについて証言した。

【証拠品】

・チェンソー

今回の事件の凶器。

指紋と返り血自体は拭き取られてしまっていたが、刃全体などからルミノール反応を検出。

・血まみれの巫女服

返り血にまみれた、赤と白を基調とした博麗神社の巫女の正装。  
犯行現場の片隅に脱ぎ捨てられていた。  
被告人の物であると確認。

・サバイバルナイフ

被告人がホームセンターで24日の午後1時24分に購入。  
犯行現場で見つかり、ルミノール反応を検出。被告人の指紋も検出された。

被告人は、被害者をこのナイフで次々に襲ったあとチェンソーで切り刻んだ。

・ホームセンターのレシート

被告人がサバイバルナイフを購入した証拠。  
事件現場に落ちていた。  
店員からの裏付け済み。

・現場の写真

親子3人分の肉片や血液やらが床にこびりついている。  
床のところどころにチェンソーによる傷が見られる。

・お被い棒

現場から見つかった被告人の持ちもの。  
犯行前に持ちこみ、犯行後に落としてしまったと思われる。

【罪状】

死体損壊および過失致死罪

【判決】

有罪・死刑



### 標的39：ムジュン（前書き）

お久しぶりです！

7月考查真っ只中なのに書いてしまった蜜柑です。

勉強せつちゅーはなし。

### 標的39：ムジュン

「あ、ハクの姐御とネルアル！」

「久しぶり神楽ちゃん・・・」

「ちよつと、なんで私だけ呼び捨てなのよ!？」

麗美たちが理科準備室へ急いでいると、廊下で懐かしい(?)人とすれ違った。

弱音ハクと亞北ネルだ。

もちろんのことだが、麗美は初対面である。

「ええと・・・どちら様ですか？」

時は、ハルヒ達がまだギリシャ共和国の首都アテネに向かっていた頃に遡る。

つていうか、アテネにいたんだ・・・あの人たち。

そしてここは、日本国 大阪府。

そのシンボルともいえる大きなお城の前に、二つの人影があった。泉こなたと黒崎一護である。

「や、やっかついた・・・」

「お前が間違わなかったら、もつとすんなりこれたはずだけだな。」  
「黙れ馬鹿オレンジ頭。」

疲れきったこなたの悪質な暴言を意にも返さず、一護はさっそく城に入ろうとしていた。

半日前のこと。

「・・・なあ、『オーサカジョー』って本当にここであってるのかよ？」

「うう・・・そのはずんだけど・・・。。。」

「そんな建物見当たらないな。・・・っていうか、『法隆寺』だろ  
ココー!!」

指さす一護と焦りまくるこなたの目の前には明らかに五重塔が見えている。

それにしても、何処をどうすれば大阪を目指して京都にたどり着くのだろうか。

地図を持っているのに間違うとは、実に器用である。

「あーもおおおー!この地図見にくい!」

「見やすいだろ!・・・一応言っとくけどよ、ゲームみたいに自分の位置がポイントで示されたりしねーからな?」

そのとたん、こなたの顔がさらに青ざめた。

「えっ……マジで？」  
「……………今の今まで、気がつかなかったのかよ。」

どうやらこの女子高生、現実と2次元がすこし混同してしまっているようだ。

カーナビとかあのへんならともかく、普通の地図にそんなモノがないことぐらい小学生でもわかるというのに……。  
将来が不安すぎる。

「ううう。」

とまあ、こんな感じでなんとか大阪にたどり着いた二人は、現在大阪城の中へ入っていた。

「どこまでいくの？」

「とりあえず一番上の階まで行ってみるか。」

考えなしに歩いているようだ。

もうちょつと考えて行動しようと言う気はないのだろうか。

「ココが最上階にみたいだな。」

「あの部屋って、もしかして殿様の部屋！？」

なぜこなたが殿様の部屋にだけここまで興味があるのか一護にはまったく理解できなかったが、とにかくにも進むしかない。

「・・・！なんだ、この感じ？」

中に入ろうと一護が襖に手をかけたその時。

襖の向こうから、異様な雰囲気というかなんというか      ともかく  
不可思議なものが漂ってきた。

殺気とかそういう類の異様さではない。

もっと別の何かであると、二人は感じていた。

「な、なんだろ・・・恐怖・・・？」

「とにかく入るぜ！」

頬に伝った一筋の冷や汗をグイッと拭い、一護は勢いよく襖を開いた。

高等部練の理科準備室に向かっていたはずの私達は、いまはなぜか  
グラウンド      高等部の運動場にいる。

なぜかって？

こっちが聞きたいのだが。

「あの、なんなんですか？」

「読まなかったの？」

質問を質問で返すな。

だいたい、いきなり魔法陣出し始めた人に質問しない方が異常だと思うんだが。

「・・・読まなかった？なにをですか。」

ちなみに新聞なら毎朝かかさずチェックしてる。

あ、でも、今日のはまだ読んでない。

昨日の夜からずっとこの学校にいるからね。

「貼り紙よ。」

「廊下に、掲示してある・・・」

あゝ。

確かにあったつけ、“廊下走るな”ってというのが。

「それがどうしたアルか。」

「あんたたち廊下走ったでしょ。」

・・・。

走りましたね、確かに。

あれ？それだけの理由で引きとめられたの？

いやいやいやいや、そんなまさか・・・。

「出番があるからってそうやって調子に乗るのね。いつだってそう。裏で私がいくら頑張っても誰も認めてなんて・・・むぐつ。」

「ハク！アンタは黙ってなさい！！」

言いながらネルさんが、大福の様なものをハクさんの口にねじ込んだ。

すごいマイナス思考というか、根暗というか、何かが根本的に間違ってる言うか・・・

それにしても限度つてもんがあるだろう。

「用件はなんなの？」

マトが訝しげに聞く。

「ああ・・・永遠に眠っててもらっただけよ。」

「なんだそんなこと・・・って、はい？今なんて？」

ん？

“永遠”に？

今永遠に眠れとか言った、この女？

「なんでそうなるアルか！」

「敵に宣戦布告して何が悪いのよ。バツカじゃないの？」

「そんな・・・。」

ええーと、つまり彼女たちはこの学園に潜入してたスパイ、ってこと？

「まさか、行方不明者が全員死んじゃったなんて思っただけでしょうね。行方不明のヤツの大半は、寝返ってる可能性十二分に大ありよ！！」

「寝返ってるんじゃないくて、もともと敵だったの・・・」

「そ、そんな・・・どういうことアルか！？」

なんてこった。

私はよく知らないけど、これは物凄くマズイのでは？

「話はこちらまで！続きが聞きたいんだったら頑張って生き残ることね。」

「えっ？」

「生き残る？」

は？

「・・・なにから？」

オレ達の目にまず飛び込んできたのは、真っ黒なセーラー服に真っ黒な髪・・・という、何もかもが真っ黒な女だった。

「お、おじゃま、します？」

「なんで疑問形なんだよ・・・。」

部屋の迫力に圧倒されたのか、こなたが目を白黒させて言った。

一方、女の方はオレ達に気が付いていないのか美味しそうにお茶をすすっている。

だが間違いなく異様な雰囲気はあの女から漂っている。

「おい。アンタ誰だ？」



とりあえず話かけてみることにする。

「・・・嘆かわしいな。」

「はあ？」

いきなり何か言い始めたぞ・・・。

「最近の若者は礼儀がなつとらんのう。嘆かわしいことよ・・・。」

「一護、なんなのこの人。」

「オレに聞くなよ！」

女はまた一口茶を飲んだ後、ようやくこちらに向き直った。

「さて・・・妾になにかようかの？黒崎一護、泉こなた。」

「なっ!？」

こいつ、何でオレ達の名前を！

・・・まさかどこかであったことがあるのか？

「やっぱり、あんたがそうなのか？」

「何の話かのう。」

何がおかしいのか分からないが、女がクスクスと笑っている。

さっきから感じるオーラといい・・・こいつなのか。

「あんたが・・・アンタが結界の番人のひとり、羽衣狐なんだな？」

一瞬だけだが、女の動きが止まった。  
ピンゴか。

「フフフツ、だからなんだと言っただ？」

女は笑う。

妖しく、美しく。

「ちょ、それどういうこと!？」

煩いガキね……。

何でこんな子をそばにおいてるのかしら。

「そのまんまの意味よ。今現在までで外れた封式は私の分だけみた  
いだからあと4人ね……って。」

「だ、だって!シジューケツカイが解かれた時に一緒に解かれる封  
印は6つよね。だったら6人いないとおかしいでしょ!」

まあ、ごもつともな意見ね。

「残念だけど、私もよく知らないの。」

「……6つ目の封印で封じていたのは生物ではないということか。」

「おそろくは。」

それにしても、この子の額の炎・・・いつになったら消えるのかしら。  
気になるわ。

「ぎゃあああああ!!」

木魂学園の広い広い運動場。

今ここにはありえないヤツがいる。

なんでいるかつて？

その金髪が魔法陣で呼び出しやがったからだよ！

「なにあれなにあれなにあれええええ!!」

「なんかやりにくいアル・・・」

“イャンクック”という名前の下級モンスターらしいけど、私からすれば下級じゃなくて上級に見える。

っていうか、たのむから。

「こっちくんな。」

「ギヤアアアッ!」

ギヤアアアー!・・・じゃないから!

こわいから!こっちは!

「何で私ばかり狙うの！」

・・・アレ？

「しまった。」

頭上にはクック先生の頭。

背後にあるのは、グラウンドを仕切っている少々高めの塀。  
そう、知らぬ間に私は角に追い詰められていた。

「グギヤアアッ！！」

「いやあっ！」

私がもうだめだと思ったその時だった。

「ほあちゃあっ！」

「・・・。」

ドゴッ！

ズダアン！！

「ギヤアアアアッ！？」

クック先生が、勢いよく後方へ弾き飛ばされた。

「大丈夫アルか？」

「う、うん。ありがとう、神楽・・・と・・・」

神楽の横にいたのは、片手にガンキャノンを装備した少女。  
特徴的な左右非対称のツインテールは、腰　いや、それ以上の長さまで伸びている。

「マト？」

「・・・否。我が名は・・・」

「・・・ブラック　ロックシューター。」

### 標的39：ムジユン（後書き）

髑髏「読者のアジト・・・今回は、私が答える。・・・・・・・・質問、ありがと。」

Q『蜜柑さんの、「ここがオススメ!」という話はあるか?』（紅葉or紅蓮さん）

髑髏「・・・最初の、学校って感じがする所。テストとか・・・。  
・・・今は・・・学校って言う感じ、しないから・・・。」

Q『網吉達は他の奴の能力を使えらしたらどんな能力が良い?』（闇夜の黒鳥さんのキャラ火渡優也さん）

髑髏「・・・・・・・・私は・・・料理がうまくなれる力がいい。  
・・・・・・・・ボスはたぶん・・・テストでいい点とりたい、だと思っ  
・・・・・・・・ボスの家庭教師の人、厳しいから・・・。」

Q『みんなツナのことをどう思ってる?』（ごくでヴあるさんのキャラねこさん）

髑髏「・・・強くて、優しい人。わたしなんかを・・・かばってくれる・・・・・・・・。」

その他のみなさんの回答

ハルヒ「やる時はやるわよ、ツナは。」

骸「まだまだ甘い男ですよ。」

ランボ「いい兄ちゃん。ボスだと思ったことは一度もありませんけど。」

京子「面白いよね!」

こなた「ツツコミだけは冴えてるんだけどね。」

アレク「隠し事できない気がするんです、ツナには。」

髑髏「・・・次回も・・・よかつたらきてね。・・・  
ありがとう。」

標的40：？？？

・・・。

あれから3年たった

やっぱり時間が解決してくれるわけ、ないか。

・・・仕方ないと言えばそうんだけどな。

でもな、気がついてぐらくれてもいいと思う

オレのことはいいんだよ

大した事もないし、10分の1の力でも消えることはない。



なにより光あつてのオレだ。

は？いいまわしが厨二くさい？

ドタマがち割るぞ（ニコ

・・・で。

問題はその光だ

その光は今どこにある？

その光は今どうなってると思ってるんだよ。

なあ、いい加減気づけよ

お前が

自分を否定するたびに

自分の力を押さえつけるたびに

誰が一番苦しんでると思ってんだ

それに

今も頼ってんじゃねえか

ちよつとだけ身体を自由にさせてもらった時

どれだけオレがあのままのつとってやろうと思ったか・・・

しらねーだろうな

まあ、

“アイツ”に止められたからしなかったけど。

いやー、でも楽しかったよ

考查自体は真面目にやってないけど。

英語は楽勝だったかな、うん

それはともかく

・・・“アイツ” あれだけやられてそれでもお前を庇おっつていうんだ

さすが大空の片割れと言わざるおえなかったね

こればかりは。

あー、オレも片割れなんだけどな

一応。

まあでも、やってるとはいえ

お前は無意識で“アイツ”にすら気付いてないんだろ

ところでさ

よく対比の表現で『光と闇』って使われるよな

じゃあ聞くけど、【大空】はどっちだ？

光か

それとも闇か

は？「知るか」だ？

しばくぞタコ（ニコニコ

・・・さて。

答えは両方だ。

青空があるから夜空がある

昼があるから夜がある

・・・は？

闇が悪者だ？

じゃあ光はいい奴や正しい奴ばっかか？

ちがうだろ

それじゃオレ、根っからの悪者じゃねーか。

何もしてないのに死刑食らうなんてごめんだね

たまたまゲームとかで出てくるラスボスが黒いだけだろ

・・・そういうことじゃねえの？

つまり、おんなじなんだよ

明るいのも暗いのも

もともと一つの『空』なのさ

生と死はだいぶちがうけど。

ま、そういうわけだから

鎖でスマキにされたうえで両腕の鎖でつりさげられて動けない“コイツ”のためにも

まずは気付いてほしいもんだな



・  
・  
・  
な  
あ

“  
主  
人  
格  
サ  
マ  
”  
？

## 標的41：クローム髑髏

「妾に何か用かえ？」

目の前の美しい女はクスクスと笑う。  
異様な雰囲気を纏ったままで。

「あ、あんた・・・結界、解いてくんねえか。無駄な争いはしたくねえ。」

「一護！？そんなのきいてくれるわけ・・・」

誰もがそう思った。  
しかし。

「よかるう。」

返ってきた返事は思いがけないものだった。

「えっ？」

「はあ？」

「なんじゃ、解いてほしくないのか？」

お茶をすすりながら目の前の女は淡々とそう言った。  
まるで、そんなものどうでもいいという風に。

「頼んどいてあれだけだよ・・・いいのかよ、そんな簡単に。」

至極当然な問いだ。

しかし、女は意にも返さない。

「フン。貴様らには関係の無いことだ。」

「う……。」

私がここに監禁されてもう8日ほどたった。

脱走は何度も試みようとしたけど、無理だった。

西行寺幽々子と名乗った女の人は最近見てなくて、目の前には麦子ヨコの袋と空っぽのペットボトルが置いてあるだけ。

昨日から何も食べてない。

「……ボス……骸、様……。」

私は、雪の守護者なのに。

せつかく骸様に助けてもらったのに。

せつかくボスに居場所をもらったのに。

これではただのお荷物だ。

「……ごめんなさい。」

するとそのとき、壁の向こう側で何かがはじける音がした。

「？何・・・？」

たとえるなら、何かが爆発す

ドガアアアアン！！！！

「ケホン、コホン・・・・・・・・な、なに？」

突然視界が砂煙に覆われた。  
なにもみえない。

「やっと見つけました。あなたがクローム様ですね？」  
「！？」

ようやく砂煙が晴れて目が開けられるようになった。  
一番に視界に入ったのは、目の前で私に向かって恭しく頭うづつせうを下げる女の子。

多分、モンスターハンターやったことがある人ならこれで分かると思うけど、女の子の髪型は所謂“ザザミ結び”。色はきれいな茶色。犬と遊んでたから覚えてる。

・・・インターネット検索で出てくると思う。

「どうして、私の名前を・・・？」

「ボスの命によりお迎えにあがりましたの。」

彼女はなめらかな手つきで、手に持っていた短刀を何気なく懷に収

めた。

・・・きれいな人。

ただ　どうして桜をあしらったピンクの着物を着てるんだろう。

「ボス”って・・・?”」

「あなたが慕っている方と同じお方ですよ。」

・・・えっ？

「　いけない、目立ちすぎましたね。それでは退散いたしましたよ  
う、クローム様。」

「ど、どうやって・・・」

気がつく、彼女の手には青い匣<sup>ボックス</sup>兵器が握られていた。

「匣・・・兵器・・・!? どうして・・・?」

「おいで、シロン。」

現れたのは、雨属性の馬。

どうしてこの人が匣をもってるの？

「クローム様、しっかりつかまっていてくださいね。」

「は、はい。」

気がつく、私は馬に乘せられていて、外の世界に投げ出されていた。  
私がつかまっていた所はイタリアだったみたい。

外に出ると、見慣れたローマの夜景が広がっていたから。

「・・・あの。」

「どうされました?」

そういえば、これを彼女に聞いてなかった。

「あなたは・・・だれ？」

まだ私は　あなたの名前を聞いてない。

「私ですか。私は、卯月瑞萌<sup>うつきみずも</sup>。とある一族の関係者です。」

「卯月さん・・・」

「ミズモとお呼びください、クローム様。」

卯月。

どこかで聞いたことがある。

骸様が言っていた・・・ような。

「いやあああああ！！！！」

だからなんで私ばかり狙うのよ！  
このバカクック！！

「・・・。」

ドゴオンッ！！

何の前触れもなく再びクック先生が吹っ飛んだ。

マト もとい、ブラック ロックシューターのしわざだ。

「ほあたあー!!」

吹っ飛んだ先生に、神楽の容赦のないかかと落としが食らわされる。  
さすがのクック先生でもひるんだようだ。  
足元がおぼつかない。

「覚悟オオオ!!」

ドゴオオオン!!!!!!

神楽のかかと落とし第2弾がきれいにクック先生の脳天に決まり、  
先生は戦闘不能になった。

「よっしゃあ! やったネ!!」

「怖かったあゝ.....」

「.....」

喜んだのもつかの間。



「……っ、うええええええ！！！！」

「気色悪いアル！！」

「……っ。」

「……つて、うええええええ！！！！」

「気色悪いアル！！」

「……っ。」

「……つて、うええええええ！！！！」

「気色悪いアル！！」

「……っ。」

目の前に白い魔法陣が現れ、そこから出てきたのは

「赤いフルフルうううう!!!???」

## 標的42：紅の巫女と目覚める常闇

「オイ、どういう意味だよ？」

一護は目の前の女に向かって聞き返す。

「意味？そのままだかのう。」

「取引したんだ？」

「取引相手は企業秘密じゃ。」

この女 羽衣狐曰く、上等な取引だったらしい。

この怪しい女をオトしたとは一体どんな内容だったのか。  
むしろそっちの方が気になる。

「でも、どうやって解くんだよ。そんな簡単に封印って解けるものなのか？」

聞くと、女はポケットから何かを取り出した。  
ってというかポケットあったのかよ。

「なに、それ？」

「妾の妖力をほんの少し込めた数珠。これをあの娘にかざせば、妾

のかけた封式は解けるはずじゃ。」

闇そのものを数珠に封じたかのような真っ黒い石で造られた数珠だった。

それをこなたが受け取った。

「・・・じゃあ、帰るか。」

「そうだねえ。任務完了したし。」

数珠をポケットにねじ込み、オレ達は部屋を出ようと女に背を向けた。

そのとき、背後からクスクスと笑い声が聞こえた。

「まだ何か用かよ?」

「おかしいの・・・用を頼んだのはおぬしたちではないかえ?」

「そうだよ一護。」

うっ。

た、確かにそうだけだよ。

「で、何でアンタは笑ってるんだ!?」

「クスクス・・・おぬしら、そう簡単にこの城から出られると思うておつたら大間違いじゃぞ。」

「は?」

やっぱしそう簡単にはいかねえよな!。

・・・だとしたらなんでオレ達に数珠を渡したんだ、あの女狐?

まさか、今の話もこの数珠も嘘なのか?

「妾を疑っておるのじゃな?安心せい、妾はウソはついておらぬ。」

「・・・信用していいんだな？」

「この件に関しては信用してよい。」

じゃあなんで笑うんだ？

それこそわけがわからない。

「じゃあ聞くけど、なにがおかしいのさ。」

「クスクス・・・。」

答えない。

ウソはつかないが口は紡ぐ、ってわけか？

じゃあ別の角度から聞いてみるか。

赤夜や黒神ならもつとうまく聞くんだろうが、生憎オレは他に思いつかないからな。

「ところでよ、どんな取引したんだよ。」

「フツ・・・知りたいのか？」

「そりゃ、教えてくれるなら知りたいけど。キョーミあるし!!」

こなた、何でお前が食いつくんだよ。

「まあよい。妾に提示された内容はこうだった。」

“力を渡す代わりに少女の封式を解いてほしい”

「力の譲渡・・・だと？」

そんなばかな!?

ありえねえ。

「ジョウト!？」

「・・・多分のお前の考えてるジョウトと違う。」

やっぱり一度病院連れていくか。

あー、オヤジに見せた方が早いかな。

一応医者だしな、あいつ。

「面白いヤツよ。契って正解じゃ。」

「な・・・それで交渉成立したのかよ!？」

本当に何なんだよコイツ。

っていうかどんな奴だよ、この女狐と交渉ってバカは・・・。

「この程度で成立などしておらん。妾からも条件を提示した。」

あー・・・変な条件なんだろうな・・・。

「条件はただ一つ。あヤツにこう言ってやったのだ。」

“ならば、妾を封印から解放してみせる。出来るといつなら交渉成立の上で貴様に一生の忠誠を捧げてやろうではないか。”

「んだそりや・・・。」

ナンダー一生の忠誠って。

なんでそうなったんだよ！

「不可能だと思つたのだ。そうしたらあやつめ・・・やりおつた。」

言つた直後、交渉相手は不気味に微笑んで「その言葉、確かに聞いたぜ。」と、そう言つていたという。

もうついていけねえよ。

目の前のお前にも、その交渉相手の奴にも。

「まさか妾が下につく日が来るとは思わなかったが、別に嫌な気はしなかったぞ。面白そうだったからのう。」

女は愉快そうにそう語つた。

つていうか、理由が面白そうつてどうなんだよ。

「そうですか・・・。」

「ところで、何の封印から？」

あ、そう言えばそうだよな。

こなたのくせにいい事聞くな。

「今一護失礼なこと考えなかった・・・？」

「い、いや、別に。封印つて何なんだ？」

疑いの眼差しで見てるこなたなんて見えねえよ、オレには。

「あの天使が妾たちにかけたモノじゃ。あの少女と共に生きろとな。」

「ええーっと、じゃあアンタはもうその封印された少女とは一切関係ないって事？」

「何で今のでそこまで理解できたんだよ。」

オレとしてはそつちも気になる。  
あとで問い詰めるか。

「まあ・・・どちらにせよ、じきにあの少女は目覚めることになる  
じやろう。」

「へえー。」

「そうなのか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

で!!

「結局なんで笑ってるのよ!」

「そう、それだ。今の話を聞いても笑いの真相は見えて来ない!」

「・・・聞いて来たのはそちらだと思っがの。」

そ、そういえばそうか。

って言うかもうどうでもよくなってきた。

「おや、帰るのかえ?」

「ああ。」

「では、見送りをつけよう。」

なんだ、気を使ってくれてるのか?

「別に構わねえよ。じゃあな。」  
「ばいばーい。」

二人はさっさとその場をあとにした。  
だから気がつかなかった。

女狐の口元が怪しくゆがんでいたことに。

「しっかし広いよなあー。」  
「さすがお城つてつくだけあるねー。」

二人はのんびりと出口に向かって歩いていった。  
目的を（一応）達成したので、少し帰りがてらにお城の見物をして  
もいいかнаと思っただのである。  
そして、その甘い考えが間違いだった。  
・・・もつとも、どっちにしろこうなっていたであろうが。

「ん？こなた、なんか感じねえか・・・？」  
「たしかに・・・。」



「さすが私のクラスメート、ってところかしら。」

聞き覚えのある少女の声。  
覚えがありすぎた。

「な、バカな・・・うそだろ。」

「生きてたんだ！一応心配したんだよ？」

そして姿を現したのは、紅白な独特の衣装を身にまとった  
巫女。

「心配？それはありがたいけど・・・無意味ね。」  
「久々に再会しといてそれはねえだろ。」

しかし、以前とは違う雰囲気を彼女は纏っていた。  
気を許しきっていた一護達にはわからなかった。

それが殺意であることに。

「わたしはね、破壊者よ。」  
「？」

巫女は淡々と語る。

「そう、たとえるなら何もかもを壊して吹き飛ばす嵐の様な・・・  
まあ、能力的にはフランとかああいう能力者の方がしっくりくるん  
でしょうけど。」

「なに、いつてるんだ？」  
「どうしちゃったの、霊夢！？」

しかし巫女は口を塞がない。  
そして突然、辺りが真っ暗になった。

「うるさいわね。ルーミア、やっちゃって。」  
「い、一護何処にいるの！？」  
「こなたっ？オイ、どうなってんだよ！」

目の前にあるはずの自分の手の平さえ視認できない、冷たい闇。  
常闇とあらわすには大きすぎる闇。

闇というより、視界を阻まれたと言う方がしっくりきてしまう。

「ヒトの話は最後まで聞きなさいよ。どうせもう動けないんだから

おとなしくなさい。」

「・・・。」

巫女はこほんと咳払いを一つして、言った。  
それはもはや死刑宣告のようだった。

「私は素敵な博麗の巫女、博麗霊夢。お久しぶりね。・・・そして」

「ちよつなら」

### 標的43：博麗靈夢VS泉こなた

「ルーミア？めんどくさいからやっちゃって〜。」  
「あいあいさー。」

「ちよつ、どういうこと！？全然前が見えないし！」

何処からかこなたの声だけが聞こえてくる。  
「つーか、オレに聞くな！」

むしろどうしたらいいのかオレが知りたいわ！

「はいはい。その馬鹿二人、私の話を聞きなさい。まあ・・・  
死にたいんなら聞かなくてもいいけど。」

「聞きます聞きます！」

「・・・お前にはプライドがないのかよ。」

何処からか聞こえてきた靈夢の声は、あっさりとかなたを釣り上げたようだ。

こなたコイツ俺より馬鹿だろ、人間的に。

「今から10分時間をあげるわ。このまま殺っても面白くないから、

せめてあがいて見せなさいよ。」

「んだそりゃ……。」

「霊夢、本気？」

どいつもこいつも面白さの問題かよ。

こいつら、命の重みをしらねーんじゃねえか？

「じゃあスタート」

さて……どうするかな。

やっぱり力づくで行くしかない、か？

「一護、私に任せて！」

「はあ？」

「いーからいーから。」

こなたには何か策があるらしい。

とにかく好きにさせるか。

オレがポケットから死神代行証を取り出しながらそう思った時だった。

「秘技・新月斬り!!」

どおん!!……という凄まじい爆発音が辺りに響いた。  
もちろんオレには見えねえから、よくわかんねーけどな。

「……。」

常闇の妖怪・ルーミアが作り上げた闇が、ゼリーのように真っ二つに割れた。  
割れて消えた所には、大きな黒い鎌を持ったこなたが肩を切らせて立っていた。

さしもの霊夢も驚いたようで、困惑した表情を浮かべている。

「ハア……ハア……。」

「……。」

「ど、どうだっ!ハア、ハア……私の秘技にかかれば、ハアハア・  
・・チヨロイもんよ!ゼエゼエ……。」  
「……。」

強がるあなたに、霊夢が冷たい視線を送った。

霊夢のワキに浮かんでいるルーミアもどことなく呆れている。

「・・・ルーミア、リボン解いてあげる。その代わり完膚なきまでにたたきのめしなさい。遠慮はいらないわ。」

ここで説明しておこう。

ルーミアは赤いリボンをつけているのだが、このリボンには秘密がある。

実はこのリボン、ルーミアの力を封じているものなのだ。

「え、いいの？食べても？“元”クラスメートなのに？」

「構わないわ。」

「何、言ってるの。れい・・・む？」

霊夢はいともあっさりと切り捨てた。

もちろんあなたは愕然とした。あんなに仲良く接していたのに！

「見損なったよ、霊夢！友達だと思ってたのに！」

「は？見損なう？友達？・・・変な事ほざいてんじゃないわよ。バツじゃないの？」

「・・・何言ってるの？」

あなたは自身の耳を疑った。

聞き間違いではなかつたか、と。

でも、間違いではなかつた。彼女は確かに言ったのだ。

「あんた達を友達と見たことなんて、ただの一度もないわ。」  
「そん、な・・・・・・」

信じられなかった。

信じたくなかった。

あんなに楽しそうに話していたのに。

あんなに・・・笑っていたのに！！

「・・・魔理沙は？幼馴染、なんでしょ・・・？」

せめて魔理沙のことだけでも。

そう思った。

だって魔理沙は霊夢の一番の理解者だって。

そう、思っていたから。

「あいつは、今も昔も勝手に私について来てるだけよ。私が一度でも魔理沙に話しかけた事あった？」

「う・・・そ。」

確かに私達は、出会ってまだ2カ月くらいしか経ってない。

クラスでは、魔理沙以外は霊夢の事なんて深くは知らない。

フランも赤の他人ではないけどあんまりよく知らないみたいだった。

でもだからって・・・こんな、あんまりだよ。

なんでそんな簡単に裏切れるの？

「・・・なんて・・・できない・・・。。。」



「えっ？」

霊夢が唐突に言った。

聞こえるか聞こえないかの声で呟かれたから、私には聞こえなかった。

（・・・人間や妖怪なんて、信用できない。）

別に全員が全員信用できないわけじゃない。  
でも、そう簡単に心を許すわけにはいかない。

（そのせいで、母さんも母さんの親友も人生をめちゃくちゃにされ  
たんだから。）

「ねえ、なんで！？せめてヒントだけでも・・・」

「水無月一族惨殺事件。」

「へ？」

水無月？

事件ってことは、ケーサツ？

「なんなの、その事件って。」

「ヒントは与えたわ。あとは、もしも生きられたら、自分で調べ」

そこで霊夢の声が途切れた。

私が見る限り、何かが起こったわけでもない。

「手荒い歓迎です事、死神様？」

え？

霊夢の後ろに誰がいるの？

残念ながら、私には何にも見えない。

「手荒い歓迎です事、死神様？」

こなたは見えなくて当然だ。

彼は死神なのだから。

「うるせえっ!!」

こなたが何もいないと感じたところ。

そこには霊夢を背後から斬りつけようとした一護が、いた。

しかし、視認できない何かに阻まれて霊夢には当たっていない。

「オレがお前の目エ覚まさせてやるぜ!!」

「はぁー……。私ね。暑苦しいヤツとかそういうの、キライなのよ。」

「!?!まさか、オレが……。見えてる、のか?」

「……。あのね、巫女さんが靈感なくちゃ話にならないと思うんだけど?」

呆れたようにそうつぶやいた。

一護が、あっそうか、と満足している。

直後、霊夢の目がスツ……と細められた。

「しかもなに、その格好? 正解“天鎖斬月”使えば?」

「な……。?なんでそんなことッ!?!」

「ホロウ化でもいいけど。でしょ? ルーミア。」

「そーなのかー。」

のんきにテキトーな相槌を打つルーミアと対照的に、一護は焦りまくっていた。

当たり前だ。

自らの手の内を、全て知られてしまっているのだから。

「何処で知ったんだ!!」

「……。まだ分かってないの? まあいいけど。」

相変わらず、巫女は冷たい目で二人を見降ろしていた。

「今に分かるわ。一体誰が正しいのかをね。」

標的43：博麗靈夢VS泉こなた（後書き）

はやて「読者のアジト、始まるで！」

なのは「早速質問に答えちゃうよ！」

京子「よろしく願いします」

はやて「『闇夜の黒鳥』さんとこの『火渡優也』くん、ゆう子からや。おおきに！』もしも綱吉がフランと恋人になったら、クラスの皆はどう思う？』やて。」

京子「全力で邪魔します（ニコッ）」

なのは「き、京子ちゃんが・・・怖い・・・」

ハルヒ「2-Aが責任を持って徹底的に邪魔するわ。イイ退屈のぎになりそうね！」

はやて「まあ、もしも恋人になったらの話やけどな。」

なのは「そこまでのの！？・・・って、私も入ってるっ！？」

はやて「邪魔するん楽しそうやなあ」

京子「脳噛君も、きつとノリノリだね」

なのは「・・・にはは。（温かく見守るうという気はないのかな）」

京子「おわろつか せーのっ！」

みんな「ご感想&ご質問お待ちしてま〜す！」

はやて「ほなまたな！」

ハルヒ「人の恋路は私が全力で邪魔するわ！！主に私の暇つぶしのために！！」

なのは（ハルヒちゃん、最後にすごい爆弾落としていっちゃったの・  
・・）

## 標的44：夜空

私が今いるのは、闇の中。

・・・というのは誤解が生まれるから言いなおすよ。

今私がいるのは、夜の草原。

ここは　どこなんだろう。

「久しぶり。まあ、2日ぶりくらいだけど。」

突然後ろから声がした。

聞き覚えのある声。温かくて、優しい感じ。

振り返ると、暗闇の中に誰か立っていた。

そのとき急に私の周囲だけ少し明るくなって、誰なのか分かった。

「・・・うん。会いたかったよ。あっ・・・でも、なんて呼べばいい？」

素直にうれしかった。

呼び方って言っても、元はおんなじ人なんだって分かってる。けど、やっぱり私の中でけじめをつけておきたい。

「別に普通に呼んでくれればいいけど・・・」

普通に？

でも、少し変えて呼ぶよ。

その方がこんがらがらないと思うから。

「改めて。・・・こんばんは、綱吉。」

「そんな改まらなくていいし、呼び方もツナでよかったのに。ところで・・・ホントにいいんだ？」

いいよ。

そのために、私はここへ来た。

彼には　　というかツナには絶大な恩がある。

でも、なのはたちに内緒にしてきたのは少しまずかったかな。

「うん。手伝うって、決めたから。」

「フフツ。その目、うちの風にしっくりだよ。　　よろしく、フェイト。」

そう言って笑った彼のオレンジの瞳は、私の心を見透かすようにきれいに輝いていた。

何度見てもキレイ。

でも一つ気になることが。

「風・・・？」

「うん。ボンゴレの雪の守護者。あ・・・クロームの方がよかった？」

「どっちでもいいよ。私は知らないな、そんな人。」

さらりとボスが機密事項を口外した気がするけど、まあいいか。私は他の人には絶対言わないから。



「ん、こつちも来たみたいだ。」  
「えっ？」

綱吉がパチンと指を鳴らすと、目の前に見覚えのある2人の少女が姿を現した。

「あ、あれ？ここどこ！？真っ暗！！」

「大丈夫だよ、カナちゃん。あつ、ツナ君にフエイトちゃん！」

現れたのはクラスメイトの笹川京子ちゃんと家長カナちゃん。

比較のおとなしくて普通に頭もいいから、クラスでは比較的目的たない子たち。

でもどうして2人がここに？

「来てくれてありがとう、京子ちゃん。」

「ううん。ツナ君の力になりたいの。カナちゃんも一緒だけいいかな？」

私と同じように呼ばれてみたい。京子、とてもうれしそうに笑ってる。

それにしても一体これから何をするんだろう。  
そしてここはどこだろう。

「え、ええつと・・・。」

「いいよもちろん。よろしく、家長さん？」

「カナでいいよ。なんだかよく分からないけど、よろしくね！」

はじめこそビックリしておどしていた家長さんだったけど、少し慣れたみたい。

今は好奇心で目が少し輝いてる　　ように見えなくてもない。

ところで、ここに女子ばかり集まったのはたぶんしょうがないんだと思う。

だって今、男子は全員一人残らず理事長にこき使われてるから……ね。

何をやらされてるかは御愛嬌。

「綱吉、今日はなんのために私を 私たちをここに呼んだの？」

「ここはどこ？ ツナ君。」

力を貸すにしても何にしても、それが分からないんじゃない前に進めない。

私は前に進んでいたいから。

「あ、ここ？ ここはオレの精神世界。」

「えっ……精神、せかい？」

私を含めた3人が大きく目を見開いて驚いた。

へえ……精神世界って他人が入れるんだ。今度なのはの精神世界に行ってみようかな？

行き方分からないけど。

「そ。これから3人には、この世界のどこかにいるオレの片割れを探してほしいんだよ。」

「片割れくん？」

「・・・名前じゃないんだよ、京子ちゃん。」

前々から思ってたけど・・・京子って大分天然だと思う。  
癒し系って感じだから別にそのままでもいいと思うよ。

「ここはツナ君の世界なんだよね。じゃあ、ツナ君が探した方が早  
いんじゃない？」

家長さんがぼつりとそういった。  
確かにその通り。

右も左も分からない素人がやるよりずっといいハズ。自分の世界だ  
から。

「・・・ダメだ。」

「どうして？」

ツナが、今までになく深刻そうな顔でそう言った。  
だからと言って今までふざけてたわけではないけど。

「片割れの所にたどりつくのは確かに簡単だ。でも・・・今のオレ  
じゃ、アイツの鎖を解いてやれないんだ。どこぞの馬鹿が無意識に  
作り出した鎖をな。」

どこぞの馬鹿・・・？

誰のことだろう。

思いつく人は見当たらなかった。

「事情はよく分からないけどわたし、やっとツナ君の力になれるん  
だね。今まで見てるだけだったけど今回は違うんだよね！」

「ありがとう、京子ちゃん。」

ともかくにも行動しないと始まらない。  
まずは夜の草原で何をすればいい？

「はじめは、そこに行くための入り口を見つけ出してほしい。」  
「入り口？」

家長さんが聞き返した。

それもそのはず、そんなモノどこにも見当たらないから。  
薄暗いとはいえだだっ広い草原で不自然な者が見当たらないと言う  
のは、ずいぶんおかしい。

「ただし、普通の人には見えない。」

たぶん今ここに、普通の人がいないと思う。

「見えないものを探せってこと？どうやってさがすの！？」  
「そもそも、綱吉が私たちをその片割れの所に連れていけばいいこ  
とだと思っけど。」

ビックリする家長さんと同じくびっくりしている京子。  
ともかくにも私は聞いてみた。  
だってこの方法だとすぐにつけるハズだから。

「確かにオレは行ける。でも・・・オレだけなんだ。フェイト達は  
連れていけない。だから自分の足でたどり着いてもらっほかに方法  
がないんだ。」

「・・・そっか。」

それはわかった。  
でもどうやってみつける？  
私が探査してみる？

「私の魔法で探してみる。」  
「う、うん。フェイトちゃんがんばって！」  
「無理しちゃだめだよ！」  
「うん。・・・ありがとう。」

二人とも優しいな。  
こんな私の心配をしてくれる。

数分後。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」  
「ど、どうかな？」  
「見つかった？」

見つからない。

私の魔法には引っ掛からないって事？

「探知じゃ無理だよ。ちゃんと視ないと。」  
見る？

見えないものをどうやってみるの？

「あつ！」

それを聞いた京子が、声をあげた。  
何かに気がついたみたい。

「私なら、見れるかも！」

「ホント！？」

嬉しそうに彼女はそう言った。

他の人の力になれる事がよほどうれしんだと思う。  
私だって、方法があるなら試してみたい。やってみて、京子。

「そういえば、京子の能力って？」

「わたしの能力は真実の瞳。トゥルーパーアイズ 見えないものがみれたりするんだよ。」

なるほど、そういうことだったんだ。

ということとは。

「綱吉・・・最初から気づいてたよね。」

「あれ、バレちゃった？」

知ってるなら最初から言ってくれればいいのに！

何で言ってくれないの。

私が慌ててそう聞くと 綱吉、何て言っただと思う？

「言っちゃったら面白くないじゃん。悩んでる顔を観察するのが面

白いのに。」

・・・彼はそうのたまった。

絶対ツナのマイナス部分集めてきたのが綱吉なんだよ。

ツナはこんなに黒くない！！

なんやかんやで、私たち3人は真っ黒い綱吉と共に人探しをする  
ことになりました。





「こなた「せ」の」

「護&こなた「ご質問&感想おまちしてまーす!」!」

標的45：ルーミア（前書き）

台風が心配な蜜柑です。

・・・あれ？この台風うちの県狙ってないか？

気のせい・・・？

## 標的45：ルーミア

「靈夢・・・！」

新月斬りというのは、私の全靈力と引き換えに闇を切り裂く大技で  
いわゆる所謂必殺技だ。

ゆえに今の私はただの少々オタクな人間だ。

靈力を持たないただの人間に、靈夢の後ろにいる（らしい）死神（らしい）なんて見えない。

非常に残念だ。

「つて、ぎゃあああぁっ！？一護ッ！！」

フツと横を見ると、一護の死体・・・ゲフンゲフン。

一護が倒れていた。

どうしよう。とりあえず起こすか。

「・・・大丈夫、だよ。うん。たぶん。」

一護は殺しても死なないし。

「オイ！れい・・・」

「相手しろって言うんでしょ？イヤよ。疲れるし。」  
「んなつ？！」

ぶつちゃけ、戦わないんじゃないんで戦えないんだけど。

アイツとのちよつとした戦闘で、持ってきたスペルカード使いき  
っちゃったし。

神社まで取りに戻るの面倒なのよね。

陰陽玉もイカレちゃってて使いもんになんないし？

まあ・・・いざとなったら御抜い棒と御札で相手してあげない事もないけど。

「というわけでルーミア。コイツ食べちゃっていいわよ。」

「たべ・・・っ！？」

「ホントに！？いいの！！」

「ええ。本気と書いてマジよ。」

言うと同時に、懷から赤い御札を取り出してルーミアのリボンに向  
かって投げつけた。

赤いリボンがはじけて彼女の頭から離れる。

瞬間、辺りが再び闇に覆われた。

「見せてもらおうかしら。常闇妖怪の本気ってやつを。」

「な、なんだ？」

「ウフフフツ……。」

突然一護とルーミア以外のモノが闇に覆われてしまった。  
どうやらこの目の前のヤツの仕業らしい。

ルーミアはリボンが外れたのと同時に風に覆われてしまい、姿が見えない。

しばらくすると風がはれ、妖怪が真の姿を現した。

「さあ、食事の時間といきましょうか。小僧。」

「誰だデメエ！！」

「ルーミア。常闇の妖怪ルーミアよ。」

「常闇じゃなくて真つ暗闇でしょうが、今のあんたの場合。」

何処からか霊夢の鋭いツツコミが飛んでくるが、気にしてはいけ  
ない。

さて。

現れたのは先程の少女       ではなく美人の女性。身長も大分伸びて  
いる。

ショートに切りそろえられていた金髪は腰まで伸び、スタイルも抜  
群だ。

手には真っ白い十字架を模した日本刀が握られている。  
対照的に真っ黒なワンピースは先程と変わっていない。

「やっぱり日本刀が一番切れ味がいいのよねー。ね、そう思わない  
？」

「え？あ、ああ……？」

つい見とれてしまった一護は、まんまとルーミアのペースにさせられた。

しっかりしろよ。

ちなみにルーミアはまじまじと一護を観察していた。

おそらく死神が食べられる種族なのか品定めをしているのだろう。彼女はそういう妖怪である。

「・・・というわけで、今からさっそく死神代行様の調理を開始しまーす」

「調理っ！？なにいつてんだよ！」

「あれ？知らないのかしら。私人食い妖怪なんだけど。」

「はあ！？」

ナチュラルにすごい発言である。

要約すると「さっさと死んで餌になれや。」ということだったりする。

やはり幻想郷の妖怪は恐ろしい。

いや、一番怖いのは平然としてるその紅白な巫女さんなんだが。それはこの際置いておこう。

「おいしそう・・・。（じゅるっ）」

「ざっけんな！卍解“天鎖斬月”ッ！」

一護が風に覆われ、再び姿を現した時にはずいぶん身軽になっていた。

重そうだった巨大な包丁型の斬魄刀も、普通の剣と同じようになっている。

「あんたも黒なんだ。いいねいいね」

「オレに正解させたこと・・・後で後悔すんなよ！」

「後悔なんてしないわ。どちらの黒が勝るか試してみる？」

ルーミアの口元がにやあつと歪んだ。

直後、いい笑顔に切り替わる。

「というわけで・・・死ね」

「断る！」

「一護っ、しつかり！」

「あーもうるっさいわね。さっきからイチゴイチゴと・・・。」

喚くこなたに向かって、霊夢が陰陽玉を投げつけた。

丸腰の元クラスメートに対して微塵の容赦を感じられない。  
なんという女。

「ぶべらっ!？」

「ガキは黙っておねんねしてなさい。ああ。私の専門は妖怪とか幽霊だから、心配しなくてもただの人間を殺すようなことはしないわ。そもそも私殺人鬼じゃないし。巫女さんだし。」

前言撤回。

少しは人としての感情があったようだ。

「れ・・・む・・・。」

こなたはあっけなく意識を手放してしまった。

こちらはツナさんの精神世界。

3人の少女たちが、広い草原にぽつんと立つ扉の前にいた。

「これがそう?」

「開けてよ。フェイト。」

「・・・京子開けて。」

「で、でも・・・」

もういいからさっさと開けるよ。

後ろ見てみ、後ろ。

「後ろ?」

「あの・・・綱吉、さ・・・ん?」

「時間がないって言うてんのが分かんない?(ニッコリ)」

それはもういい笑顔で。

のちの3人によると、凄まじい笑顔だったらしい。  
ただし目は全く笑っていなかったが。



「「「あ、あのその・・・」」」

「さっさと逃げ。（二）」

「字が違ーう！！」

そういつて、笑顔のまま3人を扉に向かって思いっきり蹴りつけた。そのなかに惚れた女がいがようが綱吉様は容赦なかった。

カナちゃんのツツコミも空しく、美少女3人組は扉の向こう側へ吸い込まれていった。

血まみれの死神と美しい妖怪。

全く対照的だった。

「まだスペカ・・・一枚も使ってないんだけどなあ。」

「んだよ、スペカって！！」

言いながら一護が瞬歩で後ろに回り込み、ルーミアを斬りつけた。

瞬歩とは、死神の高速で動く際の歩行方法で上位の死神にしか出来ない高度なものだ。

しかし切られたルーミアは手ごたえがなく、消えてしまった。

「うん、いいねいいね。黒い服に真っ赤な血がいいコントラストになってるわ。」

「ざっけんな！月牙天衝！！」

げつがてんしょう

月牙天衝は、一護の唯一にして最強の技である。

これが通用しなければ・・・彼に勝機はない。

ルーミアはまともに受けたらしく、姿が見当たらない。

「やったか？」

しかし。

「・・・はあ。バカの二つ覚えね。」

「なっ！？」

エクストラ

EXルーミアは、傷一つ負わずにその場にたたずんでいた。

## 標的45：ルーミア（後書き）

ツナ「読者のアジト始まるよ！」

ランボ「ランボさんもいるもんねー！」

イーピン「ランボ、暴れるだめ！」

ツナ「あはは・・・じゃあ質問コーナーからいこつか。」

イーピン「質問読む！『闇夜の黒鳥』さんのキャラ『月臣龍』さんから。」

ツナ「ありがとう！」

イーピン「『博麗霊夢のクラスメートに質問だ。 博麗霊夢の腋出しファッション（？）はどう思う？ 一応、沢田綱吉はちゃんと答えてくれ』。」

ツナ「あ、うん・・・いいんじゃないかな、個性的で。」

かごめ「センスいいな〜って思うわ。 同じ巫女さんとして。」

神楽「奇抜アル！商店街なんかでよく目立つネ。 迷子になりにくくていいアル！」

ツナ「うわっ！？どこにいたの！（巫女さんのセンスいいのか、あれ？）」

ランボ「次はランボさんがお手紙読んだもんねー！」

ツナ「ええと、『ごくでヴある』さんのキャラ……ってD・スぺ  
ードっ!？」

イーピン「シェイシェ謝謝！」

ランボ「『沢田綱吉、あなたはクラスメイトのファッションをどう  
思いますか』。ツナく答えるー！」

ツナ「ええっ!？……こ、個性的でいいんじゃ……」

ハルヒ「さっきとおんなじこと言うなんて面白みが全くないわ。」

ルイズ「これだから男は……」

ツナ「だからどっからでてくんの!？」

越前「本編で出番少ないし。」

ツナ「そ、それはそうだけど……」

織姫「黒崎君ばかり目立ってずるいよ！」

ツナ「いやいやいや！オレに言われても困るよ！」

満「……質問……」

ツナ「あああっ！答えてないよね！ええっと……皆派手だと思います。  
……オレなんか普段着パーカーとジーンズなのに。」

神楽「しょうがないアル。」

ハルヒ「じゃあこの辺で終わりましょ。」

ツナ「せ、せのっ!」

みんな「ご感想&ご質問お待ちしてまーす!」

ランボ「ランボさんも出番ほしいもんね。」

イーピン「無理言わない!ランボ!」

## 標的46：性格

「・・・んっ？」

一番最初に目を覚ましたのは黒髪の少女だった。  
のちにこれを彼女は死ぬほど後悔することになるのだが・・・。  
それはもつと後の話。

「あ、あれ？ここは・・・」

「お・そ・い」

「あ、ツナくん・・・ってえ、ええええっ！？」

いきなり黒髪の少女　カナちゃんの目の前に現れたのは、無数の  
ナイフ。

暗闇の中からそれは突如出現した。

「さっさと起きないとコイツで斬り裂いちゃうゾ」

「いやああっ！ちよ、二人とも今すぐ起きてえっ！！！！殺される！  
」

笑顔を純粹に恐ろしいと思ったのは初めてです。

そ、それはさておきまして。  
ここでわたしに揺さぶられ、ようやくフェイトと京子が目を覚ました。

「え．．．？」

「．．．ん。」

周りの状況が今一つ掴めていない2人は、一人慌てるわたしを不思議そうに見た。

残念ながら、まだ意識がもうろうとしているのかその後ろの笑顔の鬼には気付かなかったらしく。

「そんなに慌ててどうしたの？」

「カナ？」

「こ、こ、殺されちゃうよぉっ！！」

「へ？」

ここであつやく2人が自分たちを取り囲む無数のナイフに気がついた。

ナイフは空中で静止しており、常に3人を狙っているかのようだ。

「オレを待たせるなんて何様？（ニコ）」

（（お前の方こそ何様だよ！）（

「あつ、ツナ君だ」

・・・若干1名のんきなのか天然なのか分からない人がいるが、おいておく。

それ以外は“心の中で”全力でツッコんだ。

『何様オレ様綱吉様』のこのツナに言っても無駄だと分かりきっていたし、これ以上状況を悪化させたくなかったからだ。

というかただ単に怖かっただけというのが一番の本音なのかもしれないが。

そのとき。

どすっ！

「きゃあっ！？」

鈍い音の後に足元を見ると、カナちゃんの足から数センチ前の所に銀色に輝く凶器が突き刺さっていた。

「な、ナイフが・・・」

「落ちてきたね。何処に合ったのかな？」

京子ちゃんよ。

目の前に五万とあるぞ、同じナイフが。  
気付いてないわけはなからうて。

「チッ・・・外したか。」

「よく分からないけど、惜しかったねツナくん！」

（（ちょ、京子ちゃんっ！？））



この子どもまで天然なんだろうか。  
まさか、演技ということは・・・ないか。  
この子に限ってそれはないだろう。

「ちよつと、危ないよ！もう少しで私に当たってたじゃない！」  
「当てようと思ってたしね。それに、最初に起きるからだよww」  
「綱吉・・・。」

相変わらず彼はニコニコしている。

「カナちゃん、大丈夫だよ！ツナくん優しいから本気でナイフ突き立てちゃったりしないよ」  
「優しい・・・？あれのどこが！？」

カナちゃんがバツと振り向いて、後ろにいたツナとフェイトを指した。

「いひやいいひやいいひやい！（痛い痛い痛い！）」  
「んー？聞こえないな。」  
「あ、ツナちゃんとフェイトちゃん？なにしてるの？」

そこには、真面目な顔してフェイトの右のほつぺたを引っ張るツナがいた。

引っ張られている本人は、手足をばたばたとさせている。

「いやね、フェイトのほつぺたに何かついてたから取ってあげようと思って。」

「（絶対ウソだ！）そ、そうなんだ・・・へー・・・」  
「ほるはらはひやくひて！（取るなら早くして！）」

カナちゃんはすぐにウソだと見抜いたようだが、フェイトは気が付いていないようだ。

明らかにツナが楽しんでいるので誰でも分かる気がするが。

「ウフフ、仲いいね」

「主にどの辺が？」

京子の感性を理解しかねるカナちゃんだった。

「・・・卯月、さん？」

「瑞萌で結構ですよ。年上だからという遠慮はいりません。どうかなさいましたか？」

今現在、クロームは15歳。

対して彼女は18歳だと語ったのである。

「どうして・・・私を？」

クロームの問いに、彼女はフフと笑いながら答えた。  
着物の裾を口に当ててとても上品に笑う。

「なーくんの信頼している方ですから。あら、ボスという言い方の

方がよかったですか？」

「いえ・・・どっちでも。」

相変わらず彼女はコロコロと笑っている。

今の状況のクロームには、それが理解できなかった。  
なぜなら。

「・・・追ってが来るかも。」

そう。

クロームの脱走を知ったヤツラが追いかけてくるかも知れないからだ。

「お気になさることはありませんのよ。少なくとも2日は西行寺幽々子たちが帰ってくることはありません。」

「でも・・・」

「ご安心くださいな。もしも追って来ても私が<sup>わたし</sup>お相手してさしあげればよいだけの事。」

クロームは、そう言った瑞萌の瞳にあやしい輝きを見た。

しかしそれはすぐに引っ込んでしまい再び元に戻っていた。

不思議には思ったものの、クロームは自分の見間違いだと考え何も言わなかった。

「あ、言い忘れておりました。」

「なに・・・？」

「町中等の他人のいる場所で私<sup>わたし</sup>を呼ぶ時は、『アルファ・タウ』とお呼びください。私のもう一つの名です。世間一般ではこちらの名を使っているので間違えのなさらない様に。」

つまりは偽名だ。

これは本名を語れないと言う事を意味している。もっとも、ここはイタリアなのでクロームを助けに来るようなイタリア人はならばそういう人種だろうが・・・彼女はどう見たって日本人である。

「・・・どうして、あつたばかりの私に本名を名乗ったの？」

「なーくんのご友人ならば絶対の信頼がおけますでしょう。あなたは信頼できない人間ですか？」

「い、いえ・・・。」

とはいえ、匣兵器を持っていた時点でカタギではないことは確かだった。

瑞萌がゆつくりとほほ笑んだ。

「・・・どうかなされましたか、クローム様。」

「あなたは・・・だれ？」

クロームは知りたかった。

自分をあの場所からあっさりと連れ出し、なおかつ偽名を名乗る必要のある彼女は何者なのか。

そしてとある一族とは何なのか。

目の前の女性は、本当に信用できる存在なのか。

「そうですね・・・。ところで、5年前に裏社会を騒がせた“雨夜の流星”という人物を御存じですか？」

「！！・・・まさか。」

“雨夜の流星”といえば、麻薬密売を行うマフィアを片っ端から潰している裏社会では知らぬ者はいないほどの有名な殺し屋である。

しかし有名なのはその通り名だけであり、どんな人なのかすらわかっていない謎の人物なのだ。

この殺し屋の潰した後のマフィアは、さながら流星が落ちた後の様にあちこち穴ぼこだらけの酷い惨劇であつたためこう呼ばれるようになった。

ただ、ここ3年活動の様子は全くない。

「お分かりいただけそうですね。・・・そうです。私がその“雨夜の流星”です。それと同時に、私は月一族の生き残りで卯月家の最後のひとりでもあります。」

「・・・。」

残念ながら、クロームは月一族を知らなかった。

「今現在は家族　ファミリーのもとで暮らしています。」

「・・・どのファミリー？」

「名乗るほどの規模も歴史もありません小さな小さなところですから。」

彼女はファミリーの名を明かす気はないようで、コロコロと笑った。クロームは知りたかったので、何度も頼みこんだ。

「・・・そこまでしてお知りになりたいのですか？」

「はい。」

彼女の決意は揺るがなかった。

少しでもこの人について知りたい。

恩人であるこの人に何か恩返しをしたい。

そのためにはどのファミリーの人か知る必要がある。

「分かりました。ただし口外無用ですよ。一步間違えば私<sup>わたくし</sup>たちの沈<sup>オ</sup>黙<sup>メルタ</sup>の掟に引ッ掛かるやもしれませんので。」  
「わかった。」

クロームは目を閉じて、外部との接触を一切断った。

彼女は精神世界を通して骸と触れ合うことが出来る。

つまり、骸のような輩に盗み聞きされなくなかったのだ。

「そうですね。名乗ると言うならば、私たちは“ステツレファミリ  
ー”といったところでしょうか。」

「・・・聞いたことない。」

「当然ですよ。私たちが名乗ったのはクローム様が初めてなのですから。」

ステツレとは、日本語で星を意味するイタリア語である。

「あなたは・・・その幹部なの？」

クロームは、彼女の強さからそう判断した。  
しかし帰ってきた返事は意外なものだった。

「いいえ。私はただの構成員でしかありません。家族で表すならば、父上や母上に当たる人物が幹部。私は限りなく末っ子に近い子供に当たります。あの方たちは私なんかより、もっともっと素晴らしい方々ですよ。」

「・・・ウソ・・・！」

（それに私は、幹部の“証”を持っておりませんから。）

「・・・あのさ。私考えたんだけど。」  
「何を？」

ツナの目を盗んでカナちゃんが言うにはこうだ。

「あのツナくんって、私たちの知ってるツナちゃんと全く逆の性格なんだよね？」

「仲間想いではあるみたいだけど。たぶんね。」

「そっか！ということはあのツナくんは・・・綺麗好きの完璧主義者で厳しくてオレ様で卑屈で唯我独尊で文武両道の天才で鬼畜で辛党でとっても優しいんだね」

「なぜ“優しい”固定？」

案外ツナのこと分かってんじゃないかと、2人は京子に感心してしまった。

というか。

（（性格が天才鬼畜オレ様の完璧主義者でしかも捻くれてるって・・・果てしなくめんどくさっ！！））





## 標的46：性格（後書き）

京子「読者のアジト始まるよ」

ツナ（きよつ、京子ちゃん！相変わらず可愛いな・・・）

京子「今回のお便りは2つだね。まず一つ目は『闇夜の黒鳥』さんのキャラクター『竜也』さんからです！」

ツナ「あ、ありがとう！」

京子「じゃあ読むね。『EXルーミアはうちの優也の闇の力を見てどう思う？ 親近感とか湧くのか？』。」

EXルーミア「そーだねー。私は闇そのものだからね。人間が闇を使えるって言うのはちよつと興味あるわ。」

ツナ「何処から出てきたの！っていつかどちら様！？」

EXルーミア「いーじゃん。じゃあまた会おうね、ばーい」

ツナ「言うだけ言って帰っちゃったよ！」

京子「続いては『ごくでぶある』さんのキャラクター『タナ』さんからだよ。」

ツナ「ありがとう！」

京子「ええつと、『一護は死神の中でも異質の部類だけど・・・幻

想郷の死神とは会った事あるの？もしくは地域区分が違うのかな？  
だって。」

一護「幻想郷？悪イ・・・聞いたことねえな。隊長陣なら知ってる  
かしんねーけど、オレはしらねえな。」

ツナ「またどっから湧いて出た！」

一護「人を幽霊みたいに言うなよ。」

ツナ「・・・ある意味幽霊なんじゃ。」

一護「ほっとけ。」

京子「ウッフ、そろそろ終わろうツナくん！」

ツナ「そ、そうだね。せーのっ！」

みんな「ご感想&ご質問おまちしてまーす！」

一護「幻想郷か……。白哉にでも聞いてみるか。」

標的47：EXルミアVS黒崎一護

日本国 大阪府『大阪城』。

「んゝ・・・。」

「隠れてないで出てきやがれ！」

「全く隠れてないんだけどなあ。目の前にいるのに。」

いねえだろ！

少なくともオレには見えねえし。

「あ、見えないのか。そっかそっか。」

「こんのヤロ・・・！」

明らかにナメられている。

やりかえしてえけど、本気で相手がどこにいるのかわからない。

神経を集中させてみても残念ながら相手は霊力を持ってねえからわかんねーし。

「なるほどなるほど。本気で叩き潰さないと諦めない・・・と。おーけーおーけー！！」

「はあ？」

今の今まで隠れていたそいつは、突然闇の中から姿を現した。  
出てきたそいつの眼があやしく輝いたのを、オレは見逃さなかった。  
そしてそれを見たオレは固まった。

「これが私の本気よ。死なない様にかんばってねー。」

あの女の背中に翼が生えた。

天使の羽を黒で塗りつぶしたかのような美しい翼が。

「なめんなー!!」

「おそい。」

翼の生えたルーミアが、オレの瞬歩を上回った・・・？

そんなばかな！

背中にあいつの日本刀が容赦なく振り下ろされる。

ギリギリでかわしたから深い傷にはならなかったが、やっばいてえ。

「ぐはっ・・・」

「だいたいさ。本当に仲間って言うのが心配なら、真っ先に探しに行くんじゃないの？こんなとこでなにやってんの？」

「うるせえっ！」

目の前のこいつを倒すのに必死なオレに、アイツの声は耳に入らなかった。

激しい打ち合いが続く。

「はぁ・・・。今のあんたには集中力が足りない、気合が足りない、そして。」

ルーミアがオレの目の前に一瞬で現れた。

そして言い放った。

「殺気が足りない。殺す気がかかっておいでよ、黒崎一護!!」

「ぐうつ！」

このオレが死を覚悟してしまった。  
いつもあきらめないことが取り柄だったオレが。  
アイツの殺気に当てられただけで。

「くっ・・・そおっ!!」

そしてそいつの日本刀が振り下ろされそうになった、まさにその時だった。

「チッ!!」

「なっ・・・テニスボール？」

黄色物体が、オレとルーミアの間に割って入った。  
ルーミアは舌打ちしながら、とっさに身を引いてよけた。  
割り込んできたそれは、間違いなくテニスボールだった。  
一度地面でバウンドした後闇の中に姿を消した。

「そこまでだよ。」

「越前!?! お前越前か!」

姿は見当たらなかったが、間違いなく越前リョーマの声だった。  
毎日教室で聞いてんだ、間違いねえ。

「お前生きてたんだな!」

「・・・うるさい。」

「んな!?!」

だけど何でここが分かったんだ？

「はあ。黒崎一護……まだまだだね。」  
「は？」

気がつくときオレは、大阪城の中の一室に立っていた。  
目の前には霊夢とルーミアがいた。足元にはこなた。  
そして。

「時間切れね。まあ、わたしたちの責務はちゃんと果たしたから。」  
「なんの、話だよ……？」

「次会った時は本気で殺すからもっと強くなっててよね、黒崎一護。」

「おい！」

ルーミアが言い終わると同時に、霊夢が御札を足元に投げ付けた。  
その御札は煙幕の様なものだったみたいで、白い煙が霊夢達を包み込んだ。

「げほっ、ごほっ。」

煙がはれた時、あいつらの姿はなかった。  
越前の気配も消えていた。

「……なんだったんだ？」

「もうちょつとでルーミアが本気で一護のバ力を殺すところだったわね。」

「惜しかった。」

「・・・もつと手加減すればよかったんじゃないっすか。」

大阪城の頂上で先程の三人が話していた。

眼下には、こなたを抱えて走る一護の姿。

「あーあ。なんでわたしがこんな役回りなのよ。めんどくさ。」

「ちゃんと2人を脅せたし足止め出来たしー。これもとれたからよしとしとこーよ。」

いつのまにかきちんとリボンをつけているルーミアがとり出したのは、羽衣狐から一護たちがもらった真つ黒い数珠。

一瞬の隙を見て、彼女が奪ったのだ。

「奪い返すんなら最初から渡さなくてもいいじゃない。めんどくさい。」

「妾と戦わす気か？」

「・・・アンタ、何処から湧いて出たんすか。」

いきなり後ろから話に乱入してきたのは、今話題に上っていた羽衣狐。

一体全体どこから現れたのかは謎だ。

呆れる越前をスルーし、霊夢が話を続けた。

「そーよ。あんたが戦えばよかったんじゃない。」

「加減が出来んからすぐにヤツラ死・・・」わたしたちでよかったわね、ルーミア。「遮るな。」

物騒なことを言いかけた羽衣狐を霊夢が素早く遮った。  
「というか、お前らもさっきまで物騒なコト連呼してたろ。」

「あの娘、ホントに信用していいの？」

「妾が保障しよう。」

「あつそ。アンタの方が信用できないけどね。」

ケンカ腰な会話をしながら霊夢達は、走り去る一護を最後まで見送った。

「あう……。何よあの気持ち悪い生物！？絶対この世の生き物じゃない！」

麗美がいるのは理科準備室前。

神楽とマト　　もとい、ブラック　　ロックシューターは未だにあの赤いぶよぶよ（フルフル亜種の事）と戦っている。

ではなぜ彼女はここにいいのか？

「2人が隙を作って一足先に逃がしてくれたから何とかなったけど・  
・大丈夫かな、2人とも。」

そう、例のピーカーを持っている麗美を2人が逃がしたのだ。



「と、とにかく入らないとダメだよね！」

麗美は意を決して、準備室の扉を恐る恐る開けた。

そこはカーテンを閉め切っているのか、暗闇が広がっている。

「ご、ごめんください・・・だれかいらっしゃきゃあつー！」

一歩踏み出した麗美は、突然何かに足を取られて転んでしまった。

「もー！なんなのよ！誰がこんなところに物を落と、し・・・た・・・？」

足元に転がっていたのは、銀髪天パの男。  
人間だった。

「いやあああああつー！！！」

## 標的48：彩咲麗美VS弱音ハク

「こうしてお前と会うのは何年ぶりだ？」

「・・・八雲紫はいないのね。」

「紫は今外出中だ。」

一護やハルヒたちが交戦していたのと同じころ、木魂学園の一室に人影があつた。

ひとりはこの学園の理事長のものだ。

「そうだ、紅茶でも入れた方がいいな。そのソファーにでも座つて、少し待っている。」

「ずいぶん無防備ね。」

理事長はなにもいわず、そのまま女に背を向けて紅茶を入れ始めた。彼女の言う通りあまりにも無防備だ。

女　西行寺幽々子とは敵であると言つのに。

「いいのかしら、私に背を向けて？私は敵よ。」

「でもお前にオレは殺せない。そうだろう？」

「・・・。」

意味深な笑いを浮かべながら理事長がそう言つと、幽々子の扇子に隠れた表情が僅かに歪んだ。

彼は気付いているらしくそれ以上何もいわなかった。

それと全く同じころ。

火の国・木の葉隠れの里近くの森林。  
そこに白髪の少年の姿があった。

「誰が白髪ですか！」

「ウォーカーさん・・・？どうかされましたか？」

「あつ、いえ！こつちの話です。気にしないでください！」  
「？」

彼は今、この森にある洞窟に案内してもらっていた。  
木の葉の里の忍　つまり忍者だ　に依頼したのである。  
しばらくすると、案内役の忍の足が止まった。

「ここです。」

「・・・ここに・・・。」

「それでは私はこのへんで失礼します。」

「ありがとうございます！」

アレンはお礼をいってすぐに洞窟の中へ歩を進めた。  
中は真つ暗で、懐中電灯を持っていなかったら何も見えずに迷っ  
ている所だ。

何もしくなくても迷いやすいアレンにとっては致命的なのである。

「・・・？ここだけ明るい？」

しばらく進んでいると、右側に一部屋だけあかあかとしている部屋があった。

恐る恐る覗いてみると・・・そこには人影があった。

「よく見えませんね。これ以上明るくできないし、周りはどこも真っ暗だし・・・思い切って突撃するしかありませんか・・・。」

アレンは覚悟を決めた。  
そして。

「その人！怪我をしたくなかったら動かない、でく、だ・・・さ・・・？」

勢いよく飛びこんでいった先で飛びこんできたのは。

見覚えのありすぎる2人組。

できれば会いたくはなかった。

「はれっ？少年？」

「アレンだあゝ。ほらね、ボクの言った通りじゃん。」

「マジかよ・・・。賭けはロードの勝ちか。」

アレン達エクソシストの宿敵であるノアの一族のうちのふたりだった。

「ティキ・ミックとロード！？なんでこんなところに！」

「あー・・・うん。まあ、いわゆるロードワーク？ってやつ？」

「普通にお仕事っていいなよあゝ。しかもそれ間違ってるしい。」

「うるせえよ。」

「・・・・・・・・最悪だ・・・・・・・・！」

最悪の相手と出くわしてしまった。  
それがアレンの一言目の感想だった。

「銀八・・・・・・・・せん、せ・・・・・・・・？」

私はこの人と喋ったことは一度もない。  
もちろん、会った事もない。

「しっかりしてください！」

私自身、検事であるお父さんについて回ったり弁護士である師匠のそばにいたから死体なら見慣れている。  
死体なんて出来れば見慣れたくはない。  
それはともかく・・・・・・・・だから生きてるかどうかの確認とか手際よくできる自信がある。

「脈は・・・・・・・・ある、呼吸もしてる・・・・・・・・。よかった・・・・・・・・！」

すぐさま先生を仰向けにして心肺停止か否かを確認する。  
幸い頭を強く打って気絶しているだけだった。  
あと10分もすれば目を覚ますだろう。

「でも誰がこんなこと……。」

そもそもこの部屋には鍵が掛かっていて、私が開けるまで誰も来れなかったはずなのだ。

もつとも、合鍵でも持っていたなら別の話だが。

「……。」

でも坂田先生はそれらしきものを持っていないし、彼の近くにも転がっていない。  
とすれば。

「だれか、いるんですか？もしもし……。」

誰かほかにいるのではないか。

この狭い部屋のどこかに？いるの？

なんというか、これはもうちょっとしたホラーだ。

「何で気付くの？」

「あはは……知らないよ。」

「だれかいるの？」

突然、奥から声が聞こえてきた。

恐る恐るそちらに向いてみたけど誰もいない。  
とにかく行ってみるしかない。

声が聞こえてきた先にあったのは……理科室と書かれた扉。

「失礼、します。」

ギギイッと古めかしい音を立てながら扉を開くと、そこはごくごく普通の理科室。  
誰もいない。

「だ、誰かいるなら出て来て下さい！」

でも誰も出て来ない。

あたりはシーンと静まり返ったままだ。

正直帰りたい。死体見るより怖い。

幽霊はマジで無理なんだよ。いやこれ本気で。“本気”と書いてマジで。

「ねえ・・・そのままでもいいから聞いてくれない？」

「な、ななな、幽霊さんですか！？」

しまった。

私としたことがついテンパってしまった。

心はこんなに穏やか？なのに！

「私は鏡音リン。かがみねそのままでもいいから聞いて。」

「は、はい。」

まだ若干どもりながらも、鏡音と名乗った女の子の話に耳を傾けることにした。

声が高かったから女の子だと思った。

最近の幽霊はもしかして少女が多いんだろうか？

「あなたがもしもロボットで、たった一つだけ願望が持てるなら・・・人間になりたいって思う？」

「えっ？」

唐突な問いだった。

いきなりロボットの話しされてもよく分かんないんですが。

「わたしなら“心”がほしいかなあ。体は機械でも別に困らないし。むしろ部品交換だけでいつまでも生きられるからちよっと面白そう。」

「・・・そう。そうだよな。私たちはもうとっくに大事なモノをもらってるよね。」

「？」

さつきから意味が分からない。

もしかしてこの幽霊は頭を強く打って死んでしまった人なんだろうか。

だとしたら気の毒だな・・・。

「急にごめんなさい。キミに頼みがあるんだ。」

「幽霊様が姿を現された!？」

「誰がオバケだロン毛!!ちゃんと生きてるから!あ、生きてはないか。」

考え事をしていた私の目の前に何処からともなく現れたのは、黄色い双子。

男の子と女の子なんだけど・・・いやうん、たぶん双子。

どことなくめっちゃ似てるし。

先に喋ってたのが男の子で、後からツツコンだのが鏡音リン?って名乗った子。

「どっちだよ!・・・んで、お願いって?あつ、私は彩咲麗美。この理事長の知り合いです。あなた達は?」



「ボクは、鏡音レンです。この高校の1年生で、リンの双子の弟してます。」

「鏡音リン。レンのお姉さんしてるわ。」

あたっちゃったよ。

ホントに双子だったよ。

すごいね自分！適当に言ったのにな！

「単刀直入に言うけど、姉さんの目を覚ましてやってほしいの。」  
「姉さんを助けてください！」

だれだ姉さんって！

私分かんないよ、あなた達のお姉さん。

「弱音ハクって言う名前で銀髪ポニテの人なんだ。」  
「んっ？弱音ハク・・・？銀髪ポニテ・・・？」

なんだろう。

すつごく最近そんな人に会った気がする。  
思い出せないけど・・・。うっん？

「姉さんは人間になることにとりつかれてる。そんなのなれっこないのに。」

「絶対誰かに入れ知恵されたに決まってるんだ。」

「・・・そっか。」

あれー、おかしいなあ。

私坂田先生探しに来たんだよね？

それだけだよ。

何でこんな厄介事に巻き込まれてるのかな？

「でもたぶんそれ他の人にたのんだ方が、いつ!？」

「きゃああっ!」

「リン!麗美さん!」

私がやんわりと断ろうとしていたその時だった。

突然、私から向かって右側      グラウンド側      の窓ガラスがはじけた。

幸い私たち3人にけがはなかった。  
でも。

目の前には見たことのない生き物がいた。

たとえるなら・・・そう、恐竜で小型の2足歩行のトカゲみたいな  
のっているよね。何種類か。

あんな感じ。

白い毛皮は美しいんだけど。

「・・・ねえ。あれなにかな?」

「・・・。」

「・・・・・・・・・・ドスギアノスだ。ハク姉さんが召喚魔法で呼び寄せたモンスターだよ!」

「うそーん!!!」

こんな狭い部屋で逃げる場所があるわけもない。

おまけに後ろにはブルブル震える可哀想な双子。

・・・これはやるっきゃないよね、わたしが。

「どうしよう。私戦えないよ?めっちゃ怖いよ!」

「うわあああっ・・・。」

「レン!お、男が震えて、ど、どどうすんのよ!」

彩咲麗美17歳。

人生最大のピンチです。

これはマジでヤバいです。

標的48：彩咲麗美VS弱音ハク（後書き）

ツナ「読者のアジト始まるよ！」

麗美「早速質問に答えちゃおう。『闇夜の黒鳥』さんトコの『天道優花』さんからです。」

フラン「ありがとっ！」

麗美「『今の処、異常に強い人はどれだけ居ますか？』。」

ツナ「ルーミアに西行寺さんにうちの校長先生でしょ。あとは・・・」

フラン「霊夢！あとわたし。」

麗美「東方キャラばっかじゃん！」

ツナ「あとそう、ネウロくんとか強そうだね。」

フラン「ティッキーとかサイとか？」

ツナ「それ若干ネタばれしちゃってるから！だめだよ！」

麗美「これくらいかなあ。他もちろん強いんだけど。」

フラン「主人公が一番強いんじゃないの？だって霊夢強いよ。」

ツナ「別に決まってないから、そういうの。」

麗美「まあまあ。ええっと、じゃあおわるよ。せうのっ！」

みんな「ご感想&ご質問お待ちしてまーす！」

瑞萌「次回もぜひお越しください。」

## 標的49：雷獣の目覚め

「・・・ティキ・ミック郷。あなたはここで何をしてるんですか。」  
「おいおい、そう固くなんなつて。少年。」

言われても、アレンが警戒を解くことはなかった。

「ティツキー。アレンとサヨナラするのは残念だけど・・・帰らなきゃ千年公とサイに怒られるよお。」

「サイは怒らねえだろ。どっちかつーとアイの方がオレは怖い。」  
「質問に答えてください！」

危うく忘れられそうになったアレンが慌てて声を張り上げた。  
声が届いたようで、ロードが自分の後ろを指差した。

「アレ〜ン アレ何か分かるう〜?」

「九尾の狐・・・?」

「ご名答お〜!」

そう、アレンの目の前でロードの結界に閉じ込められていたのは、真っ赤な九尾の狐。

どういうことか彼には分からなかった。

「何が言いたいんですか?」

「この忍びの国には、尾獣って呼ばれるバケモンがいる。コイツもその一匹であると同時に、封式の一角を担ってる。」

つまりこの狐は・・・。

「では邪魔させてもらいます。その狐を連れて行かれてしまうと、封印とやらがあなた達の手によって解かれてしまつとうちの理事長から聞きましたから。」

「まあまてつて！第一コイツだけじゃ封印つて言うのは解けないんだろ？」

「逆に言えば、その狐がいないと解けないって事ですけど。」

「・・・まあね。てか今日の少年、落ち着きすぎ。」

アレンがティキと話している間、ロードはというとすでに狐を自身の扉の中へ押し込んでいた。  
大きな狐はあつという間に扉に飲み込まれてしまった。

「！！ロードお前っ！」

「アレンがティッキーなんかと話すからだよ。」

「なんだ、嫉妬か？」

ニヤニヤ笑うティキを鮮やかに無視し、ロードがアレンに近づいて来た。

アレンはなぜか一步も動けなかった。

「アレン。力を欲しがった愚かな人間は、尾獣つてバケモノをコントロールしようとした。どうやってコントロールしたか知ってるう？」

「・・・知らない。」

「だよねえ。国家機密だし。」

ロードは相変わらず無邪気な子供っぽい笑みを浮かべてアレンに詰め寄る。

「でもアレンはボクの特別だからあゝ、教えてあげる」

後ろでティキがやれやれと首を横に振りつつロードの扉を半分だけ開けた。

それを知ってか知らずか、ロードは笑っている。

「人間の体の中に封じたんだよ。人柱力としてね。」  
「ッ……そんな……！」

彼女が笑顔で語ったことは、アレンにとっては衝撃だった。  
人間が人間の中にそんなモノを封じた？  
信じられない。そんな、バカな。

「ホントだよ。その男の子がさっきの狐の人柱力だし。」  
「えっ……？」

ロードが指差した先に転がっていたのは、血まみれの男の子。  
ツンツンとしたキレイな金髪には血がべつとりと媚りついている。  
それを見た瞬間、アレンの何かがはじけた。

「サイもよくやるよねえ。ボクならココロを壊してお人形にするのにい……もったいない。」

「なんてことを！お前たちは何をした！！」

問答無用で、退魔ノ剣に変化した自身のイノセンス神ノ道化をロードに向けて振り下ろした。  
クラウン・クラウン

この剣が斬るのは肉体ではない。魔を払うのだ。

「オレ達は何にもしてねえよ。ただ、化け狐を輸送しただけ？みた



いな。」

「ふざけるな!!」

ロードの間に割って入ったティキによってアレンの攻撃は防がれてしまった。

しかしアレンは剣を何度も振り下ろす。

「だいたいさあ、あの狐を身体から抽出した時点であの人間の命はほついても消えることになってたわけだし。力のために仲間を犠牲にしてたんだよお。」

「人間のそういう醜さってさ……見てて愛しくなつてこねえ？」

「黙れえっ!!」

我を見失ったアレンの横腹に向けてティキの鋭い蹴りが決まった。アレンは壁まで吹っ飛ばされて叩きつけられ、動けなくなった。

「じゃーな、少年。また会おうぜ。」

「バイバイあれーん」

ロードとティキはアレンが動けなくなったのを確認したのち、ロードの扉の向こうに姿を消した。

あとに残されたのは、冷たくなった男の子とアレン。

「……人間はここまで醜い生き物だったんですか。他人の人生を踏みにじってまで手にする力に何の意味があるんですか。そんな生き物を救済する価値はあるんですか。」

涙を流しながら問うアレンに答える者はいない。

「師匠……僕はどうすればいいんですか……!」

アレンの声だけが小さな部屋に空しく響いた。

「み・・・アルファ、さん？」

「どうされましたかクローム様。」

もうすぐ太陽が昇りはじめそうなローマの街を歩きながら、クロームは怪しい気配を感じていた。

「だれか・・・ついてきてる。」

「・・・。」

瑞萌　もといアルファは、歩調を変えることなく近くの林の中を歩きはじめた。

最初からここを目指していたかの様だ。

しばらく無言で歩き続けると、少し開けた場所に出た。

アルファはそこで歩みを止めて後ろを振り返った。

「大分前からついて来ていましたね。もう出て来ても結構ですよ、金色の闇。」

「・・・！」

クロームは驚いた。

アルファが相手の正体までを気配だけで見抜いたことに。

術師である自分でさえ分からなかったにもかかわらず、だ。

「・・・いつから。」

「ローマの町を一般人のふりをして歩き始めたところからです。」

「最初から・・・お前は何者だ。」

木の上から姿を現したのは、木魂学園で幽々子と共に行動していた金色の闇その人。

「クローム髑髏は渡してもらおう。」

「そういう訳には参りません。わたくしの家族のお仲間ですから。」

（！・・・すごい殺気・・・！）

殺気が2人を包んでいる。

もうすでに勝負は始まっているのだ。

「・・・お行きなさい、クローム髑髏。一刻も早く、あなたを必要としている人のもとへ。」

「でも、アルファさんは・・・？」

「わたくしは、この娘を黙らせるという用事が出来ました。」

殺気を飛ばしているとは思えないほど落ち着いた声でアルファ卯月瑞萌はそう言った。

何かを悟ったクロームは、林の奥へと姿をくらました。

「おとなしく行かせてくれるのですね。殺し屋“金色の闇”。」  
「お前のせいで止められなかった。」

瑞萌の殺気に当てられた金色の闇は、動けなかった。  
この時ほど彼女が自分の非力を嘆いたことはなかった。

それほどまでに、目の前のこのか弱そうな女が強大な存在である気がしたのである。

「ここにはわたくし達の他には誰もおりません。暴れるには十分です  
ね。」

「・・・。」

そう言う瑞萌の手には、いつの間にか真つ赤な番傘が握られていた。金色の闇は素早く自分の腕を鋭利な刃物に変化させて彼女を威嚇する。

「ひとつ伺います。“雨夜の流星”と呼ばれる殺し屋をご存じですね。」

「・・・。」

金色の闇は答えない。

「なぜ“雨夜の流星”なんて呼ばれ方をしているか・・・ご存じですか？」

「・・・興味ない。」

「では、お教えしましょう。」

先にこの均衡状態を破つたのは瑞萌だった。

瑞萌は傘を持ったままふわりと空中に飛び上がった。

「夜空に舞いあがり攻撃する姿が、あたかも夜の空を流れる流星のように見えたからです。」

「！！！！」

そのまま閉じた傘を構えた瑞萌は、傘の先から青い弾を金色の闇に

向かって撃った。

彼女の弾は一発一発が重く、たった一発地面にぶつかっただけでその土がえぐれた。

「そして彼女が暴れた次の日は必ず雨になるんです。おかげでいつも現場はびしょびしょです。」

「水の弾丸！」

仕組みは分からないが、次の日の雨は水の弾丸だとばれないための偽装工作。

高威力の弾丸を避けながら金色の闇はそう考えた。  
こんなモノを撃たれたら地面がぼこぼこになって当然だ。

「はい。ですが・・・傘からだけ水がでてくるとは限りませんよ。」  
「！！」

瑞萌の笑顔に、金色の闇は正体不明の恐怖を感じた。

「どどど、どうすんの？」

「私に聞かないでよ。レン、どうすんのよ？」

「ボクにきくなあああ！！！！」

他の教室に比べると若干広い理科室を、3人の子供が逃げ回ってい

た。

追いかけてくるのは、ドスギアノスという低級モンスター。だが麗美たちにとっては低級だとかそういう問題ではない。

「きゃああああっ!!」

「リンちゃん?」

「お姉ちゃん!」

ついにリンがドスギアノスにつかまった。

早く助けないと食べられてしまう。

「どうしたらいいの!」

「もう薬品も器具も、投げつけられそうなもの残ってないよ・・・!」

すでに理科室の中はめちゃくちゃで、ドスギアノスが壊した試験管などの残骸や麗美たちが防衛のために投げつけた薬品がこぼれている。

ちなみに理科室の本来の扉には鍵がかかっていて、女子供だけでは蹴破る事も出来なかった。

そんな時間がなかったとも言える。

「このまま一人ずつ食べられちゃうのかな・・・。」

「あきらめちゃだめだ、レン!」

意を決して一歩進み出た麗美は、リンを今にも飲み込もうとしているドスギアノスをキツと睨みながらレンに言った。

「たとえどんなに体が傷ついても、希望を捨てちゃダメ。・・・大丈夫、わたしがリンちゃんを助けてみせる。」

「でもどうやって!」

答える前に、麗美はドスギアノスの腹部を思いっきり殴りつけた。  
突然の衝撃に驚いたモンスターはリンを口から吐きだした。

「こうするのっ!」

「ギヤアッ!」

「お姉ちゃんっ!」

唾液でびちょびちょの姉に、レンが慌てて駆け寄る。  
気を失っているが無事だった。

「さーて・・・ここからどうしよっか?」

「えええええ!」

明らかに目の前のモンスターは怒り心頭。

大切な食事を邪魔されたのだから、当然と言えば当然。

「ギヤアアアス!!」

「あはは・・・諦めちゃダメだよ・・・。」

「おわった・・・僕らの人生終わった・・・!」

2人が引きつった顔でそう言った直後だった。

「麗美さん!」

突然麗美の体が白い光に包まれたのだ。

そして同時に、彼女のものとは思えない低い声が聞こえた。

「・・・汝・・・水無月の血のもとに、命ずる・・・・・・再び汝

の力を・・・解放放つ事を・・・・・・・・ここに・・・許可する・・・・・・・・」

声はつづけた。

「・・・封じられし雷獣“麒麟”・・・・・・・・我のために・・・その力を揮え・・・・・・・・！」

誰のものか分からない声がそう言い終わると、白い光が徐々に形をなし始めた。

そして現れたのは。

「これが、伝説の雷獣・・・麒麟！」

感嘆するレンの目の前には、白く神々しい獣が立っていた。

獣　麒麟は、ドスギアノスを見据えて言った。

『お前の居場所はここではない。元いた世界に帰るがいい。どうしても帰らぬと言うなら・・・全力は出せないが、私が相手になろう。』

レンもドスギアノスすらも、目の前の美しい獣に見とれてしまっていた。



## 標的50：フランドールとアレン

「ぼくは・・・」

薄暗い部屋の中で、アレンは一人座り込んでいた。

あれから何分かつたが、ティキとロードの話は真実なのか・・・それとも嘘なのか彼には分からなくなっていた。

「・・・どうすれば・・・。」

悶々と考え込んで仕方ないことは分かっているが、どうしても立ち上がることが出来なかった。

このまま人間を救済してもいいのだろうか。

自分の中に眠っている14番目というノアのために伯爵側について方がいいんじゃないか。

そんなことまで考える様になっていた。

「うつ・・・！」

「あれ？アレンなんでここににいるの？」

「す、スカーレットさん！？」

「めんどくさい白髪だなあ、フランでいいよ。」

暴言を吐きながら突如現れたのは行方不明のハズのフランドール・スカーレットその人。

本当はツナと共に避難していたのだが、アレンがそんなこと知るはずもない。

「無事だったんですね！よかった・・・！」

「吸血鬼があんな低脳爆弾ごときで死ぬわけじゃないじゃん、バツカじ

やないの。あ、そっか。バカだから分かんないんだね！」

「・・・人が心配してあげてるのにめっちゃめっちゃ酷くないですか。」

遠慮など一切ないフランの言葉に、落ち込んでいた気持ちがさらに落ち込んでいくような気がした。

「んで、なにやってんの？」

「・・・実は・・・」

他に話を聞いてもらう人のいなかったアレンは、フランにこれまでの事をすべて話した。

自分はどうすればいいのか。

このまま人間を信じてもいいのか。

「信じればいいじゃん。」

「えっ？」

アレンの重い話に対するフランの答えは、至極あっさりとしていてとても軽いものだった。

「人間が人間信じなくて誰が信じるのさ。」

こう言われてしまったては、アレンも言い返す言葉がない。

アレンも人間なのだ。

「そ、そりゃそうですね・・・」

「ふーん。そっか。アレンはツナや霊夢の事も嫌いなんだ。へー。」

「そんなこと一言も言ってますん！」

しかしフランは冷たい眼差しでアレンを見ている。

こんな時の子供の眼差しは、大人にされるよりも心にくるものがある。

まだ瞳の輝きが純粹だからだろうか。

・・・フランは495歳だが。

「そういうことでしょ。人間を信じれないって事は。」

「う・・・。」

言い返せない。

「ツナの敵は私の敵。ツナは悲しむかもだけど・・・いつまでもバカ言ってるならここでその命積み取ってやる。」

「バカなんて言ってます！ぼくは本気で悩んでるんです！！」

急に声を荒げたアレンに驚いたフランは、思わず後ずさりしてしまっただ。

アレンの瞳から涙がこぼれる。

「わからないんですよ！ぼくは今まで人間もアクマも救済すると誓ってここまで来た！でも・・・でも本当に正しい事なのか・・・もうぼくには分かりません！」

そんな彼を見てフランがとった行動は。  
ため息をつくこと。

「はあ」。ホントに馬鹿だね。」

「なっ！」

フランは近くに転がっていた九尾の人柱力の死体を人形を扱うかのように袋にしまい、その場にストンと座った。

「私はね、世界に見放された私なんかを助けてくれたツナに一生ついて行くんだ。ツナを信じてるから、それが正しいと思ってるから。アレンは何を信じてるの？何が正しいと思ってるの？」

「……。」

「そういえばさ。正義ってね、ひとりひとり違うんだって聞いた事あるよ。」

「ぼくの……正義……。」

自分がこのイノセンスとマナに誓ったことはこの程度で折れてしまふものだったのか。

もしかしたらこのこの国の人間たちは酷い事をしたかもしれない。それでも。

ぼくは人間を最後まで信じてみたい。

「ちょっと変な所もあるから、人間って面白いんだよ。」

「……ですよね。そうですね！ありがとうございます、フラン。」

「

「あ、馬鹿が元気になった。」

「誰が馬鹿ですか！」

元気になったねー、と言ったフランは袋を軽々と担ぎ上げてあっという間に姿を消した。

あわてて止めようとしたけど、すでに姿はなかった、

「フラン・・・一体どこで何してるんですか？他にも助かった人はいるんでしょうか。」

残念ながらその問いが、フランに届くことはなかった。

「き、麒麟・・・！」

「ホントにいたんだ・・・」

ぽかーんとしたままの双子を見下ろすように、美しい獣は立っていた。

ちなみに、ドスギアノスはすでに尻尾を巻いて逃げてしまっている。

『私の存在は口外無用だ。もしも破れば・・・わかっているな。』

「は、はいっ！」

『よろしい。この娘をたのんだぞ。』

そう言い残し麒麟はすーっと姿を消してしまった。

後に残ったのは、気絶した麗美と・・・何かが書かれた白い紙。

「なにこれ？」

「ええーっと・・・えっ？銀八先生が1週間別人にすり変わってた

「？これ間違ってるよ！」

「半分あつてゐるけどね。」

それは麗美の捜査記録だった。

しかし双子にはどうしても腑に落ちない点があった。

「確かこの1週間は、銀八先生は出張でいなくて。」

「代わりに、幻覚の銀八先生が授業してたんじゃないの？」

実はこの双子、趣味で時々職員室の話しを盗み聞きしていたのだ。本人たち曰く『みんなの知らないことを知れて得した気分になるから』だそうだ。

今回はそれが役に立った。

「くじも出張先の暇つぶしに作ったんだよ。たしか。」

「つまりこの学校にくじがあつたのはこの1週間よりも後。」

「そしてそのくじを配つたのは出張から帰ってきてすぐ。」

「『』ということは犯人はこの学園内にいた人物！」

出張先の暇つぶしとはいえ、そんなに暇があつたわけではない。

そんな僅かな時間に時限爆弾を埋め込んだくじを30個近くも量産するなんて不可能だ。

材料もまともに揃わないだろう。

そろえようとしても銀八先生の年中寒い懷では土台無理な話。

「『……じゃあ犯人は誰？』」

「六道氏に笹川氏！朗報ですよ。」  
「ほう。なんですか？」

ついさっきまで暗い顔をしていたランボの顔がばあぁと明るくなっていた。

相当いい事なのだろうと、骸と了平は安心する。

「チエデフの人達とヴァリアーの幹部が全員生きて帰ってきたそうです！！情報もいくつか持つてるようですし。」

「クフフ。さすがは諜報部隊と暗殺部隊、と言ったところでしょうか。」

「極限無事で安心したぞ！」

しかしこれで問題が解決したわけではない。

クロームはまだ見つかっていないし、先走った守護者が何人が殺られたのもたしか。

そしてそれをボスである沢田綱吉に伝えていないこともまた事実。

「一刻も早く沢田に伝えるべきだろう、六道！」

「・・・お仕置きは嫌ですが、仕方ありません。」

「ら、ランボさんは悪くないんだもんね！」

やっぱりランボは何年たってもビビりだった。

「おかえり、霊夢たち。ごめんねこんなこと頼んじやって。」  
「別にいいのよ。アイツを助けるためだもの。」

霊夢たちが入った建物には、（ルイズ曰く）ツンツン頭の少年  
ツナがいた。

メリーことマエリベリー・ハーンとともに。

「・・・あなたが美乃利の娘さんね。」

「ええ。それがなにか？」

「ごめんなさい。わたしが瘴気に飲まれたせいで・・・美乃利は・・・」

「いいの。今更興味ないわ。」

それはメリーにとっては意外な言葉だった。  
てつきり罵られたりするのでは、と思っていたから。

「・・・ありがとう。」

それがメリーからの精一杯の返答だった。

「そんなことよりアイツはどうなった？」

「大阪城ではさんざん言ってたくせに、やっぱりウソだったんスね。」

「るっさいわね。あれぐらいきつい事言わないと黒崎も泉もへこまないでしょ。」



本当のところ霊夢は仲間なんて言うものに興味がない。

そこは事実。

でもクラスメートや友人がいらないわけでもないからあそこまで冷たいことは思っていない。

だが魔理沙のくだりは真っ赤な嘘だ。

霊夢から魔理沙に話しかけたことはけっこうある。

理解者かどうかは怪しいが、それでも腐れ縁なのは事実だ。

そして今霊夢がこうしてツナ達と行動を共にしているのも魔理沙が関係している。

「ところで綱吉。これからどうするつもりじゃ？妾と違って説得が通じるとは思えんのう。」

「そうよ。残った封印は最凶の魔女らしいじゃない。どうすんのよ。」

「そうなんだよね……。」

うーんと唸るツナの肩を、ふいに後ろからつかむ者がいた。

「ツナーただいま〜！」

「な、なんだ・・・フランか。おかえり、脅かすなよなー。」

「えへへ〜。」

「あんたツナといるときだけホントに幸せそうね。」

子供っぽい表情を浮かべるフランを呆れたまなざしで見つめながら、霊夢と越前がため息をついた。

羽衣狐はどこかほえましそうにそれを眺めている。

まるで母親と、弟と妹を見守る姉と兄、と言った感じなアットホームな空気が流れる。

ただ一人を除いて。

「ちょっと！私だけ除者！？」

メリー、ご愁傷さま。

特殊弾5：麗美と瑞萌のまとめファイル（前書き）

麗美（以下麗）：今回は私と瑞萌さんが

瑞萌（以下瑞）：最近誰がどこにいるのかわからないと言う方のために

麗：一挙に教えちゃいます！

瑞：1 - A 以外の方を見わけ分かりやすいようにいたしました。

麗：フルネームじゃない人が1 - A だよ！

瑞：それでは早速まいりましょう。

## 特殊弾5：麗美と瑞萌のまとめファイル

麗：ってことでまずは学園側の人間から紹介しますよっと。

### 【学園側】

理事長、八雲紫（元凶？幽々子と過去になにかがあった？）

リボーンや銀八などの先生方

生徒たち（3年不在＆行方不明者除外）

1年

めだか、善吉、弥子、アレン、ヒノ、こなた、神楽

遊戯、一護、怒江、はやて、なのは

鏡音リン、鏡音レン、神田ユウ、ラビ

GUMI、ナナ・アスタ・デビルーク、モモ・ベリア・デビルーク

2年

黒衣マト、小鳥遊ヨミ、重音テト、ララ・サタリン・デビルーク

東風谷早苗、神威がくぽ、KAITO、河城にとり、守矢諏訪子、

八坂神奈子

彩咲麗美（麒麟の紋章を所持？）

瑞：こんな方々もこの学園にお通いになられてたんですね。

麗：麗美ちゃんびっくり！

瑞：わざとらしいですよ。

麗：ちえっ。お次は学園の敵、セーニョファミリー側ですよー。

### 【セーニョファミリー側】

X<sup>さい</sup>（世界的な怪物強盗で、ボス？）

アイ（サイの右腕とういかパートナー的な何か）

ティキ・ミツク、ロード・キャメロット

ゴーシュ・スエード（ノワール）、ロダ、金色の闇、西行寺幽々子、  
巡音ルカ、朱染亞愛

シグナム達（主であるはやてを裏切っている？）

弱音ハク、亞北ネル（そそのかされた？）

麗：そんな感じかなあ。

瑞：第三者も忘れてはいけませんよ。

【第三勢力（ツナ側）】

ツナ、フラン、霊夢、越前

霊鳥路空、アリシア・テストロッサ、ヴィヴィオ（ハク達に誘拐された）

マエリベリー・ハーン、羽衣狐

京子、フェイト、カナ（ツナの心の中にいる？）

ハルヒ、萌香（六道骸から雨と雲のリングを受け取って寝返った？）

卯月瑞萌（“なーくん”の家族？ツナ側？）

ボンゴレファミリー

瑞：家族を馬鹿にすると怒りますからね。（ニッコリ

麗：笑顔が怖いです。目が笑っておりませんですよ。

瑞：ウフフ。行方不明の方は大丈夫なんでしょうか。

麗：大丈夫だといいけど・・・。

## 【封印】

インデックス  
禁書目録（封印の核である少女）

## 守護

九尾の妖狐  
うずまきナルト

羽衣狐（すでに抜けた）

マエリベリー・ハーン（すでに抜けた）

？（世界を統一したお姫様？）

？（最凶の魔女？）

**特殊弾5：麗美と瑞萌のまとめファイル（後書き）**

瑞：短いですが、以上です。

麗：またお会いしましょうね！



標的51：金色の闇VS雨夜の流星（前書き）

お久しぶりです！

今回はちょっと長いかもしれません。

## 標的51：金色の闇VS雨夜の流星

「くっ・・・」

「まだまだ出ますよ。もう避けられませんか？」

番傘から引つ切り無しに打ち出される弾丸と化した水が、金色の闇を襲う。

威力が強すぎて、避けないとやってられなくなるのだ。

「確かに威力は強い。でも、速さは私が上。」

「・・・。」

隙について回り込んだ金色の闇は自身の髪を変形させたパンチで瑞萌を思いっきり殴った。

瑞萌の口の端から、つーっと赤い液体が流れる。

「さすがですね。」

「隙あり。」

続けて攻撃しようとした金色の闇だったが、瑞萌の番傘が案外丈夫で防がれてしまった。

「この傘はとある特別な友人からいただいたものですから、そう簡単には壊れませんよ。（体力の無い私にこのダメージは痛い・・・）」

「夜兔族、か。」

瑞萌の足元が少しふらついている。

今まで一方的な戦闘しかしたことがなかった彼女にとって、ただの一発が大分響いたらしい。

もつとも、普通の人間ならば気絶しているであろう一撃に耐えたのだから体力がないわけではないはずなのだが。  
「というか体力関係ない。」

「ですが・・・ここで私が負けたら、クローム様にもない君にも顔向けできませんね。」

瑞萌が番傘と共に構えたのは 短剣。

「そんな物では私の攻撃は防げない。」

「それはどうでしょうか。やってみなければ分からないことは世の中たくさんあるんですよ。」

「・・・。」

にこつとほほ笑んだ瑞萌を睨みつけながら、金色の少女が再び宙を舞った。

「じゃあ、霊夢達にも紹介しとくね。」

「はじめまして。第一の封印を守護していました、ルーチェといいます。どうぞよろしくお願いしますね。」

ツナの肩に乗って現れたのは、怪しさ満点の赤ん坊だった。

その赤ん坊の頭の上には小さなリスが乗っていてこれも彼女の怪しさの一つ。

守護していた、だから・・・もうそこはツナが破ったんでしょね。

「信用していいの？」

「そこはオレが保証する。」

彼が言うならそうなのかと、別段興味もなかった私はそれ以上聞かなかった。

ここで、メリーがこの場全員の疑問をぶつけた。

「で、何で今紹介したの？」

「それなんだけど・・・ちよつと厄介なことになるんだよ、今から。」

「厄介？」

それを聞いたフランの目が輝いた。

弾幕ごっこしたいだけよね、あんたの場合。

「実は、第1～4の封印を解くと第5の封印が自動的に解かれる仕組みになっているんです。」

「え？最初に6つとも解かれるんじゃないの？」

少なくとも私はそう聞いているし、学園の方もそう思ってるみたいだった。

セーニョファミリーもそのはず。

「いいえ。それは簡単に解かせないためのウソです。」  
「妾もそう聞いた。」

赤ん坊は表情を一切変えずにそう言った。  
黒い狐の方は妖しく微笑んでいて気持ち悪い。

「ねーツナ。そもそも何でガッコに協力しないのー？」  
「それは私も思ってた。」

たしかに、わざわざ私たちだけで協力するメリットなんてない。  
使える駒は多い方がいいし。  
まあ、ツナはそういうのキライだろうけど。

「・・・あの封印を、今、解かせるわけにはいかないんだ。」  
「どういうこと？」

今まで聞いているのかいないのか分からなかったメリーも、真剣な  
面持ちでじつとツナを見つめる。  
そんな中、口を開いたのはツナの肩に乗った赤ん坊だった。

「もしも今彼女を解きはなってしまえば、暴走した彼女を止めなく  
てはならなくなるでしょう。」

「じゃあどうしろっていうのよ。その狐が封印を放棄したんだか  
ら、もう今までの様に6つの封式で封じておくことはできないハズ  
じゃない。」

「いいえ、そういうことはありません。封印というものは、施し  
た時点で解除されることが決まっているのですから。」

未来永劫なモノなど存在しないんだと、赤ん坊は言う。

「永久機関がこの世に存在しないことと同義で、彼女もまた、いつかは目覚めなくてはなりません。しかし今はダメなんです。彼女を守るものとして・・・彼女の暴走は絶対に避けるべき事なんです。」  
「いつならいいのかしら？」

メリーがそう聞くと、赤ん坊は難しい顔をして答えた。

「彼女の暴走は、急激な環境の変化によって引き起こされるものです。なので・・・そうですね、あと4日。あと4日は待ってもらわないと・・・」

「四重結界が破られてまだ2日。だいたい一週間は待つ必要があるんだよ。だからこそ、オレは学園を離れた。校長先生、人の話聞かなそうだったし。」

「なるほど、妥当な判断ね。んで、このままだとあと4日たつ前に解放されちゃいそうよ。」

「・・・あの魔女を倒せたら、じゃがの。」

ふーん。

今回この赤ん坊が私たちの前に姿を現したのは、こんな話をするためじゃないってことか。

そろそろ本題に移ってもらう必要があるそうね。

「あの魔女ってなに？」

「フランも知りたい!。」

「わかったから落ち着いて!みんな顔近い!。」

チッ。

まあいいわ。

「ワルプルギスの夜。かつて彼女はそう呼ばれていました。」

「・・・聞いたことないわね。」

「当たり前です。この彼女の存在を知る者は、この世界に私たち4人とあと一人しかいませんから。」

赤ん坊が語ったのは、今の世界が創造されたいきさつと5人の魔法少女の物語。

私にはとてもじゃないけど信じにくい話でも妙に親近感がわいてきて。

不思議とその話にのめり込んでいった。

「その話が本当なら、なんでここにその・・・何とかの夜がいるの？」

「フラン、ワルプルギスの夜だよ。」

「彼女はルシフェルに選ばれた。だからこそ鹿目まどかの矢を受けてなおここにいるんです。」

よくは分からなかったけど、そのワルプルギスというのは大天使・ルシフェルの能力によって第5の封印の守護者として封じ込められたらしい。

「ワルプルギスの夜を破壊することで第5の封印は破られます。そうなれば第6の封印は自動的に解かれてしまうんです。」

「なによそれ、6つめ意味ないじゃない。」

「もともとそこにも守護するものはいたんです。ですが、彼女は死にましたから・・・。」

ワルプルギスの夜の力が強かったから、ひとり不在のままでも何とか大丈夫だったらしい。  
てかなんなのよそいつ。

そんだけ強い力があるって、それ勝てる奴いるの？

「だからこそ、大空の7の3乗<sup>トゥルニセツデ</sup>に選ばれた沢田さんに協力を求めたんです。」

「・・・オレが持つてるのボンゴリングだけなんだけど。」

「なにかいいましたか？」

「なにも言ってないよ。気のせいじゃない？」

この赤ん坊侮れないわね。

コイツ、できる。

「ん？確か黒狐のはここにあるから解かれてないんじゃない？」

「それはダミーじゃ。」

「・・・わたしが掠め取るのに要した時間を返しなさいよ、この女狐っ！！」

ああもう。

ツナがいなけりや殴ってやったのに！

「で！そいつは何処に出るのよ。」

「ええと確かあそこだから・・・今は、海鳴市、っていう町だと思います。」

「・・・それ、ウソじゃないわよね。」

魔王と揉み魔の故郷って一番最悪パターンじゃない。  
うわー。

「クラスメートをさりげなく魔王とか揉み魔呼ばわりすんな。」

「あんたこそ人の心を読むな万年童顔。」

「・・・それすっごい傷つくからやめて？」



「おいおい・・・これのどこが中ボスなんだよ。がつつりラスボス  
だろーが。」

「あくまでゲームに例えただけだぜ？」

「泉かお前は。」

少年二人が見下ろす先には、宙に浮かぶ齒車。

その下にはドレス姿のピエロのようなものが逆さまになって浮かんでいる。

「キャハハハッ、キャハッ」

「遊戯・・・じゃなかった、アテム。帰ったら2人で理事長を逆さ  
づりにでもしようぜ。」

「罰ゲームとして、な。」

私立木魂学園で行方不明者扱いのハズの少年奴良リクオ（妖怪バー  
ジョン）と、そうではない少年武藤遊戯・・・ではなくアテム、は  
海鳴市の高台から苦笑いしながらそう呟いた。

「まったく、きれいな夜明けが台無しだぜ。」

「見えねーけどな。」

「だからだよ。」

「はあっ、はあ・・・」

「くっ・・・はあっ・・・」

激しい戦いを繰り広げていた2人の殺し屋は、そろそろ決着がつきそうだった。

お互いボロボロで、ところどころ出血もしている。

「私の勝ちですね、金色の闇さん。いい戦いでしたよ。」

「・・・違う・・・違うっ！！」

再び金色の髪を使って瑞萌を攻撃しようとしたが、それは届かずに終わった。

「わたしは、負けちゃいけない・・・私の存在はターゲットを殺すためだけにある・・・」

壊れた機械の様にそう呟き続ける彼女は、誰が見ても痛々しかった。

「あなたの出生だとか生い立ちだとか、そんなことはわたくしは知りません。ですが・・・」

なおも攻撃しようとする彼女に近づき、瑞萌は優しく抱きしめた。  
金色の闇の動きが止まった。

「ですが、そんなことがあなたの存在価値だとは思いません。」

「なにを・・・」

「あなたが名乗った“金色の闇”という名。確かにあなたは金色がしつくりきますし、それプラス闇に生きる者だからその名なのでしょう。ですが・・・私には別のモノを現している様に聞こえます。」

金色の、闇。

それはすなわち光なのではないのかと。

「世界は広いんです。宇宙はもっと広いんです。あなたの言う存在価値というものは、本当にそんなちっぽけなことですか？」

「・・・わたしには、それしか能がない。嬉しいとか、そういう事も分からない。」

「そんなことは思いこみです。分からないことは学べばいいんですよ。」

瑞萌は、ふっと金色の闇の顔を上げる。

そしてその頭をそつと撫でた。

「ではお聞きします。あなたが今、泣いているのはなぜですか？」

「えっ。」

本人は気が付いていなかったらしく、おどろいたように目を丸くした。

「泣ける、ということはあなたに感情があるということです。」  
「感情・・・？」

ごしごしと涙を拭きとりながら、彼女はそう聞き返した。  
きょんとした表情で瑞萌を見上げる。

「そうですね。感情です。よければわたくしと一緒に来ませんか？」  
「・・・。」

「あなたにはあなたとしての人生を歩んでほしいんです。もっといろいろなものを見てほしいんです。」

不安そうな表情を浮かべた彼女は、しばらくして口を開いた。  
しかしすぐに閉じてしまった。

「・・・私を受け入れてくれる人なんていない、から。」

一言そう言って。

「わたくしが受け入れます。わたくしの家族たちも・・・絶対にあなたを受け入れてくれる。とくに、なーくんとお母様は絶対に。なにがあるうとも。」  
「・・・。」

戸惑う少女の腕を強引に引っ張り、瑞萌が立ちあがった。  
引っ張られた少女も立ち上がる。

「わたくしにはこれからもう一ヶ所、寄るところがあります。ですが・・・不注意で怪我をしてしまったので、たどり着けるかどうか分かりません。なので、一緒に来てくれませんか？」

金色の少女はほんの少しだが、コクリと頷いた。

標的51：金色の闇VS雨夜の流星（後書き）

リボーンがアルコバレーノじゃないのに、ルーチエが赤ん坊なのは  
おいおい出てくるかもしれません（笑）

それではまた次回お会いしましょう

標的52：そのころの3少女（前書き）

こんにちは！

綱吉さんがグダグダ言ってる過去話は、なんとなく察してあげてください。

## 標的52：そのころの3少女

「やっとついたね。」

「し、死ぬ・・・」

「楽しかったね！」

ひとりの外れなことを言っているが、それに反応した様子もなく他の二人はその場にぐったりと座りこんだ。もう疲れきっていたのだ。主に、色んなところに仕掛けられた罠とかそこで笑ってるサイヤ人の妨害とかなかなか見つからなかった扉とか妨害とか妨害とか妨害とかで。

「って、ほんとんどアンタの所為じゃん!!」

「ん？なに、なんか言った？」

「ムキーン!!!」

ぐったりしていた少女のひとり、家長カナがビシッとサイヤ人こと綱吉を指差してシャウトした。

ちなみに、綱吉に面と向かってサイヤ人とか言つと笑顔で殴られます。

「フフツ、楽しそうだね。」

「楽しいわけあるか！」

彼女だけお花畑にいるんじゃないかと思うような微笑を浮かべた京子は、相変わらず天然全開で会話している。これもカナとフェイトの疲れの原因だ。



「あ、あの・・・もしかしてこれが私たちの目指してたもの？」

「そうだけど？」

「いやいやいや。これただの鎖の塊じゃん！」

少女3人＋笑顔の悪魔がたどり着いた空間には、スマキかよと言いたくなるような形に巻かれた鎖の塊があった。

なんというか、ここに人がいるとは思いたくない。

てかいたら圧死してるんじゃない？

「この鎖をその金髪のお嬢さんに壊してもらいたいわけよ。」

「・・・へ？わたし？」

「他に金髪いる？いないだろ。」

指名されたのはフェイト。

何処までも自分勝手なこの悪魔は、笑顔でそうのたまった。

ちなみに、彼の手には何処から持ち出したのか分からない棒が握られている。

「わかった、やってみるね・・・雷光一閃っ！！」

掛け声と共に放たれた雷撃が、鎖の塊を粉々に砕いた。

そして、その中からでてきたのは 男の子。

沢田綱吉のハイパーモード時に瓜二つの少年だった。

少年は十字架に架けられたイエス・キリストの様な格好のまま、眠っているかのようにピクリともしない。

「ツナ・・・くん？」

「え、あ、あれ？なんで綱吉君が2人・・・？」

「どうなってるの？」

驚きを隠せない少女たちをしり目に、笑顔の悪魔は満足げに少年の額に手をかざした。

とたんに綱吉の髪が白く、服装が黒く変色していく。瞳はオレンジ色だ。

「ようやくこの時が来た。これでオレの力は元通りだ!」

「訳分かんないよ!？」

説明する気はないらしい。

代わりにかどうかは分らないが、京子が口を開いた。

「ねえ、あなたは誰なの？最初は捻くれたツツ君かと思ってたんだけど、途中からそう思えなかったの。」

「そういうことは早く言おう!」

カナのツツコミが炸裂するなか綱吉がゆっくりと口を開いた。

もちろん、お前どうしたというような素晴らしい笑顔で。

「オレは“夜空”であって“沢田綱吉”じゃない。まあ、今は“沢田綱吉”なんだけど。」

「・・・ごめん、全然分かんない。なんて?」

「日本語でしゃべろう?」

「思いつきり日本語なんだけど。」

宇宙語でも話されている様な京子たちの反応。

やれやれと首を振った綱吉は、「短い短い昔話をしてあげるよ」と言っってこんな話を始めた。

ちなみに彼ははしりながら話すとも言った。

あれは、そう。“沢田綱吉”が中3の頃の話だ。

彼の友人であり仲間だった『三浦ハル』と『クローム髑髏』って女の子がいた。

彼女たちが殺されかけたんだよ、その中3の夏にね。

彼女たちは本気で生死を彷徨った。ほとんど死人だったね、マジで。

その時ヤツは大分荒れてたなあ。

ちなみにその犯人は、死体で見つかった。事故死だって。皮肉だよなー。

・・・んで、残念なことに、『三浦ハル』の方は今も意識が戻ってない。

笹川京子。あんたなら知ってるだろ？

“沢田綱吉”にとって何よりも大事なのは仲間とか友達なんだよ。

彼女たちが襲われたのは自分のせいだと“沢田綱吉”は今も追いついてるのさ。

「んで、オレはそこにつけ入ったわけ。お分かり？」  
（はしより過ぎて何一つ理解できてねーよ！つかそもそもお前は何なんだよ！！）

心の中でカナとフェイトが全力でシャウトした。  
京子は知っているらしく顔面蒼白で立っただけ動かない。

「じゃあ、あなたはあの時の？」  
「今は“沢田綱吉”の器と姿を借りてる……っていうか“沢田綱吉”の一部なんだけどね。」

彼は相変わらず笑顔で淡々と話す。

「……2人だけの秘密って事。あーそーですか。」  
「いいなあ。」

いじけて床に『の』の字を書き始めた女子高生2人は、ブツブツと小言を言っている。  
なんという暗い2人組みなのか。

しばらくそんな状況が続いていたのだが、突然綱吉が顔色を変えた。

「つくそ！あのクソパインなんちゅーことしてくれやがったんだよ。」

「どうしたの？」

現実世界で何かあったらしい。

今まで恐ろしい笑みを浮かべていた綱吉が、思わず舌打ちをこぼす。

「家長とフェイトはオレと来い。元の世界に戻してやる。京子ちゃんはいッを励ましてあげてほしいんだ。」

「えっ？」

言うのが早いのか、3少女と綱吉が光に包まれた。

そして次の瞬間、その場に残っていたのは京子と放心状態のいつものツナだった。

「あつ、ツツくん！」

「・・・オレのせいだ・・・オレのせいでまた・・・！」

「どうしたの、なにがあったの？」

彼の顔は真っ青になってしまっており、瞳からは大粒の涙がこぼれていた。

京子達が少年にたどり着く少し前の事。

「あとでちゃんと来なさいよマグロ。」

「ツナ、あとで逢いましようね。」

「あつちよつと！ツナと会うのはフランだよ！！」

「・・・オレ挟んでケンカするのやめてほしいんだけど。」

「にぎやかじゃのう。嫌いではないぞ、この雰囲気は。」

いつの間にか治った陰陽玉を引き連れた霊夢を筆頭に、ツナ以外の面々は海鳴市へと向かった。

ので、今はこの小さな部屋にツナ一人だ。  
と、そのとき。

「ん？骸から電話？珍しい事もあるんだな！・・・もしもし？」

数分後。

電話を切った彼の顔からは笑顔が消えていた。

「雲雀さんと獄寺くんが死んだ・・・？山本は意識不明の重体・・・？」

そう呟いた彼の瞳からは光が消えていた。

ツナはまだ知らない。

その彼らの持ち物であった雨と雲のボンゴレリングがすでに新たな所有者を選んだことに。

## 標的52：そのころの3少女（後書き）

ところで、先週から始まったWJのリボーン！人気投票で京子ちゃんにベスト3以内に入ってほしいと思ってるのは私だけですか。

・・・あわよくばツナと1・2フィニッシュしてほしいなー、なんて。

誰か京子ちゃん大好きな人いませんか・・・。

毎回ほぼ圏外扱いなんですよ、京子ちゃん。

あんな可愛くていい子なのに。

・・・とか言ってる私は、一回もそういうハガキ送ったことないんですけども。　おい

関係ないことばかりぼやきましたが・・・  
次回もよろしく願いします！



標的53：卯月瑞萌となーくん（前書き）

「よかった・・・。」

私の横を歩く女性は、そう呟いたまましばらく押し黙ってしまった。

### 標的53：卯月瑞萌となーくん

それはまだ肌寒い春先のこと。

私は、正体を隠して生きる卯月家の長女として生を受けた。

顔立ちから分かる通り、私は日本で生まれ、日本で育った。

けど、私たちは隠れて生きる存在。

物ごころついてすぐから、いざという時のために色んな事を教わった。

お父さんからはいろんな国の言葉や文化を。

お母さんからは代々伝わってきた私たちの能力と武器の扱い方を。

まさかあんなに早く役に立つことになるとは知らずに・・・

私が10歳のときだった。

幼い私には辛すぎる悲劇。

両親が麻薬にとり殺された。

警察の人が『覚せい剤』って言ってた。

そのとき心に誓った。

麻薬は私の人生をめちゃくちゃにした。

私の両親を殺した。

ぜったいにユルサナイ。

私の手でこの世から葬ってやる。

幼い私の心にあつたのは、悲しみと憎悪。

その日から私は、麻薬を両親に売った密売者を探し始めた。

すぐに見つかった。

そいつは、しばらく泳がせて情報収集に利用し……しばらくとれるだけしばらくとって殺した。

当然の報いだと思ったから。

お父さんに教わった通りにやったら、簡単に情報が手に入った。

お母さんに教わった通りにやったら、簡単に死んだ。

でも、さびしかった。つらかった。

カタキは殺したはずなのに……どうして？

そんなとき、私となーくんはであつた。

何の変哲もない公園。

でも私にとっては、両親との最後の思い出の場所。

だって私の両親はここから帰る途中に死んだから。

突然麻薬の幻覚を見て、そのせいで道路に飛び出して車にはねられた。

卯月家の人間ともあろうものが・・・私たちの事を知っている人が聞けばそう思うだろう。

「ねえ、お姉ちゃん何してるの？ひとり？」

そんなことを考えている時に話しかけてきたのが、当時まだ小さかったなーくん。」

「ええ。ひとりですよ。」

「お母さんは？いないの？」

「・・・ずいぶん前にいなくなりましたから。」

「そうなんだ。」

それを聞いた彼は母親のもとへと駆けてった。

とおもったら、その母親を連れて再び戻ってきた。

「あなた大丈夫？ツツ君から聞いたわよ、家出しちゃったのね。」

「・・・えっ。」

私そんなこと一言も言ってません。

でも家から出てきたことは事実。

そもそも、もうあの場所に家はない。

「そうだ、よかったら今からうちでお茶でも飲んでいかない？ここ  
でじっとしてるのしょうがないじゃない？そうだわ、それがいい  
わ！」

「え、いや、あの・・・。」

半ば引きずられるようにして私はお茶会に参加することになった。

偶然だったのか必然だったのか。

この出会いが、わたしの憎しみと悲しみの歯車を壊すことになった。

「・・・そう。大変だったのね、瑞萌ちゃん。」

「いいえ。いいんです。」

お茶会が始まって1時間。

気がつくとは自分は自分の事を、この出会ったばかりの親子に話していた。

自分でもよく分からない。

「辛かったのね。泣いてもいいのよ。」

「・・・っ。」

そう言っただけで彼女は私の頭を撫で、そして優しく抱きしめてくれた。

「あ、そうだね！身寄りがないのよね？よかったら一緒に暮らしましょう！」

「へ？」

突然彼女はそう言った。

あんなばかりの人に言う言葉ではない。



・・・正気？

「おかーさん。のどかわいたー！」

「はいはい、ちょっとまってねっーくん。瑞萌ちゃん、荷物はそれだけ？」

「ええ、そうです。」

このかばんの中には、大切なものが色々入っている。

「じゃあ早速行きましょう！」

「どこへ、ですか？」

「あなたの新しい家族になる子たちのところよ」

それが、今の家族たちとお母様となーくんの出会い。

もしも彼女たちに出会っていなかったらと思うと・・・少し怖い。



標的53：卯月瑞萌となーくん（後書き）

「金色の闇というのは長いですね。」

「・・・うん。」

瑞萌と名乗った女性がふとそう口にした。  
彼女は突然こっちを向いて、ニコツと笑った。  
あやしい。

「名前、考えましょうか。」

「・・・へ？」

私の時間がピシッと止まった。

## 標的54：ワルプルギスの夜VS奴良リクオ

「ギザギザ分け目の変態が、余計なことを・・・!」

「・・・だれ？」

「知らない。」

一体誰の事を言っているのか分かんなかったけど、とにかくにも私たちがこの謎の男の子と共に現実世界へ戻ってきた。

“夜空”だと言っていたけど、どういことなんだろう。

「ねえ、アンタの名前が“夜空”？」

「・・・お前馬鹿だろ。」

「はあっ!？」

何こいつ相変わらずムカつく!!  
女子高生に向かって馬鹿って・・・!

「お、落ち着いて、カナちゃん。」

「落ち着いてるよ!!」

おろおろするフェイトはさておき。

「と・に・か・く!あんたは一体何なのよ。なんで沢田君の中にいるの？」

「オレ？」

「お前以外に誰がいるのよ!!」

「力、カナちゃん・・・。」

もうそれだけでいい。  
名前と、それだけ教えてくれたら手を引こう。  
なんかもう疲れる。  
しんどい。

「オレは大空を染め上げる最後のひとり。闇をもって空というキャンバスを黒に変える“夜空”の炎を扱うもの。名前は・・・好きなように呼べばいいじゃない。どうせオレはもう“沢田綱吉”だし？」  
「名前はともかく・・・その黒い炎が夜空の炎？」

いつの間にか彼の額と手には真っ黒な炎が輝いていた。  
うーん。

黒は輝かないけど、なんというか、きれいだった。

「ご名答。特徴は侵食<sup>しんしょく</sup>。毒のごとくじわじわと相手をいたぶり破壊する。ね、ね、これオレにぴったしだと思わない？オレしか使えない炎！」

こわいぐらいぴったりだわ。  
神様何してくれてんの！？

なんつー力この鬼畜DSに与えちゃってんのよおおっ！！

「フェイト！あんたも何とか言いなよ！」  
「えっ・・・いや、わたしは・・・。」

なんでこう、めんどくさい人が多いんだろう私の知り合い。  
いや、クラスメートか。

「なんなんだよ。近づけやしねえ……。」

さつきから何度も魔女に近づこうと試みるも、リクオの刃は周りの雑魚を斬るにとどめている。

さすが姿を現すだけで2000の命を奪う魔女と称されるだけある。これは、女神まどかが唯一残してしまった負の遺産というべきだろう。

「ちっ!」

リクオの畏れも彼女には効いている感じがしない。

というか、そもそもこんな機械同然のヤツに効くんだろうか。

「ブラックマジシャン、道を作れ! ブラック・マジック!」

「はあっ!」

「サンキュー! くらえ、明鏡止水・桜!」

遊戯……もといアテムの援護によって何とか本体の近くに辿りつけたリクオは、すばやく技を放った。

この技は相手を焼き尽くすという、ぬらりひよんの技だ。今までリクオをこの技で何度も勝利を収めてきた。しかし。

「キャハハハッ、キャハッ」

「無傷、だと・・・！」

畏れが効かないうえに、纏いを発動させようにも対象がない。残念ながら今日のリクオはひとり。

こういう場合、アテムなどは数に入らない。

「クッソ・・・なめやがって。」

顔についた血を袖で拭いながら、リクオは愕然とした。

「キャハハッ」

ワルプルギスの無差別攻撃によってボロボロの海鳴市。

この町にに住んでいた住人達の安否を考える暇も、今のリクオ達にはなかった。

「畏れが効くないんじゃあ、オレの手には負えないな・・・ちくし  
ようっ。」

「じゃあ次はオレの番だぜ！」

一枚のカードを持ったアテムが、リクオの前に立った。  
何やら秘策があるらしい。

「・・・何する気だ？」

「天空の神を呼ぶ。残念ながら今のオレの体力ではコイツを呼ぶの  
で精一杯なんだ。」

「ふーん。」

よく分かっていないリクオに背を向け、アテムが叫んだ。

「我、ファラオの名のもとに命ずる！降臨せよ、オシリスの天空竜  
！！」

「キャハハハッ、キャハ」

アテムを中心に光が発生。

その光は一本の柱となり雲の中へ吸い込まれていく。  
リクオが目丸くする中、その龍は現れた。

「ギャアアアッ！！」

「赤くて長い龍・・・コイツぁおどろいた。」

一体何メートルあるのか分からない長いからだ。  
二つある特徴的な口。

まさに神と呼ぶにふさわしい風格を漂わせていた。

・・・が。

「キャハハハッ、キャハハハハッ、キャハッ」

「・・・・・・」

ワルプルギスの一撃が、よそ見していたオシリスにクリティカルヒ  
ットした。

（（ドジリスの天空竜ーっ！！））

ダメだこりゃと思ったリクオであった。





標的54：ウルブルギスの夜VS奴良リクオ（後書き）

ラーの翼神竜

（“太陽神”って言う強そうな肩書き持ってるのに、何で出番ないんだろ。オシリスばかりじゃん！）

オベリスクの巨神兵

（・・・と言われても。）

ラー

（ぬるぽ。）

オベリスク

（ガッ！・・・っていわすな！）

標的55：ブラック ロックシューター（前書き）

久々の投稿のわりに短いのですよ。

今回は、やっとあの方のお目覚めです！

## 標的55：ブラック ロックシューター

「……。」

2人の少女の目の前に死屍累々と横たわるモンスターたち。  
一晩かけてようやくこちらにも決着がつこうとしていた。

「眠いアル。結局徹夜してしまったネ。」

「……敵は、たおせたの？」

「この通り、2人そろって伸びてるアル。」

2人の少女　神楽とブラック ロックシューターの目の前には、  
モンスターたちに混じって弱音ハクと亞北ネルが目回して倒れて  
いた。

召喚しすぎて体力がなくなり、自滅してしまったのだ。

「んだこりゃ!？」

「あ、銀ちゃん起きるの遅いアル!！」

声のした方へ振り向くと、そこには理科準備室でぶっ倒れていた銀  
八先生その人の姿が。

うれしさと苛立ちでなんとなく飛び蹴りを食らわせた神楽。

しかし、その行為をブラック ロックシューターは敵への攻撃とと  
ってしまった。

「ちょ、まてまてまて!なんでオレに向かってんな物騒な兵器  
ぶっ放してんだよ!」

「神楽の敵は、私の敵。」

「ブラつきー待つネ！銀ちゃんは敵違うアルヨ！」

あわてて止めると、不思議そうな顔をしながらも攻撃するのを止めた。

「そのガキは何もんなんだよ、神楽。」

「ブラつきーアル。」

まあ、そんな説明だけで銀さんに通じるはずもなく。  
というか誰にも通じないから。

「私の名前はブラック ロックシューター。・・・わたしは戦うために生まれた。」

「マっち先輩（黒衣マト）とはどういう関係アルか？」

「彼女は協力してくれる人。この世界で私が戦うための器。」

表情一つ変えず淡々と言つてのけた— B R S ≪ブラック ロックシューター≫。

銀さんはそれを聞いて気になることがあった。

あ、いや、ツツコミどころは腐るほどありますけど。

「戦うために生まれた？」

「・・・そう、教えられた。」

彼女は不思議そうに答えた。

なぜそんなことを聞くのか、と言いたげな表情で。

それを見てやれやれと頭をかきながら、銀さんはこう言った。

「オレの勝手な意見だけどよ。別に戦うだけが生まれた意味じゃね

「はずだ。テレビ見たり本読んだりメシ食ったり・・・生きる意味ってよ、人それぞれちげーからあんまいわねえよ？でも、戦うだけってーのはちよっとつまんねーんじゃないか。どうせ生きるならよ、うちの学園の馬鹿どもみてーに笑って生きろや。」

「・・・笑う？」

「アホみてーなことで楽しそうに笑うんだよ、あいつら。笑って生きた方が人生楽しかろーよ。少なくとも、そんな面してるよりはいいだろ？まっ、戦うなどはいわねーけどお前女なんだからちつとぐらい笑った方が美人だって。」

相変わらず訳が分からないという顔をするB RSだが「とりあえず笑っとけ」ということは理解したらしく、神楽に笑い方？を聞いている。

そんな2人をその場にのこし、銀八は今日も今日とて着ている白衣をはためかせながら学園をあとにした。

一方そのころ、高等部の理科室。

「逃げやがったあんの銀髪教師イイッ！！！！」

「落ち着けーっ！」「」

一晩明けてようやく目が覚めた麗美が絶叫していた。  
ついでに鏡音姉弟も。

「あ、あのさ、麒麟って知ってる？」

「麒麟？何それおいしいの？」

どさくさまぎれにレンが聞いてみると、こんな答えが返ってきた。どうやら麗美はあの時の麒麟について何も知らないようだ。じゃああれはなんだったのだろうかと考えてみたものの、リンもレンも何も浮かばなかった。

「うっ。」

「と、とりあえずグラウンドまで降りてってみようよ。」

「みんないるかも・・・。」

それもそうかと、麗美は2人に従って廊下へと歩を進めた。

「私が目覚めたのは・・・5年前。それまで私は・・・ずっとカプセルの中にいた。」

「退屈じゃなかったアルか？」

「わからない。その時の私には・・・何も、わからなかったから。」

彼女の話聞いていて、神楽は分かったことがいくつかあった。どうやらこの少女は異世界で戦っていたらしい。

その世界では人類は滅亡。

メカメカしい宇宙人に侵略された地球でその宇宙人を倒したのは、この目の前の少女であること。

「壮絶アルな……。」

「私はその世界で生きる意味を失くした。だから、他の世界に来た。」

「そんな簡単に来れるアルか!？」

ブラつきー曰く、本当にたまたま偶然たどり着いたのだという。

「よく分からないアル。」

「……敵は、もういないの？」

話終えた彼女は、キョトキョトとあたりを見回している。  
が、視界に入るのは倒れたモンスターたちばかり。

「銀ちゃんにこっそりついてってみるネ。」

ハクとネルを縄で縛りあげ、そのまま引きずりながら神楽とB  
Sは木魂学園を後にした。R

「なんじゃこらーっ!」

校庭に降りてきた3人が見たのは、たくさんのモンスターたちの死骸の山。

麗美がちょっとこの肉おいしそうだな、と思ったことは秘密である。



「これ・・・ハク姉とネルさんの召喚獣？」

「召喚獣って、あの理科室にやってきたあんな感じのモンスター？」

「うん。まさにアレ。」

モンスターたちの死骸をふんづけながら3人が適当に進んでいると、目の前に校庭の門から出て行く神楽たちの姿が飛び込んできた。そして縄でぐるぐる巻きにされて引きずられるハクとネルの姿も。

「追いかけよう！」

「どこにいくんだろっ。」

「私に聞かれても知らないよ、レン！」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・てへっ」

「リン・・・。」

「てへじゃねえええっ!!」

「銀ちゃん落ち着くネ。」

銀さんと神楽たち一行がいるのは、船の上。

若干2名は入りきらなかったし気絶してるしよくね、ってことで船の外で海の塩水につかりながら引きずられている。そこはまあ、いいだろう。

「寒くないのかな、この二人。」

「麗美が気にすることじゃないアル。気絶してるから大丈夫ヨ。」

ここ木魂学園は巨大な孤島に存在するため、外に出るための普通の移動手段が船しかないのである。

飛行機とかの飛ぶ乗り物は禁止されていてここにはない。

で、何で銀さんが落ち着いていないかというところ。

「何でお前らがいるんだよ！オレさつきカッコよかったじゃん！カッコよく退場したじゃん！あ、ここからは銀さん一人で行くんだな、的な雰囲気醸し出してたじゃん！」

「煩いアル。旅は道連れ世は情けネ。」

「ごめんなさい、銀ちゃん先生。私今ここで降りましょうか。」

麗美が船の淵に手をかける。

「今降りたら死ぬから！ここ潮の流れ早いからホントにまずいんだって！つか今銀ちゃん先生って言ったよな。ちゃんと坂田先生って呼べよ！」

「やつぱりおります。初対面の先生に失礼なことを・・・」

「ごめん、銀さんが悪かった。もう銀ちゃん先生でいいからそれだけはやめてください、お願いします。」

6人（+2人）が向かう先は、まだ薄暗い早朝の空に輝く一筋の光。生徒を、クラスメートを、仲間を救うため。真実を見つけるため。

彼らが目指すは、ワルプルギスの夜。

## 標的56：変化と疑問（前書き）

お久しぶりです、蜜柑です！

2か月ぶりの更新ですね、もうしわけないです。

これからは週一ぐらいのペースで頑張ろうと思うので、こんなヤツですがこれからもよろしく願いします！

## 標的56：変化と疑問

禁書少女が暴走しなくなる時間まで

あと、72時間。

「はぁ、はぁっ・・・くそ、どんだけかてえんだ・・・。」  
「キャハハハッ」

肩で息をし、立っているのもやっとなリクオ達。

しかし当のワルブルギスは傷一つなく、イラッと来る笑いだけが響いている。

もはや彼らにとって肉体的にも精神的にも限界だった。

「どうしろってんだよ、チクショウ。」

「ねえ、パイナップルから連絡があつたってどういうこと？」  
「そういうこと。」

そのころ、ツナとカナとフェイトはどこかに向かつて歩いていた。  
行先を知っているのはツナだけ。  
しかも何を聞いてもはぐらかされるので、いい加減カナは苛々していた。

「もう！それぐらい教えてくれたっていいじゃん！」  
「わたしも知りたいよ。」  
「ええゝ……。知らない方が幸せだよ、絶対。」

わたしもそう思います。

「やつほゝ あれが魔女？」

海鳴市の高台。

というかせり出した崖の上。

そこに悪魔の妹がすたたたと飛びだしてきて、物珍しそうにあたりを見回した。

観光でも楽しんでいるかのよう。

「ババアがガキ見たいに騒ぐんじゃないわよ。」

「霊夢の馬鹿。わたしは、見た目も精神年齢もこどもだもん。」

「なお悪いわ。」

続いて現れたのは楽園の巫女さん。

ふと眼をやった先でボロボロになって戦っているリクオとアテムを見つけて憐みの眼差しを送りながら、フランに向かって悪態をついている。

「いい加減に気付きなさいよね、あのバカ。」

「ねーねー霊夢。狐さん達は？」

今この場にいるのは、無言のまま後ろで突っ立っているテニス少年を含めて3人。

メリーと羽衣狐の姿はない。

「さっきも言ったでしょうが。別のところで待機してんのよ。」

「あつ、そうか。それで私はなにすればいいの？」

全く話を聞いていなかったようだ。

イラッとしながらも、霊夢は先程みんなで話し合っていたことを目

のまえのお馬鹿な吸血鬼に一つ一つ丁寧に説明した。  
それはもう、丁寧に。

「　　そっか。あれ、止めればいいんだ。」

「倒すんじゃないわよ。・・・後70時間ね・・・我慢なさい。」

「ちえーわかったよ。リョーマ行こ！見ててもつまんない。」

結局一言も口にしなかった越前を連れて。

フランは切り立った崖から、何の躊躇もなく飛び降りた。

下を覗き込んでも、もうすでに越前達の姿はない。

霊夢は確認も何もせずにすぐさまその場を後にした。

「さてと。わたしはあの馬鹿どもに会いにいきますか・・・あーめんどくさっ。」

嫌なら行かなきゃいいのに。

（魔理沙・・・どうして・・・）

「もしもし。私です、瑞萌です。」



東アジア某所。

着物姿のヒットマンは、ヤミをつれて確かにそこにいた。

「・・・ええ。霊鳥路空、アリシア・テストロッサ、ヴィヴィオの御三方は確かに保護しました・・・いえ、わたし一人で十分でしたから・・・なく、いえ。ボスに伝えておいてくれますか？」

彼女は笑顔を崩さず電話の相手に語りかけている。

その横でヤミは、瓦礫の下敷きになっていた黒猫をそつと抱き抱えていた。

「にゃーお。」

「・・・よしよし。痛かったね。」

少し心境に変化があつたようだ。

その顔には前にはなかった優しい微笑みがつかんでいる。

「それで、水無月様は・・・・・・・・・・わかりました。そこらはあなたに任せます・・・ええ・・・・・・・・・・では、またあとで。行きましょう。」

携帯からようやく耳を外した瑞萌は、後ろへ振り返って声をかけた。ところが返事がない。

ヤミは、離れようとしないう猫に戸惑っていたのだった。

「にゃーお。」

「えっ、あ・・・・・・・・つ。」

それを見た瑞萌は、フフと笑いながら猫を抱えあげた。

「連れて行って欲しいのかもしれませんが。」  
「にゃ。」

そう言うとき黒猫はそうだというように鳴いて見せた。  
満足そうに頷き、彼女はつづけてこう言った。

猫は、例えばどこにいてもいずれは家に帰ってくるもの。  
ならばあなたがその家になってあげてはどうか、と。

「おそらくこの子は、先程の爆発で大破した敵アジトの床下でひっそりと暮らしていたんでしょうね。」

「さっきのヤツラが自爆なんて図ったから住処を失ったんですね。」  
「・・・だともいますよ。」

瑞萌から猫を受け取り、ヤミはその子を抱きしめながら瑞萌に続いてこの場を後にする。

そのときヤミがふと思いついたようにこう言った。

「お前の名前は ココア。見た目は黒いけど中身は甘くて優しい、ココア。わたしとは違う、幸せを運ぶ黒になるんですよ。」  
「にゃおん。」

瓦礫の山となった場所に、優しい声が響いた。

「はいはい、その馬鹿二人とまりなさい。」

「えっ!？」

「は、博麗っ？」

ものの数分で、楽園の巫女は戦場に降り立った。

“空を飛ぶ程度の能力”をもっている彼女にとって、このぐらい朝飯前なのだ。

重力無視は十八番である。

「何でこんなところに！」

「落ち着いて聞きなさいバカ。魔女は襲ってきたりしないから。」

バカバカと連呼する霊夢は、ちらつと後ろを見てからそう断言した。もちろんそれで納得する2人ではないのだが、それを鮮やかにスルーして彼女はこう告げた。

「で？あんたらなにやってんの？」

「なにつて、アイツを・・・」

そこまで言ったりクオの言葉を遮って、霊夢は見下したような顔をしてこう言い放った。

「倒す？なんなの？バカなの？死ぬの？」

曰く、お前じゃ何年たっても倒すどころか話にもならん、と。

あたりまえだが、こんなこと言われて怒らないヤツはこんな所でボロボロになってたりしないだろう。

「そんなのやってみなきゃあ分かんねえじゃねーか！」

「実際ボロボロじゃないの。ボロ雑巾の様だわ。」

「そこまでいうか!？」

ハアっとため息をつき、続けて巫女はこう言った。

「で？アンタ達疑問には思わないの？」

「なにをだよ。」

リクオとアテムがそろって首をかしげる。  
またまた霊夢は盛大にため息をついた。

「こんなに生徒がボロボロで死にそうなのに、何で先生が1人も動いてないのよ。」

## 標的56：変化と疑問（後書き）

### 注意

霊夢さんは、銀八先生が動いてる事を知りません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7886q/>

---

大空あっと非現実的学園生活。

2011年12月1日19時55分発行